
妖 あやかし

彪峰イツカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖 あやかし

【Nコード】

N5221Z

【作者名】

彪峰イツカ

【あらすじ】

「お前が私の運命なら、その総てを受け入れるから」
ときは平安。異端の半妖陰陽師と最強のあやかしが織り成す、長編和風恋愛ファンタジー。

オリジナル創作サイト「Never-never Land」より転載

桔梗の巻

第一章

—

初秋の夜更け。都の外れに位置するこの路は人通りもなく、時折聞こえる虫の音だけが透明な空気を揺らしている。男がひとり、ゆったりと歩んでいた。黒を基調とした直垂、烏帽子。だが髪は結わず、長く垂らしている。まだ若く、年は二十歳くらいであろう。

男はゆっくりと視線を月に向ける。闇を照らす月光が白々と男の顔を映し出した。紫電の瞳　ひとにはあり得ぬ色。

彼はひとではない、否、半分はひとである。しかし残り半分の血は、あやかしであった。

父はひとで、母はあやかしであるという。滅多にはおらぬ半妖それは古来より忌むべき存在とされており、本来ならば赤子のうち殺められていても不思議はない。しかし彼は例外的に生を許され、なおかつ従三位という高位についていた。それは、彼が代々続く陰陽師の家柄である御門家の養子になり、比類のないほど強力な術者に成長を遂げたからであろう。

御門紫苑

それが男の名前であった。

さて、紫苑はただひとり、歩いている。宮中には牛車に乗って参内したのだが、帰り道の途中で先に返してしまった。牛を先導していた童もひとではなく、式神である。彼の屋敷ではひとを使わず、式神で用を済ませていた。半妖である彼に仕えたいという物好きなどいないということも理由のひとつだが、それだけではない。紫苑

は、ひとが不得意だった。

宮中で飲んだ酒が、徐々に醒めていく。

ひとが嫌いというわけではない。嫌うほど付き合いを深めたことがない。友と呼べる唯一の男は今は遠方にいる。宮中の者たちのほとんどもが、彼を忌諱していた。

人妖……か。紫苑は苦笑した。宮中の口さがない者たちの間で、自分がどう呼ばれているかくらいは知っている。紫苑が強力な術者であればあるほど、都を邪なものまじしもののけから守れば守るほど、彼は悪しざまに言われ、貶められる。

くだらない。怒る気にもならない、というのが本音だった。先帝、今上と二代通して帝の信頼が厚いことが救いかもしれない。それでも どうせ私はひとりだ。

紫苑は足を止めた。冷たい風が吹き抜ける。道の両側の薄すすりがざわざわと音を立てていた。眼を閉じ、虫の音色を聞く。こうしてひとりで居る方がずっと気楽だし、寂しくもない。だから、私はこれからもひとりで……。

そう思ったとき、虫の音が消えた。

「……………?」

少し遅れて気配を感じた紫苑は、軽く辺りを見回した。何も見当たらない。否、

とくん。

小さな音。

「誰だ……………?」

返事はない。

とくん。

二度目はより強く響き、音はその方角を明らかにした。紫苑は警

戒をあらわにしながらも、音に向かって一步、踏み出す。

とくん。

意を決して彼は道を逸れ、その方角に向けて薄の原を歩き始めた。音は何度も彼の耳に届き、徐々にそれは大きくなっていく。まるで彼を呼んでいるようなその音は、どこか懐かしい。この音を自分は良く知っている、きつと聞き慣れている。そんな気がした。

とくん。

「もしかすると……」

これは鼓動の音、だろうか。気付いた紫苑は、何かに憑かれたように駆け出した。鼓動。誰のだろうか。何故、彼を呼ぶのだろうか。

とくん！

鼓動が彼自身のそれと同調して大きく響いたとき、紫苑は林の奥深くに居た。袴は既に汚れてしまっていたが、紫苑は気にせずさらに足を踏み出す。

「……………」

風が吹き渡った。

紫苑は眼を軽く閉じ、そして眼を開ける。林の中の一際奥、急な滝が切り立った崖を流れ落ちていく、鋭い水音だけが支配する静謐な場所。そこに、それはあった。

「何だ……?」

紫苑はさらに一步、足を進める。滝の中腹に、まるで卵のような円形の塊があった。氷のようにも見えるが、表面は波打っている。先ほどから脈打っているのは、恐らくはそれだった。月明かりに照らし出され、水晶のように煌いている。

「……………」
眼を凝らした紫苑は驚愕に息を飲んだ。その奥に、幼子が入っている。ぼんやりとしか見えないが、確かに子供だ。年は十歳前後か。細い手足を折りたたみ、背中を丸めて、まるで蛹まなこのように眠っている。

「これは、一体……………」

そつと手を伸ばす。途端、

「くっ?!」

紫苑の体がぐぐつと滝に向かって引き込まれた。そして、

あなた、だれ？

問い掛ける、小さな声。

「な……………」

抗おうとしても抗えず、紫苑の腕はずぶずぶと水の中に入り込んでいった。頭上から水をかぶり、紫苑は全身をしとどに濡らす。

「し、紫苑だ。御門……………紫苑」

紫苑は水を吐き出し、答えた。声は再び、どこからともなく響いた。

しおん……………あなたが、わたしをよんだの？

「よ、呼んでなど……………!」

これ以上引き込まれば、溺れてしまう。紫苑は腰まで冷たい水に浸かり、滝を見上げた。

それとも……………わたしが……………あなたを……………よんだの……………?

術を使っても抜け出さなければならぬかと思った瞬間、ふつと彼を引っ張る力が消えた。

「……………!!」

同時に幼子を捕らえていた水晶が消え、小さな体が紫苑の腕の中に落ちてくる。何とかそれを受け止めることには成功したが、

「あー!」

体勢を崩し、彼らはもろともに滝壺に落ちた。

二

尖った耳、額に描かれた水色の文様、そして銀髪。水の中から出てきた子供　少女は、どう見てもあやかしであった。

紫苑はずぶぬれのまま、少女を抱えて家路を歩いている。裸のままではまずかろうと、自らの衣を一枚脱いでそれに包んだ。どちらにせよ濡れていることには変わらない。

先ほど自分を呼んだ声はこの少女のもののだろうか。彼女は先ほどから意識を失ったまま、ぴくりとも動かない。

「しかし……………」

紫苑は彼女を抱えなおした。華奢な体はとても軽い。

「これは水龍族ではないか……………」

水族の長、水龍族。

火族の長、鳳凰族。

地族の長、白蛇族。

風族の長、黒鷹族。

それらは強大な力を持つ妖たちの一族で、四天王とも呼ばれている。紫苑の母親はその四天王の一、鳳凰族であったとも聞くが、実は彼自身良くは知らない。彼の父親が誰かということと共に、誰も語ろうとはしない話であった。

紫苑は軽く眼を細める。ひととあやかしの歴史は決して平和なものではない。むしろ、ひととあやかしは幾度となく戦を交えた間柄であった。最初にどちらが仕掛けたのかは分からない。半妖の紫苑

はともかく、並の陰陽師たちを含めたところで、ひとはあやかしの妖力には勝てぬ。しかし、ひとはあやかに比べ圧倒的に数が多かった。そのためにこれまでの戦では大抵ひとの側が勝利を収め、絶滅に追い込まれてしまったあやかしの一族も幾つかある。そのうちのひとつが鳳凰族であり、

「水龍……なんだが」

それは既に二十年ほど前の話であり、水龍族については紫苑も話に聞いて知っているのみである。この少女は一体いつ生まれたというのだろうか。あの滝の中、ずっと時を止めていたとでもいうのだろうか。

私を待っていたとでも……？

「……訳が分からん」

紫苑がそうつぶやいたとき、

「う……ん？」

少女が小さく呻いて眼を開けた。紫苑は足を止める。家まであともう少し。

「眼が覚めたか」

「え……？」

ぼんやりした目線で辺りを探り、やがて紫苑に気付いて眼を見開いた。澄みきった、青い瞳だった。

「あ……あれ？　ここは……？」

「私の家の前だが」

少女は驚いたように眼を瞬きながら、紫苑を見つめる。

「あなた……だれ？」

自分で引きずり込んでおいて、覚えていないのか。喉元まで出てきた問いを飲み込み、紫苑は少女に反問した。

「お前は？」

「私……？　私は……」

少女は首をかしげて考え込み　やがてつぶやく。細い首筋はまだしつとりと濡れて、銀髪が幾筋も絡みついていた。

「知らない。……わからない」

紫苑はため息をつく。

「そんなことじゃないかと思った」

「え？」

「名前は？」

少女は無言で首を振った。

「何も覚えていないのか」

「……………」

少女は目を伏せた。長い睫毛が震える。

「はい。気が付いたら、あなたがいて……………」

「……………そうか」

記憶が今後戻るかどうかが、それすらもどうでもいいような気がした。彼女は自分と出会い、今ここにいる。それだけのことだ。

「どこか行くあてはあるのか」

念のために尋ねてみるが、やはり少女は首を横に振る。

「言葉は、ちゃんとわかるのだな」

少女はその問いには首を縦に振った。

「それでは……………」

紫苑は少女に微笑みかける。こんなふうにならざるに自然に微笑めたのは、久しぶりのような気がした。この少女に対しては、何故か警戒心が解けてしまう。怪しいとは思っているのに……………彼女の無邪気な感じが、さのせいだろうか。それとも彼女の心細そうな様子が、少しかつての自分と似ているからだろうか。何も分からなかった、あの頃。縫るものの何もなかった、幼い頃の自分。澄んだ瞳はまだ何の汚れも知らないのだろうか。

「私と、来るか？」

「……………」

少女は即座に頷き、同時に白い両手を伸ばして紫苑の首筋にしがみついていた。肌の表面の体温は奪われているが、それでも少し、暖かい。

「……そうか」

紫苑はその背をばんばんと叩いた。

「まあいい。どうせ御門の屋敷は一人で住むには広すぎる」

少女は紫苑の肩に顔を埋めている。離されまいとするかのように、腕には力がこもっていた。

「そつだ。名前が要るな」

その言葉に、少女は顔を起こした。紫苑の眼をまっすぐ見つめる真っ青な瞳。それはまるで。

「……桔梗」

紫苑はぼつりとつぶやいた。彼らの立つ場所の周りに、その小さな花が咲き乱れている。紫苑は少女に言う。

「お前の名は、桔梗にしよう」

「……ききよう。ききよう」

少女は何度か呟いてみて、やがてにっこりと笑った。

「ありがとう！」

「……」

ありがとう 慣れない言葉に紫苑は戸惑うが、やがて気を取り直したかのように前を向いた。

「早く帰ろう。こんなに濡れていては風邪を引く」

「あ……あれ？ほんとだ。びしょ濡れ」

少女は小さくくしゃみをした。

「どうして？ 雨が降ったんですか？」

本当に何も知らないのだな。紫苑は苦笑する。

「気にするな」

「でも……つくしゅん」

「急ぐぞ」

少女を抱きかかえたまま、紫苑は家の戸をくぐる。月明かりの元で見た屋敷はいつもと違い、ここが自分の家なのだとしみじみ感じさせる暖かさを纏っていた。

「名乗るのを忘れていたな」

紫苑は告げる。

「私の名は、紫苑だ」

「しおん」

「ああ」

「しおん……しおん、しおん」

少女はその名を記憶に刻み付けておこうとするかのように、何度も繰り返しつつやく。甘いあどけない声に名を呼ばれるたび、紫苑はどこかくすぐったいような、面映いような、不思議な感覚を味わうのだった。

第二章

—

桔梗が眼を覚ましたとき、既に日は高かった。一瞬自分がどこにいるのか分からず、辺りを見回す。

静かな屋敷。近くにひとの気配はない。中庭に面した部屋の外からはかすかに緑の香りがした。遠く近く、鳥の囀りが聞こえる。

「お目覚めになりましたか」

「……………?!」

不意に掛けられた声に驚いて飛び上がる。振り返ると、側に美しい女房がひとり、微笑みを浮かべて座していた。萌黄と若葉色の衣が、目にまぶしい。

「あ、あの……………」

突然出現した女に桔梗が戸惑うと、彼女は静かな笑みを湛えたまま囁くように告げた。

「私は紫苑さまの式神でございます。桔梗さまの身の回りのお世話を言い付けました」

「は……、はい」

間の抜けた答えを返し、桔梗は頷く。

「まずはお召し物を」

女は一揃いの着物を差し出した。桔梗は紫苑に借りた大き過ぎる衣の袖をたくし上げ、それを受け取る。

「ありがとうございます」

女はふわりと立ち上がり、彼女の身支度を手伝った。女から甘い匂いがかすめる。

「私の名前は、菊と申します」

振り向くと女と視線がかち合っ、桔梗はその瞳が黄金色に彩られていることに気付いた。

「菊……さん？」

「はい」

菊は桔梗の着替えを終え、立ち上がった。

「朝食の用意があらにできてございます」

菊が彼女を先導するように歩む、その足の裏は床についていない。

「紫苑さまがお待ちでございますよ」

「……あ」

その名を聞いて、桔梗はかすかに頬を染めた。

ここが今日からお前の家だ　昨夜、紫苑はそう言った。そして、答えを待つようにじっと桔梗を見つめた。暖かい瞳。優しい瞳。紫の色の中に、自分が映っていた。まだ抱きかかえられたままだった桔梗は、何だかくすぐったくなって顔を紫苑の肩口に寄せ、彼の視線から逃げた。

「行くあてがないのなら、いつまでもここにいればいい」

「はい」

「だが　いたくなくなつたなら、いつでも勝手に出て行けばいい」
平坦で冷ややかな紫苑の口調に驚き、桔梗は紫苑を見上げた。

「どうした？」

再び向けられた瞳は先ほどと同じ温度を保っていて、桔梗は安堵する。冷たく聞こえた言葉は、そんなつもりではなかったのかも知れない。

「ずっと……居たいです」

桔梗の小さな言葉が耳に届いたのか、紫苑の口元がぴくりと動いた。

「私、きっと何にも思い出せないと思うし」

「思い出すかもしれないぞ」

「いいえ」

桔梗はそう言って微笑んだ。長い間、眠っていた……そんな感覚が彼女の体には残っている。そして　　ずっと、誰かを待っていた。きつと、紫苑を。

「……お前も物好きだな」

そうつぶやいた彼の顔は、少し悲しげで　　けれど微笑んでいた。彼の言葉の意味が、桔梗には分からない。

紫苑は、おそらく桔梗以上に戸惑っていた。異端の存在。禁忌の半妖。そんな自分と、この子供はずっと一緒に居たいという。

まあ、いい。紫苑は口元を皮肉に歪めた。いつか、彼女の気も変わるだろう。いずれ、桔梗は自分の元を去るに決まっている。けれど　　今、少しだけ夢を見ていたい。誰かと共に生きる夢を。自分も誰かに必要とされているのだという夢を。

「秋の夜は、長いからな……」

その声が聞こえたのか聞こえなかったのか、桔梗は彼の胸元で丸まっていた。小さな体温が心地よい。紫苑は何となく、彼女を自分で歩かせる気にはならなかった。手放すのが惜しく、そのまま寝具を用意させた部屋まで抱きかかえて連れて行く。

だが、離れたくなかったのは桔梗も同じこと。そつと床に下ろされた後も、桔梗はじつと紫苑の残像を目で追い掛けていた。

「……………」
 「……………」
 食膳を前に向かい合い、ふたりはただ黙々と食事をしていた。ひと付き合いの苦手で、元来無口な紫苑は、時折桔梗の方を眺めるものの特に何を言うでもない。桔梗は桔梗で、黙り込んでいる紫苑に自分からは話しかけづらい。陽光の中で見る紫苑は、何故か闇の中で見たときよりも近づき難く見えた。

「……………ふう」

彼女が小さく漏らした吐息を聞きつけたか、紫苑が目を上げた。暖かな紫電の瞳と目が合い、桔梗の緊張は緩む。

「昨夜はよく眠れたか」

「はい」

「菊は、ちゃんとお前の面倒を見てくれているか」

「はい！ 菊さん、とても綺麗な方ですね」

「そうか？」

紫苑は無頓着に首を傾げる。

「彼女は式神だからな」

「式神って……………」

先ほどは聞きそびれたが、桔梗は式神が何なのか知らない。

「菊は言わなかったのか？」

紫苑は眉をひそめる。

「あれは菊の精だ。うちの庭の菊に宿った、精霊。それと私が契約をしている」

「……………契約？」

「式神となつて私の為に働くという、契約だ」

「紫苑は菊さんに何かしてあげるんですか？」

「来秋も我が家で咲けるよう計らってやる」

「……………それだけ？」

「それで、十分なのだ」

紫苑は食器を置いた。桔梗は慌てて残りの飯を口に頬張る。

「慌てなくてもいいぞ」

紫苑は笑って白湯さゆを口ににした。彼の笑顔はとても優しく、桔梗

はつられて微笑む。だが、彼女はすぐに真顔になった。

「あの……………、私も、その」

「うん？」

「私も、ここに居ようと思ったたら式神にならなきゃ駄目なんですか？」

「……………は？」

紫苑は意味が分からないというように聞き返した。

「えっと、だから」

桔梗はもじもじと指先を弄いじりながら繰り返す。

「菊さんみたいに、来年もここに居ようと思ったら、紫苑のために働かなきゃ駄目なのかな……………って」

「……………」

紫苑はきよとん、としていたが、やがて声を上げて笑い始めた。

「え？ え？」

桔梗は顔中に疑問符を浮かべ、きまり悪げに紫苑を見つめている。

紫苑はやがて笑いをおさめ、彼女の頭にその大きな手を置いた。

「何もしなくていい」

「え……………、でも」

「何もしなくていいんだ」

不意にふわつとしたものに包み込まれた。紫苑の身にまとっていた白い狩衣の文様が、今日の前に広がっている。焚き染められた香の薫りだろうか。甘い、どこか懐かしい匂い。緊張に強張っていた桔梗の体から力が抜けていく。小さい子供にするように　事実、桔梗は小さい子供だが　紫苑は桔梗の髪と背中をよよしと撫でる。

「でも、私……」

「いいんだよ」

紫苑は桔梗の言葉を遮った。

「まだお前は子供だろう。子供は大人に養われるものだ」

「私、子供ですか？」

桔梗は不満げに紫苑を見上げるが、

「子供だ」

紫苑は断言した。紫苑は特別長身だが、彼と比べなくとも桔梗は小さな少女だ。しかし、桔梗が本当に水龍族だとするならば……。知らず知らずのうちに険しい顔になっていたのか、桔梗が心配げに紫苑の顔を覗き込んでいた。煌く銀髪と、光に照らし出された深い湖面のような瞳。

紫苑は表情を緩め、桔梗の肩を抱きなおすとそつと体を離れた。

「とにかく、何も考えないことだ。知恵熱が出るぞ」

「ちえねっ?」

「それも気にするな。さて……、そろそろ私は宮中に参内しなければならぬ」

紫苑は立ち上がり、奥から新たな式神を呼び出した。

「藤野」

「はい」

今度の式神は男の格好をしていて、名の通り藤色の狩衣を身にまとっていた。おそらくは藤の精なのだろう。

「出かけるぞ」

「はい」

しずしずと歩んできた藤野は、ちらりと桔梗を見て微笑む。

「可愛い奥方さまで」

「違う」

紫苑は眉をしかめて答える。藤野は笑顔のまま紫苑に頭を下げた。

「おめでとうございます。藤野が紫苑様にお仕えし始めてから早幾年……藤野はうれしゅうございます」

「だから違つと言つのに」

桔梗はただ一人意味が分からないというように、目を瞬いている。紫苑は藤野に背を向け、桔梗の頭を撫でた。

「少し留守にする。夕暮れには帰って来るが」

「……紫苑、居なくなつちやうの？」

じんわりと眼を潤ませる桔梗に、紫苑は苦笑した。

「帰って来ると言っているだろう？ 待てるな？」

「……はい」

「菊がいるから、遊んでもらえ」

紫苑は桔梗の髪から手を離した。

「……………」

桔梗の幼い視線が紫苑をとらえ、やがて微笑んだ。少し無理をした。紫苑を心配させまいとしているのだろう、明るい笑みを浮かべて。

「行つてらつしゃい！」

「……………」

初めて聞いたその言葉に、紫苑は戸惑う。ずっとひとりだった。誰かから側に居て欲しいと望まれることも、誰かに帰りを待ち望まれることも、なかった……。

「行つてくる」

紫苑は言つて微笑んだ。それは藤野もついぞ見たことがないほど、自然で優しげな笑みであった。

三

宮中についた紫苑は、打つて変わつて能面のような無表情を張り付けていた。

陰陽博士、御門紫苑。従三位という高位にあるものの、殿上人の視線は決して温かいものではない。ひとにはあり得ぬ紫電の瞳。そ

して、彼の奮う不可思議な力。それはあやかしと同じ妖力であるとされ、忌諱された。都を守っているのは、紫苑であり、彼の力であるのに。

藤野を背後に従え、紫苑は歩みも早く廊下を渡っていく。自分に対する悪意が渦巻いている空間など、早々に脱してしまいたい。

しかし、

「御門どの」

「……………」

声をかけられては立ち止まらぬわけにもいかず、紫苑はむっつりとした顔のまま声の主を見遣った。同じ陰陽寮に属す占星術に長けた老人、菅野が立っていた。紫苑は陰陽寮における最高位の陰陽博士だから、菅野は彼の部下といってもいい。とはいえ、紫苑が陰陽寮の陰陽師の力を借りることなどほとんどない。

「少々、お時間をよろしいですか」

「ああ」

菅野に導かれるまま部屋に入る。何かと陰陽の術に長けている紫苑であるが、占星は専門外だ。その白い眉の下の瞳を眇め、菅野は囁くようにつぶやいた。

「星が、軌道を変えました」

紫苑は尋ねる。

「凶か？ 吉か？」

「わかりませぬ」

菅野は首を横に振った。

「どちらとも言えぬ星にございますれば」

「いつ、軌道を変えた？」

「昨夜。丑の刻一つばかり」

「……………丑の刻、一つ……………」

桔梗を拾ったのがちょうどその時間だったが、まさか桔梗がその星だとは思えない。たとえ、彼女がひとに滅ぼされたはずの水龍族であっても。

「吉凶がはつきりせぬ以上、主上に言上するのも憚られまして」
「そうだな」

紫苑は頷いた。
「様子を見ていれば良いのではないか？ その星が今すぐ主上に仇をなすわけではあるまい」

「は」
紫苑に告げて荷が降りたのか、菅野はほっとした様子で頭を下げる。そして 頭を上げたとき、菅野は紫苑をじっと見ていた。まるで何かを試すような……。

「何だ？」

促すと、菅野は低い声で言葉を紡いだ。

「その星 貴方様に近づこうぞいます」

「……………」

紫苑の動きが止まる。菅野はゆっくりと続きを告げた。

「どうぞ……………お気をつけなさいませ。御門紫苑どの」

「……………」

立ち尽くす紫苑を横目に、菅野は部屋を出て行く。

行ってらっしゃい。紫苑は桔梗のその言葉と菅野の言葉を胸に反芻し、やがて齒をきりりと食いしばった。その唇の隙間から押し出すように、

「……………それが、どうした」

つぶやかれた言葉を拾ったのは、すぐ側に立つ藤野だけであった。

第三章

五条橋にもものけが出るらしい。宮中でそんな噂が流れ始めたのは、紫苑が桔梗と出会ってから十日ほど過ぎた頃だった。

「藤原助友どのも襲われたとか」

「そうじゃそうじゃ。命からがら逃げられたと聞いたぞ」

「牛飼いの童は未だ行方不明じゃと」

「それが三日前のこと。今も臥せっておられるそうな」

「童も食われたのかも知れませぬな」

「恐ろしや」

「いかようなもののけだったのか」

「それは分かりませぬ」

「助友どのも覚えておられぬのか」

「まだそのような話が出る状態ではありませんぞ」

紫苑は眼を軽く閉じてそれらの話を聞いていた。

場所は朝議の間。簾の向こうに帝が座るまで、貴族たちは好き勝手に会話をしているが、紫苑には特に話し相手がいるわけでもない。彼に好んで話しかけようとする者も居ないし、彼から話しかけることもない。しかし、こと妖物のこととなると無視を決め込むわけにもいかず、紫苑は聞くともなく彼らの話を聞いていた。

結局のところ、五条橋にもものけが出ている、それ以上のことは彼らの話からは得られない。推量や憶測、噂の数々。貴族たちの暇つぶしとも言えるそれらの中に、信じるに値する情報が含まれているはずがない。

「紫苑どの」

不意に声を掛けられ、紫苑は振り向いた。

「は」

声の主は彼と同じ年くらいの男で、名を藤原雅哉（まねや）という。年若い今上の、摂政藤原時雅の長男で、宮中一の貴公子との誉れ高い人物である。

「お話、耳に入りましたでしょうか？」

彼は無闇と紫苑を敵視する他の公卿たちとは違い、あくまでも慇

勤な物腰であった。紫苑は彼に向き直って答える。

「少々は……」

「それで結構。我々はあやかしのことは分かりませぬし」

「はあ」

丁寧な言葉の中に含まれた皮肉に気付きながらも、紫苑は口数少なく同意する。雅哉は微笑を浮かべ、

「それでも、日暮れ以降五条橋を通れなくなったのは事実。陰陽博士である貴方に何とかして頂きたく思いまして」

「畏まりました」

紫苑はそう言い軽く頭を下げる。どうせ大したものわけではあるまい、と思う。何故かひとはあやかしともものけを混同するが、それは全くの間違いだ。ものけを作り出すのは、こころ。闇を恐れ、怨みを募らせ、想いを滾らせる。その念が下等なあやかし、時にはひとをも狂わせ、ものけとするのだ。

あやかしとひととの狭間に生まれるのがものけ。

紫苑は軽く眉を寄せた。あやかしと、ひととの交わりで生まれる唯一のものがものけなのか。それでは自分は 半人半妖の自分もものけだというのだろうか……？

「御門どのがものけを退治して下さるそうな」

遠くから、雅哉の声が響いてくる。それを耳にして、紫苑はため息をついた。宮中で自分の名が取り沙汰されるとろくなことはない経験上、彼はそのことを良く知っていた。

「おお、御門どのなら安心」

「あやかしのことならわが身のごとく詳しくうございませうからな」

湧き上がる悪意に満ちた笑い声。慣れたこととはいえ、紫苑は身を強張らせた。

「お静かに！」

折も折、今上が簾の向こう側に腰を下ろす気配がし、ざわついていた朝議の間は水を打ったようにしん、とした。紫苑に対する帝の

厚い信頼を慮ってであろう。

下郎どもが……。紫苑は口汚く胸中に吐き捨てた。

二

ここ数日間ほど、桔梗は菊と二人で昼を過ごしていた。紫苑が留守にしている間、桔梗は屋敷で留守番をしていなければならない。当然、都を出歩くことなどできるはずがなかった。

この日もはじめは菊の奏でる琴の音に聞き入っていた桔梗だが、直に飽きてしまったらしい。

「暇ですね……」

桔梗がつぶやくと、菊は困ったように首をかしげて手を止めた。

桔梗がその身にまとうのは藍色のかさねで、銀の髪によく映えている。これを見繕ったのは実は紫苑自身のだが、意外な趣味の良さに式神たちは少々驚いた。

式神となった精霊たちが、彼らの孤独な主人に寄せる思いは優しく、深い。菊もまた例外ではなかった。だからこそ彼が桔梗を捨ててきたとき、菊は驚いた。ただでさえ難しい立場にある彼があやかりの、それも今は滅びたはずの水龍族の子供を拾ってくるなど、尋常なことではない。しかも彼は彼女と出会った経緯について誰にも一切語るうとはしない。また、菊も藤野も敢えて尋ねはしなかった。心配でないわけではないが、主人には主人の考えがあるのだからと信じてのことだった。

それにこの少女は、警戒心を抱かせるにはあまりにも幼く、あまりにも愛らしく、あまりにも純粹だった。まるで生まれたばかりの赤子のように。

「絵合わせでもなさいますか？」

「……………」

並べられた貝を手に取り、桔梗はつぶやいた。

「紫苑がこの間、これで遊んでくれた」

「そうですね」

菊は微笑む。それは、さぞかし微笑ましい風景だっただろう。紫苑は相変わらず気難しい顔で貝を覗んでいたのだろうか。あの大きな手に、小さな貝はすっぽりと隠れてしまうことだろう。

「もう一度、遊んで欲しいな」

「お暇があれば、きっとお相手してくださいませよ」

「そう？」

桔梗は起き直り、瞳を輝かせる。

「ええ。勿論ですとも」

桔梗に対し、紫苑には保護者の自覚が芽生えているらしい。彼女に字を教え、歌集を与える。衣も見目麗しいものを選び、惜しげもなく買い与えていた。都びとの間に妙な噂が広がらなければ良いのだが。

そもそも、あの方は歌をお詠みになられるのかしら？ 菊はそれがおかしくてたまらない。

桔梗は桔梗で素直に紫苑に言われるまま字を覚え、最低限の作法も身につけた。菊や藤野には少し逆らってみることのある桔梗だが、紫苑の言うことには異議を差し挟まない。

「桔梗さまは、紫苑さまがお好きですね」

「……………」

貝を弄っていた桔梗の手が止まった。

「……………」

白磁の肌が薄桃に染まった。赤い顔で菊を見上げる。

「紫苑に言わないでね？」

「いけないのですか？」

「うん」

桔梗は俯いた。

「何故？」

「……………紫苑を困らせることになるかもしれないし」

「……………」
「だから、秘密にしている」
「……はい」

菊は微笑んで頷いた。幼い少女の胸に生まれた好意は、まだ恋に分類するには早すぎるものだろう。それでも、大事に育てて欲しい。菊は桔梗の銀髪をそつと撫でる。そして、紫苑さまは、いつまでもひとりであらう。いつかは思わないそんなことを、ふと思った。

紫苑は誰も信じない。ひとも、あやかしも、異端の存在である彼を受け入れることはない。この広い屋敷で暮らすのは紫苑と式神のみである。

しかし、桔梗も孤独な身の上には違いない。彼女の属する水龍族は既に絶えたといわれている。彼女の家族や知り合いがどうなったかは分からないが、恐らく生きてはいないだろう。

水龍族を滅ぼしたのは、ひと。
何度となく戦われたひととあやかしの戦いで、数の圧倒的に少ないあやかしたちはその強大な力にも関わらず常に圧されていた。水龍族も四天王と呼ばれたほどの力を誇っていたにも拘らず、結局絶滅に追い込まれた。

あやかしの戦いに、現在最強の陰陽師である紫苑は参加したことがない。彼の裏切りを恐れているのだろうか。そもそも何故ひととあやかしが戦わなければならぬのか、菊にはわからない。紫苑もきつとわからないというだろう。

桔梗とひとの少女との間に、何の違いがあると言うのだろうか。髪の色？ 眼の色？ 尖った耳？ 額に描かれた文様？ 何て下らないこと……。菊が小さくため息をついたとき、

「あ」
側に伏せていた桔梗が身を起こした。

「どうされました？」

「うん……………」

曖昧に呟いて桔梗は辺りを見回す。

「紫苑が帰ってきた」

抑揚のない口調。眼はどこか中空を彷徨いながらも、らん、と輝いていた。まるで何かに憑かれているようだ。菊の背中がぞわりと粟立った。

「紫苑が、帰ってきた」

桔梗はもう一度、繰り返す。

「え？」

菊は驚いた。彼自身のかけた術で彼と繋がっている菊ですら感じ取れない気配を、この少女は感じ取ったというのだろうか。半信半疑で桔梗を見つめっていると、つと彼女は立ち上がり、廊下を小走りで駆けていった。ちらりと見えたその顔は、既にいつもの幼い表情に戻っている。

「やっぱり！」

廊下の向こうから桔梗の弾んだ声がして、菊はぴくりと体を震わせた。やはり、紫苑の帰りを感知取っていたのか。あの少女は一体何者なのだろう……？

「何がやっぱり、だ？」

桔梗に対する時だけに聞かれる、柔らかい主人の声がする。

「さつきちようど紫苑が帰ってきたって思っで。そうしたら、やっぱり帰ってきでいたから」

「そうか」

紫苑は何も疑問には思っでいないようで軽く受け流していた。菊の居る部屋の前まで二人は歩みを進め、紫苑は中を覗いた。

「菊」

「はい」

その穏やかな表情に、菊は胸中にあつた不安を忘れることにした。

紫苑は、今この少女とともにあることがしあわせなのだ。彼女は、彼が初めて得た家族のような存在なのだから。

「桔梗は大人しくしていたか？」

袖をぎゅっと掴まえている桔梗の髪を軽く押さえ、紫苑は尋ねる。
「ええ」

菊が頷くと、桔梗はほっとしたように息をついた。

「近々調伏に出る」

紫苑は表情を引き締め、そう言った。

「五条の橋にものけが出るそうだ」

「はい」

菊は口元を引き締めた。紫苑は時に供として式神を連れて行く。その任に当たるのがどの式神かは分からないが、菊はその心積もりをした。

「桔梗、一晚留守にすることになるが、大人しくしているのだぞ」

「……………」

桔梗は虚をつかれた様に黙り込む。

「どうした？」

紫苑が畳み掛けると、桔梗は紫苑の腕をぎゅっと掴んだまま頭を横に振った。

「桔梗？」

珍しく紫苑の言うことに逆らう桔梗に、菊も驚く。

「……………って下さい」

「何？」

紫苑が眉を潜める。桔梗はぱつと勢い良く顔を上げた。

「連れて行ってください！」

「……………」

紫苑がぼかんと口を開ける。その間抜けな表情は、菊にはたいそう面白い見物であった。

藤原雅哉邸の一角。簾からは夕日が薄く何層にもなって差し込んでいる。

雅哉は彼の異母弟、伴雅と向き合って座っていた。雅哉には幾人もの異母兄弟がいるが、同じ母親から生まれた者は弟の蓮しかいない。蓮は今帝の側仕えの蔵人くらびととして宮中に参内し、雅哉の邸には居ない。

さて、伴雅である。

「兄さま」

低い声で囁くように伴雅は言った。

「いつまであの人妖ほけものを宮中にのさばらせておくつもりですか」「どういうことだ？」

雅哉は緩く足を組み、扇で自らに風を送る。

「お分かりのほすですが」

伴雅は底冷えのする目つきで雅哉を睨みつけた。時雅の北の方の息子である雅哉に比べ、妾腹である伴雅は冷遇を受けている。能力はあるが少々狭量だ、と父は伴雅を評していた。

「しかし」

雅哉は扇をぱちん、と閉じた。

「彼への帝の信頼は厚いであろうが」

「今上は誑かされておいでなのです」

「言葉を慎め、伴雅」

「……………」

伴雅は五位。紫苑よりも位が下である。おそらくはそのことが伴雅の紫苑に対する敵意をかきたてているのだろう。

「私も彼を好くわけではない」

宥めるように雅哉は言った。

「お前の気持ちも良くわかるのだよ。ひとである父親も誰なのかはわからず、母親はあやかしという。御門家を名乗ることができるの

も養子に入ったおかげだ」

「蘇芳殿も少々短慮でした」

「そうかもしれない」

先代の御門家当主、蘇芳は既に隠居の身である。決して紫苑と折り合いは良くない。

「しかし、だからといってどうする？ 彼を宮中から追い出せとでも言うのか。都を誰が妖異から守るのだ」

「陰陽寮には他にも陰陽師たちがおります」

雅哉はゆっくりと首を横に振った。

「彼らが束になってかかっても彼には勝てまい」

彼は意外と冷静に紫苑を評価している。ただ毛嫌いするだけの他の公卿たちとは異なっていた。

「馬鹿なことを考えるのはやめるのだな。彼に何か落ち度があれば

……考えても良いが」

「……分かりました」

伴雅は低く呟いた。

「彼の監視は怠りません」

「……………」

伴雅の放った忍の存在など、紫苑は気がついていいるかもしれない。

雅哉は紫苑を敵に回したくはなかった。彼のことは好きではないし、半妖という存在を受け入れるつもりもない。だが、都にとつて紫苑は必要な人材だ。無駄に敵視するよりは味方に取り込んだ方が良いだろう。

雅哉は再び扇を開く。伴雅を観察しながら、彼はそれで自らの口元を遮った。

長い髪をきゅつと高く結び、背中に垂らす。つややかな黒髪はそつと手で触れてみたくなるほど綺麗だ。白い狩衣の要所を縫いとめる紫の糸は、術で強化されているらしい。手首の数珠は護符で、その袖口には呪符が何枚か入れられている。腰にさしてある小刀も普通の刃ではなく、特別に鍛え上げられたものであった。

桔梗は支度を進める紫苑の側に座りこんで、ぼうつと彼を見上げていた。ひとつもあやかしとも違う匂いにする彼の隣りは、とても居心地が良かった。隙のない所作、鋭いがどこかに優しさを宿す眼光……。

「桔梗」

「は、はい！」

不意に名前を呼ばれて飛び上がる。紫苑はいつの間にか支度を終え、桔梗をまじまじと見つめていた。

「お前、本当に行く気なのか」

五条橋のもののけを退治しに行くという紫苑に、無理やり同行を頼み込んだのが一刻ほど前のこと。はじめは反対していた紫苑も最後は折れたのだが、それでもどこか心配そうである。

「行きます」

ぐつと唇を噛み締めて頷くと、紫苑はやれやれ、と言った様子で苦笑を浮かべた。

「大したもののおかげでなければ良いのだがな。いざとなればちゃんと逃げるのだぞ。戦えとは言わぬからな」

「は……はい」

桔梗は頷く。

紫苑は緊張した面持ちの桔梗を見つめた。彼女は間違いなく水龍族である。水龍といえばあやかしの中でも最強の妖力を誇る一族で、その殺性は非常に強く、自分に刃向う者を殺すことに罪悪感を持たない。逆に自分の味方は命を懸けて守ろうとする、そのような一族であったといわれている。桔梗は本当にそんなあやかしのだろうか？ 紫苑は自問する。その白く細い手で、本当に誰か

を傷つけることができるのだろうか？

「……紫苑？」

「さらり、と銀髪が零れた。」

紫苑は首を横に振って彼女から眼をそらす。たとえば彼女の
手が血に汚れても、私はちゃんとその手を取ってやるわ、そう思っ
た。一族からはぐれ、たったひとりで生きていかなばならぬ桔梗の
身の上は、どこか自分と重なって見える。

「先に飯だ。その後行く」

紫苑はそう告げて菊を呼び出した。いつもの通りどこからともな
く現れた菊は、首をかしげて紫苑を見る。

「桔梗さまはこのままのご装束でよろしいのですか？　あまり動く
には適さないと存じますが……」

「何？」

紫苑は桔梗を見た。桔梗の大きな青い目が紫苑をとらえる。

「……何を着せれば良い？」

菊に問うと、彼女はふわりと微笑んだ。

「菊にお任せ下さいませ」

「ああ、任せる」

紫苑は照れ隠しのように、意味もなく重々しく頷いた。

三

それから一刻ほど後。五条通を歩む三つの人影があつた。紫苑と
桔梗、それに式神である。この式神は菊とも藤野とも違い、名を焰^{ヒノ}
という。その名の通り赤がかつた髪と瞳を持つ青年で、まとう狩衣
まで赤い。紫苑に流れるあやかしの属性は火。その力により召還し
た式神だと桔梗は聞いた。焰は桔梗を見ない。というよりも、周り
の事物に対して一切関心がないようだった。そういえば声も聞いて
いない。

「……桔梗」

突然低い声が振ってきて、桔梗は顔を上げた。紫苑の仏頂面が眼に入る。

「歩きにくいのだが」

「……すみません」

謝ってみるものの歩きやすくしてやるつもりもないようで、桔梗はしがみついていた紫苑の腕にさらに体重を預けた。

「夜目が利かぬわけでもあるまい？」

「そうですね……」

桔梗は目を伏せた。

「でも、寒いですし」

今の桔梗は童形の少年のような服装をしている。銀髪も頭頂部で一つにまとめて背中に垂らしていた。確かに軽装だから、少々寒いかもしれない。

「だから家にいると……」

「紫苑は暖かいですね」

皆まで聞かず、桔梗は見上げてにっこりと微笑んだ。

「最初に私を拾ってくれたときも、暖かった」

「……そうか」

紫苑はわざとらしくそっけない返事を返し、宵闇の向こうを見つめた。五条橋は近い。

りん、

と鈴が鳴った。小さな音だったが、それは闇を震わせ、彼らの足を止める。

「紫苑さま」

焰が紫苑を呼ぶ。彼が言葉を口にするのは初めてのことだ。

「ああ」

紫苑は顔を引き締め、桔梗を庇うように袖の中に入れた。

「桔梗。黙ってしがみついている」

「はい」

桔梗は唇を引き結んで紫苑の腕に身を預けた。紫苑の心音が心地よい。

りん、

さらに鈴の音。先ほどより少し大きい。

りん、

徐々に近づいてくる。

紫苑は桔梗を抱いていない方の腕の袖をぱつと翻し、顔の前で印を結んだ。

「……………」

桔梗には意味不明な言葉が彼の唇から紡がれる。訥々とした中にも抑揚をつけて呪を唱える声は、とても綺麗だと思った。

「……………?!」

紫苑が不意に桔梗を抱えたままうずくまる。途端、熱風が彼らに吹き付けた。

「きゃ……………」

思わず漏れそうになった声は紫苑の手に遮られたが、桔梗は大きく眼を見開いてその光景を眺めた。それは、焰が一匹の鳥に 伝説の神獣、朱雀に変化する瞬間。闇を焦がして炎を纏うその姿は、神々しく、雄々しい。

りん、

熱と炎に包まれた中、鈴の音だけが大きく耳に届いて、桔梗はぞつとする。

「桔梗?」

指先が細かく震えていることに気付いたのか、紫苑が声をかけた。「大丈夫です」

桔梗は答えて紫苑にしがみついた。紫苑は黙って彼女を抱えて立ち上がり、橋のたもとへと歩み始める。

「……………」

袖口から取り出した呪符に念を込め、紫苑は橋の欄干四方へと飛ばした。紫苑の頭よりも少し高いほどの位置で呪符はびたりと静止

し、かつと輝く。

りん、

音が少し変化した。

「橋に結界を張った。もうここからは出られぬ」

紫苑は誰にともなくそうつぶやいた。

「しかし……正体が見えぬな」

上空に静止していた朱雀が羽ばたき、舞い降りてくる。紫苑の唱える呪に呼応しつつ軽やかに動き、朱雀は身を隠しているものを探した。

りん、

また、鈴の音。紫苑は眼を見開いた。

「朱雀!!!」

焦りをにじませた、今まで聞いたこともないような大声。

朱雀が橋の表面に急降下してくる。皮膚がざわめくような瘴気を感じ、桔梗が身をすくませたその瞬間、ごう、と強風が辺りを薙ぎ、紫苑と桔梗を吹き飛ばした。紫苑の手が桔梗から離れる。

「桔梗!!!」

紫苑の声　まるで悲鳴のような。

桔梗の体がふつと軽くなり、そしてそれは落下を始めた。黒い川面に向かい、真っ直ぐに。……そのとき桔梗の目に映ったのは、女……。固く鈴を握り締めた、女。もう片方の手には……髪の毛の長い、女の……、首？

桔梗の頭から血の気が引く。首を抱えた女が、裂けた口でにっと笑い　桔梗の頭の中で何かが弾けた。

第五章

「桔梗！」

紫苑は叫んで橋の欄干に駆け寄ろうとした。途端、再び瘴気に吹き飛ばされる。

「ぐっ……」

肩を強打した紫苑は、朱雀に向けて印を結んだ。朱雀が人には聴くことの出来ない咆哮を上げ、炎を生み出す。もののけは怯んだようにあとずさった。

そうか。そのとき、紫苑は思い出していた。

「お前は……華子！」

数ヶ月前　とある男の妻が大病に伏せた。いよいよ命の灯火が尽きようかというときになり、彼女は夫と約束を交わした。決して再び正室を迎え入れることはない。

瀕死の正室は鈴を所望し、やがてそれを握り締めたまま事切れた。男はその後しばらくは独り身を通したが、彼がまだ若かったこともあり、周りがそれを許さなかった。やがて若い後妻が屋敷に入り殺された。首をもがれるという無残な死に様で。そのとき周りの者が聞いたのは後妻の悲鳴ではなく、ただ鈴の音。

あの正室の名は確か、華子だった。後妻を殺しただけでは飽き足らず、その妄念が凝り固まったままもののけと化したらしい。

「……ちっ」

川に落ちた桔梗が気になるが、水のあやかしである彼女が溺れ死ぬなどということはあるまい。とにかく、先にもののけを調伏しなければ……紫苑は心を決め、呪符を取り出す。もののけも彼の気配を察したらしく、瘴気を強めた。

「……………！」

紫苑が最初の一言を発したのと、川面が爆発したのとは同時だった。

川面に落ちた桔梗は、そのままずつと下に沈み込んだ。

「っ……！」

冷たさに身をすくめるが、水は彼女を優しく受け入れた。この感じを、私は知っている。桔梗は気付いて眼を見開いた。彼女の着ていた衣が徐々に落ちていき、彼女は薄物を一枚纏っただけの姿となる。力を抜くと、体はそのままゆらゆらと水の中を漂った。

この感じ……。桔梗は目を閉じる。髪を揺らす波紋。指先をすり抜けていく泡。肌に馴染む水温が心地よい。

昔、私はこの中にいた……。誰かを待っていた……。

とくん、

とくん、

体を丸め、自分の鼓動に耳を傾ける。私は 誰かを待っていて、そして……。

桔梗！

水を響かせる強い声。彼女を見つめる優しい紫の瞳。

桔梗！

どくん、

「しおん……」

桔梗はつぶやき、目を開ける。彼女の体の中で何かが爆発した。

ざあつ、と水柱が立ち上がり、水面に叩きつけられる。まるで、突然空中に滝が生じたようだった。

「なっ……っ?!」

水を苦手とする朱雀は空高く舞いあがって、警戒の声を上げた。

「これは……」

凄まじいまでの妖気が空間を席卷する。紫苑の皮膚までもがぴりぴりと痛みを感じた。もののけはその醜い姿を橋のたもとに隠している。

やがて水柱が消え　上空にゆったりと浮かぶあやかしの姿があらわになった。

長く、白い手足。腰までも伸びた銀髪。額の青い印と、青水晶のように輝く瞳。弧を描く赤い唇　。

「き、きょう……？」

紫苑は呆然と呟いた。

まるで違う　まるで違う気配をまといながらも、それは桔梗だった。桔梗でしかあり得ない。だが、その体は成熟したおんなのものだ。

「何故……何故いきなり成体に？」

声音が震える。

水龍族の成体　彼らは「水の殺戮者」と呼ばれていた。そのふたつ名は、邪魔なものは見境なく殺すというその苛烈な性質から付けられたもので、伴侶を得た一人前の成体ではよりその傾向が顕著となる。その非常に強い殺性は、同じあやかしたちからも恐れられていたという。その水龍が　ここにいます。

「……………」

「桔梗」はふわりと笑った。何の屈託もない、純真な笑み。紫苑の視線が吸い寄せられる。

「……………」

唇が勝手に彼女を呼んだ。

すらりとした足が空を蹴り、「桔梗」は紫苑の側へと降り立った。薄物一枚を纏っただけの体は、その大人びた体型をくつきりと浮かび上がらせている。

「紫苑」

澄んだ声は、桔梗と同じ。

「少し待っていて」

「桔梗」の唇が艶やかに微笑んだ。

「すぐ片付けるから」

「桔梗！」

とどめようとした手を、彼女のひんやりとした指先が握った。眼を合わせると、「桔梗」は少女めいた笑みを零す。その純真さと残酷さは、紙一重だった。紫苑は体を強張らせる。

「その名前……、『私』も気に入ってるの」

くすくすと微笑みながら、「桔梗」は紫苑の手を離した。

「待っていて」

隙をうかがっていたのか、もののけが「桔梗」に向かって突進した。溢れんばかりの瘴気と、彼女 既に華子ともいえない、ものけを核として吐き出されてくる悪霊たち。その勢いたるや凄まじいものがあるが、「桔梗」は慌てることなくゆっくりと向き直った。紫苑をとん、と後ろに押しやり、彼女は真っ直ぐに手を振り上げる。「……切り裂け」

彼女の言葉に従い、川が狂った。どつと逆巻いた川面から刃のような水が打ち出され、橋の中央はずたずたに切り裂かれる。同時に、もののけの体はあっけなく四散した。

おおおおおおおおおおおお！！

大気が震える。

逃れようとする小さな悪霊たちまでも水は捉え、引き裂いて粉々にした。どす黒く濁っていた水の色も徐々に澄んで、やがて 全てが消える。呆気ないまでの殺戮。紫苑が除霊を行うまでもなく、もののけは 華子は 消滅した。

「……もう終わりか。呆気ない」

「桔梗」はつまらなそうにつぶやいて、呼び寄せた水を返していく。

「下等なものけだった、というわけか」

「桔梗……」

紫苑は乾いた喉から、どうにか声をしぼり出した。

「お前、どうして……」

「成体になつたかつて？」

振り向いて眼を覗き込まれる。普段よりもずっと身長が近づいたせいで、「桔梗」の顎が紫苑の胸元に触れていた。

「簡単なこと。この体にはふたつの人格が棲んでいるの。……こちらの『私』は嫌？」

「そういうわけではない」

紫苑は首を横に振る。

「ただ、……その、よくわからない」

「桔梗」は少し眼を見開き、やがて口元を緩めた。

「そう」

「教えてはくれないのか？」

「教えることなど、何もない」

「桔梗」は艶やかに微笑む。

「私たちはふたりとも 貴方が名づけたとおり、『桔梗』なのだから」

「何故、お前はふたつの人格を持つ？」

「必要だから」

「何のために必要なんだ？ お前は一体」

「そんなこと、今はまだどうだっていい……」

「桔梗」はそうつぶやくと、少し背伸びをした。

「良くは……ない、が」

「桔梗」の水色の瞳に追究を拒絶する色を読み取り、紫苑は語尾を濁した。

「だが、聞かれたくないなら聞かないでおく。お前が必要だと思うときに話してくれればいい。それでいいか？」

「桔梗」は嬉しそうに笑って頷いた。そんな表情はいつもの桔梗と良く似ていて 紫苑は困惑する。

「お前も、桔梗なんだな？」

確かめるように尋ねると、彼女はこくりと頷いた。

「それだけがわかっていれば、十分だ」

紫苑は力を抜いてそうつぶやいた。水龍の殺性を知らなかったわけではない。それでも、自分は彼女を手元に置こうと思った。守ってやるうと思っただ。それならば最後まで責任を取りたい。桔梗と「桔梗」は外見も中身も異なっている。それでも 彼女の中にある孤独は変わらないのではないか。そんな気がした。彼の中の孤独と惹きあうものを感じる。そして それ以外にも、何か……。

「紫苑」

「桔梗」の声に、顔を上げる。と、不意にその唇に柔らかいものが押し付けられた。

「……………」

眼前にある閉じられた瞼は、銀糸のような長い睫毛に縁取られている。彼女の細い指が紫苑の長い黒髪を優しくなぞった。

「……………」

紫苑はやがて眼を閉じ、「桔梗」の背中を優しく抱擁した。子供を宥めすかすような動作だが、彼女は気持ちよさそうに彼に凭れる。

「……………私は」

「桔梗」がつぶやく。

「私は、ずっと貴方を待っていた」

ずっとずっと、あの場所で。

「水龍の皆が死んでも……自分自身の記憶を失っても」

貴方を待っていた。

「それは、仕組まれていたこと」

彼女はゆっくりと眼を開けて紫苑を見上げた。

「私たちの運命」

「運命……？」

「もうすぐこの世界は大きく変化を遂げる」

「桔梗」はまるで預言者のように言葉を紡ぐ。

「そのために私はいる。もう独りの桔梗に、まだこの定めは背負え

ないから」

「独りで扱うには、この妖力は強大すぎる。彼女は言い換えた。貴方も運命の歯車のひとつ。大きな、中心となる歯車」

「……………」

「私も同じ。私たちが出会ったのは、運命……」
「いや」

紫苑は首を横に振った。

「違う。私はお前に呼ばれた、だから出会ったのだ。運命に呼ばれたのではない」

「……………」
「私が、呼んだ？」

「そうだ」

「桔梗」の瞳が揺れる。

「運命などに呼ばれて、誰が行くものか」

紫苑は毅然とそう言い放った。それは、彼がいつも自分に言い聞かせてきたこと。どれだけ孤独でも、どれだけ辛くても、どれだけ疎外されても。

「私は私のしたいように生きてきた。これからもずっとそうだ」

だから、

「お前もそうしろ」

「……………」

「桔梗」は微笑んだ。意図のつかめない、底冷えのするような笑み。

「私が、怖くない？」

唐突にそんなことを尋ねる。

「私は貴方を殺すことができる」

「……………」

紫苑は黙ったままそれを認めた。どんなに彼が優れた陰陽師であっても、彼女には勝てないだろう。彼女は普通のあやかしではない。いや、おそらくは普通の水龍ですらない。あの残酷な戦い方を全てを洗い流してしまう様子は戦慄を誘うものだった。確かに、

紫苑には彼女を恐れるだけの十分な理由がある。しかし……。

「怖くない」

紫苑は彼女をそっと抱きしめた。

「お前を怖がることなどない」

「桔梗」は為されるがままに紫苑の胸に顔をうずめる。

「世界中の皆がお前を怖がっても、私は怖がってなどやらない」

恐れられるということは、孤独だということだ。紫苑はそれを良く知っている。自分は人から常に恐れられてきたのだから。

「お前が桔梗なら　怖がる理由など何もない」

「桔梗」は深い吐息をついた。

「……」
何事か囁く。だが、紫苑の耳はその言葉を捉え損ねた。わざとかもしれない　「桔梗」はそれを、聞かれなくなかったのかもしれない。なかつた。

第六章

—

桔梗が眼を覚ましたとき、既に夜明けが近かった。

「……あれ？」

身を起こして首を軽く振ってみる。銀髪がぱらぱらと頬にかかっていた。

「私……」

そうだ。私、あの時川に落ちて……落ちて、その後どうなっ

たんだろう……。

「紫苑……？」

辺りを見回した視線がぴたりと止まる。彼女の眠っていた寝具のすぐ側、壁にもたれかかるようにして紫苑が眠っていた。結った髪も解かず、服も昨夜のままだ。ずっとここに居てくれたのだから。桔梗の側で、一晩中見守って……。式神に任せることもせず、紫苑自ら彼女の傍らについてくれたのだろうか。

「紫苑」

そつとつぶやいて、桔梗は紫苑の俯いた顔に手を伸ばす。指先が触れるか触れないかの距離まで近づいたとき、紫苑が小さく身じろいだ。はつと桔梗が手を引っ込める。

紫苑の紫電の瞳が開いた。

「桔梗？」

紫苑は身を起こして桔梗の肩に触れる。

「大丈夫か？」

「はい！」

心配そうに尋ねる彼に、桔梗はぶんぶんと首を縦に振って頷いた。

「でも、あの」

桔梗は口ごもる。

「私……昨日のことあんまり覚えてなくて」

「……………」

紫苑は黙って桔梗を見返した。

その後、「桔梗」はあっさりと身体の支配権を手放した。まだ時期ではない、という言葉を残して。

川に落ちたはずなのに濡れもしていない体を　そしてあつという間に幼い少女となった体を抱きとめ、紫苑は暫し黙然としていた。

運命など信じない。「桔梗」にはそう言い放ったが、実のところ気にならないわけではなかった。桔梗と出会ったときの不思議な体験。菅野の警告めいた星見。そして、「桔梗」　私には貴方

を殺すことができる。そう聞いても自分は動揺しなかった。むしろ、それならそれでいいとさえ思った。私の居場所はこの世界にはないのだから。だが、それは桔梗も同じかもしれない。そう 私たちはきつと、良く似ている。

「紫苑？」

間近で覗き込まれて紫苑はどきりとした。昨夜の柔らかな唇の感触が蘇り、さつと顔に朱が指す。

「どうしたんですか？」

「いや……」

紫苑はやりわりと首を横に振った。桔梗が昨夜のことを覚えていないのなら、わざわざ教えるまでもない。

紫苑は言葉を選んだ。

「昨夜お前が川に落ちて、もののけは、その……私が退治して」

「紫苑が私を助けてくれたの？」

桔梗の青い瞳がきらきらと輝いた。

「そ……そうだな」

自分でも下手くそな嘘だと思ったが、桔梗はあっさりと信じたらしい。

「ありがとう、紫苑」

桔梗はそう言って微笑んだ 「桔梗」と同じ微笑だった。

二

自分の部屋に戻り、紫苑は昨晚を思い出す。 眠り込んでいる

桔梗を抱えて帰宅する途中、焔が言ったのだ。

「そのあやかし、ふつうのものではありませんね」

「どういうことだ？」

紫苑が振り向くと、焔はその無表情な顔に僅かな緊張を浮かべて

いた。

「先ほどの『彼女』の妖力の波動に、私は覚えがあります」

「何だと？」

「紫苑は足を止めた。」

焰は　朱雀は、最強の霊獣である四聖獣の一である。

朱雀。青龍。白虎。玄武。それぞれが火族、水族、風族、地族の守護獣であるとされている。

己にふさわしいと認める者による召還にしか応えることのない霊獣たちで、大抵の人間たちは伝説だと思っているし、あやかしもそれは同じだろう。

だが、彼らは確かに実在する。現実には、朱雀は紫苑を主と選んだのだから。

朱雀　焰はうなずいた。

「『彼女』の波動は、青龍のもんです」

「何だつて……？」

紫苑は眉を寄せた。

「青龍の？」

「ええ」

焰は頷いた。

「恐らくこのあやかしは、その魂に青龍を宿している」

「……………」

紫苑は口をつぐんだ。　そんなことがあり得るのだろうか。魂に霊獣を宿すなどと、そのようなことが。

焰は彼の疑問を悟ったのか、淡々とした口調で説明した。

「水龍は、青龍とのつながりが深いのです……………」

元々水龍は謎の多いあやかしであった。だが、ほぼ絶滅してしまっただと思われる今ではそれもはや知る由もないことである。

「彼らの中には、『御子』と呼ばれる個体が生まれることがある」

「……………」御子『？』

それは、紫苑も初耳だった。

「圧倒的な妖力を持ち、一族を統率する次代の長となるあやかしです」

「それが、青龍を宿すのか」

「いえ」

焰は首を横に振った。

「今までにそんな例はない」

青龍は四聖獣の中でも特に力の強い霊獣である。その霊力を制御できるあやかしなど、今までいなかった。

「青龍は……常に誰に属することもなかったのですが」

しかしあの波動は青龍のものだ、と焰は言った。紫苑はじつと考え込む。もし焰が言うことが本当だとすると、それではあの桔梗が水龍の「御子」だということだろうか？ 一族が滅ぼされた後も「御子」である彼女だけが死を免れたということか？ そして、私を待っていたのか？

腕の中の桔梗をぎゅっと抱きしめた。

「『運命』だと言ったな」

紫苑は小さく囁いた。

「それは私たちを苦しめるものなのか？ それとも……」

力を失った華奢な体は何も答ええない。それとも、私たちを新

たな道へと導くものなのか？

「むしろ両方かもしれない……な」

紫苑はつぶやき、歩みを再開した。もう、立ち止まるつもりはなかった。

「……………」

ぼつつと庭を見遣っていた紫苑は気配を感じて振り向いた。視線の先には桔梗が顔を覗かせている。

「どうした？」

尋ねると、彼女はふるふると首を横に振った。

「何でもないんです。けど」

「けど、何だ？」

「側に行ってもいいですか？」

「……………」

紫苑は微笑んだ。

「ああ」

桔梗は嬉しそうに笑って彼の側に腰を下ろす。甘い香りが鼻を掠めた。

「綺麗な空ですね」

桔梗の声に、紫苑は上を見上げる。改めて眺めた空は、深く澄んで美しかった。きっと、彼女に言われなければ気付かなかっただろう。

「……………そうだな」

紫苑は呟く。

「綺麗だ」

こんな時間が続けばいい。

紫苑は頼りなげな桔梗の肩にそっと手を置く。白い雲の軌跡を辿れば、青い天球の形がなぞれそうだと思った。

ひとりでいることは嫌いではない。それなのに、今こうやってふたりでいることをとても心地良いと思う。まるでずっと昔から彼女を知っていたかのような、不思議な安心感。どこか境遇が似通っているからだろうか。根深い孤独を共有しているからだろうか。どんなにその存在が謎めいていたとしても、彼は構わない。ただ一緒に、こうして空を見上げて。

「ねえ紫苑」

桔梗が甘えるようにもたれかかってきた。

「今日はお出かけしないんですか？」

「ああ」

短く答えると、桔梗は嬉しそうに笑って、
「だったら、遊んでくれますよね？」

「……何がいい？」

紫苑は向き直って尋ねた。

「何がしたい？」

桔梗はしばらく考え、やがて微笑んだ。

「何でも！」

紫苑といられるのなら、何でも……。

三

御門蘇芳はその日、藤原伴雅の屋敷を訪れていた。蘇芳は紫苑の先代の御門家当主で、かつての陰陽博士である。隠居の身である彼が突然呼ばれた理由は分からないが、何故この若造に呼びつけられなければならぬのかと思うと少々腹立たしい。

「わざわざお越しいただいてありがとうございます」

伴雅はゆったりと微笑んだ。

「いえ」

蘇芳は短く答える。伴雅は扇を軽く揺らしながら尋ねた。

「最近、ご子息とはお会いになるのですか？」

「紫苑と、ですか？」

蘇芳は一瞬視線を上げ、再び下ろした。

「会いません」

彼はあの青年が苦手だった。先帝の命により紫苑を養子にしたものの、結局半人半妖という彼の存在を受け入れられなかった。紫苑もそれは十分承知しており、幼い頃から養父である自分に甘えるということをしなかった。それが余計にふたりの溝を広げ、結果、今では完全に他人同士になってしまった。

「では、最近のご子息の様子もご存知ではないと？」

「ええ、全く」

蘇芳は伴雅を見据えた。かつて陰陽博士であった頃と同じ、鋭い

視線が伴雅を射る。伴雅はさすがにうるたえた様子で視線を逸らした。紫苑であれば、必ず受け止めていたものを。不意に浮かんだそんな考えは、続いた伴雅の言葉に打ち破られた。

「ご息が今、あやかしを屋敷に住まわせていらっしやるのをご存知ですか」

「……は？」

蘇芳は聞き返した。

「あやかし……ですか？」

紫苑は人間から受け入れられてもいないが、決してあやかしと近しいというわけでもない。式神の間違いではないか、という顔をする彼に、伴雅は追い討ちをかける。

「それも水龍族と思われる少女です」

それは、彼が御門邸に放った忍から得た情報だった。蘇芳はすぐさま言葉を返す。

「そんなはずはない。水龍は滅びたはず」

「しかし銀髪に青い眼……そして額の文様。全てが水龍の特徴だったそうですよ」

「……」

蘇芳は黙り込んだ。

「紫苑殿は未婚でしたな？ 養子のおつもりでしょうか？」

伴雅は軽い口調で言う。

「しかしお上に楯突いた存在であるあやかしを家族に迎え入れるとは……少々軽率ではありますまいか」

「……」

「お疑いならご自身でお確かめください」

「……」

蘇芳は視線を落としたまま答えない。

「このことは未だ、私ひとつの胸にしまっておきましょう」

「……ありがとうございます」

紫苑が罪を得れば、蘇芳もただではすまない。伴雅は頭を下げる

蘇芳を満足げに見遣った。

「それで……、ひとつ、お願いを聞いていただきましょうか」
「お願い……？」

顔を上げた蘇芳に、伴雅は微笑みかける。

「ええ。それほど難しいことはありません。まじないです」

「まじない……」

まじない。呪い。蘇芳は鸚鵡返しにつぶやいた。伴雅は言葉を続ける。

「そう。そしてまじないは、のろいとも読み替えることができる」
のろい。呪い。

「私のお願いを、聞いていただけますな？」

「……………」

蘇芳はのろのと頷いた。頷くしかなかった。

「御意」

伴雅の巻

第一章

—

からから、と。通りを牛車の進む音がする。濡れ縁で書物をめくっていた紫苑は、軽く顔を上げて音の方向を探った。誰か、自分に用事がある者かもしれない。

都で怪異が起これば、大抵は自分のところに持ち込まれてくる。それが公のものであれば宮中にて相談を受けるし、私的なものであれば こうして屋敷を訪れてくるのだ。

秋が進んで屋敷の中庭は淡い枯れ草色になっている。紫苑はそこに視線を落とし、ため息をついた。

「菊」

呼ぶと、ひとりの女房が音もなく彼の背後に現れ、畏まる。

「お呼びですか？」

「桔梗を連れて奥に行っている。彼女が見つかるか厄介だ」

「はい」

菊は頷き、姿を消した。

「……………」

紫苑はもう一度ため息をついた。桔梗と出会ってから、既にひとつきが経つ。平穩に日々は過ぎていたが、それは実際まだ何ごともしこっていないというのと同義だった。桔梗のこと、水龍のこと。彼女のうちに潜む青龍の魂のこと。そして 自分のこと。何も明らかにはなっていない。

「紫苑さま」

季節が移り、藤野は役目を終えた。代わって現れたのがこの式神、

馨である。

「ご来客です」

「誰だ？」

「女の方ですが」

「……女？」

紫苑は眉を寄せた。

「名乗らぬのか？」

「はい」

「……通せ」

紫苑は袖を払って立ち上がる。藤色の衣がはさ、と音を立てた。

女は部屋に用意されていた帳の向こう側に座っていた。こちらから窺えるのは衣の裾だけだが、かなり高級な服地であることが分かる。貴族の子女、か。

「突然お伺いして申し訳ありません」

女は深々と頭を下げたようだった。声の調子からすると、紫苑より少し年上かも知れぬ。

「いえ」

紫苑は言葉短かに告げると、正面に腰を下ろした。

「……さて、お話とは何でしょう？」

女は躊躇うように身じろいだ。

「あの、内々にお願いたく思いました……、今からお話することは、どうぞお胸のうちに」

「承知しております」

紫苑は無表情に告げる。声から自分への不信感がまざまざと感じられて、不愉快だった。私がひとではないからか。相手に見えぬことをさいわいと、紫苑は苛立ちもあらわに顔をしかめた。

「……」

長い沈黙をはさみ、やがて女は口を開いた。

「まじない、を」

一度息を呑むような気配の後、

「まじないを解く方法はありませんか……？」

思いつめた調子で問うてくる。

「……………」

紫苑は眼を細めた。

「つまり、呪いのまじを解く方法を知りたいというのですね？」

「は……………」

「その質問に答えるためには、幾つかこちらの問いにも答えていただく必要があります。差し障りのない範囲でお答えください」

「……………」

「呪いを掛けられたのは誰です？」

「……………」

再び長い沈黙の後、女はぽとりと言った。

「藤原雅哉様」

「掛けたのは？」

「……………」

「……………」それは、お許しくださいませ
「術者の名前をお聞きしたいのです。依頼者ではありません。呪いを掛けるのにも鍛錬が必要、それなりの力を持った者が請け負っているはず」

「……………」

躊躇う女に、紫苑は言葉を重ねた。

「術を解くためにはそれが必要なのです。早めに解決すれば、この件そのものを明るみに出さずに済むのですよ」

「……………」

「術を失敗すると、依頼者に累を及ぼす可能性もある。ご存知ですか？」

「まさか……………」

女は大声を上げた。

「本当です」

対照的に静かな声で紫苑は言う。

「……でも」

女は苦しい呼吸になって、

「でも、陰陽師の方であれば……きっと、上手にやって下さっているはずですよ」

「……陰陽師？」

紫苑は聞きとがめた。

「陰陽寮の陰陽師が？」

陰陽博士である彼が統治している陰陽寮。その中の者が彼に断りもなく危険な呪いを行うとは考えがたい。何しろ、紫苑は彼らの生年月日と出生地を把握しているのだ。生殺与奪の権を彼に握られているのも同然である。それが、何故こんなことを……？

「いえ、違います」

女は覚悟を決めたのか、張りのある声で言った。どこか、紫苑を責めるような響きも伴って、

「術者は御門蘇芳さま。貴方様のお父様でいらっしやいます」

そう、言い切った。

二

女の泣き声が聞こえる。彼は夢うつつにその声を聞いていた。聞き慣れた、懐かしい声。だが、同時に胸を締め付ける悲しい声。

自分にはどうしても泣き止ませることができなかった、母の声。鷹狩で沢山の獲物を獲って帰ってきてても、詩文で先帝より直々に褒められても、母の涙は涸れることはなかった。

彼は父親に家で会ったことがない。彼が生まれた後、妾であった彼の母親の家に父親は寄り付かなくなった。

兄のことを彼に教えたのは母親だった。そのときは何ということもなく聞いていた。成人して宮廷で会ったときも特に何とも思わな

かった。兄は腹違いの弟をちゃんと弟として扱ってくれたし、時には彼の才能を素直に賞賛すらしてくれた。あのまま普通の兄弟になれば良かったのに。心のどこかで、そう思っている。それなのに……。

「兄上が悪いのだ」

伴雅はつぶやいた。文机に散らした書類を押しやり、頭を抱える。

「貴方が私の邪魔をするから」

その存在全てが目障りになった。自分より常に上位にある彼が、いつだって少しだけ優位に立つ彼が。

「邪魔なんだ」

私の劣等感を刺激するから。

「きつと母も喜ぶ」

今は亡き母親を思った。

「母があれば憎んだ女の子なのだから」

だがその女の姪が私の正妻なのだと知ったら、貴方はどう言うのだろうか。

「私は、愛している」

兄も妻も母も、愛しているのだ。そんな彼がただ一人、愛せないもの。それは、

「私自身だ」

伴雅は絞り出すようにつぶやいた。そう　これは儀式なのだ。

私が私を愛せるようになるための。

三

女が帰った後、紫苑は鳥型の式神を飛ばして彼女のあとをつけさせた。依頼者の名は要らないと言ったのは、嘘である。

「しかし……蘇芳が」

彼はつぶやき、苦笑した。蘇芳のことを父上と呼ばなくなったの

は、いつからだろう。実の父親ではないし、父親だと思ったこともない。蘇芳が欲しかったのは、御門家の家督を継ぐ優秀な陰陽師で、紫苑自身では決してなかった。家柄を存続させるためにはひとではない紫苑を手元に置くことすら厭わなかったという、ただそれだけのことだ。それほどまでに家柄に固執していた彼が、何故今になってこのような危ない賭けに出たのだろうか。

誰が何と言おうと、藤原雅哉はときの実力者である。恐らく彼の父親が隠居すれば、次に実権を握るのは彼であろう。事実、彼の妹のひとりには既に中宮として参内している。そんな彼に呪いを掛けて、ことが露見すればただでは済まない。

「どういうことだ」

視線を落とす。

「蘇芳を動かしたのは、一体誰なんだ」

想像もつかない。

この件は厄介なことになりそうだ。じっと考え込んでいると、背後からさらさらと衣擦れの音が近付いてきた。

「誰だ？」

無愛想に問いかけると、足音がぴたりと止まる。

「……………」

無言が気になって振り向くと、そこには桔梗が立っていた。彼女の怯えたような表情を見て、紫苑は慌てて表情を緩める。

「すまない、少し考え事をしていた」

「……………いいえ」

首を左右に振り、桔梗はほっと息をつく。

「お客様だったんですか？ 珍しいですね」

と言って紫苑の隣りに座った。

「そうでもないぞ。ややこしいことになる、途端に他人の力を借りようとする輩は多いからな」

「ふうん……………」

桔梗は頷いて宙を見上げ、ふと、思い出したように紫苑を見た。

「菊さん、もう少ししたらいなくなってしまうんですか？」

「何？」

紫苑は聞き返す。桔梗は目を伏せた。銀色の長い睫毛が小さく震える。

「藤野さんもいなくなってしまうたし……、菊さんももうすぐお役目を終えるって言うてたから」

「……ああ」

紫苑は頷いた。精霊とはその力の強い季節の間だけ契約を結んでいる。秋も深まってきたことであるし、菊はそろそろ消える頃だろう。無論、来年の同じ季節になればまたまみえることになるのだが。

「また、来年会える」

「でも」

「死ぬわけではない。しばらく眠るだけだ」

「……」

桔梗の手が紫苑の袖をつかんだ。悲しげな瞳の色に、紫苑は眉を寄せる。

「どうした？」

桔梗は首を曖昧な方向に振り、俯いた。

「知ってる人がいなくなってしまうのは……寂しいことだから」

「……」

「私の知ってる人は、紫苑と藤野さんと菊さんだけで……、最近馨さんとも知り合いになれたけど、でも」

やはり、一番付き合いの長い式神は菊だった。

「そうだな。……お前が寂しく思うのも無理はない」

「……」

「だがな、桔梗」

紫苑は桔梗の頭に手を載せた。

「世に出会いと別れはつきものなのだぞ。一々心を痛めていては、身がもたない」

「……はい」

「式神たちはまた会える。心配するな」

「ねえ、紫苑」

桔梗は紫苑をじっと見上げた。

「紫苑はずっとここにいるよね？ どこにも行かないよね？」

紫苑との別れなんて、ないよね？ 真摯な青い瞳に見つめられ、紫苑は瞬いた。やがてゆっくりと頷く。

「……ここにいます」

私には他に行く場所もないのだから……。その言葉を、紫苑は胸の奥深くに仕舞い込んだ。

ちょうどその時、羽音と共に式神が帰ってきた。紫苑はそれを手に止まらせ、声にはならぬ報告を聞く。

「……何？」

彼の顔色が変わった。

「紫苑？」

桔梗の聲が耳に入っているのか入っていないのか、紫苑は顔をしかめて顎に手をやる。

「……これはほんとうに、厄介だな」

彼の脳裏に男の顔がよぎる 藤原伴雅。

第二章

—

暫く考え込んでいた紫苑は、やがて手を高く打ち鳴らした。どこからともなく現れた黒衣の男が、中庭に畏まる。紫苑は口の中で呟くように、彼に何事か囁きかけた。

「……承知しました」

男は低い声で頷き、その場を立ち去る。桔梗は不思議そうにその

背中を見送った。

「紫苑、あの人は誰？」

「あれも式神だ。名は羽櫻^{はぶい}。真の姿は鴉なのだが、この庭で子育てをすることを許した代わり、こうして一族の長が仕えてくれる」

「からす……」

「桔梗」

紫苑は彼女に向きあうように座り直した。

「呪いとは、何だと思う？」

「呪いって、憎い相手に何か良くない事を起こすために行われるもの……ですよね」

考え考えしながら、桔梗は言う。だが、紫苑は緩く首を横に振った。

「呪いの本質は、もっと別のところにあるのだ」

「別……？」

「そう」

紫苑は桔梗のふっくらとした掌に、「呪」という文字を書いた。

「ひとが誰かを呪う時、その者は必ず無意識の内に自分をも呪っている」

「自分を……？」

桔梗の長い睫毛が瞬いた。

「どういうことですか？」

「……」

紫苑は少し眼を細めて桔梗を見つめる。

「できればお前にそのような感情を知って欲しくはないと思うよ」

「……」

大きな手が桔梗の銀髪をくしゃくしゃと撫でた。

「自分を呪う気持ちほど、どうしようもないものはない」

「自分を、呪う？」

桔梗の青い視線が紫苑を捕らえる。

「つまり、自分を憎むということだ」

「……………」
彼女は少し首を傾げて何事かを考えたようだった。やがて、ぽつりとおぼやく。

「もし紫苑が自分のこと嫌いになりそうになっても」

一度言葉を切り、はにかむように顔を伏せた。

「私は、紫苑を嫌いにならないから」

「……………」

「だから、その……………」

顔を赤らめて深くうつむく彼女に、紫苑は苦笑した。

「………… 大丈夫だ。私は誰のことか呪いはしない」

「うん」

腕にしがみつく暖かな温度。紫苑はそれを受け止める。たと

え自分を愛せなくても、私は大丈夫。今までも、これからも、私は愛などなくても…………。

「紫苑？」

桔梗が顔を上げる。

「………… いや」

紫苑は首を振った。

「何でもない」

桔梗は紫苑をじっと見つめる。その横顔はひどく寂しそうで、桔梗はぎゅっと彼の手を握りしめた。

二

紫苑の元を辞した羽櫻は身を翻して烏の姿へと戻り、藤原雅哉の屋敷の屋根に止まった。黒く澄んだ眼が、じっと中の様子をつかがう。

「雅哉さま」

彼の北の方の声が聞こえ、羽櫻は耳を傾けた。

「ご気分はいかがでいらつしやいます？」

妻に付き添われるようにしてようやっと中庭に出てきた雅哉は、やや蒼白い顔をしていた。

「……ああ、今は少し良いようだ」

霊鳥である羽櫻が近くにいてことで、呪いの波動が少しは中和されているのだろう。しかし、完全には打ち消せていない。羽櫻は喉の奥で小さく鳴いた。

「流行り病ではない、と薬師が申しておりましたが」

「ああ、流行り病の症状とは明らかに違う。それに」

雅哉は眉を寄せる。

「何かが……おかしい」

「何がです」

「……………」

雅哉の目が羽櫻を捕らえる。だが、それは一瞬のことですぐに眼は逸らされた。

「近頃、夢を見るのだ」

「夢を？」

「ああ」

「どんな、です」

「幼い頃の夢だ」

雅哉は微笑を浮かべる。

「父上や母上と共に暮らしていた頃の……な」

「おしあわせな思い出が沢山おありなのでしょうね」

雅哉はどこかあどけない表情で微笑んだ。

「ああ」

「それが、今回のことと関係ありますの？」

「……さあな」

雅哉は緩く左右に首を振った。

「私には分らん。その道の者でなければな」

「その道の者、とは」

「決まっている」

雅哉は妻を見つめた。

「陰陽師だ」

「陰陽師」

「……そう」

雅哉はもう一度、羽櫻を見た。

「御門家当主になら……分かるやも知れぬな」

「あの人妖の世話になるのですか」

「眦をきつとあげる妻の腕を、雅哉は軽く叩く。

「そうまで言わずとも良いではないか」

「今回のことも、あの男が何か術を掛けているのやもしれませぬの
に」

「……あれはさほど馬鹿な男ではない」

雅哉は苦笑を浮かべた。

「私は彼を昔から知っている……あれはなかなかどうして、大した
男だよ」

「でも」

「もう良い」

妻を遮った雅哉は下男を一人呼び、何事かを言いつけた。

羽櫻は一声鳴いて屋根を飛び立つ。もうすぐ雅哉からの使者が来ると、主人に知らせるために。

三

背後から気配が近付いて来ていたが、蘇芳は振り向く気にもなれ
なかつた。

「お疲れですか、蘇芳どの」

「……………」
声を掛けられて仕方なく振り向くと、そこにはやはり藤原伴雅が

居た。ここ数日、彼は毎日蘇芳の屋敷に現れる。優雅な物腰は兄の雅哉と同じく貴公子然としているが、穏やかに微笑む眼の表面はぎらぎらと油膜が張ったように光っていた。蘇芳の背にぞくりと冷たいものが這う。

「呪いは効果を表しているようですね」

手に持った扇をぱちり、ぱちりとさせながら、伴雅は言った。

「兄は一昨日から伏せているようですよ」

「左様ですか」

「流石は蘇芳どの……兄の髪の一房を渡しただけで、このような「陰陽師ですからな」

蘇芳は目を伏せた。紫苑がこの呪いに気付くのも時間の問題だ。そうすれば、彼はきつとこの呪いを解こうとするに違いない。それこそが彼の仕事、彼の役目なのだから。

私は紫苑には勝てない。蘇芳は苦々しくもそれを認めていた。陰陽術の力量は、ほぼ生まれつきの才能によって左右される。蘇芳は紫苑と術の応酬をやり合うつもりはなかった。いくら伴雅に御門家の不祥事を握っていると脅されようと、自らを危険にさらす気はない。

しかし、水龍がまだ生きているとは……。水龍族と戦ったとき蘇芳は未だ御門家当主であり、紫苑は幼子であった。蘇芳が経験したあやかしの戦いの中で、水龍は最も苦戦した相手である。奇策を使ってかるうじて勝つことができたが、もし本当に生き残りがいたとしたら 考えるだけでぞつとする。

とにかく 今回のことが露見しても、御門家には累が及ばぬよう手は打った。

伴雅は微笑を浮かべたまま蘇芳を見つめている。この男を狂わせたものは何なのだろう。蘇芳はふと思った。妾の子として冷遇された恨み？ 出来の良い兄への妬み？ それとも……。

蘇芳は伴雅に一礼した。

「失礼。所用がありますので出かけ申す」

「おや、そうですね」

「私が居らぬ間の祭壇の管理は、これに任せておりますので」

背後を目線で指し示す。そこには二十歳前くらいの若者が居た。

「若いのが有能な陰陽師で、私の弟子です」

「お初にお眼に掛かります」

男は深々と頭を下げた。

「浅葱と申します」

「あさぎ」

伴雅は穏やかに笑って手を差し伸べた。

「……よろしく」

四

雅哉の使者が帰った後、紫苑は文机に肘を突いてため息をついた。

「明日お伺いします」

とのみ告げておいたものの、症状を聞けばそれは明らかに呪いによるものだ。

「蘇芳は何を考えている」

自分と敵対するつもりだろうか。そんな訳がない。蘇芳は確かに自分を疎んじているが、彼の力が紫苑のそれに遠く及ばないこともよく知っているのである。

「……分からねぬな。弱みでも握られたか」

つぶやいたとき、羽櫻がゆらりとその姿を現した。

「何事だ？」

「お越しにございます」

からから、と牛車の音が聞こえてくる。紫苑が眉を顰めるのと同じ時に、羽櫻が言葉を継いだ。

「御門蘇芳様」

馨に先導され、蘇芳が座敷に姿を見せた。もう随分会っていない義理の父親が目の前に現れたところで、紫苑の心は全く動かない。義父に愛されないことを悩んだ時期など、記憶にもないほど遠い昔のことだ。

「父上」

それでも、面と向かつては一応こう呼ぶ。

「お久しぶりにございます。お見受け致すところお変わりなきよう
で」

淡々と挨拶をする紫苑に、蘇芳は苦い顔をして言葉を挟んだ。

「用件を言おう」

「……はい」

「お前も気付いているのだろう」

「……………」

紫苑は緩く首を縦に振った。蘇芳はしばらく口をつぐみ、やがて唐突に問い掛けた。

「水龍の子供を 飼っているのか」

「……は？」

紫苑の顔色が目に見えて変わる。蘇芳は苦々しげに顔を歪めた。

「お前は自分の立場が分かっていないようだな」

「……存じておりますが」

「分かっておらぬ！」

蘇芳は語気を荒げた。紫苑が一瞬怯んだところに、言葉を重ねる。

「お前を眼の敵にして、色々と見張らせている公達もおるのだぞ！

そういった者たちにとって、お前があやかしを匿っているなど

それもかつて朝敵とされた水龍を……！」

「では」

紫苑の声のその鋭さに、蘇芳は思わず言葉を切った。彼の紫電の瞳が焰を宿している。幼い頃から変わらぬ……。不意に蘇芳はそんなことを思った。真っ直ぐな、信念を宿す視線は強く、見る

者の心の疚しさを暴く。

「私が殺されなかったのは何故です」

「何？」

「私も鳳凰族の血を引く　謀反人の血を引く者でしょう。何故殺されなかったのです」

「それはお前の父親が」

言いかけてはっと息を呑む。蘇芳の顔が音を立てんばかりの勢いで青ざめた。

紫苑はそれ以上そのことについて追究するつもりはないらしく、すぐに話を元に戻した。

「私の拾ったのは幼子でした……しかも完全に記憶を失っておりま

す。私の元で養育すれば、ひとに仇なす存在とはなりません」

「……何故言い切れる。いや、むしろそれを皆が信用すると思うのか」

「このことをご存知なのは父上と他にもうひとりだけ……」

紫苑はすつと眼を細めた。

「問題にはならぬでしょう」

「し、しかし」

「そのことで父上は脅されている、と。意に染まぬ呪いを掛けているのもそのせいですか」

「……………」

紫苑の洞察力に辟易しながら、蘇芳は頷いた。

「……では、呪いの掛け方が妙に稚拙なのは」

「気付いていたか」

「今日、使いの者から雅哉どのの症状を聞きましたから」

紫苑はやれやれといったように肩をすくめた。

「とりあえず伴雅どのを納得させるために、というわけですか」

「それだけではない」

蘇芳は声を低めた。

「あの男は危険だ。それに……お前に対する敵愾心は並々ならぬも

のがある」

「どうなさるおつもりです？」

「ごくり、と蘇芳は唾を飲んだ。

「私の弟子に浅葱、という者が居る。身寄りのない孤児で」

「私と同じですね」

「同じではない。彼にはお前のような才能はない」

蘇芳はそう言い切り、紫苑の顔を伺うようにして見遣った。

「私は……呪いを掛けるとき、彼の名を使った」

「なんですって？」

呪いなどの術の契約は、名を介して行われる。通常、陰陽師たちは自分の持つ隠し名を用いるのだが、今回まだたいして力のない見習いの名を使ったということは……。

「御門家前当主と現当主が争うなどという事態にはしたくない」

「……つまり」

「ああ、そういうことだ」

紫苑はぎりりと歯を鳴らした。このままでは浅葱は死ぬ。恐らく

契約者である伴雅も。

「お前が私の掛けた術を解けば……」

つまり、

「私に……殺せと？」

唸るような紫苑のつぶやきに、蘇芳が言葉を返すことはなかった。

第三章

—

翌朝、桔梗が起きると既に紫苑は出掛けた後だった。早朝に雅哉からの使いの牛車が来て、馨と共に雅哉の屋敷に向かったとのこと

だ。

「起こしてくれれば良かったのに……」

ぼそぼそと文句を言いながら顔を洗い、菊の揃えてくれた食膳の前に座る。ちようど箸をつけ始めたとき、背後から声を掛けられた。

「おはようございます」

振り向くと、昨日見た羽櫻という名の式神が自分を見て穏やかに微笑んでいる。

「あ、おはよう……」

羽櫻はす、と膝を落として畏まった。

「紫苑さまに言い付かりました。貴方をお守りするように、と」

「私を？ どうして？」

「それは」

お食事をお続けくださいと言った後、羽櫻は簡単に説明した。

「貴方の存在は藤原伴雅に知られている。そして」

「そして？」

羽櫻は少し視線を落として言う。

「ふつう、ひととあやかしが同じ場所で生きるということはない。

貴方の存在を知れば、ひとは必ず貴方を排除しようとするでしょう」

「……………」

排除されているのは、紫苑も同じかもしれない……。桔梗はぱたんと箸を置いた。

「……………ねえ、羽櫻さん」

ぼつり、と言葉を唇に載せる。

「はい」

「紫苑は、ひとなの？」

「……………」

「それとも、あやかし？」

「……………」

羽櫻は答えない。桔梗の斜め前に座る菊は困った表情でふたりを眺めた。

「もしかして」

桔梗はつぶやく。

「今度のこと……私のせい……？」

「そういうわけでは」

羽櫻が口調を強めたとき、

たっ！

彼の背後の壁に矢が突き立った。菊がはっと立ち上がる。

「曲者?!」

「ちっ」

羽櫻もすぐさま飛び起き、どこからともなく長剣を取り出した。

刃は黒く、鋭く輝いている。

「桔梗さま!」

「な、何？」

桔梗は事態が飲み込めていないのか、目を大きく見開いて体を強張らせていた。

「失礼」

羽櫻は片手を伸ばし、桔梗を抱えあげた。主である紫苑に桔梗を守れと言われたのだ。それが何にもまして大切な、優先すべきこと。荒々しく帳が切り裂かれ、覆面をした数人の武装した男たちが雪崩れ込んできた。

「あれだ!」

そのうち一人が桔梗を指差す。

「あやかしだ! あやかしを殺せ!」

「あ……!」

あからさまな殺意にさらされ、桔梗の体が震えた。

ぎん! 羽櫻は黒い刃で一人の刀を受け止め、打ち払う。そのまま返す刀で峰打ちにした。鈍い音は、おそらく彼の骨の折れた音だろう。言葉もなく男は横転する。

「きゃあ!」

悲鳴に桔梗が振り向くと、別の男の刀によって菊が袈裟切りにさ

れていた。血の一滴も零すことなく、菊の姿は虚空に消える。そのあとには、菊の花が。

「菊さん!!」

桔梗は叫んだ。

「桔梗さま!」

羽櫻の腕から抜け出し、舞い落ちた菊の花を手に取る。ほんのりと甘い香りを漂わせる花。それは茎の部分を真っ直ぐに断ち切られており、やがてみるみるうちに 枯れ落ちた。

「菊さん……」

桔梗の頭上に、男が刀を振り上げる。

「桔梗さま ！！」

羽櫻の声が、遠くで聞こえた。

二

紫苑の勧めた薬湯を飲み、雅哉はふう、と息をついた。

「朝早くからすみませぬな」

「いいえ」

昨晩急に症状が悪化したという。現在は落ち着いているが、頭が割れそうなほどに痛いという。早急に何とかしなければ。紫苑は眉を顰める。

「紫苑どの」

「はい?」

雅哉の声に、紫苑は顔を上げた。真っ直ぐな眼差しが、彼の紫電の瞳を見つめる。このように彼の眼を見つめるものなど、普通はない。忌むべき色 ひとではないという印の色なのだから。雅哉は、紫苑が思っていたよりも器の大きな人物なのかもしれない。

「これはやはり、呪いによるものですか」

「おそらくは」

紫苑は慎重に言葉を選ぶ。

「ふむ」

雅哉はやつれた顔に緊張の面持ちを浮かべた。

「私は、死ぬのですか？」

「いえ」

紫苑は首を横に振る。

「そのようなことはありません。術そのものは非常に拙いものに」

懐から取り出した細長い紙に、雅哉から借り受けた墨と筆で文言をさらさらと書き付けた。そのようにして作った呪符四枚を、掌底に乗せて軽く息を吹きつける。それらは軽く宙に舞い、東西南北の柱に貼り付いた。

「……失礼」

右手で印を結び、左手を雅哉の額にあてた。紫苑の薄い唇がかすかに動いた。雅哉の頬に血色が戻っていく。やがて紫苑の声最後の一音を発して消えいく頃には、あれほどまでにひどかった頭痛も治まっていた。

「おお」

表情を明るくする雅哉に、紫苑は首を横に振った。

「お喜びになるにはまだ早過ぎます」

「何故」

「これを」

紫苑は右手を開いてみせる。そこには黒い炎がちろちろと瞬いていた。

「そ、それは？」

「呪い手の……念です。そうとう強い」

紫苑はきゅっと手を握り、その炎を四散させる。その様子を雅哉は呆然と眺めた。

「……つまり」

紫苑はゆっくりと噛んで含めるように言う。

「その拙い術者に呪いを頼んだ者　その者の持つ貴方への負の感情。それが取り除かれぬ限り、貴方は呪いから完全に逃れることはできないというわけです。そもそも」

紫苑は四枚の札を順繰りに眺めて、

「このままでは貴方はこの部屋を出られません」

「……誰なのだ」

雅哉は呟いた。

「私をそこまで憎む者とは……」

「心当たりはございませんか」

「ない」

「そうですか……」

「調べていただけませんか」

雅哉の言葉に、紫苑は彼の顔をじつと見つめた。

「調べることは、可能です」

実際、彼は既にその男の名を知っている。

「しかしその者の名を貴方が知るということは、貴方とその者との間に念の繋がりができるということ」

「念の繋がりが？」

「貴方がその相手に抱く怒りや憎しみ……そういったものが相手に流れていくのです。今はその者から貴方へ流れるだけの一方通行ですが、それが双方向に流れるようになります」

紫苑はため息をついた。

「その、ひとの念の媒介となったり、もしくは障壁となったりするのが術を掛ける陰陽師なのですが……」

彼我にこれほどまでの力量の違いがあるとするならば……。

「術者も、貴方に呪いを掛けた者も。おそらく無事にはすみません
い
い」

「……」

雅哉は黙って自らの指先を見つめている。

「いかがなさいますか。それでも、お知りになりますか」

「……………」

「雅哉どの」

雅哉は顔を上げた。紫苑に向かい、力強く頷く。

「私は、知りたい」

三

閃光が、辺りを焼いた。

「くっ?!」

羽櫻までもが一瞬眼を閉じてしまう。刀を構えていた三人の男は皆床に倒れ伏し、眼を庇いながら起き上がるうともがいている。

「ぎゃああああ!」

凄まじい悲鳴に羽櫻が驚いて眼を開けると　そこに水の龍がいた。体に合わない単から伸びる白い手足、風もないのに逆巻く銀髪。爛々と輝く青い瞳は研ぎ澄まされた刃物のような鋭さを宿す。鬩した右手の先から迸る水の縄が、先ほど桔梗に切りかかった男の喉首をぎりぎり絞め上げていた。

「愚か者が」

「桔梗」がにと笑った。紅も差さないのに赤く色づいた唇は、艶かしくも酷薄な笑みに歪んでいる。

「そんなもので、私を傷付けられるとでも?」

「彼女」の視線が一瞬彼の刀に吸い寄せられ、やがて再び男の顔に向かった。

「『御子』たる私に刃を向けた罪　死を以って贖うがいい」

「あ」

声にならない絶叫。男の首は水によって切断され、床に転がり落ちた。血管が急速に収縮したためか、傷口から血は零れない。

「……………」

「桔梗」は微笑み、辺りで硬直している三人の男のうちのひとり

に視線を固定した。

「お前たち、どこから来た？ 誰に頼まれた？」

「……い、言えぬ！！」

「……………」

「桔梗」は面白くなさそうな顔で彼の全身をちらりと眺め、
「そうか」

どん、という衝撃と共に、彼の胸には大きな穴が開いた。羽
櫻は息を飲む。

「お前は？ 言えるか？」

「ひっ」

死体になど興味はないというように、「桔梗」は次の男へと視線
を投げた。男は体中を走る震えを隠そうともせず、

「ふ、藤原伴雅さまだ」

「……………」

「桔梗」は満足げに頷き、やがて視線を羽櫻に映した。今まで感
じたことも無いほど強い妖気 羽櫻は激しい緊張で汗が滴るのを
感じる。

「このふたり、お前に任せよう。殺すなり生かすなり好きにしる」

「……………」

ふたり、というのは殺さずに置いた侵入者のことらしい。

「これから少し、行くところがある」

「い、いずこへ？」

情けないほどに上ずった声で羽櫻が尋ねると、「桔梗」はゆるく
微笑んであっさりと答えた。

「藤原伴雅の屋敷へ」

そしてあっという間に庭へ飛び出し 姿を消した。

「……………」

羽櫻はひとまず生きている男たちを縛り上げ、次いで鴉の姿に戻
り空に羽ばたいた。急いで紫苑に事態を知らせねばならない。放っ
ておいたらあのあやかしは何をするか 。あの冷ややかな威厳を

持つ美しい瞳で見つめられたときの恐怖と陶醉が、未だ羽櫻の体を震わせていた。

第四章

—

あれはいつだっただろう……。自分は五歳くらいだったような気がするが、はつきりとは分からない。しかし記憶にあるのは 優 しかった手。

今から思えば、多分あれはどこかの屋敷の庭だったはずだ。石に躓き転んで、泥だらけになった。着付けてもらった一張羅の袴も汚してしまい、母に怒られてしまうことを思うと身が竦んだ。そのとき、差し伸べられた手があった。

「大丈夫か？」

「……………」

うつむいて泥にまみれた膝を見つめっていると、手の持ち主は苦笑したようだった。でも、あの手はそんなに大きくはなかった…

…。

「こちらへおいで」

「え？」

「いいから、早く」

屋敷の濡れ縁に上がりさらに奥へと導かれた。

どれだけ歩いただろうか、奥まった一室に通された彼は、そこで自分の履いていたものと寸分違わぬ袴を目にした。

「え…………？」

「これはね、……………」

隣りで何か言っていたような気がしたが、良く覚えていない。た

だ、これに履き替えることが出来れば母に叱られなくてすむ。そのことだけが頭にあった。

結局その袴をもらい受け、何もなかったような顔で彼は母の元に帰った。礼さえも言わなかったような気がする。そのことだけは悔やまれるが、思い出すたびに何となく胸の奥が少し温まるような……、そんな思い出なのだった。

「……ふう」

宮中からの帰り道、牛車の中で伴雅はため息をついた。

「妙なことを思い出したものだな……」

軽く頭を振って幼い日の幻影を振り払い、ひとりごちる。

「上手くやっただろうか」

参内する前、御門紫苑の屋敷に居るあやかしの殺害を命じた。この判断そのものは一般常識に照らしてそれほど逸脱してはいない。あやかしはひとの世界における異分子。それも飛び切り危険な。排除することに何も躊躇うことはない。それも、あのあやかしはかつて朝敵とされ討伐された水龍族であるというではないか。

「……言い訳か」

伴雅は苦笑した。実際のところは兄が一目置いている紫苑が気に食わないという、それだけの理由のような気がする。

「まあ、どうだっていい……」

もうすぐ兄は居なくなるのだから。そうしたら　そうしたら？　牛車ごとん、と音を立てて止まった。屋敷に着いたのだからとは感じたが、それにしても牛飼いの童が何も言わないし、下男たちがやってくる気配もない。

「どうした？」

御簾をあげた伴雅は小さく息を飲んだ。牛飼いの童は牛の横で腰を抜かしへたり込んでいる。伴雅はきゅっと唇を噛んで牛車から降りた。

「何者だ」

鋭く誰何の声を上げる。

屋敷の門の上にふわりと腰掛け、じつと彼を見つめる一匹の美しい妖獣。長い銀髪が風に流れ、青い瞳が笑うように瞬いている。

「お前が藤原伴雅か？」

薄い唇が花のように綻びる。伴雅が気圧されたように黙っている。と、あやかしは門をたん、と蹴って伴雅の目の前に降りてきた。

「どうした？ 私が自ら来てやったのだぞ」

「……何だと？」

あやかしの手が伴雅の肩にかかり、その端正な顔が間近に近付いた。吐息が触れそうなほどの距離で囁く。

「私を殺したいのだろうか？」

「……………!!」

伴雅は顔を強張らせて一步退いた。あやかしは美しい顔を残酷に歪めて笑う。

「お前が帰ってくる前にこの家中の人間を殺してやっても良かったのだが、お前を待ってやっていたのだ。感謝して欲しいものだ」

「……私を、殺すつもりか」

伴雅は青ざめた顔でそう言った。あやかしは大して興味もないような顔で彼を眺める。

「私がひと殺しをするのを、紫苑は好まない。だが……………」

青い眼光を煌かせる。

「水龍の『御子』を殺そうとした奴には、それ相応の報いが必要だ。そう思わないか？」

「……お、お前は一体」

「我が名は『桔梗』」

あやかしはゆっくりりと、滑るような足取りで伴雅に近付く。

「水の四天王、水龍族最後の『御子』だ」

紫苑がそろそろ雅哉の屋敷を辞そうかと考えていた頃、帳の隙間から黒い羽根が舞い落ちてきた。

「これは……？」

床に横になつた雅哉の問いに答える前に、紫苑はその羽根を手に取り軽く額に翳す。彼には羽櫻が届けたものであることがすぐにはわかつたのだ。

「……………!!」

紫苑の顔色が音を立てんばかりの勢いで変わる。

「紫苑どの？」

「申し訳ありませんが、これにて失礼致します」

「何があつたのです？ 今回のことに関係があることですか」

「あるともいえませぬ……ないとも」

「どういふことなのです？！ はつきり言つて頂きたい」

「……………」

紫苑は雅哉に袖をつかまれ、返答に窮した。急いで行かねばあの「桔梗」は何をするかわからぬ。紫苑は覚悟を決めて口を開いた。

「貴方に呪いを掛けたのは、……藤原伴雅どのです」

「……………!!」

雅哉の顔が驚愕に染まつた。

「そして、彼は貴方が私に術の解除を依頼するであろうことを知っていた」

「……………」

「だから、私の屋敷を襲撃させたのです。そして私の屋敷には……あやかしの少女がおります」

「なんですつて？」

雅哉は未だ青ざめた顔のまま、それでもあやかしという言葉には反応して顔を上げた。

「記憶を喪つた、幼い子供です」

「しかし」

「そう。子供とはいえあやかしはあやかし。危機に陥れば妖力を使うとも考えられます」

「つまり、伴雅が危ないと……」

「今、そのように連絡が参りました」

「急いで行かねば！」

雅哉は紫苑の袖を離した。床から起き直り、ひとを呼んで身支度を命じる。紫苑は驚いて彼を制しようとした。

「雅哉殿、まさか」

「何がまさかです」

ぎり、と雅哉は紫苑を睨みつける。

「私の弟を傷つけたら……、承知しません」

「……………」

紫苑は思わず口をつぐんだ。雅哉の一族想いは有名であったが、これほどまでとは……。家族というものを知らぬ紫苑にとっては、少し眩しくさえある。

「一足お先に彼の屋敷に向かい、その者を止めて下さい。私もすぐ参ります」

「……………分かりました」

紫苑は懐から護符を取り出し、術をかけてそれを丸薬に変えた。

「これをお飲みください。しばらくは呪いが薄れるはずですよ」

「かたじけない」

雅哉はよろめきながらも丸薬を口に含み、飲み下した。紫苑はそれを確認した後、早足に屋敷を出て行く。

桔梗……！ 噛み締めた奥歯が鈍い音を響かせた。

三

突然、蘇芳の屋敷に置かれていた呪いの祭壇がふたつに割れた。

「蘇芳様」

祭壇の管理を任せていた、そして実質的には術の抛り代であった浅葱が、息も絶え絶えに蘇芳の元にやってくる。

「術が……返されたか」

蘇芳は静かに呟いた。

「しかし……これは」

割れて床に落ちた鏡を手に取り、つぶやく。

「紫苑が返したわけではないな」

どちらかというと、術を返されたというよりも術が断ち切られたような、そんな印象である。実際全ての術が返されたのであれば浅葱は無事ではすまないはずだ。蘇芳の隣りで畏まっている浅葱は荒い息をついているが、生命に別状のある様子には見えない。

「……ということは」

藤原伴雅の屋敷で、何かがあったということだろうか。彼の屋敷にもこれと似た、しかしもっと小さな祭壇が設けられており、そこで伴雅は毎夜のように呪いの念を鏡に込めているはずである。

「それが、割られたのか……」

「いかが致しましょう」

浅葱に問われ、蘇芳は答えた。

「お前は休むが良い。……もう、この件からは手を引いたほうが良さそうだ」

「はっ」

さがっていく浅葱の背に向けて、蘇芳は声を掛ける。

「浅葱」

「はい」

振り向いた彼の顔には、疲労の色が濃い。

今一体何が起きているのか、蘇芳にも把握できていない。だが、ひとつだけ分かっていることがあった。このまま術が返されず、自然に消滅すれば浅葱は無事にすむだろう。しかし、結果的に術が跳ね返ってくることになれば……浅葱は死ぬかもしれない。

「いかなさいました、蘇芳さま」

蘇芳の身代わりとなって死の危険にまでさらされているというのに、浅葱の瞳は真つ直ぐに彼を見て疑うことを知らない。

「お顔の色が優れませんが」

「……いや、大事ない」

そして蘇芳はぼつりとつぶやいた。

「すまない」

それは浅葱に向けて言った言葉なのか、それとも紫苑に向けて言いたい言葉なのか……蘇芳にも良く分からなかった。

四

「桔梗」の放った水の刃に、呆気ないまでに鏡が両断される。彼女は屋敷に入るやいなやまっすぐにこの部屋まで来て、伴雅が止める暇もなく祭壇を破壊したのだ。

「何を……！」

声を震わせる伴雅に、「桔梗」は嫣然と微笑む。

「これが呪いの元なのだろう？ 紫苑が随分悩んでいた」

「……………」

鏡の切断面からは黒い霧のような物がもやもやと出てきていている。思わず伴雅がそれをじっと見つめていると、

「これは」

「桔梗」は一抱えほどの水の球の中へとそれを吸い取った。

「お前の呪いの念だ」

「……………」

美しい水の中でどろどろとしたその黒いものが次第に形を変えていく。「桔梗」は表情に微笑を含みながらその様子を見守った。やがて、それは小さな一匹の海蛇の形になる。そして、赤い一對の眼がぎろりと伴雅を睨んだ。

「ひっ」
伴雅が小さく息を呑んだ。
「想いは持ち主の元へ」
「桔梗」は水の球を軽く掲げる。
「返さねばならぬな」
海蛇が水面から飛び出し、伴雅の胸元に飛び込んだ。
「あああああああああああ!!!」
広い屋敷内に響き渡った絶叫。それを、紫苑は伴雅邸の門の前で聞いた。

第五章

—

騒然としている屋敷の中を駆け抜けながら、紫苑は見覚えのある従者の顔を見つけて声を掛けた。

「女子供を連れて屋敷から出ている。危険だ」

「しかし伴雅さまが……!!!」

「彼のことは私が何とかする」

「……………」

一瞬の逡巡の後彼は頷いたが、その時には紫苑は再び駆け出していた。

「桔梗!」

先ほど聞こえた絶叫は恐らく伴雅のもの。ならば恐らくそこに「桔梗」は居る。

「ききよ……………」

奥まった部屋の前、紫苑は足を止める。「彼女」が居た。足元には苦悶する伴雅の姿。皮膚の色がどす黒く変色している。

「伴雅どの！」

駆け寄ろうとした紫苑の目の前に、「桔梗」がふわりと降り立った。

「桔梗……！」

「殺しはしていない」

美しい眼差しの中に一際凄絶な光を宿し、「彼女」は紫苑の乱れた髪に触れる。

「ただ、返しただけ」

「何を……だ」

視線を「桔梗」の瞳に吸い寄せられたまま、紫苑は祭壇が破壊されていることに気がついた。

「術を返したのか？」

蘇芳が名を使った浅葱という男を思い出す。彼の生死を思って顔を強張らせた紫苑に、「桔梗」は首を横に振った。

「返してはいない。術者が死んだら、紫苑は嫌がるだろう？」

「……………」

「この男と術者の間にあつた念の流れを断ち切っただけだ。そして」

「桔梗」は伴雅に冷ややかな目を向けた。

「呪いの念をこの男に返した」

「……………」

伴雅は蹲って脂汗を流し、苦しげに息をついている。言葉を出せるだけの余裕はないようだ。「桔梗」は伴雅の目の前に軽く膝をつき、屈み込んだ。

「苦しいか？」

長い銀髪がさらさらと零れる。伴雅はかろうじて顔を上げた。

「お前が今苦しんでいるのは、お前自身の呪いの念によってだ」

「わ……私……自身の？」

「そう」

「桔梗」は頷く。立ち上がり、紫苑をちらりと見遣った。微笑んでいる。

「……この男が本当に呪っていたのは誰なんだろうな？」
その答えを、既に紫苑は知っているような気がしていた。

二

牛車に乗り込み伴雅の屋敷へと向かっていた雅哉は、長らく体を覆っていた痛みと重さが同時に消え失せたのを感じていた。だが、その顔は晴れない。

「……何故」

そう問われて、心当たりが全くないとは 残念ながら言えない。妾腹として常に日陰の身であることを余儀なくされた伴雅とは違い、彼の母親は藤原時雅の正室であった。しかも皇族である 生まれながらにして境遇が違った。しかも、伴雅の母の両親は早くに亡くなったと聞いている。婚姻生活において、経済的な負担は全て女の家が背負うもので、その親を亡くした女がどうなってしまうか 想像には難くない。

「しかし……」

雅哉は何かと伴雅の面倒を見てきたつもりだ。母親が違うとはいえ、彼にとつては兄弟に違いないのだから。伴雅も雅哉を慕っていたはずだ。少なくとも彼はそう思っていた。それなのに何故……。いつだって思い出せる。泥にまみれて泣きそうになっていた幼い弟の顔を。初めて時雅の屋敷にやってきた伴雅 幼名は確か「ともや」とか言った は雨上がりのぬかるみに足をとられて転び、一張羅だっただろう袴をどろどろにしまったのだ。

彼はあらかじめその少年が弟だと知っていたせいもあって、あまりに可哀想で見えいられず、父にせがんで新しい袴を用意させた……。いや、実のところ父親としてそれを見て平静ではいられなかったのだ なぜなら、伴雅と時雅の顔はとても良く似ているのだから 時雅と雅哉。時雅と伴雅。それぞれが良く似ている。そして、雅

哉と伴雅も……。

「急げ」

雅哉は童を叱咤した。鞭が唸る。牛車は一際激しく揺れながら速度を速めた。

三

「うん？」

立ち尽くしていた紫苑が、眉を顰めた。うずくまっただままの伴雅に、微妙な変化が起こっている。噛み締められた歯の間から、ちろちろと青白い炎が立ち上っているのだ。

「そういうことか」

「桔梗」はにやりと笑った。

「おかしいとは思ったのだ。たかが人間の呪いの念……いくら強いとはいえ、そう簡単に蛟の姿など取れるはずがない。こいつの身には、何かが巣食っている」

「……………」

どこか腑に落ちぬものを感じながら、紫苑は口中で真言を呟き、袖から呪符を取り出した。一閃、紫苑の投げた符は伴雅の周辺で前触れもなく破れる。目に見えぬ雷光に切り裂かれたようにも見えた。「何……?!」

紫苑は警戒を強めた。伴雅の体内では未だ嵐が荒れ狂っている。

「ぐぐぐ……………」

肩甲骨の辺りが盛り上がったかと思えば凹み、続いて腹が突き破られそうなほど膨れた。

「……………これは」

紫苑はつぶやいた。

「手が出せぬ……………」

伴雅の体内にもものけが居たとして、何故蘇芳はそれに気付

かなかったのか。紫苑は先ほど不思議に思った。いくら引退したとはいえ、蘇芳は間違いなく有能な陰陽師である。その彼が気配を感じ取れなかった、その事実が意味するところはふたつ。ひとつの可能性は、そのもののけが取るに足りぬほどの妖力しか持ち合わせていなかった場合。もうひとつは……。

「ふん」

伴雅を見下ろす「桔梗」は小さく鼻を鳴らした。

「自らの意志で己を苦しめているのなら、紫苑がいくら助けてやりたくともどうしようもないな」

「私の……意志で？」

伴雅が喘ぎ喘ぎ言う。

「桔梗」はその表情から笑みを消した。なまじ造形が美しく整っているだけに、その双眸は鋭利な厳しさを漂わせる。

「お前の体内にはもののけが棲んでいる」

「……もの、のけ」

「お前の負の感情に吸い寄せられてやってきたのであろうが……」

「ふ、の？」

「伴雅どのが」

紫苑が口を挟んだ。

「誰かを憎む気持ちです」

「だれ、かを……兄を？」

だから、呪いを掛けた。

「そうか？」

「桔梗」は問う。

「私は先ほどお前に呪いの念を返したと言ったな」

「……あ、あ」

「ならば何故……お前の兄に向かって飛び出して行かぬ？　いつまでもお前の胸のうちに留まってお前を苦しめる？」

「……」

「誰かを呪うものは」

紫苑はゆつくりと言った。

「自分をも呪うものです。それが誰かを呪うことに対する無意識のうちの自責の念から来るのか、それは私にも分かりませぬ。しかし」

「……………」

いつしか伴雅の体の変形は収まっていた。

「貴方の場合は　そういうことではない」

「わたし……………」

「お前は何故そうまでして自分を苦しめる？」

「桔梗」の声に穏やかさが生まれた。紫苑ははっと彼女の横顔を見つめる。相変わらずその表情は厳しいが、瞳は和らいでいた。水龍族を束ねるべく生まれた「御子」　青龍の魂を宿す特別な存在。その器の大きさを感じさせる。不用意にその存在に触れれば指を切り落としてしまいそんな鋭利な殺意と同居して、何ともいえない威厳を醸し出していた。

「わたしは」

伴雅の眼から涙がこぼれた。ぎらついていた瞳が、清らかな液体に覆われている。

「私は生まれてきてはならなかったのだ」

「……………何故」

「私が生まれたせいで、母は不幸になった」

「……………」

紫苑は胸にちりりとした痛みを感じた。彼自身にも覚えのある、痛み。　それは昔、宮中で聞いた噂。鳳凰族と伝えられる彼の母は、彼を産んだ後精神に異常をきたし、そのまま行方を眩ませたという。一族を絶滅へと追いやった憎い人間の子供を産むということ。そのことはどれほど母を苦しめただろうか。そう思うと、紫苑はいたたまれなくなる。

「桔梗」はそんな紫苑の横顔を見遣っていたが、やがて伴雅に向き直った。

「お前の母は、お前を憎んだのか」

「……いや」

「お前に恨み言を言ったことがあったのか」

「……ない」

伴雅は身を振り絞るようにして言った。

「私を愛してくれた。愛してくれたが、……いつだって泣いていた」
ばつと顔を上げる。その顔色は真つ赤になっていた。

「私が居なければ、別の伴侶も見つかっただろう。あんな風に寂しく、荒れた家で死んでいくことなどなかったのだ」

「では」

「桔梗」は言った。

「お前がものけに体を食い破られることを、お前の母は望んでいるのか」

「……」

「里子に出すこともせず、己が手ずから育てたお前が、そんな風に苦しむことをお前の母は望むのか」

「……」

紫苑は一步伴雅に近づいた。ぴくり、と伴雅の体が震える。

「貴方が自らもののけを体から追い出したいと願って下さらなければ」

紫苑は再び呪符を手を取った。

「貴方の苦しみを取り除いて差し上げることがはできません」

「……」

「伴雅どの、どうか」

そのとき、廊下を駆ける足音がした。

「伴雅!!」

飛び込んで来たのは 藤原雅哉。紫苑の体に緊張が走った。

「……兄上」

伴雅の眼の色が、変わる。

第六章

—

「危ない！」

咄嗟に紫苑は雅哉の前に飛び出した。伴雅の右手の爪が伸び、紫苑の衣を切り裂く。

「紫苑！」

「桔梗」が声を上げ、伴雅を蹴り飛ばした。

「この下衆が……！」

傷口を押さえた紫苑の手が赤く染まるのを見て、「桔梗」の眼差しが冷たい怒りに燃える。

「伴雅」

床に転がった彼に向かい、雅哉が名を呼んだ。

「ぐぐ……」

伴雅の歯がかちかちと打ち鳴らされ、その隙間から細長い舌がちらちらと見えた。時折ひゅう、という音と共に鬼火が唇を焦がしている。その姿は生成り　もののけとひととの狭間に、伴雅はいるのであった。

「紫苑殿どの」

雅哉がぼつりと口を開いた。

「伴雅と話がしたい」

「しかし、雅哉どの」

「良いのだ」

す、と紫苑の手を退けて雅哉は顔を上げた。

「これ以上貴方の手を煩わせるのは忍びない」

「何をおっしゃいます！」

「良いのだ」

雅哉は今一度繰り返した。

「あれは私の弟なのだから」

「あれにとって、私は唯一の兄なのだから」

「……………」
雅哉はゆつくりと視線をめぐらし、「桔梗」を見つめた。

「水龍……………」

ぼつり、とその言葉を唇に載せる。陰陽の知識に通じていない雅哉でさえ、その存在については良く知っている。強大な妖力を持つ四天王の一。滅びたはずの一族。

紫苑は言葉を失くし、ただ雅哉を見つめていた。このことを宮廷に報告されれば、おそらく自分は反逆者として処罰されるであろう。下手をすれば命はない。それはおそらく彼女とて同じこと……いや、彼女はきっと大人しく殺されまい。

「……………」
雅哉はそのまま何も言わず、「桔梗」から目をそらした。一歩ずつ、伴雅の方へと踏み出す。

「兄……………」

伴雅は搾り出すように呻いた。

「来てはなりません……………」

「伴雅」

「どうか……………」

「伴雅」

「兄上……………」

伴雅の爪が再び伸び、空に白刃の煌きにも似た軌跡を描いた。

「あ……………」

血飛沫が飛ぶ。だがそれは雅哉のものではなかった。伴雅の右手に深々と突き立っていたのは、彼自身の左手の爪だったのである。

「伴雅……………」

雅哉は駆け寄り、伴雅の頭をぎゅっと抱いた。

「何をするのだ……………」手を、手を離しなさい……………」

「いけません、兄上」
伴雅は呟いた。

「この右手を離せば、きっと兄上を切り刻んでしまいます」
……それで」

雅哉の眼から涙が零れた。

「それでお前の気は済むのか」

「え……」

「私がいなくなれば、お前はしあわせになれるのか」
……」

「お前がそれを望むなら」

雅哉は伴雅を深く抱きしめた。

「この兄を殺すが良い」

「雅哉どの！」

紫苑が声を上げるが、「桔梗」はその腕に触れて彼をとどめた。

「桔梗……」

「桔梗」は冷淡に笑う。

「好きにさせてやればいい」

「しかし！」

「伴雅」

焦る紫苑をよそに、雅哉は伴雅に優しく語り掛けた。

「忘れるなよ」

「何を……です」

「私はお前の兄だ」

……」
「お前がいくら私を憎もうと……私がお前を憎むことはない」
……」

「いつまでたっても、私にはお前の幼い頃を忘れることができない
のだ」

「……」
「覚えているか。初めて私をお前が会った日を」

「……………」
「お前は新しい袴を泥だらけにしていたなあ」

「……………」
伴雅が小さくつぶやいた。

「あの時、代わりの袴を用意させたのは父上だったのだよ」

「父……………」
「上が」

「そつだ」

「私のために……………」

「勿論。お前の名をつけたのも父上だ。私と、父と共通の文字……………」
『雅』を与えてな

「……………」

「私には沢山の異母兄弟がいるが、その中ではお前が一番年近い。父上もそれは良くご存知で、だからこそ」

ともまさ。

「私とともにあるようにと……………」

「……………」

「伴雅。確かに私の父上はお前の母親を捨てた」

伴雅の体がびくりと震える。

「男と女とはそのようなものだ。所詮他人でしかない。そのことは私にも良く分かっている。酷いことだが、どうしようもない」

「……………」

「しかし」

雅哉は伴雅を揺すぶった。

「親子や兄弟は、違うのだぞ。どのようなことがあっても決して切れぬ縁なのだ。少なくとも、私はそう思っている。お前は違うのか」

「……………」
「あに、うえ」

「だから」

雅哉の指が伴雅の涙を拭った。

「もう、やめぬか」

「……………」

「その手を離せぬか」

「……私は」

伴雅は幼子のように首を左右に振った。

「私は……」

「お前には私は殺せぬ」

「……」

「お前を死なせたくないのだ」

「あ……」

「なあ、伴雅……」

雅哉の頬を伝った滴が伴雅の肩に落ちる。

「……兄上」

伴雅は口元を震わせた。

「私は……私は」

紫苑がはつと顔をあげた。袖の中で印を結び、呪を唱え始める。

「私は！」

伴雅はがくん、とのけぞった。

怖かった……！

伴雅の大きく開いた口から何かが飛び出した。

二

兄上の背中はいつも私の前にあった。いつか置き去りにされてしまふのではないか、見捨てられるのではないかと……怖かった。父に捨てられた母のように。自分も、いつか……きつと。

それならば、私から兄上を切り捨てればいい。

「本当は……」

伴雅はつぶやく。

「……手を、伸ばして」

兄上に届かせたかった。兄の補佐として立派な人物になりた

かった。しかし兄は常に自分の一步前に行く。決して届かない。

「私では駄目なのだと思ったとき……憎かった」

兄が　自分が。

「そんなことはない」

雅哉は言う。

「お前の為にも、私は立派な兄でありたかったのだ」

伴雅の眼が大きく見開かれる。

「……兄上」

「こんなにも……すれ違うとはな」

雅哉の手がそっと伴雅の額を撫でた。

「……」

伴雅の唇がすっと円弧を描く。穏やかな笑み。

「……そう……ですね……」

そのまま彼は眼を閉じた。

「伴雅……？」

雅哉の呼びかけにも答えぬ。雅哉は乱暴に肩を揺すった。

「伴雅！」

「放っておけ。意識を失っているだけだ」

掛けられた声に、雅哉はびくりと体を震わせた。振り向いた先に立っているのは銀髪の美しいあやかし。紫苑は彼女を押しつけるようにして、雅哉の前に屈んだ。何かその両手に包まれているものがある。

「それは……？」

雅哉に問われ、紫苑はそっとその手を開いた。そこには一包みの灰。

「伴雅どのの身に巢食っていたもののけにございます」

「おお」

「伴雅どのが自ら体外へと追い出して下さいましたので」

「……そうか」

雅哉は大きく息をついた。

「……紫苑どの」

雅哉は伴雅の頭を抱いたまま彼を見上げた。

「ご迷惑をお掛けしたついでに、一つお願いがあるのです」

「何でしょうか」

「……どうぞ、今回のことはお上には内密に願いたい」

「は」

「家人どもには私から申し渡しておきます。紫苑どのにご迷惑の掛かることはございません」

「わかりました」

紫苑は頷いた。今回のことが露見すれば蘇芳らの立場も危うくなり、ひいては御門家全体の問題ともなり兼ねない。ただでさえ半妖である自分を嫌う宮中の者たちは、それこそ鬼の首でもとったように御門家現当主を非難するだろう。

「それともうひとつ」

雅哉は視線を「桔梗」に向けた。

「その……あやかしのことです」

薄い水色の瞳がじつと雅哉に固定される。切れ長の伶俐な双眸の持つ威圧的な力に、雅哉はじわりと汗ばむのを感じた。

「雅哉どの……」

紫苑の声が遠く感じるほどに、圧倒される。

「私は」

「桔梗」は不意に口を開いた。

「紫苑に迷惑を掛けたくはない」

「……え？」

「不要な殺生を紫苑が厭うなら、約束しよう」

敵かとも聞こえる口調で、彼女は言った。

「ひとの世の秩序を荒らしはしない……と」

「まことか」

「私は水龍族の正当なる末裔。そして選ばれし『御子』だ。言葉を違える事はない。それに」

「桔梗」は皮肉げな笑みを浮かべた。

「あやかしは『ことば』の持つ本当の力を知っている。ひとと違い軽んじはせぬよ」

「……雅哉どの」

紫苑が口を開きかけるのを、雅哉は手で制した。

「もし……私が否といえばどうする」

じつと彼女を見据えて問う。

「簡単なことだ」

「桔梗」はいつそ穏やかとも言える笑みを浮かべた。

「私を目撃した者たちをひとり残らず殺せばいいだけのこと」

「桔梗！」

紫苑は「桔梗」の腕を掴んだ。彼女はふわりと振り向く。

「お前……!!」

「何がいけない？」

「桔梗」は水色の瞳を微笑ませていた。

「私は生きようとしている、それだけのことではないか。人間たちとして生きるためには多くの動植物を犠牲にしているだろう？ それだけではない。我々あやかしの死の上に今日のひとの世の平穏があるのは事実」

「しかし」

「それに、今の場合はただこの男が秘密を守れば良いだけのこと」

「……………」

「どうだ？」

雅哉の額から脂汗が滴った。ゆっくりと彼は頷いてみせる。

「ありがとうございます」

紫苑は深々と頭を下げた。「桔梗」はその姿を見て少し寂しそうに眉を寄せ やがてその体の支配権を手放した。

自分のした小さなくしゃみで、桔梗は目を覚ました。

「あ……」

瞬くと、見慣れた天井にゆっくりと焦点が合う。

「気がつかれましたか」

横に視線を投げると、見慣れぬ式神が見えた。薄桃色の衣を纏った女房姿で、肌の色は透けてしまいそうな程白い。

「小雪と申します」

「こゆき？」

「はい」

桔梗は体を起こした。

「……新しい式神さん？」

「冬の間、桔梗さまのお世話をさせて頂きます」

「小雪さんは何の精なの？」

青い目を輝かせて尋ねる彼女に、雪は微笑みながら答えた。

「山茶花です」

「さざんか……か」

ふと思いついて尋ねる。

「あの……紫苑は」

「紫苑さまは今義父殿のお屋敷にいらっしやいます」

「お義父さんの……」

「ええ。もうすぐお帰りになられますよ」

「そう……」

桔梗は視線を落とした。誰かに襲われたのはほんやりと覚えてい
る。その後気を失ってしまつて……羽櫻が助けてくれたに違いない。
紫苑の耳にもそのことは入つただろう。だから、目が覚めたとき紫
苑が側に居てくれるのではないかと思つていた。心配したと、そう

言ってくれるのではないかと。

そんなわけがないのに……。桔梗は小さくため息をつく。自分分は紫苑の何でもない。行くあてのない子供だから、側に居ることを許されている。それだけなのだ。

「……わかつてるけど」

「桔梗さま？」

小雪に見えないよう、顔を俯ける。じわじわと視界が白く塗り潰されていくのを止めることが出来ない。白い頬が濡れた。

「そんなこと、わかつてるけど」

あのととき……突き刺さるほどの殺意を感じて。菊が消えてしまつて。頭上に白刃が煌いて。

「怖かつたんだ……」

紫苑に、守って欲しかつたんだ……。

二

蘇芳は目前の紫苑に向かい、軽く頭を下げた。

「迷惑を掛けたな」

短い言葉だが、それは紫苑の驚愕を誘うに十分すぎた。

「父上」

「浅葱は無事だ」

紫苑に何か言わせまいとするように矢継ぎ早に畳み掛ける。

「聞けば伴雅どのもお命に別状はないとのこと。雅哉どのもだ」

「……」

「これで内々に解決できるだろう。今上のお耳に入ることもあるまい」

「父上」

「表向きには何もなかったことになる。伴雅どのにはしばしの療養が必要だろうが……」

「父上！」

紫苑は強い口調で呼び掛けた。

「何を恐れておいでなのです」

「……………」

蘇芳は押し黙った。

自分に対して常になく饒舌な蘇芳　その奥に秘められた真情に
気付かぬほど、紫苑は鈍感ではなかった。そして、彼の恐怖の対象
が何であるかも既にわかっている。

「我が家に居る……………水龍のこと、ですか」

「……………」

蘇芳は頷いて見せた。声を潜め、囁く。

「幼体のうちに、殺してしまえぬか」

「……………！！」

瞬間体をめぐった激情を、紫苑はかろうじて制御した。

「それは無理です。あれは、ふつうの水龍ではありませんから」

「どういうことだ」

「魂に青龍を宿していると、朱雀がそう申しておりました」

「……………馬鹿な」

蘇芳は啞然と口を開ける。

「現に」

紫苑は淡々と言葉を継いだ。

「あれは成体にもなるのです……………特に、生命の危機を感じた時には」

「……………つまり」

「私はあれに勝てません」

「……………」

蘇芳は口をつぐんだ。紫苑が勝てないということ　それはつま
り、人間の力では誰も彼女を制し得ないということだ。

「さいわい」

紫苑は曖昧な笑顔を作って見せた。揶揄するような、底冷えのす
る笑み。

「彼女は私を慕ってくれている……彼女が成体になった時にも約束してくれました。『私を困らせるようなことはしない』と」
「信じるのか」

「ええ」

「何故」

「彼女は」

紫苑ははつきりと唇に笑みを刻んだ。眼だけはまっすぐ蘇芳を見据え、言う。

「彼女は『あやかし』ですから」

「……………」

蘇芳は気まぎれに目をそらし、そのまま低く唸った。

「お前は」

「……………何ですか？」

「お前は裏切るまいな？」

「何をです」

「決まっておるだろう」

蘇芳は苛立った様に膝を進め、紫苑の瞳をじっと見つめた。

「お前は『ひと』を裏切るまいな？」

「……………」

紫苑は黙ったまま義父を見つめ返す。その眼に映る自分の瞳はやはり紫電の色で……………。

「私が『ひと』の世に居ります限りは」

紫苑は深々と頭を下げ、義父の視線を遮った。

脳裏に浮かぶ桔梗の顔。それはあどけなくも可憐で、純粋な笑顔だった。

久しぶりの深い眠りだった。ずっと彼を苦しめていた悪夢も消えた。

「丸一日眠っていたのだぞ」

兄に言われ、伴雅は気まずそうに笑う。その腕には彼自身のつけた傷が残っていた。紫苑が手当てをしてくれたが、痕は残るかもしれないという。だが、それでいい。この手で自分を壊そうとした、その愚かさの証としていつまでもこの身に刻み込んでおけば良いと……。

「兄上」

伴雅は側に座る雅哉に向き直った。

「本当に、申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げる。雅哉は苦笑したようだった。

「もう良い。何もなかったのだ。そう思え」

「しかし」

「もう良い」

「……はい」

「北の方が随分心配していたぞ。謝るのならそちらにしろ」

「……はい」

伴雅は零れ落ちそうになった涙をかるうじてとどめる。

「兄上」

「なんだ？」

「あの、あやかしなのですが」

「……」

雅哉は緊張の面持ちになって伴雅を見守った。彼は兄の視線の陰しさには気付かず、

「彼女は私を救ってくれたのかもしれない」

「え？」

思いもかけない言葉を聞き、雅哉は眼を瞬いた。伴雅は雅哉を見て微笑んだ。

「そう思つのです」

お前は何故そうまでして自分を苦しめる？ 涼やかな声です問われたとき、彼の心の中で何かが弾けた。

「彼女は厳しかったし、勿論私はあれが怖かった」

伴雅は吐息をついた。

「けれど……彼女のお陰で、私は自らの内に巢食つもののけと相対することが出来たのかもしれない」

「……………」

雅哉は呟いた。

「『水龍族の正当なる末裔 選ばれし御子』か」

それは彼女が口にした言葉だった。

「兄上？」

「あのあやかしは 確かに普通ではない」

「……………はい」

「その存在は、今は伏せておくしかないな」

「兄上がそう約束なさったのでしたら、私も」

「ああ」

そうせねば命がない、とは言わなかった。

孤高の陰陽師を思い浮かべる。長い黒髪と紫電の瞳、ひとでもあやかしてもないその存在……………。

約束しよう。

「彼のため か」

どこか胸騒ぎを覚えながら、雅哉は弟の手をぎゅっと握った。

四

その日は夕方から酷く冷え込んだ。桔梗は火鉢の前から動かない。泣いたせい、頭が重かった。

「私、何が欲しいんだろう……………」

桔梗はつぶやく。自分は何を物足りなく思っているのだろう。衣食住の全てを保証され、式神にまで守られて 大切に扱われているのに。どうしてこんなに寂しいのかわからない。

「桔梗」

「わっ」

不意に声を掛けられて、桔梗は飛び上がった。

「何をそんなに驚くことがある」

背後に立つ紫苑は、彼女がそれほど驚いたことにむしろ驚いているようだった。

「な、何ですか？」

振り向くと、紫苑は帳の外 庭の方を指差して見せた。

「良いものを見せてやろう」

「え？」

「外だ」

「外は、寒いです……」

素直になれなくて渋る桔梗に、紫苑は苦笑を投げかけた。

「お前は猫か」

「え？」

「いいから来い」

「え、でも」

「ほら」

脇に抱えていた衣で桔梗をすっぽりと覆い、そのまま軽々と抱き上げる。

「し、紫苑！」

「落ちるなよ」

おそるおそる紫苑の肩に腕を回すと、そうしていると言われた。ひんやりした彼女の指先に、紫苑の少し高い体温が伝わる。

紫苑は帳をあけて濡れ縁に出た。既に日は沈み、宵闇が深く辺りを浸している。そして。

「な、何？」

白い粉のようなものがひらひらと舞い落ちていた。辺り一面、きらきらと光っている。

「雪だ」

紫苑は短く答え、縁に腰を下ろした。膝の上に彼女を載せ、軽く揺すぶって位置を落ち着ける。

「綺麗だろう」

「……はい」

もうとつくに収まったと思っていた涙が、また溢れそうになった。だが先ほどまでの涙とは意味合いが違う。

「桔梗？」

「……」

「泣いているのか？ どうした？」

紫苑は驚いて尋ね、桔梗の銀髪をその不器用な指でやわやわと撫でる。

「もう、寒くないです」

桔梗は両頬に涙の流れた痕をつけたまま、顔を上げて笑った。

「あつたかい……」

「……」

紫苑の腕の中は暖かい。何が起きてもここに帰って来られるのなら、自分は何も恐れなくていられる。そんな気がした。

「綺麗だろう？」

「……はい」

お前にこの世界の綺麗な所を沢山見せてやりたい。紫苑は口に出さずにそう思った。ひとの世は彼らに冷たい。だが、世界はひとだけのものではないのだ……。

「ねえ、紫苑」

「何だ？」

腕の中で丸くなった桔梗が、紫苑の顔を見上げている。その表情はどこか「桔梗」のものとも似て……。

「何だ？」

「私があの時殺されていたら」

口を挟もうとした紫苑を、桔梗は手を翳すことで止める。

「紫苑は泣いてくれましたか？」

「……………」

紫苑は桔梗を見つめた。その薄氷色の瞳に、自分の顔が映っている。

「私は、きっと……………」

伴雅を殺していた。

低くつぶやかれた言葉に、桔梗は眼を見開いた。

「……………」

言葉が出ない。

紫苑は庭に降り積もる初雪を眺めている。桔梗は黙ったまま紫苑の肩に頭を寄せた。暗い夜を染める白い雪。桔梗の額にかかる紫苑の暖かな呼吸。そっと背中にまわされた手は大きく。

もう寂しくはない。けれど、胸が痛い。多分それは、切なさだった。

燐の巻

第一章

—

その屋敷は、主が住まう様子もなくひっそりと静まり返っていた。東大路に面した大きな屋敷である。放っておけば荒れ放題になるはずのところだが、何故かここはそうなっていない。

年の瀬も押し詰まった頃の夕刻、その門の前に一台の牛車が止まり、中から人影が降り立った。御門紫苑である。

「……………」

どこか懐かしいような、それでいて哀しいような表情で屋敷をしばらく見つめていた彼は、やがて振り向いて牛車の中に声を掛けた。

「桔梗」

「はい」

「出てきていいぞ」

銀髪が宙を舞い、牛車の中から一人の少女が降り立った。幼女の装いをした彼女は、実はあやかしである。だが、陰陽師である紫苑の側にいることがさいわいして、彼女はまるで式神であるかのようにひとびとの目に映った。

「ここは、どなたのお屋敷ですか？」

「……………」

紫苑は口を噤んだまま桔梗の背を軽く押す。踏みしめられた枯葉がかさかさと言を立てた。

—

中庭に面した奥の間に進んだ紫苑は燭に火を灯した。まだ闇には間があるが、手で作業をするには不自由である。

「……………」

きょとんとした表情で見守る桔梗をよそに、紫苑は取り出した符を人型に切った。口中で呪を唱え、ふつと息を吹きかける。人型の紙はふうわりと舞い上がり、庭に落ちてひとになった。簡素な平服を纏った、従者風の男。

「わあ」

桔梗が感嘆の声を上げる。口元に小さく笑みを浮かべた紫苑が小声で何ごとか告げると、その男はすうつと虚空に溶け消えた。

「桔梗」

「はい」

男の行方を追ってきよろきよろしていた桔梗に、紫苑は声を掛けた。

「今夜、この屋敷の主が帰ってくる」

「……………」

「その男は、私の友達だ」

「ともだち？」

聞きなれない言葉に桔梗は首をかしげる。紫苑は苦笑した。

「ああ。私の唯一の友達だ」

紫苑は彼女に向き直った。

「お前をあつ屋敷に置いてくるのが不安だったから連れてきたが、いくらあの男でもいきなりお前を見れば驚く。おいおい話していくつもりではあるが、とりあえず今夜は帰京祝いが先だ。だから」

「だから？」

「お前は別室に」

「あれ？」

突然、中庭に人影が現れた。

「紫苑、もう来ていたのか、早いなあ。まだ何のもてなしの用意も

していないよ？」

「……紫苑？ 大丈夫ですか？」

突然床に突つ伏してしまった紫苑を心配するように、桔梗は小さな手のひらで彼の背中を撫でた。

「おや」

中庭の男は目を瞬かせ、桔梗をじいつと見つめた。物腰の柔らかさ、というよりもどこか力の抜けた、温厚そうな好青年である。年は紫苑と同じくらいであろう。髪も眼も、色素が薄い。

「水龍、かな？」

ぼつり、と呟いた瞬間、彼の眼に一瞬だけ凄みのある光が射した。桔梗が驚く間もなく、その光はすぐに消えてしまう。

「はじめまして」

男は桔梗の方に右手を差し出して微笑んだ。

「橘たちばな燐はなといます。よろしくね」

「よ、よろしく……」

やわやわと握り返すと、燐はますます笑み崩れた。

「水龍にもこんな可愛い女の子がいるんだ。紫苑、良く探してきたなあ。てつきりもう絶滅してるもんだと」

「燐!!」

紫苑ががばつと体を起こした。

「お、お前何故急に」

「急につて。今晚つて文で知らせただろう？」

「しかし、宮中に参内するとかしてもつと遅くなるものだ」と

「宮中？」

燐はひよい、と肩を竦めた。

「あんなところに用はないよ。まあそんなことはともかく」

燐は再び笑みを浮かべた。

「紫苑、この子どこから見つけてきたの？」

桔梗の銀髪をふわふわと撫でながら尋ねる。

「見つけてきた、というか、その……」

「うん？」

「拾った、というか」

「拾った？」

「後で話す」

紫苑はそう言うと、手を高く打ち鳴らした。すると簾が巻き上がり、そこから何人かの女房たちが幾皿も料理を運んでくる。

「家神たちを借りたぞ」

「うん」

「おいしそうですね！」

嬉しそうに笑う桔梗の髪を紫苑はくせのように撫で、そして微笑んだ。

「……………」

まるで仲睦まじい親子のような様子ふたりを見て、燐は瞬きを繰り返していた。

三

全くいつの間に呑んだのだか。紫苑は桔梗の側に転がる甘酒の杯を見て眉を顰めた。当の桔梗は満腹感と酔いのせいだろう、すっかり寝入ってしまったている。すでに子の刻に近付いているから眠くなって当然かもしれない。

「冷えるぞ」

紫苑は独り言のようにつぶやくと、彼女の体の上から自分の羽織っていた単の着物を掛けた。

「どうしたの、紫苑」

燐が杯の端を舌で舐めるようにしながら悪戯っぽく問い掛ける。

「僕のいない間に何があったわけ？ どうしていきなり父親になつてるのさ」

「父親になどなっていない」

「じゃあ何？」

「……………」

紫苑は少し首を傾げて考えたが、やがてぼつりと呟いた。

「保護者？」

「最強のあやかしに保護者なんているのかなあ」

「しかし」

燐の瞳に投げられたのは思いのほか強い眼差しだった。

「あいつはひとりなのだ」

「……………」

燐はため息をついた。

「だから、拾ったの？」

「……………」

「放っておけなかった？」

紫苑は曖昧に頷いた。

「敢えて理由をつけるなら、そういうことになるのだろうな」

「でも危険だなあ。水龍といえはかつての朝敵だよ？ 他人に見つ

かったらただじゃすまない」

「わかっている」

「本当に？」

燐の目が哀しみと怒りを宿した。

「君は全て見ていたはずだ。僕と彼女の辿った運命を」

「……………」

「それでもいいと、そう思うの？ それだけの覚悟があるの？」

「……………」

紫苑は微笑んだ。暖かな、それでいて切なげな笑み。燐は詰問口

調になっていたことに気付き、口を噤む。

「もう、始まっているのだ」

そう切り出すと、紫苑は訥々と語った。桔梗との出会い。もう一

人の「桔梗」。青龍を宿すその魂。藤原兄弟とのこと。燐はただ黙

って耳を傾ける。

「……きつともうすべては始まっている」
紫苑はつぶやいた。

「『桔梗』の語る運命が何かは知らない……だが、きつと」
燐はゆっくりと頷いた。

「君と桔梗ちゃんは出会ってしまった……それは変えようのない事
実なんだね」

「ああ……」

「僕と彼女が出会ってしまったように……」

燐の浮かべた微笑みの中に宿るもの。それはまるで、諦念だった。

四

翌日の深夜、橘邸にひとりの男がやってきた。紫苑と桔梗は既に
帰宅している。紫苑が貸してくれた式神と共に屋敷の片付けをして
いた燐は、突然の来客に眼を見開いた。

「有平」

遠野有平という名のこの男は、燐の乳兄弟である。

「燐さま」

有平は小柄な体をすくめるようにしながら、彼の前に座った。

「どうかしたの？」

「まずは無事のご帰京、おめでとうございます」

「ありがとうございます」

「実は、その、申し上げにくきことがあるのですが」
「何？」

有平は観念したかのように一息で言った。

「宮中にて……橘家を取り潰そうという動きがあるのです」
「何だつて……?!」

燐はさすがに色を失った。

彼の父母はもうこの世にいない。妹がふたりいたが、どちらも若

くして死んでしまった。確かに今橘家直系の血をひくものは憐しいないが いや、彼がいるにも関わらず取り潰そうというのである。「それは……やっぱり」

「ええ」

有平は痛ましそうに目を伏せながら言った。

「あの方のことが……」

「……………」

憐はすうっと無表情になった。

「……そう」

「憐様？」

「別にいいよ」

どこか深く暗い場所から浮かび上がってきたかのような、彼の笑み。

「僕にはもう矢うものなんてない」

「憐さま！」

「そうだろ？ 有平」

「そんな」

「あの時全部終わったんだよ、僕は……」

「そんなことを仰らないで下さい、私は」

「もういいんだ、有平」

憐は穏やかに笑った。

「僕は帰ってくるべきじゃなかった」

「私は！」

有平の瞳から涙が一筋零れる。

「私は憐様にお会いしとうございました」

「僕も君が懐かしかったよ」

憐は微笑む。

「紫苑にも会いたかったしね」

彼の巻き込まれた運命を見届けたくはあるのだけれど……。

「御門様は反対しておられます。橘家は由緒ある名家。取り潰すこ

とは先人たちに申し訳が立たぬと」

「彼らしいね」

あくまで私情を見せることなく燐を庇おつといふのだろう。あのときと同じだ。　あのととき……。

「ありがとう、有平」

燐はすつと立ち上がった。

「知らせてくれて助かったよ」

「明日にでも御自ら出仕なされてはいかがですか」

「針の筵に座るのは嫌だなあ」

冗談めかして燐は笑った。

「ま、とりあえず今日は帰りなよ。もう遅いしね」

有平は唇をかみ締めた。本当はもっと言いたいことがあるのだろう。しかし彼の燐への遠慮がそうはさせない。

「……夜分遅くに失礼致しました」

「ううん、君の好意はわかってるよ」

取り潰されかねない橘家を訪れば、遠野家にまで類を及ぼしかねない。それでも訪ねてきてくれた有平の想いを　　自分は無駄にするかもしれない。

「おやすみ、有平」

「……おやすみなさいませ」

彼を戸口まで送り届けて、燐は夜空を見上げる。厚い雲に覆われた寒空には、星の一つさえ見せる優しさもなかった。

第二章

—

橘家は由緒ある家柄である。代々式部省に務め、燐の父親である

龍秀は式部大輔に任ぜられた。式部省の長官である式部卿は親王が任ぜられるのがしきたりであるため、次官とはいえ事実上の最高位である。彼らは紀伝道に通じた学者の家系であり、藤原氏が台頭してきた昨今とはいえ宮中における発言力は決して小さいものではなかった。燐自身、文章生として大学寮で紀伝道を学び並ぶものなほほど良い成績を収めた。父、龍秀亡き後は若くして式部大夫に任ぜられ、将来を囑目されていたのだが。

紫苑はため息をついた。宮中に出仕して朝議の席に着いていたのだが、どうしてこつても殿上人たちは橘家を潰してしまおうとするのだろうか。確かに不幸続きで直系の血を引くものは燐しかいない。いや、燐がいれば十分ではないのか。しかし、自分が下手に弁護すれば彼の立場はさらに悪くなる。紫苑はじつと黙っていた。

燐はこの場にいない。いない方が良いのか、いた方が良いのかどちらにせよ辛い目を見ることだろう。それを思うと胸が痛んだ。摂政、藤原時雅がそんな紫苑をじつと見ている。側に控えて座している雅哉がそんな彼の耳元に何か囁いた。彼は重々しく頷く。

「各々方」

時雅の低く通った声が場を打った。

「ここで今上にお考えを賜ろうと思考するがいかがか」

一瞬の沈黙の後、皆口々に同意を示す。

「いかがでございましょうか」

御簾の前に居住まいをただし、時雅が内側に座す今上に尋ねる。

「橘家の処遇、いかが所思召されます」

「……橘家には、長男がいたであろう」

澄んだ声が、静まり返った朝議の間に響いた。今上は御年十七歳。無論既に成人していると見なされる年齢ではあるが、それでも若過ぎる節があるのは否めない。未熟な正義感の時として人を傷付ける。

この時もまさにそうだった。

「彼は、陰陽博士と親交が深かったのではなかったか。朕は彼の意見が聞きたい」

「……………ほう」

時雅は頷き、紫苑にちらと視線を投げた。

「との仰せだが。御門殿、何か仰りたいことは？」

「……………私めがこのようない大事に口を挟むのはいささか僭越かと」
深く頭を垂れ、紫苑は静かに言う。

「そう言うな、紫苑」

今上は重ねて言った。

「そなたは良く知っているのであろう？ あの時のことを」

「……………」

紫苑は体を堅くする。

「あの時朕はまだ幼かった……………そなたの口から教えて欲しいのだ」

その時、空の一角が一瞬赤く染まった。同時にぱん、と乾いた音が小さく響く。皆一斉に腰を上げた。

「……………」

時雅の元へ末子、蓮が走りより何事か囁く。それを耳にした時雅は顔色を変え、紫苑を手招いた。

「橋の屋敷が燃えておるそうだ」

「……………何ですって？」

紫苑は思わず大声を上げた。

燐……………！

一一

御門家の屋敷と橋家の屋敷はかなり離れている。それでも、桔梗の耳には路傍で騒ぐひとびとの声が聞こえていた。側に控える小雪は厳しい顔をしている。桔梗は落ち着かない様子でそわそわとしていた。

「ねえ、何が起こっているの？」

折しも、烏の姿をした羽櫻が飛び込んできた。小雪の耳元で何か嘴を動かして囁くような仕草をした後、またぱつと飛び去っていく。

小雪の表情はさらに険しいものとなった。

「小雪さん？」

「…… 火事だそうです」

桔梗の不安そうな様子に気付いたのだろう、彼女は少し表情を緩めた。

「紫苑さまはすぐにはお帰りにならないかもしれませんが、心静かにお待ち下さいませ」

「火事って、どこが？ どうしてこんな騒ぎになっているの？」

「それは」

小雪は言葉に詰まった。

「紫苑は危なくないの？」

「それは、大丈夫だと思いますよ」

「……………」

桔梗の水色の瞳が憂いを湛えて外を見遣る。

「紫苑……………」

三

貴女と出会ったのは、雪深い比叡の山の中。気紛れに遠出したところ吹雪に見舞われ、もはや馬で駆けることもままならず、僕は轡を引いてどこか避難できる場所を探していた。

はつきりと覚えているよ。貴女を初めて見たときのこと。真っ白な雪の中、そこだけが色づいていた。貴女はさくら色の髪をしていたから、とても目立っていたよ。

馬のいななきに気がついて、振り向く。驚いた顔。大きく見開かれた瞳。

一瞬は警戒したようだったが、僕のあまりに情けない姿を見てすぐに手を差し伸べてくれたね。

「おひとりですか？」

「……ええ」

馬の轡を貴女の手が受け取ってくれた。

「私の家にご案内します。このままでは凍え死んでしまっわ」
「でも」

悲しいことだけど、僕の中にも警戒はあったのだ。あやかしの家に呼ばれていっていいものかどうか……。でも、それは貴女をひどく傷付ける考えのような気がしたから。そして、友人のことが思い浮かんだ。彼はいつだって冷静を装っている。でも本当は、ひと倍傷つきやすい繊細な男だ。それを僕は良く知っているから、口に出したのは別のことだった。

「ご迷惑でしょうか？ ご家族は？」

「居りませんわ」

そう言うつと貴女は僕から目を逸らした。

「比叡の山寺の者の手にかかって 命を落としました」

「……」

あのとき、僕は正直凍死してもいいから貴女の前から消えたいと思った。僕が余程ひどい表情をしていたのか……貴女は気を遣うように笑って、首を横に振ったね。

「貴方のせいではないのだから、そんな顔をしないで」

「……」

「遠慮せずにいらして下さいな」

「しかし」

「お代のことなら後ほどしっかりと頂きます。心配なさらずとも、ね」

冗談めかした口調は、あまりに優しくかった。貴女の気遣いが胸に沁みて、何だか泣きたくなったのを覚えているよ。

さくら。

貴女にこの名前をつけたのはいつだっただろうね。本当の名前を教えてくださいなかつたから、あの後僕が勝手にそう呼んでいたのだけ。

さくら。

この名前を気に入ってくれていたのかどうか、確かめる術はもうないけれど……でも僕が呼ぶたびに貴女は嬉しそうに頬を染めていたね。

さくら。

もうどれだけ呼んでも届かない。どうして、どうして、どうして、どうして……。

「さくら……」

貴女の側に、ゆきたい。

四

紫苑が橋の屋敷の前に駆けつけたときには、既に中に入れる状態ではなかった。燃え盛る炎が冬空を舐めている。火の粉が時折ぱつと舞い上がって、野次馬の中から悲鳴が上がった。

「中から誰か出てきたか?!」

紫苑は辺りにいた若者に問うた。

「いや……見ていません」

彼の剣幕に気圧されるように、若者は首を横に振る。紫苑は唇を噛み締めた。

「……燐」

中にいなかったのならいい。しかし……もし巻き込まれているとしたら。最悪 自ら火を放ったのだとしたら。いや、そんな馬鹿なことはしないはずだ。燐はそれほど弱い男ではない。紫苑は彼を信じている。

紫苑は呪札に術をかけ、それを鳥形の式神にして屋敷の中へと飛ばした。念を込めて人の気配を探るが、特に何も感じられない。

ということの中には誰もいないということか。ほっと息をついたとき、紫苑の隣りに立ち並ぶ者の気配がした。振り向くと、遠野有平だった。

「燐……さま」

力が抜けたようにがくりと座り込む。その顔色は蒼白だった。

「有平どの、お気を確かに」

「……み、御門どの」

有平はかろうじて顔をあげた。

「わ、私が要らぬことを申したばかりに……！」

「落ち着かれよ。中には誰もおらぬ。無人だ」

「……」

有平は口元を喘がせ、やがて大きく息をついた。

「で、では燐さまはご無事で……？」

「居場所はわからぬが、無事だろう」

「……良かった」

有平は涙を零した。

「本当に……良かった」

「有平どの」

紫苑は控えめに問いかけた。

「先ほどの……要らぬこととは何です？」

「……」

有平は少し俯いたが、ぽつりぽつりと答えた。

「橘家が断絶の危機にあると聞いたので、燐さまにお知らせ申し上げたのです。自ら朝議の場に出て抗議していただきたいと思い……」

「……そうか」

紫苑はため息をついた。彼は敢えて燐には言わなかったのだが

無論有平に悪気はない。彼の気持ちも理解できる。しかし、燐にとっては打撃だっただろう。三年前、愛するものを奪われると同時に京での居場所も失った。そして彼は留学との明目で遠く唐の国へと追い払われ……ようやく帰ってこることが出来たと思えば、自らの血筋が断絶の危機に見舞われていたのである。

燐が何の罪を犯したか。紫苑は声を大にして叫びたい。

彼がしたこと。それは愛したこと。あやかしを愛したこと。そ

れだけだった。

第三章

—

屋敷に戻った紫苑を出迎えたのは、蒼い顔をした小雪だった。
「どうした？」

胸騒ぎを抑えながら紫苑が尋ねると、

「桔梗様が……どこにもいらっしやいません」

小雪の唇が震える。

「何？」

「少しの間目を離した間に、忽然と」

「消えたというのか?!」

「はい」

紫苑は小雪を軽く押し退け、桔梗の部屋に向かった。確かに人気はない。だが、文机の上に置かれた紙にふと眼が止まった。

呼ばれた。山へ行く。

それだけの文字が、流れるような筆跡で書かれている。

「これは誰が書いたものだ？」

後に続いてきた小雪に尋ねる。小雪は首を左右に振った。

「存じません。桔梗様がいらっしやらなくなって、この紙だけぽつんと置かれていました」

「そうか……」

桔梗の筆跡とは似ても似つかない。だが、これを「桔梗」が書いたとすれば……。

「山……比叡か」

山といえば、比叡山を指す。都の北西、鬼門の方角に位置し、都

を災いから守る役目を果たす山だ。

紫苑は小雪に問いかけた。

「誰か、屋敷を訪ねてきたものはいたか？」

「いいえ」

即答した彼女に、紫苑はあることを確信した。

「出掛ける。馬を出してくれ」

「はい」

小雪の後ろ姿を見送り、紫苑は深々とため息をつく。「桔梗」がどうして「呼ばれた」と書き残したのかは分からない。だが、彼女を呼んだと思われる相手なら分かっていた。

燐。彼はどうして「桔梗」を　水龍の御子を呼んだのだろう。一体何を望んでいるのだろう。

「……………」

脳裏に閃く可能性を打ち消すように、紫苑は髪をぎゅっと束ね、出掛ける用意をした。

二

「それはできません」

「どうして」

貴女を困らせていることなんて百も承知だった。

「山を降りて。僕の屋敷に来て」

愚かだったと今なら分かる。貴女の危惧は正しかったのだから。

「ここに通っていたたくわけには行かないの？　遠過ぎる？」

僕はあの頃毎夜のように貴女の元へ　比叡の山深くにある貴女の庵へと通っていたね。あの時、出逢って数ヶ月は経っていた。

確かに都からは遠かった。でも、そんなことが理由じゃなくて。「ずっと側にいて欲しいんだ」

「……………」

貴女は少し頬を染め、でも困ったように微笑んでいた。

貴女はとても優しくかった。豊かな自然に囲まれて育ってきたせい
か、繊細な感受性と大らかな包容力を同時に持ち合わせていて、だ
から貴女の側はとても居心地が良かったんだ。

他人の眼ばかりを気にして競い合うことしか知らない宮中の者た
ちよりも、貴女はずっと気品があった。半妖である僕の友人が口さ
がなく貶められていることを聞いて、貴女はとても哀しそうだった
ね。

そういえば、貴女は一度紫苑に会っている。貴女が山を降りる決
意をする少し前、僕らは三人で花見をした。貴女の庵の近く、そう、
あの峠。貴女の髪や眼と同じ色をした花びらが、ひらひらと舞い散
って……紫苑は眩しそうに僕らを見つめていた。

彼は貴女が山を降りることはあまり賛成していなかった。身を
もってあやかしへの風当たりの強さを知っていたからだろう。僕も
それは知っていた。いや、知っていたつもりだった。それでも僕は
貴女を守れると思っていた。誰にも貴女を傷付けさせはしないと。

傲慢だったね。

「儂いな」

花びらを見つめて言った僕に、貴女は笑って首を左右に振った。

「また、来年も咲きますわ」

優しい眼差しで木々を見つめ、

「花を落として葉をつけ、実をならせて……命は続いていく」

「そうだな」

紫苑は酒盃を重ねながら、顔色一つ変えずに頷いていた。

「たとえ私たちの目には見えなくとも、生きていることには変わり
ない」

「ひとは目に見えるものにとらわれがちだね。気をつけなきゃ」

本当に儂かったのは、貴女の方だったのに。

ああ、僕は帰ってくるべきじゃなかった。ずっと唐にいれば良かった。この国には、貴女との思い出が溢れている。部屋にも、屋敷にも、街にも、山にも、風にも、空にも、全て。貴女と重ねた記憶が僕を苛むんだ。

それでいて、僕は探している。貴女との思い出を、一つ残らず集めようとしている。それが、僕を殺すことになるうとも。

三

さくらの住んでいた庵のあった場所を、燐の体は覚えていた。庵は跡形も無く、すっかり荒れ果てていたがそれでもなお、風景は当時の名残をとどめている。

粉雪がはらはらと舞い散っていた。

燐は馬を降り、冷たい土の上に体を横たえた。灰色の空から、白い雪。まるで花びらにも似た。この冷たい土の下、さくらがいる。

彼女の亡骸を運んだ日のことを思い出し、燐の眦を涙が伝った。

もう、何も無い。

父母はとうの昔に死んでいる。姉妹もまた、流行り病で命を落とした。そして、

「貴女はいない……」

ふと、旧友の顔を思い出す。紫苑にも家族ができたようだった。

純粹な、水晶のような眼をした少女。彼女が水龍族だと気付いたときは慄然としたが、彼女の言動を見ていると本当にただ幼い子供で

そして紫苑をとて慕っていて。親子のようで微笑ましかった。もう、紫苑は独りではない。ただ、彼らの行く末は気になるところではあるのだが……。

「できれば、あの子に」

桔梗、と言っただろうか。あの水龍の子供には、

「僕らのこと……知って欲しかったな」

ひとりでも多くさくらのことを覚えていて欲しい、それだけのことなのかもしれない。それでもひととあやかしの間に育まれた愛が辿った悲劇は、決して彼らと無関係ではないはずだ。桔梗が、紫苑を想うのならば。

「紫苑は知っているはずなのにね……」

それでも紫苑は彼女を手元に置こうと決めたのだ。彼らの悲惨な末路を見届けていながら。

「何故なんだろう……」

少しずつ、手足の感覚がなくなってくる。どこか柔らかな綿の上を浮遊するような錯覚を覚え、焔は眼を閉じた。その睫毛の上にも雪が降り積もる。少しずつ、雪は大粒になってきていた。このまま大地に埋まってしまいたい。

「もう、疲れたな……」

焔は大きく息を吸い込んだ、そのとき。

「逝くのは少し待て」

涼やかな声が空間を震わせた。

焔は眼を開け、声の方角を探る。彼の右方、葉を落とした木の太い枝の上。雪と見紛うほど白くすらりと伸びた足がぶらぶらと宙を蹴っていた。

「誰……？」

「私を呼んだのだろうか？」

一瞬の後、焔は頭上から彼女に逆さまに見下ろされていた。長い銀髪が、彼の凍えた頬に落ちかかってくる。冷たい瞳は、まるで雪の結晶のようだ。

「正確には私ではなく、もう一人の『私』だが……『彼女』にはお前の呼びかけに応えるほどの力はないからな」

「え？」

焔は瞬きを繰り返す。そのあやかしは静かに微笑んだ。

焔ははたと気付いた。彼女は水龍族。絶滅したはずの。そして現存する最後の水龍族とは……。

「…………桔梗…………ちゃん？」

「そう」

「桔梗」は艶然と微笑んだ。

「姿もこころも違うが、確かに私は『桔梗』だ。そして長い指先が自身の胸元を滑る。」

「水龍族最後の『御子』」

「み…………？」

「お前の『声』に呼ばれたのだ。あまりにも強い『声』だったものだから」

燐は呆然と「彼女」を見上げ、問いかける。

「どうして貴女は姿形を変えているの？ それに…………人格も違うみたいだし」

「そんなことは後で紫苑が説明してくれる。間に合えば、な」

「間に合う？」

「彼は、お前を逝かせたくないようだ」

「……………」

燐は眼を伏せた。「桔梗」は彼の動揺には気付かぬように、

「私は違う。お前が死のうが死ぬまいが、そんなことは知らない。」

お前の望みを妨げるだけの理由など私にはないからな。ただ」

「彼女」の言葉は淡々として、なおかつ厳しさを秘めていた。

「お前は『私』を呼んだ。『私』に何らかの話を聞かせたいと望んだ。それは現世に対する心残りとも言えるだろう。『私』はそれを解消してやるつもりだ。それが終わったなら」

「桔梗」は薄く微笑んだ。優しくもなく、それでいて嘲っているわけでもない。何ともいえない笑みだった。

「好きにするがいいさ」

「……………」

燐は暫く黙然と「彼女」の顔を見ていた。やがて意を決したように言葉を発する。

「僕の妻は、あやかしだった。そして」

彼の血の気の失せた喉元がごくりと動いた。

「人間に殺されたんだ……」

第四章

—

「桔梗」は顔色ひとつ変えず、先を促した。

「それで？」

燐は言葉を続ける。

「僕が屋敷にあやかしを囲っているという噂は、あっという間に都中に広がった。あることないこと陰口を叩く奴らもいたけど、さくらの耳には届かないようにしていたし、僕自身何も気にならなかった」

彼女が側にいてくれれば何も要らない。そう思っていた。

「さくら」というのか、そのあやかしは「

「僕のつけた名前だよ」

「……そうか」

ふわり、と微笑む。鋭利な印象を残す美貌があまやかにとろけて、燐は虚をつかれたように瞬きを繰り返した。「桔梗」は表情を華やかせたまま言う。

「私の名も紫苑にもらったものだ。さくらはきつと嬉しかっただろうな」

「……うん」

そう思いたい。少しでも、彼女にしあわせを与えられたのだと……。燐の眦を涙が伝った。

「彼女が僕の屋敷に来てしばらく経った頃ね。彼女の身体に異変が

起きたんだ」

「異変？」

燐は泣き顔のまま微笑む。

「僕らの子供を、授かったんだ」

「……そうか」

「嬉しかった。本当に嬉しくて嬉しくて……毎日毎日名前を考えた」
二人で顔をつき合わせ、女の子だったらどうしよう、男の子だったらどうしよう……そうやって考えている時間が何より楽しかった。
「紫苑は最初とても複雑そうだったんだ。ひととあやかしの子供は禁忌、そうやって身をもつて扱われてきたのが彼だから」

「……」

「でも、僕は言った。僕らは決して子供を捨てない。そして」
燐は親友の顔を思い浮かべるように目を閉じた。

「どうか、僕らの子供を可愛がってやって欲しいって」

半妖でも幸せになれると、知って欲しい。

「桔梗」はひどく穏やかな顔をして燐を見つめていた。その視線の先で、燐の表情が歪む。

「だけど」

その子供は生まれることはなかった。

「今日と同じ、こんな天気の日だよ」

燐の頬は雪に叩かれ、すっかり冷たくなっていた。

「僕の屋敷に賊が侵入したという知らせがあつて、僕は宮中から慌てて戻った」

そこで彼が見たものは……。

「……屋敷にいた使用人たちは、皆縛り上げられていた。そして」
燐の喉が詰まる。

「……さくらは……」

「殺されていたのだな？」

「桔梗」の静かな声が辺りを打った。

「……」

燐は頷く。

「……………あれは、さくらを殺すための刺客だったんだよ。あやかしが都に住んでいることに耐えられない、そう思ったものがあったらうね。どこの手の者かは今でも分からない。でも、使用人たちは彼らの目的が分かかっていて、あっさりと縛り上げられたんだ。わざわざ身を挺してあやかしを守るうとするものなんて、いなかったんだ」
彼女を守ってやれなかった……………。脳裏に彼女の最期の言葉が浮かぶ。

「ごめんなさい……………赤ちゃん、守れなかった。」

「燐」

「桔梗」の強い声が彼の耳に響いた。

「お前は私がさくらの二の舞を踏むのではないかと　ただでさえ敵の多い紫苑のことなのだから、と……………そう考えたというわけだな？」

「……………」

燐は頷いた。

「桔梗」は冷たい笑みを刻む。

「安心しろ。私は強い。紫苑に守られなくとも……………生きていける。私が紫苑を守る。それに」

燐は続けられた言葉に慄然とした。

「私には都の人間を皆殺しにするほどの力がある」

「私や紫苑に仇なす者たちの巣窟なら、滅ぼすことに何の躊躇いもない。あっさりとそう言い放つ。」

「だが、紫苑は殺生を嫌がる。無下にそのようなことはしない」

「桔梗」はその氷の結晶のような瞳で、燐を見つめた。

「お前のさくらと私は違う。安心したか」

「……………でも」

「私は、自分の身ひとつ守れぬ弱いあやかしではない」

「さくらは悪くない！」

燐は身を起こした。

「元々彼女は都に降りてくるのは反対だった……それを無理に連れてきたのは僕。彼女を身籠らせたのも僕。全部僕のせいだ」

「だからここで死にたい、と?」

「桔梗」の声には呆れが含まれているようだった。

「お前はつくづく阿呆だな」

「え……?」

「さて、私はそろそろ消えることにしようか。紫苑が来るまでどれくらいあるかはわからないが、この山には野犬も住んでいような。食われてしまつかもしれぬぞ」

「あ、貴方は……?」

「言っただろう。自分の身は自分で守ると」

「桔梗」は笑う。

「ただし、お前を助けるつもりはない。ここで冷たくなるのも食い干切られるのも自由だ。私は紫苑とともに帰る。埋葬くらいはしてやるぞ」

「……………」

「それとも 罪悪感を引き摺りながらおめおめと生き長らえることを選ぶか? どちらも無様には違いないが」

その挑発的な調子の奥に、燐はもう一つの彼女の言葉を聞き取っていた。

お前の愛しいさくらが、本当に望むのはどちらだ?

「私は興味深く見せてもらうことにしよう……………」

「桔梗」の体が淡く光り、みるみるうちに丈を縮めていく。目を見張る燐の前でその体は子供のものとなり ぱたり、と雪の上に倒れ伏した。

「き、桔梗ちゃん」

放っておけず、駆け寄って抱き上げる。彼女の長い睫毛がふるふると震え、ゆっくりと瞼が開いた。

「寒い……」

つぶやく彼女の服装はといえば薄物一枚である。あちらの「桔梗」は寒さなど感じないのかもしいれないが、これではあまりというものだ。焾は慌てて上掛けを羽織らせてやった。

「ねえ……ここ、どこ？」

「えっと」

「紫苑は？ 紫苑はどこ？」

「……………」

焾はふう、とため息をついた。きよろきよろと見回している桔梗に、焾はゆつくりと言う。

「ここはね、僕の恋人の いや、妻のお墓。僕は、お墓参りに来たんだよ」

「……お墓？」

表情を曇らせた桔梗は雪の上に座り直し、両手を合わせた。

「じゃあ、お祈りしなきゃ」

死者のためには祈るものだって、紫苑がそう言っていたから。その小さな背中を見守りながら、焾は濃い灰色の空を見上げる。

「ああ……」

僕は阿呆だ。

「焾さん」

桔梗が振り向いた。

「どうして、死んじゃったの？」

「……………」

澄んだ湖面のような瞳に、残酷な真実を教える気にはならなかった。もともとそのつもりで彼女を呼んだというのに……。それでももうひとりの「桔梗」に話したのだから、もういいのだ。

「僕が、守ってあげられなかったからだよ」

「守って……？」

「うん」

罪の意識はきつと消えない。永遠に消えることはないだろう。そ

れでも、僕は生きなくちゃいけない。

貴方が無事でよかった。息を引き取る寸前、さくらはそう言った。だから……。

「帰ろうか」

燐は立ち上がり、桔梗を抱き上げた。

「わ、私歩けます!」

「いいんだよ」

彼女の体はひどく軽い。乗って来た馬の後ろに寄せ、燐はひらりと鞍にまたがった。ふと上空を見遣ると、どこか見覚えのある鳥が舞っている。

「紫苑の式神、かな」

「あ、羽櫻さんだ」

桔梗は空を見上げ、微笑んだ。

「じゃあ、紫苑が近くまで来てるのかもしれないね」

燐はそう言って馬を歩ませ始めた。ぽく、ぽく、ぽく。蹄の下で雪が溶けて行く。厚い雲に覆われていた空が、晴れ間を覗かせ始めていた。

二

迎えに来た紫苑と合流し、屋敷を焼け出された燐は彼の元へと身を寄せた。

疲労の色の濃い桔梗を自室で寝かせ、紫苑は燐と共にとある部屋に座した。都でも雪が降ったようので、部屋の中央には火鉢が置かれている。

「結局、どういうことだったんだ」

紫苑は不機嫌もあらわにそう言った。燐は困ったように微笑む。

「屋敷に火をつけたのは僕ではないよ」

「じゃあ、誰だ?」

「さあ……」

彼が都に帰ってきたのを聞きつけた誰かが、嫌がらせのつもりでやったのだろう。ひとつ間違えば彼の命も、また近接する屋敷の者の命も危うくなる場所だったのだから、無論腹立たしい。だがそれだけではなかった。

「何だか、すつきりしちゃった」

「憑き物の落ちたような顔をして……」

紫苑はため息をついた。

「桔梗は一体何故あそこに？」

「僕が、呼んだんだと思う」

燐は眼を軽く伏せた。色素の薄い虹彩の中に、赤く灯った炭の色が映る。

「あやかしがひとの中で生きることがどれだけ危険で、かなしいことなのか。聞いて欲しかったんだ」

「……話したのか」

燐は無言で首を横に振った。

「彼女のもうひとつの人格の方には話したんだけれど」

「……やはり」

紫苑は眉を寄せた。

「『彼女』が出てきたのか？ 何故だ？」

「僕の声が聞こえたのは『彼女』の方だったそうだよ」

「……」

「とても厳しいことを言われた。僕は阿呆だって」

紫苑は少し困惑を浮かべて彼を見つめる。

「まあ、あいつはああいうやつだから……」

「でも」

燐は笑った。

「紫苑のことは好きなんだね、『彼女』」

「……」

「結局のところ、『彼女』は僕を止めに来たんだと思う。紫苑じゃ

間に合わなかっただろうから」

「…………お前はやはり」

「そう」

燐は頷いた。

「焼け落ちる屋敷からかろうじて抜け出して、本当に僕には何もなくなっただと思っただ」

胸を襲う虚無感。気がつくとは叡の山へと向かっていた。

「彼女の墓の側で死ぬつもりだったよ」

「お前は阿呆だ」

「うん」

紫苑の決めつけにも燐は微笑むだけだ。

「僕は阿呆だね」

「…………もう死ぬ気はないのか」

「ああ言うのって、一度機会を逃しちゃうともう駄目だね」

茶化したように言いながら、燐は火鉢に手を翳す。

「だから、もう少し生きてみようと思っただ」

「……………」

「僕は、僕自身の身を守らないとね……………」

もう、彼を守ってくれるさくらはいないのだから。

「ところでお前」

紫苑はふと気がついて言った。

「屋敷を失ってこれからどうする？ この屋敷に住むか？」

「お邪魔虫みたいで嫌なんだけどなあ」

「…………虫？」

「何でもない」

燐はくすつと笑った。

「じゃあ、しばらくここに置いてもらってもいいかな」

「ああ」

「宮中にもちゃんと行ってみる。もしもう一度官位につくことができたら…………橘家をちゃんと復興させたいんだ」

「しかし妻を娶る気はないのだろうか？」

「それは紫苑も同じだよな」

「紫苑はあっさりと言った。」

「僕は、有能な子供を養子にしてもいいと思っっているよ。……紫苑こそどうするんだい？ 御門家を断絶させるわけにはいかないだろう？」

「私は妻を娶っても無駄だ」

「紫苑はぼつりと呟いた。」

「え？」

「聞き返す燐に、紫苑は無表情を保ち、言葉を紡ぐ。」

「半妖は子孫を残す能力がない」

「……………」

「だから、妻を娶ることはない。必要もない」

「でも、紫苑」

「……………」

「燐の言葉など聞こえなかったふりをして、紫苑は立ち上がった。」

三

桔梗の部屋を覗くと、彼女は気配に気付いたのかぱちりと眼を開けた。闇の中、水晶のようなきらめきが踊る。

「しおん…………？」

「起こしたか。すまない」

「ううん」

何か話したいことがあるのだろうか、唇にきゅっと力を込めて彼女は紫苑を見上げている。紫苑は彼女の側へと歩み寄った。

「どうした？」

「………… 今日、燐さんの奥さんのお墓に行っただんです」

「ああ」

「ちゃんと、お祈りしてきました」

「……偉いな」

紫苑はその大きな手のひらで彼女の髪を撫でてやる。気持ち良さそうに眼を閉じながら、桔梗はつぶやいた。

「あんな山の中にまで、燐さんはお祈りしに行くんですね」

「……………」

「死ぬって、悲しい……」

殺性の強い水龍族とも思えない言葉に、紫苑は優しく微笑んだ。

「そうだな」

「……何だか、寂しいです」

縋るような眼差しで見つめられ、紫苑は少し怯む。

「紫苑」

桔梗は無言で身を起こし、紫苑の胸にぎゅっと抱きついた。

「……………」

外ではまた雪が降り始めていた。しんと雪が降り積もるうかすかな音と、互いの鼓動の音と。紫苑はそれに耳を傾ける。冷たい夜なのに、ここはとても暖かい。

いつの間にか、桔梗はまた眠りに落ちたらしい。体を離そうとして思いとどまり、紫苑は桔梗とともに体を横たえた。暗がりの中で彼女の寝顔を見つめる。まだ幼い造形だが、ふつくらと艶やかな唇や長い銀系の睫毛にふと女性らしさを感じ、紫苑は無理に眼を閉じて動悸を押さえ込む。

燐が最後に呼びかけた言葉　いつまでも一人ぼっちで生きていくのは、寂しすぎるよ。

「寂しい……か」

紫苑の声が届いたのか、桔梗がかすかに身を寄せてきた。仄かに甘い香りが鼻をくすぐる。柔らかな肢体は紫苑の腕の中で弛緩しきって、高い体温を彼に伝えていた。途方もない心地よさに包まれ、紫苑は徐々にまどろみへと誘われる。

ふと気がついて、紫苑は愕然とした。今この腕の中にあるものが失われるとき感じる感情。それこそが、真の寂しさなのだ。

燐の巻（後書き）

第二巻に続く

母の巻

第一章

—

羅城門に美しき女のもののけが出るそうなの。年の改まった頃、そのような噂が都で囁かれるようになった。

羅城門は朱雀大路の南端に位置する城門である。今上から数えること十数代ほど前、桓武天皇の御世に建設された。だが、彼の意向により都の規模は当初より縮小されることとなり、壮麗な羅城門の周りは閑散とした寂しい風景が広がっている。そのためか、羅城門には常に怪奇譚が付き纏う。現在紫苑の持つ笛の先代の持ち主、源博雅もまた、羅城門で怪異に遭遇したうちのひとりであった。

村上天皇の御代、天皇が大事にしていた玄象という琵琶が盗難にあった。行方は杳として知れず、天皇をはじめとして樂を愛する公達は皆心を痛めた。無論、天皇の甥にあたる源博雅はその最たる人物であった。

ある夜、清涼殿で博雅がその玄象のことを考えていると、あたりに琵琶の音が響くのに気付いた。彼の耳が聞き紛うはずもない。玄象である。

「これは一体どういうことだ」

驚いた博雅が供の小童ひとり連れて音の源を辿っていくと、都の大路を南下し、朱雀門を過ぎ、やがて羅城門にまで行き着いた。音はその羅城門の二階から聞こえているらしい。一体何故それが遠く離れた清涼殿まで響いたのか……博雅はちらと訝しく思ったが、その琵琶の妙なる響きに、博雅はこの状況も忘れて酔いしれた。怯える小童を宥め、樂曲が終わるまで身じろぎもせず聞き入った。

最後の音の弦の震動が、やがて空気の中で減衰して消えるまで、博雅はただ待つていた。 やがて、口を開く。

「その琵琶を弾いておられるのはどなたですか？ その琵琶は先日今上の元から消え失せたものです」

深夜の羅城門に勿論燭など灯されているはずもない。小童の持つ灯りが唯一の光源である。博雅の前に立ち塞がる城門は日中見るよりもずっと巨大に、圧倒的な存在感を持つていた。怖気づいた小童が主人の顔を見上げ、はっと息を呑んだ。博雅の顔にはひとかけらの恐怖もなく、むしろ慈愛に満ちた穏やかな表情をしていたのだ。

分かり合える。博雅は確信していた。あれほどの樂を奏でられる人物なら、器を愛で、この手の中で慈しみたいと思う気持ちから分かれぬはずがない、と。

沈黙が場を支配することしばらく。羅城門の上から、するすると縄に結ばれた玄象が降ろされてきた。博雅は慌てて駆け寄る。

「御礼申し上げます！」

受け取った博雅はその玄象を内裏へ持ち帰った。ひとびとはもののけの奪った玄象を博雅朝臣が取り戻したと言い、その功績を讃えたという。

その博雅の吹いた笛、葉二つは今紫苑の元にある。元々はもののけの持ち物であったと伝えられるその笛は、いかなる笛の名手にあっても吹かれることを拒んだ。ただ例外は、もののけから直々に受け取ったと伝えられる博雅と、その体にあやかしの血を流す紫苑だけである。

繊細で、尚且つ場を圧巻する力のある音色 博雅のものは優美に、紫苑のものは哀愁を帯びて。そう表現する古老もいた。いずれにせよ美しいことには変わりなく、今上もまたその音を愛するひとりであった。この正月にも、若菜の行事で紫苑に葉二つを吹かせている。美しく装った公達はそれを聞きながら若菜を羹あじものにしていただき、一年の息災を願ったのだった。

紫苑が羅城門のもののけの噂を聞いたのは、ちょうどその行事の最中であつた。幾人かの殿上人から同じ話を聞かされ、調伏して欲しいと頼まれたのである。とにかく調べてみると返事をしたものの、あまり気が進まない。嫌な予感がした。それが同居人である桔梗に関わることなのか、それとも旧友、燐のことなのか、もしくは自分に関わることなのか……今の紫苑にはわからなかつた。

二

その日の夕刻、桔梗と燐は式神の小雪が作った若菜の羹を食べていた。

「これ、どこで摘んだの？」

不思議そうに首をかしげる燐に、桔梗はにこにここと笑つた。

「私と小雪さんが庭で摘んだんですよ」

「へえ」

燐はふと気付いたように手を止め、やがて微笑を浮かべた。

「ありがとう」

今の自分は、宮中に参内できない。宮中で行われる行事にも参加できない。だから、本来なら若菜の羹を食すこともできなかつた。それを彼女は気遣ってくれたのだろう。

「そつえばね」

燐は箸をすすめつつ、口を開いた。

「もうしばらくすれば、あがためしのもく 県召の除目がある」

「あがた……めし？」

「諸国の国司を任命する行事だよ。今回は、特別に僕のことにも任命してくれることになっている」

「国司に、ですか？」

「いや、違う」

燐は微笑んだ。

「いきなり以前と同じ式部大夫に復帰することはできないけれど、文章博士として大学寮に務めることができそうなんだ」

大学寮とは式部省下の教育機関であり、貴族の子弟に紀伝、明経、明法、算堂　すなわち中国歴史、漢文や儒教経典、律令、格式、そして数学を教授する場所である。文章博士は大学教官の最高位で、「史記」「漢書」などの史書や詩文を教え、天皇の侍読や、詩序、書序、願文、申文の作成なども行う。橘家が代々勤めてきたそれに、燐は復帰できるというのだ。

桔梗は胸の前で手を組み、声を弾ませた。

「良かったですね！」

「紫苑のお陰だよ」

それと、もう一人の「君」のね……。燐は口には出さず、そう付け加える。

「じゃあ」

ふと桔梗の表情に陰が差した。

「燐さん、ご自分のお屋敷に帰ってしまわれるんですか？」

「うーん、そのことなただけど」

燐は困ったように眉を寄せた。

「橘家は焼け落ちてしまっただし、新たな屋敷を建設するにも時間がかかる。どちらにせよ、もうしばらくここに居候させてもらうことになりそうなんだよ。……迷惑かな？」

「いいえ！」

桔梗は勢い良く首を左右に振った。細い銀髪がその動きにつられ、光の軌跡を描く。

「紫苑、燐さんが帰ってきてくれて本当に嬉しいみたいです」

紅潮した頬、真剣な眼差し。燐はそれをまぶしそうに目を細めて見遣った。

「私も、燐さんが来てくれて楽しいです！」

燐は桔梗に様々な知識を与え、また遊び相手にもなってやった。彼らはまるで兄妹のように、仲睦まじく過ごしている。

ふと、桔梗が遠くに視線を投げた。

「紫苑……今日も遅いのかな……」

その表情におんなを意識させる色香を感じ、燐ははっとした。そういえば、彼女は徐々に大人びてきている。あのもうひとりの「桔梗」の姿が成体のものだとするなら、彼女はいつかあのようならずりとした美女になるのだろう。表情だけはきつと「彼女」のように伶俐なものにはならないだろうが……。

紫苑は、「彼女」をどうするつもりなのだろう。

「さあ、正月は何かと行事で忙しいからねえ」

「……そうですね」

飼い主に構ってもらえない子猫のような表情になる彼女に、何故か燐までもが紫苑に早く帰って来いと言いたくなる。

空になった膳を、音もなく現れた式神たちが下げていった。

「さあ、今度は何をして遊ぼうか？」

燐はことさら明るい声を作った。

「うーん……」

気乗りのしない様子の桔梗に、さらに問い掛ける。

「それとも、楽器を奏でてみる？」

「楽器？」

「うん。紫苑が笛の名手だというのは、以前話したよね」

「はい」

「僕は、彼ほどじゃないけど琵琶を奏でられる」

「琵琶を？」

「そう。君は琴なんてどうか。きっとこの屋敷の中にはひとつくらいあるよね」

背後にかしこまっている小雪に尋ねると、彼女はうつすらと微笑んで頷いた。

「わたくしも多少、嗜んでおります」

「なら、ちょうどいいね」

「小雪さん、琴弾けるんだ！」

初耳だと驚く桔梗に、彼女は簡単に説明する。

「この屋敷に以前住んでいらした奥方さま　紫苑さまの義母に当たられる方が弾いておられたのを、お庭で聞いておりますうちに」
「あ……………」

桔梗は小さく息を呑んだ。紫苑の義父のことは知っている。彼を決して愛さなかった義父　御門蘇芳。だが、義母のことは聞いたことがなかった。一体どんな人だったのだろうか……………紫苑にとってはどういふ存在だったのだろうか……………。

「その人は今どうしているの…………？」
「……………」

小雪は口をつぐみ、救いを求めるように燐を見た。燐はため息をつき、困ったように髪を掻く。

「紫苑が言わないことを、僕が勝手に言ってしまった方がいいのかどうか、わからないけど……………」

燐はためらいがちに口を開いた。

「蘇芳が紫苑を引き取ってしばらく経った後、こころを病んで亡くなったんだよ」

「え……………」

「『人妖を我が子にすることはできない』　との言葉を遺して」

当時、都でも騒ぎになった。元々病弱で子供を産むことのできなかった彼女は、蘇芳が養子を迎えることには賛成であった。しかし、彼の連れ帰った赤子が半妖であったことには耐えられなかった。蘇芳が紫苑を愛さないのは、そういったことがあったせいかもしれない。

「そんなことがあったんですね……………」

眉を寄せてうつむいた桔梗は、しかしすぐに顔を上げる。燐はそれにやや遅れて、屋敷の前に止まる牛車の音に気がついた。紫苑のこととなると、相変わらず彼女の勘にはかなわない。

「紫苑だ！」

表情をぱつと明るいものに変えて駆け出す。部屋を飛び出す前に

小雪の方に振り向いて、

「今度、琴を教えてくださいね！」

そう、言葉を遣した。小雪は微笑んで頷く。

「……桔梗ちゃんは、今の話を聞いてどうするんだらうね」

燐のつぶやきを聞いた小雪は、静かに答えた。

「あの方は、紫苑さまの痛みを全て受け止めていらっしやいます。

まるで自分のことのように」

「全て……？」

「ええ。桔梗さまは、紫苑さまのことを一番に想っておられる……」

「……そう」

小雪は笑みを浮かべた。

「桔梗さまは、紫苑さまに惹かれていらっしやいますから」

「……そうだね」

燐も頷いた。それは彼女を見ていればすぐにわかる。わかっているのは、想われている当の本人、紫苑くらいのもだろう。

「でも、紫苑は？」

「……」

「いつまでも、桔梗ちゃんを子供扱いするわけにはいかないのにな」

廊下の向こうから、桔梗の弾んだ声と紫苑の落ち着いた受け答えが聞こえる。燐と小雪は複雑な笑みを交わし合った。

第二章

—

その日、宗方平一^{むなかた}はおそろおそろ羅城門を通過していた。付近にものけが出るとは聞いていたものの、日の沈む前であれば大丈夫であろうと考えたのである。彼は都で商店を営んでおり、今回は店

子のひとり連れて来て柵卸の為の買い付けに行った、その帰りであった。

宗方が馬に乗って城門をくぐり抜けようとした、そのとき。

「ねえ、何処に行くの？」

澄んだ女の声が彼を呼び止めた。

羅城門に出るもののけは、美しいおなごの姿をしているらしい以前聞いた噂が脳裏に蘇り、宗方は背筋を冷たいものが駆け下りるのを感じた。

「聞こえないの？ 聞こえているんでしょう？」

真つ直ぐ前を凝視しながら、宗方は馬を駆けさせた。少し遅れた店子が必死に追ってくる。

「ふふ……ふふふ……」

不意に耳元で笑い声がしたような気がして、宗方の体からどっと汗が噴き出した。

どうして、逃げるの？

この世のものとも思えぬ悲鳴が辺りに轟く。宗方は半ば目を瞑ったまま、都を目指して疾走した。店子の馬が主を失い、ふらふらと辺りを彷徨っているのを片目で捉えながら……。

二

宗方平一が命からがらものけから逃げてきたという噂は、あつという間に広がった。彼自身はそれ以来伏せてしまっている。店子は馬から落ちた形のまま炭になって発見された。見つけたものがそつと手を触れようとするとそれはばらばらと灰になり、どこへともなく風に飛ばされていつてしまったという。

それから十日ほど経った頃、都を更なる衝撃が襲った。先の陰陽

博士、御門蘇芳が羅城門で大怪我を負ったというのだ。詳細は定かにされなかったが、噂だけはすぐに広まる。どうやら羅城門のものけに返り討ちにされたらしいということが伝わってきて、都びとは恐れおののいた。

こうなればあの御方しかない、と紫苑の名が口に上るのも当然のことであろう。帝や摂政からも直々に調伏を依頼され、紫苑はそれを引き受けたのだが……。

「それにしても、よくわからん」

宮中から戻ってきた紫苑は、燐を自室に呼んだ。酒を酌み交わしつつ、紫苑は首を捻る。

「何故蘇芳がわざわざ羅城門に行ったのだ？ 理由がない」

彼は既に引退して長い。弟子はとっているが、積極的にものけの調伏に赴くことなどもう数年来なかったことだ。

「そうだね」

燐は行儀悪く文机に肘をついた。

「確かに不自然だ」

「一応あれでも義父だからな。見舞いに行こうとしたのだが断られた」

「そう」

燐は苦笑した。蘇芳は妙に気位の高い所があるから、自分の不恰好な姿など見せたくなかったのだろう。

「そのものけって、すごく強いのかな？」

「そうだろうな。蘇芳も並の術者ではない」

「厄介だね」

「ああ……」

紫苑は軽く眼を閉じた。

「このものけは火の属性を持つものだと考えられる。宗方の店子は炭になっていたしな」

「うん」

「私もまた、火。もしものけがあやかしから変化へんげしたものだとする

れば、純粹な力比べになる。そうすると危ういな」

「何故？」

「所詮私は半妖。あやかしの妖力とは比べものにならないからだ」
紫苑は淡々と言った。

「確かに私は陰陽道を使って妖力を増幅することができる。だが、たとえば四天王のような強力な種族には太刀打ちできないだろう」

「やってもみないのに」

「やりたくはないさ」

紫苑は顔の角度を微妙に変え、鼻筋が頬に濃い陰影を落とした。

「身近にその、最強のあやかしがいるのだからな」

「……………」

燐は口をつぐんだ。つい、忘れそうになる。桔梗があやかしだということ。水龍族だということ。もうひとつの人格のこと。

「ん？」

紫苑が不意に怪訝な表情をし、燐も遅れて顔を上げた。巻き上げられていた御簾をくぐり抜け、一羽の白い鳥が部屋の中に飛び込んでくる。嘴には何か紙をくわえていた。

「何、それ？」

「見覚えがある。蘇芳の式神だ」

紫苑の差し出した手に止まって、あいた方の手に封書を受け渡すと鳥は再び飛び去った。

「手紙だね」

燐は中身を覗き見ないように注意しながら、紫苑の表情を軽く観察する。封を開けて中を見た紫苑は、眉をきつく寄せた。

「何だこれは？ どういう意味だ？」

「……………何て書いてあるの？」

「見てもいいぞ」

紫苑は軽く燐に紙を放った。燐は拾い上げて眼を通す。書いてあったのはたったひとつのこと。「羅城門のものけには関わるな」。

「関わるなんて…………？」

「放っておけとでもいうのか？」

「強いからやめておけってことかなあ」

「やめてどうにかなるものでもないだろう」

紫苑は燐の手から紙を取り上げ、文面をまじまじと見つめた。しかし、そうしていても蘇芳の真意が浮かび上がってくるわけもない。「今回蘇芳がこんな行動をした理由も気になるが、帝の依頼を無下にする訳にはいかない」

帝には燐の復官について色々と後押ししてもらった恩もあるのだが、勿論燐の前で口にはしなかった。

「でも」

燐は真面目な顔で紫苑を見つめた。

「紫苑が危険な目に遭うかもしれないよ？」

「仕方あるまい。私の仕事だ」

「桔梗ちゃんは？ 彼女はどうするの？」

「……………」

しばらく黙り込んだ後、紫苑は静かに呟いた。

「………… 桔梗は、桔梗だ。彼女の道がある」

「それ、どつという意味？」

燐が軽く気色ばむ。

「自分とは関係ないって言いたいの？」

「違う」

紫苑の口調はあくまで穏やかだった。

「桔梗を私の人生に巻き込みたくはないのだ」

半妖として生まれ、奇妙な運命を辿るに違いない自分に巻き込まれてはいけない。

「…………でも」

燐の言葉から刺々しさが消え、代わりに躊躇うような響き加わった。

「君はもう巻き込まれてるよね。桔梗ちゃんのこと」

「それは、覚悟の上だったからな」

紫苑はかすかに微笑んだ。

「私は彼女を拾い、保護しようと決めた。だから私は、私の力が及ぶ限りそれを実行する。だが彼女が私の元を離れるのは自由だ。私が彼女を縛る道理などない」

「紫苑……」

寂しくないの？ その言葉が燐の唇をついて出そうになり、慌てて彼は口を閉じた。聞くまでもない。紫苑の微笑は寂しげな優しさを湛えているのだから。

冬の夜の冷えた空気を、たどたどしい、しかし柔らかな琴の音が渡る。

「誰の音だ？」

尋ねた紫苑に、燐は答えた。

「桔梗ちゃんだよ。最近猛練習してるんだ」

「ほっ」

紫苑は眼を細める。

「紫苑と音を合わせたいんだって」

「……そうか」

紫苑の指が懐に潜り、一本の笛を取り出した。燭に照らされてつやつやと輝く表面をそっと指先で撫で、紫苑は吹き口にその薄い唇を近づける。

まだ決して上手くはない琴を導く笛。琴もまたそれに応え、徐々に絡み合っていく。親が子供を見守るような、兄が妹の手を引いているような、それでいて恋人同士が睦んでいるような そんな響きに心を奪われながら、燐は静かに眼を閉じた。

三

「紫苑の音だったよね」

弾き終えた桔梗は、声を弾ませて振り返った。側に控える小雪は

頷き、微笑む。

「ちゃんと合わせられていましたよ」

「紫苑が上手いから」

桔梗の頬は紅潮している。

「私ももつと練習しなくちゃ」

「……………」

小雪は眼を細めて桔梗を見守る。春が来れば、自分の式神としての務めも一端終わる。来年の冬もまた、この少女に出会えるだろうか。どんな風に成長しているのだろうか。紫苑との仲も少しは進んでいるだろうか。

「小雪さん？」

主人の仏頂面を思い出してくすくすと笑う小雪に、桔梗は不思議そうな顔をする。

折しも帳が引き上げられ、燐が半身を覗かせた。

「随分上達したんじゃない？」

「そ、そんなことないです」

「そう？ 紫苑も褒めていたよ？」

「本当ですか?!」

これ以上ないというくらいの勢いで、桔梗が身を乗り出す。燐は笑って頷いた。

「僕らの話は終わったし、直接聞いてみたら？」

「はい！」

勢い良く立ち上がったものの、琴を片付けようと手を伸ばす。それを小雪がやんわりと止めた。

「片付けは私が致しますわ」

「でも」

「構いませんよ。上達したご褒美です」

「……………」

燐と小雪の顔を見比べる。ふたりが良く似た表情で微笑んでいることに少し疑問を感じながら、それでも暖かい表情に嫌な感じはし

ない。

結局桔梗はその場を小雪に任せ、紫苑の自室に向かった。

四

それから一刻ほど後。紫苑がふと気付くと、桔梗は床の上で眠ってしまった。苦笑して、寝具をかけてやる。

「先ほどまで、あんなにはしゃいでいたのにな」

家にある楽譜を見ながら色々と逸話などを話していたのだが……話が途切れた少しの間に、睡魔に引きずられてしまったらしい。

まるで子供だ。薄桃色に染まった頬を人差し指でつついてみるととても柔らかく、きめ細かな肌はすべすべとして、まるで瑞々しい果物のようだ。

分かっているさ、と紫苑は口に出さずにつぶやいた。桔梗の生は桔梗のもの。それでも自分はこんなに関わってしまった。本当は、関わる権利などなかったかもしれないのに。

「なあ……」

無邪気な寝顔に向かい、小さく囁く。

「いつか、お前もいなくなってしまうのだろうか」

父も母もいなかった。友人も燐を除けば他には誰もいない。彼を愛する女性ひとなどいない。最初からいなかった。最初から。

だから、寂しくなどなかった。

「う……」

紫苑の呼気が顔に当たってすぐだったのか、桔梗は小さくうめいて体をうごめかせた。その仕草が妙に艶っぽくて、紫苑は当惑する。

いつか、いなくなってしまうのに……知ってしまえば失うときに寂しくなるのに……。

桔梗の薄水色の瞳がぼんやりと開き、うつすらと涙を溜めたまま

微笑んだ。揺らめく燭の光の中、それはきらきらと水晶のように煌いている。紅も差さないのに赤くつやめく唇が、ゆっくりと囁いた。「……しおん」

それは愛しいものに呼びかける声音。重たげに持ち上げられた腕が紫苑の首に回り、抱き寄せる。紫苑は抗うことなく身を任せた。

重ねられた唇。一度目は「桔梗」では、二度目は。

動悸が耳の中でうるさいくらいに鳴り響く。それは常よりもずっと早く、大きくて、紫苑の頭をくらくらとさせた。

「桔梗」

掠れた声を耳にしたのかどうだろうか、桔梗は心地良さそうに微笑んだ。紫苑の胸がぎゅっと、まるで握りしめられたかのように苦しくなる。

「明日の夜……羅城門に行く」

目を閉じ、再び夢の中に戻った桔梗に、そう囁いた。

「きつと、無事に帰るから」

今はまだ、お前は私を必要としているはずだから……。

紫苑は腕の中の温もりを抱きしめる。それはまるで、孵化する卵を温める親鳥のようだった。

第三章

—

夢を見ていた。

部屋には女がひとり。それは、華やかで美しいあやかしだった。

赤く長い髪は真っ直ぐに床に流れ、伏せられた瞳も赤く宝石のように輝いている。そこは豪華な調度で飾られた一室だったが、壁には異様なほどの枚数の札が貼られていた。

このひとは誰なのだろう。桔梗は疑問に思いながら、ただ黙ってその光景を見つめる。

女は日がな一日何をするでもなく部屋に閉じこもっていた。もしかしたら出られないのかも知れない。しかし、一体何故だろう。

日が暮れた頃、帳を開けてひとりの男が姿を見せた。人間だ。どこかで見たような顔。だが、思い出すことはできない。

「つつがないか」

「……はい」

涼やかな男の声にこたえる女の声は冷たく、それでもその中に秘められているどこか待ち焦がれていたような響きを、桔梗は鋭く感じ取った。

男は女の向かいに腰を下ろし、何をするでもなく黙って彼女を見つめている。

「……」

しばらくそのまま沈黙が続いたが、やがてしびれをきらしたように女が口を開いた。

「何かご用ですか」

「いや？ 何もない」

「名乗りもせぬくせに態度ばかり大きい。見張りの者も貴方のことは見逃している様子」

女はその瞳の中に静かな炎を燃やした。

「高貴な身分の方なのかしら？ それなら」

「私を殺すか？」

男は鷹揚な笑みを浮かべる。

「いつ、そう言い出すかと思っていたよ」

「……」

女は顔を顰めた。

「殺されたいの？」

「さあ、どうだろう」

男は首をかしげる。

「私は死にたいとは思わない。だが君の放つ炎に焼き殺されるのなら」

床に触れている女の指先から順に視線でたどり、男の眼差しはやがて彼女の顔に固定された。

「それも悪くはないような気がしてしまふのだよ」

「馬鹿げている」

「そうだね」

男はあっさりと頷いた。翻した袖がゆったりと揺れる。

「……支配されることに、憧れがあるのかもしれない」

独り言にも似た口調でつぶやく。女は彼に興味を失ったように視線を他所へうつした。

「殺して欲しいのなら、いつでもそうして差し上げます」

男はくすくすと笑った。

「とはいえ、ただで殺されたくはないな」

「どうということ?」

「情熱の炎なら、いつでも焼き焦がされたいのだがね」

「……本当に馬鹿ね」

女は吐き捨てるように言う。

「人間なんて、愛せるわけがないでしょう?」

「あやかしなど愛せるわけがない」

男は女の言葉そのままの調子で言葉を返し、微笑んだ。

「私も君に出逢う前はそう思っていたよ」

「いい加減にして」

女は顔を背けた。華奢な肩が小刻みに震える。

「私から全てを奪ったのは人間。こんな風に閉じ込めているのも人間。憎みこそすれ、どうして愛せるというの?!」

「それなら」

男は目を細める。

「何故、私を殺さない?」

「……………」

女は仮面のような無表情を崩さない。

「ここでは妖力が封じられている？ それは本当か？ 君の種族は四天王なのだろうか？」

「……………」

「……………」

彼女の首がゆっくりと回り、その赤い視線が男を射た。

「では、私からも聞くわ」

「何だ？」

「どうして私を殺さないの？ 殺せないわけではないわね。同胞をあんなんにも沢山殺したのだから」

「……………」

男は軽く肩をすくめた。

「君が私の質問に答えてくれたなら、私も君に答えよう」

「何故私我先なの？」

「問うたのは私だからな」

「……………」

女は軽く紅唇を噛んだ。無意識なのだろうが、それはひどく妖艶な仕草だった。

「……………簡単なことよ」

再び顔を背ける。眼を伏せ、顔色を悟られまいとしているかのようだった。

「あなたを殺したら……………」

「殺したら？」

「殺してしまったら……………」

逡巡の後、彼女は消え入りそうな声で答えた。

「誰も……………私のところへなど、来てくれないもの……………」

「……………」

男の手が伸び、女の肩にそっと触れた。

「……………寂しいのか」

「最低」

女の声は細かく震えていた。

「あなたって最低。人間なんて最低」

「ああ、私は最低だ」

男の顔が歪んだ。

「こんな出会い方をしたくはなかった」

「……………」

「君の高貴な美しい魂を…………私のせいで苦しめている」

「そうよ」

女は顔をあげる。その紅の双玉からは、透明な滴が溢れていた。

「あなたのせいだわ」

「ああ、そうだ」

男は女を抱き寄せた。女はもう抵抗する気力もないのか、崩れるようにその胸の中に倒れ込む。

「わたしのせいだ」

「……………」

女は男の胸元に指を這わせた。

「どうしてあなたが泣くの？ 泣きたいのは私」

「…………君が泣くからだ」

「馬鹿」

「ああ、そうだな」

「…………いえ、違うわね」

女は自嘲したようだった。

「馬鹿は、私よ」

「あなたが誰だか、もう私には分かっているんだから。」

「…………名を」

男は囁いた。

「名を教えて欲しい」

「……………」

女はやがてぽつりと呟いた。

「蘭妃……」

二

御門の屋敷は、ひっそりと静まり返っていた。先ほどまで冷たい空気を鳴らしていた琴の音がいつの間にか途絶えていることに気付いて、燐は首を傾げる。

「おや、桔梗ちゃんは？」

彼の元へと白湯を運んできた小雪は、笑みを浮かべて答えた。

「琴の練習にお疲れになりました、お休み中です」

「そう」

燐はくすくすと笑った。

「子供はよく寝るなあ。昨夜は紫苑の部屋で眠ってしまったんだっけ」

「ええ」

「あのふたり、閨を共にしても動物の親子みたいにくっついて眠るだけなんだよね」

「微笑ましくうございます」

「……確かに」

閨の隙間だけではなく、ここらの隙間までも補い合っているような。

悪趣味とは知りながらこっそり覗き見たが、紫苑がまるで子供のようにな无邪気な顔をして眠っていたのが印象的だった。彼にあんな無防備な表情ができるとは思わなかった。

縁に面した中庭を見遣る。朝下りしていた霜が溶けたのか、椿の葉がつつすらと濡れている。それとも粉雪のせいだろうか。昼間から降り出したところを見ると、今夜は積もるかもしれない。

「紫苑、寒いだろうな」

つぶやいて、燐は軽く目を閉じる。

「今夜は遅くなられるとお聞きしました」

「うん。羅城門に行くって、焰さんを連れて行ったよ」

「そうですか」

焰とは神獣の朱雀が姿を変えたもので、紫苑が調伏のときに用いる式神だ。四聖獣は元来主を持たぬと言われるのにもかかわらず、朱雀は紫苑に従う。そして青龍の魂を宿すあやかし、桔梗は紫苑の元に……つまり四獣のうちの二獣が、彼の元に集っていることになるわけだ。彼はひととしてもあやかしとしても前代未聞の強大な力を手中にしている。恐らく本人は気付いていないのだろうが。

「……何か理由があるのかな」

考えようとして、やめる。

「まあ、僕にわかるはずもない……か」

どうでもいいことだと思った。何も問題はない。

今はまだ、

何も。

「どうか、桔梗ちゃんが……ふたりが、幸せに眠っていられますように」

焔はつぶやいて空へ手を伸ばす。手のひらに落ちた雪の欠片は、その冷たさを伝える前に溶け落ちていった。

三

女は暗がりの中に蹲っている。何か、覚えのある気配がここに近付いてきているのは分かっていった。ただ、それが何なのか分からない。あの男のものに似ているような、この身にまとうものに似ているような。その両方であるような、どちらでもないような。彼女には分からない。

気が付くと何もかもを失っていた。新しく手に入れたと思ったものも、本当は最初からこの手の内になどなかった。愛したと思ったものは幻影に過ぎなかった。

寂しかった。優しかった。苦しかった。美しかった。愛しかった。
蘭妃。

心地よい音が甦る。低く濡れた声で、何度も何度も。それが自分の名だったということすら気付かぬまま、唇に笑みが浮かんだ。その紅の瞳は狂気ゆえに澄み切っている。

蘭妃。

見開かれたままの瞳から一筋、涙が零れた。

第四章

—

紫苑の乗った牛車は、一路南を目指して進んでいる。牛を先導するのは焰。特に鞭をふるうわけでも手綱を引くわけでもないのだが、牛は脇見もせずに彼の後をついて歩いた。

肘をつき物思いに耽っていた紫苑の耳に、焰の声がした。物理的な音声ではなく、精神を介した呼びかけである。主従の関係にある陰陽師と式神にのみ可能な会話だ。

「紫苑さま」

「何だ」

「例のもののけの気配を感知致しました」

「わかった」

羅城門は近いということか、と紫苑は居住まいを正す。だが、焰の言葉はその後も続いた。

「……何か、おかしい」

「何？」

「この気配。覚えがあるような」

「……………」

紫苑は眉を顰める。

「特定できるか？」

「いいえ」

焰の歯切れの悪い口調に、紫苑はますます違和感を強めた。

「どういうことだ、はっきり言ってくれ」

「……………」

焰は少し逡巡した後に行った。

「このもののけ…………紫苑さまと良く似た気配がするのです」

「……………」

紫苑は虚を衝かれて黙り込む。自分と似た気配のものけ…

…？ 心当たりなどあるわけがないが、いい気はしない。

「わかった」

言葉少なに答える他、今の紫苑にできることはなかった。

二

桔梗が眼を覚ますと、既に夕闇があたり立ち込めていた。

「あれ…………？」

何だか悲しい夢を見ていたような気がする。瞼をこすると、指が僅かに濡れていた。

「お目覚めですか？」

小雪が音もなく現れ、尋ねる。桔梗は体を起こして頷いた。

「燐さんは？」

「御門蘇芳さまのお屋敷に参られました」

「え？」

不思議そうに瞬く彼女に、小雪は説明する。

「先ほど蘇芳さまから使者がいらっしゃって、それに応じて出かけられたのです」

「そうなんだ」

桔梗は立ち上がるうとしてぐらりとふらついた。

「桔梗さま？」

小雪が彼女の体を支える。

「どうなさいました？ ご気分が優れないのですか？」

「ううん、大丈夫……あつ」

小さく叫んで桔梗は眼を閉じた。

「なに……これ……?!」

頭の中に流れ込んでくる「力」。それは彼女の小さな体を破裂させんばかりの勢いで渦を巻き、洪水のように溢れ出す。

悲哀。孤独。怒り。恐れ。恋慕。悔悟。愛情。狂気。狂気。狂気

様々な感情がない交ぜになって、彼女の内部を荒れ狂う。桔梗

は悲鳴を上げた。

「桔梗さま！」

小雪は彼女の体を揺さぶろうとして、ふと気がついた。桔梗の肌の表面がうす青く光っている。それはどこか龍の鱗にも似た光沢を放ち。

「……あつ」

触れている場所から感じる妖力の奔流に、小雪は耐え切れずに手を離れた。桔梗は膝を折る。

「く……うっ！」

「桔梗……さま」

ざあ、と肌が粟立つような威圧感。小雪は息を呑んだ。

ゆらり、と立ち上がったのは既に桔梗ではなかった。否、成人

した体を持つそれは「桔梗」であって桔梗でない存在。

「驚かせたな」

「桔梗」は背を伸ばして立ち、小雪を見下ろして嫣然と微笑んだ。

「い、いつたい、どういう……」

「紫苑から話には聞いていたのではないのか？」

「え……あ、はい」

小雪は頷く。桔梗と体を共有するもうひとつの人格の存在なら、

確かに紫苑から聞かされていた。

滅びたはずの四天王の一、水龍族の末裔。最強のあやかし。水の殺戮者。青龍の魂を宿す者。

「けれど、何故……」

「あのもののけ」

「桔梗」は低い声で告げた。

「強い思念を放っている。私のように強い妖力を持つものは、引き摺り込まれてしまうほどにな。桔梗は、それに耐えられぬ」

「思念を……？」

「彼女の過去を見た」

「桔梗」は痛ましげに目を伏せる。

「彼女の正体……そして狂気の原因を、私は知った」

「かのじょ？」

「羅城門へ行く」

小雪の問いには何ひとつ答えぬまま、「桔梗」はきっぱりと言った。

「紫苑を止めなければ」

三

燐は蘇芳と相対しながらもどこか落ち着かなかった。紫苑の義父とはいえ、蘇芳と燐とは今までほとんど交流などない。一体彼が何の理由で自分を呼んだのか、見当も付かなかった。

「突然お呼び立てして、誠に申し訳ない」

蘇芳はまだ床に就いたままであった。燐は傍らに腰を下ろし、深々と頭を下げる。

「この度は災難でございました。心よりお見舞い申し上げます」

「そのことなのだが」

蘇芳は燐を見つめた。燐はその視線をしっかりと受け止める。

「紫苑は今、どうしているだろうか」

「今晚、羅城門に向かいました」

「……そうか」

蘇芳は力なく頷く。

「あやつならそうするであろうな。昔から私の言うことなど聞く男ではなかった……」

「ただ行くなとおっしゃられましても、理由を明らかにされないのでは紫苑とて困惑致しましょう」

燐はできる限り丁寧な言葉で、紫苑を弁護しようとする。蘇芳にもその意図が伝わったのだろう、じわりと口の端に苦笑が浮かんだ。

「明らかにできぬ理由があるのだ」

「わたくしにも、ですか？」

「いや……、今更隠す理由もない」

蘇芳はため息をついた。

「あの、羅城門に出るものだけは」

蘇芳の喉がごくりと音を立てた。

「あれの、母親なのだ」

燐は息を呑む。

「……そ、それは」

搾り出した声は掠れていた。

「まことですか」

「嘘など言つて何になるうか」

蘇芳はため息混じりに答える。燐の額に汗がにじんだ。

「……それで、紫苑にあのように」

「羅城門のものの中には関わるな」と。

もしあのものだけを調伏すれば、知らずとはいえ紫苑は母を殺したことになる。記憶にもないまだ見ぬ母を、その手に掛けることになるのだ。

「貴方は」

自然と詰問するような口調になった。

「彼の両親についてご存知なのですね」

蘇芳はしぶしぶといった様子でうなずいた。

「……知っている」

「一体いつまで隠し通すおつもりですか」

「いつまででもだ」

蘇芳は即答した。

「……隠されると詮索したくなるのが慣わしでは？」

「詮索しても良いことはない。誰にとっても、な」

「紫苑にとつても、ですか」

「ああ。むしろあやつが一番苦しむだろう」

「……」

そう言われると、燐にはもうそれ以上の追求はできなかった。紫苑を苦しめてまで好奇心を満たす必要など、どこにもない。

「紫苑はあのもののけを調伏するつもりなのか」

「……恐らくは」

「……つくづく不幸なおんなだな、蘭妃は」

蘇芳は独り言のようにつぶやいた。らんひ　それが彼女の名なのだろう。

のだろう。

「今からでも間に合うかもしれない」

燐は身を乗り出した。

「貴方から言ってやって下さい。そのもののけは、元は母親だったのだと。調伏してはならないと」

「それはそれで」

蘇芳は静かに言葉を返す。

「残酷なことではないか」

「……」

燐は言葉に詰まった。

「数多くの人を傷付けてきたもののけが己の母であると……そんな事実を知らせる必要がどこにある」

「……しかし」

「母殺しの事実とて、紫苑が知らなければ……己が手に掛けたのが母であったと、知らなければ良いだけの話だ」

「……」

それは違う。反論したいのに、言葉が出てこない。燐は歯がゆい気持ちで口を引き結んだ。

「あのもののけは強力だ。だが、紫苑ならばそうやすやすと負けることはあるまい」

「……」

燐のとがめるような眼差しに気が引けたのか、蘇芳は言い訳がましく言葉を続けた。

「勿論、本当は止めるつもりだった。そのつもりで橋どのお呼びしたのだから　しかし、もう遅い」

蘇芳は左右に首を振った。

「こうなってしまった以上、紫苑が真相を知ることなく無事調伏しおおせることを祈るのみだ……」

燐の胸をやるせなさが襲う。

「しかし、どうして彼の母親がもののけに……」

「……」

蘇芳は黙って視線を外に向け、燐は彼に答えるつもりがないことを悟った。

簾の向こうでは雪が降り積もっていた。燐の乗ってきた牛車の轍も既に埋もれているかもしれない。雪の降り積もる音すら聞こえそ
うな、静かな夕闇。闇に侵されまいと一際鮮やかに映える夕焼けが、
不吉なまでの輝きを放っていた。

赤く聳^{そび}える羅城門。赤紫色の夕闇を背後に従えて、禍々しい妖気を放っている。紫苑はそれを見上げ、唾を飲み込んだ。と同時に、かすかな違和感が腹部からせり上がってくる。

「紫苑さま」

焰が張り詰めた声で名を呼ぶ。紫苑はうなずいた。闇の一部が蠕^{くも}いている。それはおそらく、この強い妖気に惹かれた下級のもののけだろう。意志を持たず、ただ妖力に反応し、操られるだけの存在。

紫苑は口中で術を唱えた。澱んでいた空気の中に凜とした紫苑の力が張り巡らされていく。焰が朱雀の姿へと変化^{へんげ}した。

「……………」

紫苑が結びの言葉を唱えるのと同時に、どす黒い瘴気の塊が彼の元へと突進した。紫苑はいつそ緩慢にも見える動作で、右手の人差し指と中指を突き出す。唇が、静かに動いた。彼の指先とものけたちを結ぶ一本の直線上に炎が湧き出る。それは物理的なものではなく、術による清浄の炎。それはものけたちを飲み込み、彼らは悲鳴も残さず塵^{あぐた}と消えた。

「私の力量を測った……………」という訳か」

紫苑はつぶやく。このような下級のもののけが羅城門に巢食^{すく}っているとは聞いていない。それなのに、今こうして闇が集っている。まるで、紫苑の到着を待ち伏せていたかのように……………」

「少しは手応えのある者が来たようね？」

細く、透き通るように艶のある声。

紫苑ははつと顔を上げた。羅城門の二階にあるひさしの上。闇の中に浮かび上がるようにして、その女は座っていた。紅蓮の髪。紅玉の瞳。白い肌。弧を描く赤い唇。身に纏う衣は古いものらしくところどころ解れてはいるが、驚くほど仕立ての良いものであった。都の中でも五本の指に入る豪商でしか取り扱わぬような高価な綾織

に、金糸・銀糸の縫い取り。まるで皇女のようにだった。

紫苑の胸のうちに疑念が広がる。この女は一体誰なのだろう

……。

女は彼の様子には無頓着に、くんくんと鼻を鳴らした。まるで獣のような所作だった。

「この匂い……」

かすかなつぶやきが、風に乗って紫苑の元に届く。

「あの男のものと似ている」

女は柳眉を顰めた。

「だけど、違う。もっと懐かしいものが混じっている……」

冷たい風が吹き、女の髪を乱した。

「お前」

鮮やかな紅唇が言葉を紡ぐ。

「何者だ？」

「……………」

紫苑は黙って佇んでいた。

「お前の匂いは」

女は薄く眼を眇める。

「ひとつのものでもあり、あやかしのものでもある」

女は冷静で、とてももののけと化したものとは思えない。しかし

次の瞬間、彼女の瞳にはゆらりと狂気が浮かんだ。

「そして、あの男の気配がする……」

「あの男とは誰のことだ」

「あの……おとこ」

煉獄の色をした視線は、紫苑を焼き尽くそうとするかのように強い。

「私の一族を滅ぼし、私を捕らえ」

炎の属性を持つあやかしで最近滅ぼされた一族といえは、鳳凰族が真っ先に浮かぶ。彼らは四天王の一であり、妖力も強大だ。彼女の持つ条件には見事に当てはまる。

女はゆっくりと立ち上がった。擦り切れた衣の裾がはためき、白く細い脛があらわになる。

「私を閉じ込め、私に全てを与え」

びりびりと空気を震わせる妖気に、朱雀は警戒の声を上げた。

「全てを、奪った！」

「?!」

女が素早く跳躍し、紫苑はなすすべもなくその場に薙ぎ倒された。背中をしたたかうちつけ、息が止まった。乗り上げた女の膝が、彼の鳩尾を圧する。

「っは……」

間近で見つめた女の瞳は、何故かひどく優しい。

「ここはひどく寂しいわ」

甘やかな口調はまるで少女のようですらある。

「誰も来てくれないの。たまに誰かが通りかかっても、皆逃げてしまっ」

「だから……焼き尽くすのか」

「そうよ。人間は嫌いだもの」

女は透き通った表情で笑った。紫苑は静かに彼女を見上げる。

「それなのに寂しいとは、矛盾しているな。あやかしに来て欲しいのか」

「違う。だって……私は裏切り者だから」

女は紫苑の肩に手を置いたままふうつと背中を逸らせた。瞳がどこか遠くを眺める。

「私はあの日からずっと……待ち続けるだけ」

「……あの日、とは」

「私が捕らえられた日よ」

「……」

「力を封じられ、飼い殺しの身……。訪ねて来るのはあの男だけだった」

「……」

「私は馬鹿だから」

不意に紫苑は気付いた。女は泣いている。彼の胸倉を掴む手も細かく震えていた。

「ひとりになるのが嫌で、あの男を殺せなかった」

「……………」

「私の一族を滅ぼした仇なのに……………」

愛してしまった。

「待つて待つて、毎日毎日待つて待つて待つて……………」

女の顔がゆっくりと紫苑に近づく。

「だけど 来なくなつた」

「何故だ」

「死んだのよ」

女はぼつりと言った。

「突然、死んでしまったの」

「貴女は」

紫苑は女の頬にそつと指先を触れさせた。濡れている。

「今も待つているのか」

もう決して訪れることのないその男を……………。

「ずっとずっと、待つているのか」

「……………」

女は何度か瞬きを繰り返した。瞳の中に、徐々に狂気の色が甦つてくる。

「ふふ」

にっとな唇がつり上がった。

「うふふふふ」

不意に悪寒が走り、紫苑は女を押し退ける。彼女は軽々と飛びのき、紫苑は急いで体勢を立て直した。女の体からはゆらゆらと炎が立ち上っている。

「貴方のその匂い……………気に入らないわ」

「……………」

紫苑は慌てて飛びのいた。彼の居た場所を紅蓮の炎が焼き尽くす。「私を殺せると思うのならやってみるがいい」

女は嫣然と微笑んだ。

「我が名は鳳凰族最後の姫御子 蘭妃」

紫苑は印を結ぶ。頭上の朱雀が旋回した。女は不思議そうにそれを見上げる。

「あの神鳥を手懐けるとは」

女の笑みが深まる。

「面白い」

女の片腕を炎がうねり、やがてそれは一匹の巨大な蛇となって鎌首をもたげた。同時に紫苑は印を完成させ、宝剣をすらりと抜き放つ。

矢のように走る炎の蛇と、翼を広げて迎え撃つ朱雀、それがぶつかる寸前。

「そこまでだ」

水の壁が大地から噴き出した。

女と紫苑は慌てて飛び下がり、朱雀は上空へ舞い上がる。蛇はそのまま水中に消えた。ふたりはゆっくりと視線を声の方角に向け、

「『桔梗』」

紫苑は茫然と呟いた。

二

「水龍族？ 鳳凰族と同時期に滅ぼされたはずではなかったの」

蘭妃が眉を顰める。

「桔梗」は一步一步と歩みを進め、紫苑を背中で庇うようにして立つ。

「私は特別な御子だからな。ずっと、時を止めていたのだ」
「特別な？」

蘭妃は嘲笑した。

「御子というなら私も御子よ。どうして貴方だけが特別な」
「お前の役割は既に終わった」

「桔梗」はつぶやく。

「特別な、役割だった」

「……どうということだ、『桔梗』」
「紫苑」

「桔梗」は振り向くことなく言う。視線は蘭妃に固定されていた。

「この場は私に任せて欲しい」
「何？」

「何も聞くな。蘇芳の言葉を守るのだと思えばいい」

「頭ごなしに命令されるのは嫌いだ。それが蘇芳であっても、たとえお前であつてもな」

紫苑はぶっきらぼうに答える。「桔梗」は少し困ったようだった。

「そう言わず、ここは退いてくれないか……」

「理由を言え。納得したら私は帰る」

「できれば、言いたくは……」

「そこをどいて！」

蘭妃は「桔梗」を睨みつける。

「私、その男が気に食わないの」

「何故？」

「だって、あの男と似た匂いがするんだもの」

「あの男とは誰だ？」

「……」
蘭妃は子供じみた表情で唇を噛んだ。

「子供の父親、か」

「……！！！」

蘭妃がぱつと顔を上げた。

「何を言うの?!」

「お前の思念が強過ぎたので」

「桔梗」は淡々と告げる。

「記憶が視えた」

「ちよつと待て」

紫苑はふと声を上げた。

「貴女の言うあの男というのは……人間なのだろう」

「……………」

「子供？」

声が震えるのを自覚する。「桔梗」ははつと息を呑んだ。

「まさか……………」

蘇芳が紫苑を止めた理由。もののけと紫苑の気配が似ていた理由。紫苑にあの男とやらの匂いがした理由。そして女が懐かしいと言った理由。全ての欠片が、一つに組み合わさる。

「貴女が」

紫苑は愕然と蘭妃を見つめた。狂気をまとう美しいもののけは何も理解していないのか、ただただ紫苑を睨みつけている。

「貴女が私の母親なのか……………」

「紫苑！」

「桔梗」が声を上げた。

蘭妃は一瞬の隙に「桔梗」の頭上を飛び越え、紫苑の目前に迫る。

「貴女が、私の」

目の前に広がる紅い、紅い……。

「紫苑!!」

鈍い衝撃が、彼の全身を襲った。

第六章

その小さな命を手放したのは、まだ自らの腹部から出だして一月ほどしか経たぬ頃であった。手元で育てることなど到底叶わないと悟っていた蘭妃も、別れの前日は夜通し子供の顔を見つめていた。

子供にはまだ名前がない。名をつければ情が移る。そして業も。蘭妃はただじつと見つめていた。虫の知らせか、ぐずる赤子を胸に抱いて揺すぶる。瞳の色は禍々しい禁忌の証と言われるが、こうしてみると紫水晶のように美しい。

「ごめんね……」

蘭妃はつぶやいた。この夜を限り、彼女は都を離れる。遠い大和の吉野山。その地に力を封じられ、生きていくことになる。身の回りのものは、あの男が計らうと約束してくれた。また男は、時の陰陽博士、御門蘇芳に彼女の身の回りの世話をする式神を一体、用意させた。それは無条件に彼女のいう事を聞くわけではないが、大抵の用なら足してくれるだろう。

蘭妃にはもう何も望みはない。 どうでもいい。

「必ず訪ねていく」

男はそう言った。

「子供のことも必ず知らせる。いずれ時が来たら引き会わせることもできよう」

「……ええ」

蘭妃は芒陽とした瞳で頷いた。

「どうした？」

不思議そうな顔で見つめる男に、彼女は寂しい微笑を浮かべる。

「いえ、何も……」

彼女自身にも分らない。この虚脱感。無力感。一族を人間の手によって滅ぼされたときよりもずっと胸が塞がっていた。 何故だろう。

「子供のことは任せてくれ」

男は力の入らない蘭妃の腕から赤子を抱きとった。愛しげに眼を細めてあやす。

「悪いようにはしない。ちゃんと目を掛ける」

「彼は……」

蘭妃は呟いた。

「生きていけるのですか」

「何？」

「この都で」

自らの居室を見回す。縦横無尽に張り巡らされた結界。彼女を外界と隔離するための呪札。決して相容れようとしない、ひととあやかし。そんな世界で半妖の子供はどうやって生きていくというのだろう。髪は黒。肌にもあやかし特有の文様はない。それでも、瞳だけが……。

「綺麗な瞳だ」

男はつぶやいた。赤子はきゅきゅと喜んで笑う。それを見つめる彼の表情は、切なげだった。

「しあわせにしてやりたい」

「……」

蘭妃の目から涙がこぼれた。身を引き裂かれるような痛み。彼女は愛していた。この男を。この男の子供を。彼女の子供を。

「……お待ちしております」

蘭妃は塞がった声でかろうじて囁いた。

「なに？」

聞き返す男に、

「あなたを。待っています」

「……」

「いつかこの子に再び会える日を……」

おとうさま、おかあさま、ごめんなさい。父母を殺した人間を愛し、子供までもうけた。決して許してはもらえないだろう。蘭妃は泣き伏した。それでも……。

驚いた赤ん坊が泣き声を上げる。男は慌ててそれをあやしながら、蘭妃の腕にそつと彼を預けた。彼女は何か嗚咽を飲み込み、彼を優しく抱く。

「あなたに会うためなら」

蘭妃は囁いた。

「何だつてするわ。何にだつてなる」

そう　何にだつて。

二

紫苑の胸元に女の手が伸びる。「桔梗」は目をぎゅっと閉じた。

間に合わない。紫苑は殺される……！

「母上」

ぼつり、と。紫苑はつぶやいた。

「桔梗」はおそろおそろ眼を開ける。そこに広がっていた光景は、信じがたいものだった。

「蘭妃！」

自分でも信じられないほどの大声を出して駆け寄る。蘭妃は片手を紫苑の肩に触れさせていた。もう片手は　自らの腹に。

「出てきなさい……」

蘭妃の小さな、しかしはっきりとしたつぶやき。

「この子は……わたしの」

絶叫を上げながら、ずるずると引きずり出される異形の鳥。陰摩おんま羅鬼らきだ。鶴のような姿形、頭部は人の顔をしている。その口からは先の細かく分かれた舌が伸び、目はまるで炎のように揺れていた。

「あなたが、わたしの」

蘭妃はおびただしい量の血を流しながら、まるでそれを感じさせ

ない優しい表情で微笑んだ。

「わたしとあのひとの……こどもなのね」

あの男が死んだのは、紫苑が生まれて八年後。それ以来彼女に運ばれる食物は途絶え、蘭妃は飢えた。結界に阻まれて外に出ることも叶わず、彼女はそのまま死を迎えた。その時。

「わたしの屍骸から、この鳥が生まれた」

高い鳴き声。

「わたしの無念を……背負って」

その陰摩羅鬼を体から引き離せばどうなるか。紫苑は気付いて慄然とする。

「は、母上」

「しおん」

蘭妃は紫苑を見つめて微笑んだ。

「しおん、というのよね。たしか、彼はそう教えてくれたわ」

約束通り、あの男は何度となく吉野の山まで来てくれた。そして、紫苑の様子をそれとなく教えてくれていた……。

「そうです」

紫苑は震えながらも激しくうなずいた。

「私は、紫苑です」

「……気付くことができて、良かった」

蘭妃は大きく息をつく。

「あなたをこの手で殺すところだった……。いえ」

視線をちらりと「桔梗」に向けて、

「あの子に殺されるところだったのかしら？」

「陰摩羅鬼に理性を食い尽くされかけていたのか」

「桔梗」の問いに蘭妃は苦笑する。

「本来の目的を忘れるところだったわ。せつかく結界を出ることができたのにな……」

咳き込み、血を吐く。紫苑の胸元が赤く染まった。陰摩羅鬼は蘭妃の手の中にもがいている。徐々にその力は弱っていた。それにと

もなつて、蘭妃の呼吸も荒くなる。

「しおん」

蘭妃の手が紫苑の頬を撫でた。

「聞きたいことがあるの」

「……………何です」

蘭妃は穏やかに微笑んだ。狂気のない、澄んだ赤い瞳。

「あなたは、ひと？ それとも、あやかし？」

「……………」

紫苑は虚を衝かれたように黙り込んだ。

「あなたはどちら側で生きていくのかしら」

「……………」

紫苑は眼を伏せて逡巡し、やがて母の顔をじっと見つめた。

「私はどちらでもない。どちらにもなれない」

「……………」

「けれど」

紫苑は蘭妃の体をそっと包んだ。母の体は暖かく、か細かった。

「私は、いのちだ」

「……………」

「貴方から生まれた」

紫苑の頬に涙が伝う。

「いのちだ」

蘭妃は紫苑を抱きしめた。

「……………ありがとう」

陰摩羅鬼が炎に包まれた。蘭妃の体が徐々に崩れ始める。

「紫苑……………」

耳元で囁かれる優しい声 母の声。紫苑は全て聞き逃すまいと、

歯を食いしばって全神経を集中させた。

「しあわせになりなさい」

愛する者から離れては駄目。手放しては駄目。

「誰が許さなくても」

母の体はさらさらと音を立て、灰に変わっていく。陰摩羅鬼が断末魔の悲鳴を上げた。だが、蘭妃の声はあくまで優しく。
「必ず、守りなさい」

愛する者を。あなた自身を。

蘭妃の脳裏に、失った者たちが通り過ぎた。父母、兄弟、一族の者たち……そして、愛してしまったあの男。我が子。

違う。蘭妃は眼を開けて紫苑の顔を見た。わたしから生まれたいのち。

「しおん」

一陣の風が吹きすぎた。思いのほか強いそれに目を閉じ、そして開けると。そこにはもう、何も無い。灰のひとかけらすら、残されてはいなかった。

「はは……うえ……」

紫苑はがくりと膝を折り、地面に座り込む。不思議と、涙は出なかった。

三

どれくらいの時が経っただろうか。ただ茫然と膝をついていた紫苑の耳に、声が届いた。

「すまなかった」

「……………」

振り向くと、「桔梗」が力なく俯いていた。紫苑は不審そうに聞き返す。

「……何のことだ？」

「本当は、止めたかった」

「桔梗」は顔を上げない。

「紫苑を止めたかった」

ひとを喰らうもののけに成り下がった母親の姿など、見せたくない

かった。母親の死など、見届けさせたくはなかった。

「それでお前は」

紫苑は力なく苦笑する。

「私に帰れと言ったのか……」

きつと蘇芳も同じことを思ったのだろう。あの男にも、彼を氣遣うところが少しはあるらしい。

「……………」

「『桔梗』」

紫苑は立ち上がった。服についた砂を払い、胸元に残る血痕を見つめる。それが、母の遺した唯一のものだった。

「私は、ここにきて良かった」

「……」

「桔梗」が弾かれたように顔を上げた。紫苑はその目の前に歩みを進める。

「母上に会えて……良かった」

彼は、微笑んでいた。

「母上は確かにものけだった。私に 子供に会うこと、その妄執のために陰摩羅鬼を体内に生み出し、ひとを喰らった。それは事実だ。だが」

「桔梗」はその細い手をそつと彼の頬に当てる。夜闇の中で、彼の表情は良く見えない。だが、確かに彼は泣いていた。微笑みながら、泣いていた。

「それでも……私は嬉しいのだ。母上に会えたことが、嬉しい」

自分勝手だと思う。母の為に死した者たちには顔向けができない。

それでも……。

「愛されていたことが 嬉しいのだ」

父親が誰なのか、未だに分からない。だが、それでも……自分が誰にも望まれぬ生であったのだとは思わない。

「私は、愛されたいのちだったのだ」

ひとにもあやかしにもなれぬ歪な生命であっても、両親には愛さ

れていた。祝福されていた。それで十分だ。

「紫苑……」

「だから」

紫苑は「桔梗」をそっと抱きしめた。

「私は……」

悲しくなどない。その言葉は涙で濡れている。「桔梗」はその背を優しく抱いた。そうしながらも目を閉じて、もうひとりの自分に意識を譲り渡す準備をする。

ふたつの精神が体の中で行き過ぎるとき、「彼女」はもう一人の自分へと告げた　もうすぐだ、と。

水龍の巻

第一章

—

行きつ戻りつしながらも確実に気温は上昇し、きんと澄み渡っていた空気がやがて穏やかな匂いを漂わせるようになった。

春である。

桔梗は腰まで長く伸びた銀髪を指先で弄りながら、縁に腰掛けて中庭を見ていた。咲き零れる花々は色鮮やかで、桔梗の元にまでその若々しい息吹を吹きかけてくるようだった。それをすう、と吸い込む。

「桔梗さま」

背後から掛けられた声に振り向くと、それは季節が変わって小雪の代わりに現れた式神だった。紫苑に頼んで、彼女に名を付けさせてもらった。桔梗は嬉しそうにその名を呼ぶ。

「若菜さん」

薄緑の衣に身を包み、春の陽光のような微笑を浮かべる若菜。名が体を表すのか、この外観であったからこそこの名が付いたのか……。

「お食事の支度ができました。お出で下さいませ」

「わかりました」

おっとりとした気性の若葉にそう告げられ、桔梗は勢い良く立ち上がる。その身長はほんの三ヶ月前に比べ、随分と伸びていた。

「こちらへ」

先導しようとした若菜がぴたりと歩みを止めた。続いて桔梗も庭に潜む気配に気付く。

「だ、誰？」

四つの眼が見守る中、茂みがざわざわと鳴った。どこか懐かしいような気配を感じて、桔梗の胸がざわめく。

「桔梗さま！」

若菜が彼女の手を引こうとしたとき、それは茂みから飛び出した。

二

「ねえ、紫苑」

「何だ」

桔梗を待つ、ふたりの男。食事を前にして黙然と座っている紫苑に、燐は声を掛けた。

「桔梗ちゃん、また大きくなったね」

「そうか？」

「そうだよ。何とぼけてるんだい」

「とぼけてなどいないが」

相変わらずの無表情を保っているが、彼の視線は不自然に宙を彷徨っている。

「君が」

燐はすらりとした人差し指で紫苑の鼻先を押すような動作をした。

「気付かないはずないだろう？ 毎日あれだけ一緒にいるんだから」

「……………」

「ね？」

「……………そうかもな」

「僕は良く知らないのだけど」

燐は考えるように眼差しを天井に向けた。

「水龍族は、成人するとき何か特別なことはあるの？」

「いや……………」

あやかしには幼体から成体へと変態を遂げる種族がある。紫苑の

母の出自である鳳凰族には、そのような言伝えはない。だが、水龍族は……。

「あの種族の生態は、実のところ良く分かっていないんだ」

冷酷無残な水の殺戮者。決してひとを近付けず、孤高の王者として水属のあやかしに君臨していた。

ある日、ひとりの少女を残して滅亡するまでは。

「ふうん……」

燐は顔を横に向けて胡坐をかいた膝に肘をついた。顎を指先でゆつくりと撫でる。

「そういえば、水龍って本当にひとり残らず絶滅したのかな」

「さあな」

燐の独り言に生返事を返した紫苑は、不意に妖気が膨らむのを感じ表情を変えた。

「どうしたの？」

「何かが居る」

つぶやいて立ち上がる。ひとつの気配は桔梗のもの。それともうひとつ それは「桔梗」ほどではないが、強大な力を持つ者の気配だった。

三

「あなた、誰？」

桔梗は用心深く尋ねる。

彼女の目の前に立つ男。それは彼女の外見と良く似ていた。長い銀髪を頭頂部で一纏めにくくり、毛先を後頭部に垂らしている。額には彼女と同じ文様。眼の色は彼女の水晶色よりも濃い、藍色をしていた。

「御子……」

低い声でつぶやく。

「ご無事で……！」

「みこ？」

「桔梗！ 大丈夫か?!」

縁を駆ける足音がして、桔梗はぱつと振り向いた。

「紫苑！」

安堵したようにその腕にしがみつく。

「誰だ?!」

庭に立つ男は語気も鋭く、紫苑に尋ねた。

「お前こそ誰だ」

厳しさを増す眼光にも怯まず、紫苑は続ける。

「ひとの家屋に断りもなく足を踏み入れたのだ。礼儀を弁えるべきはそちらであろう」

「……………」

男はしばらく黙っていたが、やがてふつと息を吐いた。

「我が名は王^{みずのえ}」

その後が続けられた言葉に、紫苑は息を呑む。

「その御子と同じ……、水龍族だ」

「……………」

桔梗は紫苑の腕の影に隠れたまま顔を覗かせ、王を見つめる。彼の年の頃は紫苑と同じか、少し年若に見えた。日焼けした肌と精悍な顔立ち。その気配には懐かしいものを感じるが、見覚えはない。

「御子。俺を覚えていないのか？」

王は彼女の様子を見て表情を陰らせた。

「ごめんなさい……………」

「彼女には私に出会うまでの記憶がないのだ」

紫苑はそつと彼女の頭を撫でた。

「お前……………」

ふたりの様子を見ていた王は、剣呑な表情を紫苑に向ける。

「半妖だな？」

「……………」

「何者だ。どうして御子の側に居る」

「私は」

紫苑は息を継いだ。

「彼女を拾った。去年の秋のことだ」

「……………」

「記憶を失い、行き場のなかった彼女を手元に置くことを決めた。桔梗という名は私がつけた」

「御子には名などない」

「そうか」

紫苑は桔梗を見下ろした。

「桔梗がそうと認めるのなら、名くらいいつでも捨てれば良いが…

…」

「わ、私の名前は」

桔梗の声に、王はびくりと肩を震わせた。

「桔梗です」

「御子」

悲しげな瞳に心が揺さぶられる。だが、桔梗は断じて譲れなかった。

「私の名前は、桔梗です」

「……………」

紫苑の瞳には、何とも形容のしがたい複雑な色が渦巻いていた。

「少し話がしたい」

王が口を切る。

「紫苑とやら。少し席を外してくれないか」

「……………」

桔梗の手がぎゅっと彼の袖を掴む。紫苑はそれを柔らかく握って外させた。

「私は次の間にいる。何かあれば呼べ」

「……………」

「いいな？」

「……はい」

桔梗は頷いて王に視線を向けた。王は歩み寄り、彼女の隣りに立つ。紫苑は御簾を上げて奥に姿を消した。

四

縁に腰を下ろし、王はぽつりぽつりと語り始めた。

「憶えてはいないみたいだけれど、俺は御子の許婚だったんだぜ」

「いいなづけ……？」

「結婚の約束をしていたってこと」

「………」

桔梗の顔に一瞬血が昇り、やがて青ざめた。結婚という言葉が何を意味するのかくらは桔梗にも分かつている。王は苦笑した。

「無理やりそうする必要もないさ。……今は、な」

「……うん」

桔梗は紫苑に最後に握られた手をぎゅっと抱きしめる。そこに残る温もりを逃したくはなかった。

「御子……」

王はゆっくりと言葉を紡いだ。

「いつまで、ここにいてるつもりだ？」

「え？」

桔梗は弾かれたように顔を上げた。

「俺は南の、水属たちが暮らす場所の近くに住んでいる。勿論別の種族に入り混じって暮らすわけにはいかないけれど……人間の居る場所からできるだけ離れていたい」

「じゃあ、どうしてここに来たの？」

「風の便りに、御子の噂を聞いたからだよ」

王は優しく微笑んだ。

「都に 人間だらけのところを一人で貴女がいるって聞いたから」

ていた。言葉が喉の奥にひっかかって、彼女に呼びかけられない。

何故俺を拒絶するんだ、御子。

「あの」

「え？」

王は驚いて振り向いた。

いつの間にか背後に人間が立っている。御子の様子に気を取られていたとはいえ、全く気配に気付かなかった。

「誰だ、お前」

つつけんどんな言い方にも気を悪くした様子もなく、人間は柔和に微笑んだ。

「橘燐だよ。紫苑の友達で、居候」

「俺は王だ」

王は彼の笑顔に毒気を抜かれたのか、その場にどっかと座り込んだ。燐はその隣りにちよこんと屈みこむ。

「水龍族って、君以外にも生き残りが？」

「いや……」

あの夜、人間たちは彼らの住む集落に奇襲を掛けて来た。水は火に強いから、火攻めは効果がない。それならばということで術者を総動員し、村ごと土石で埋めてしまおうとしたのである。小石や砂だけではなく岩までもが雨のように降り注いだ。

「おかげで俺も体中傷だらけだぜ」

王は口元をゆがめた。その視線は目の前の庭に向けられているようにうでいて、本当はもつと遠くを見ているのだろう。

「俺には双子の弟が居たけれど、そいつの生死も分かっていない。

反撃する間もなく　村は消えた。土に埋まっちまったんだ」

彼の藍色の瞳の中には暗い炎が燃えていた。

「命からがら、ただ逃げるのに精一杯で……遺体のひとつも回収できなかつた」

御子の行方もわからず　いや、彼自身の父母の生死すら定かではない。だがこれだけ時間が経つても見つからないのだ。きっとも

う……。

「やっと御子を見つけたと思ったたら記憶をなくしていて、人間なんかと一緒に暮らしている。どういうわけだよ……!!」

堪え切れなくなった気持ちをぶつけるように拳を縁に叩きつける。燐はその様を表情ひとつ変えずに見守っていた。

「なあ」

王は顔を伏せたまま燐に尋ねた。

「何であんたは御子と一緒に暮らしているんだよ」

「……………」

「人間とあやかしが……どうして」

燐はすつと立ち上がった。

「僕がこの世で最も愛した女性は　あやかしだったんだよ」

「……………」

王は驚いて顔を上げる。燐の表情は逆光になって良く見えなかった。

「その命を奪ったのは、人間」

「……………」

言葉を失った王に、燐は淡々と告げる。

「僕は誰を恨めばよかったんだろう。ひとかな。あやかしかな」

「……………」

「僕は自分を恨んだ。恨んで恨んで恨みぬいて　死んでしまおう
と思った」

王は唇を噛んで俯く。彼がここにたどりつくまで、様々な紆余曲折があつたのだろう。しかし燐はただ言葉を紡ぎ続ける。

「僕が京に帰ってきた時、紫苑の元に桔梗ちゃんが居るのを見て驚いた。彼はただでさえ宮中の貴族連中に疎まれている。半妖であるがゆえに恐れられてもいる。無用な疑いの元ではないか、そう思った」

「その通りだろ」

「でもね」

燐が振り向く。その表情は、微笑わらっていた。

「それが彼らの選んだ道なら、周りがとやかく口を出すことじゃないのではないかな」

「『彼ら』……?」

王は立ち上がった。燐の顔を真っ向から睨みつける。

「御子が、御子自身がここで暮らすことを選んだって言うのか」

「そうだよ」

「そんなこと、認めない!」

「みずのえ……」

「記憶のないところに付け入ったのは、あの男だろう!」

王から感じる強い妖力に、燐は一步退いた。

「俺は絶対に認めないからな!」

身を翻し、軽々と塀を飛び越えていく王。その背中にどうしようもない孤独の影を感じ、燐は痛ましげに目を伏せた。

二

桔梗が部屋に帰ってきた。紫苑は若菜の口からそう聞かされ、自ら膳を持って彼女の部屋に向かう。

「桔梗」

部屋の隅で丸くなって背を向けている彼女はまるで猫のようで、紫苑の口元には笑みが浮かぶ。

「昼餉だ。食わないのか」

「……………」

返事がないのに焦れ、紫苑は部屋の入り口付近に膳を置いた。丸くなった背中に手を掛ける。

「おい、桔梗」

「……………」

ぐらりと体が揺れて紫苑の膝の上に転がり落ちる。健やかな寝息

を立てて彼女は眠っていた。閉じられた瞼は赤い。泣きながら寝入ってしまったのだろう。

「……全く」

紫苑は膝の上から抱き起こし、軽く肩を揺さぶった。

「桔梗。飯だ、食べる」

「う、……うう……」

何度か揺ると長い睫毛が瞬き、その奥から水晶色の瞳が覗いた。うっすらと涙を溜めている。

「あ、あれ？ 紫苑？」

「あれ、ではない」

紫苑は苦笑した。

「飯を持ってきたぞ。冷めてしまっているが、食べるだろう？」

「……」

桔梗は問いには答えず、無言で彼の胸元に顔を寄せた。小さな手が背中をぎゅっと抱きしめる。

「どうした？」

紫苑は優しく尋ねた。

「私は」

桔梗は顔を上げない。

「私はもう『御子』には戻れない」

「え？」

「あのひとが誰なのか私にはわからないし、思い出すつもりもありません」

顔をあげさせようと顎に手をかけるが、彼女はいやいやをするように首を横に振った。

「私……」

声がかくもっている。泣いているのだな、と思った。紫苑はそつとその華奢な体を抱きしめる。柔らかく、温かだった。

「私、ここにいちや駄目ですか……？」

「誰がそんなことを言った？」

「み、王……さっきの人が」

もう一度、顎に指を沿わせてみる。今度は素直に桔梗は面を上げた。案の定、頬は涙で濡れている。

「お前は本当に泣き虫だな」

紫苑は苦笑して指で涙を拭った。

「私は前にも言ったはずだ」

行くあてがないのならいつまでも居たらいい　だが、居たくなかったら勝手に出て行ってもいい。

「それって」

桔梗はぼつりとつぶやく。

「紫苑にとっては、私なんて居ても居なくてもどっちでもいいってことですか」

「何故、そうなる」

「そうとしか思えない!」

桔梗は紫苑の腕を振り払った。

「桔梗……?」

唐突な拒絶に紫苑は眼を白黒させる。桔梗の目から新たな涙が溢れた。

「たとえば私が突然居なくなっても、紫苑はきっと探しには来ないんだ。心配だつてしてくれない!」

紫苑には桔梗が何故怒っているのかが理解できない。ただ啞然として桔梗の激昂を見守るだけだ。

「私は……私は今まで紫苑が必要だった。それは、他に何処にも行くあてがなかったから。ただそれだけの理由だった」

いつの間にこんなに大人になったのだろう。紫苑は何故かそんなことをぼうつと考えていた。もはや桔梗は、差し伸べる手にただ縋りつくだけだった子供ではない。

「だけど、あの人　王が来て」

桔梗は紫苑の眼をじっと見つめる。強い瞳だと思った。

「私の居場所は他にもあるって、彼はそう言った。……ううん、違

う

桔梗は言い直す。

「私の居場所はここじゃない、って言った」

「……………」

紫苑は小さく息を呑んだ。

「今までは私がどこにも行く場所がなかったから、身寄りのない子供だったから、だから紫苑はここに置いていてくれたんですね」

桔梗は目を伏せた。なだらかな肩の線が細かく震えている。手を伸ばして抱きしめたいと紫苑は思った。だが……………。

「だったらもう　私がここに理由は、ないんですか……………？」

「……………」

伸ばしかけた手が止まる。紫苑は困惑した表情で桔梗を見つめた。

何か、何か言わなければと思う。それなのに言葉が出ない。

「ねえ、紫苑……………」

桔梗は顔を伏せたまま言った。

「私、多分もうすぐ大人になる」

「……………」

「良く分からないけれど、私の頭の中にはもうひとりの『私』が居て

紫苑ははっと彼女を見つめる。　もうひとつの人格の存在は、

知らないと思っていたのに。

「『もうすぐだ』って言っている」

「もうすぐ……………？」

「今までは私が幼くて、『力』を制御できなかった」

桔梗が喋っているのか、それとももう一人の「彼女」なのか
紫苑には判断がつかない。

「だけど、もう大丈夫。だからもうすぐ私たちはひとつになる」

それはすなわち、

「水龍にとつては、伴侶を選ぶ時」

桔梗は顔を上げる。

「……………」
紫苑は絶句した。

いつまでも桔梗は子供のままでいるような気がしていた。ずっとずっとこのままで居られると思っていた。居心地のいい関係だった。ただそこに居て、話して、笑って、そうしていられると思っていた。けれど。

「伴侶を選びたいのなら」

紫苑は、自分の声がかすかに震えていることを自覚する。

「私は不適任だ」

「……………」

「私以外を……選んだ方がいい」

私は半妖だから。子孫を残す能力はないから。

「桔梗」

紫苑は彼女を抱きしめた。なされるがままになる彼女の体を強く強く胸に抱いた。愛しいと思う。宮中から帰るたびに迎えてくれた笑顔も、怖がりで泣き虫なところも、不器用にしか箸が持てない指先も、いつまで経っても上達しない筆跡も、隣りで眠っている抱きついてくる甘えん坊なところも、もうひとつの人格の美しい孤高の魂も、「彼女」の真っ直ぐな強さも 全てが愛しい。

「桔梗……………」

口下手な自分がかかしい。どう言ったらこの気持ち伝わるのか、それとも伝ええない方がいいのか、彼にはわからなかった。

「桔梗……………」

寂しい。もう側には居られないのかもしれない、そう思うだけで胸に穴が開きそうなくらい寂しかった。半年以上も毎日顔を合わせ暮らしてきたのだ。既に彼女の存在は彼の生活の一部と化している。それをどうして手放せるだろう。どうして……………。

「紫苑」

桔梗が顔を上げた。紅も差さないのに艶めく唇が彼の名を刻む。白い肌にはうっすらと朱が指していた。

「私はここには駄目なの？」

綺麗だ、と紫苑は思う。このあやかしはきつと誰よりも美しい。細い銀髪が指先に絡み、冷やかな感触を伝えた。彼女の愛らしい指先が紫苑の頬をそつと撫でる。無意識であるう仕草の全てが、彼の胸を締め付けた。

「このままずっと、ここに居ては駄目ですか」

桔梗の腕が彼の肩を抱きしめる。彼女の早い胸の鼓動が直に伝わった。柔らかな肢体を腕におさめ、紫苑は眼を閉じる。諦めよう、と思った。

「私はお前の求める者にはなれない」

腕の中の桔梗の体が凍った。

「私はお前の伴侶にはなれぬのだ」

紫苑は体を離し、立ち上がる。

「紫苑！」

悲鳴のような声に、紫苑は振り向かぬまま応える。

「……お前が居てくれて嬉しかった」

ずっと疎まれ続けてきた自分を必要としてくれた最初存在だったから。

「側に居たいと思っていた」

「じゃあ、何故……」

「お前は水龍族の御子なのだろう？」

紫苑は静かに振り返った。その蒼白な顔に浮かぶのは哀しい笑み。血を絶やすわけにはいくまい

「……」

「もしもうひとりのお前と会話が出来ようなら」

紫苑はすぐに前を向きなおし、低い声で告げた。

「話し合ってくれ」

「……」

「それから」

紫苑はぎゅつと拳を握った。本当は口にもしたくない、その名前。

「王とも、な」

彼は水龍の血を絶やすことなど、きつと認めないだろう。

「紫苑……」

紫苑はそれ以上何も言わず、足早に部屋を出て行った。

三

「君は馬鹿だね」

「……盗み聞きは最低だぞ、燐」

廊下に佇んでいた燐に、紫苑は鋭い眼差しを投げる。だが燐にはいっこうに堪えた様子がなかった。

「馬鹿に馬鹿といつて何が悪い？」

「馬鹿で結構だ。私のわがままで、水龍族の未来を棒に振らせることはできない」

「君にとって大切なものは何なのさ」

燐は足を速めて通り過ぎようとした紫苑の腕を掴んだ。

「僕だったら かつて大失敗をした僕だったら、こう言うね」

燐は表情から笑みを消す。

「水龍族なんて糞喰らえだ……って。愛する者を手放したりなんてしない」

「それは」

紫苑はため息混じりにつぶやいた。

「愛情の形が違うのだろう。私とお前では」

「……」

「私は彼女に委ねただけだ。彼女の中での『私』と『血族』との重さの比較は、私にはできない」

「……でも」

「もついいんだ」

紫苑は微笑む。

「もう、いい」

その儂げな笑みがあまりにも哀しそうで、燐は腕を掴んでいた手を緩めた。

「ひとりには……慣れている」

そうつぶやいて、紫苑は燐を置き去りに歩み去った。その背中を見送り、燐はうな垂れる。

「……嘘つきだなあ、紫苑は……」

その夜、桔梗は屋敷から姿を消した。

第三章

—

桔梗が忽然と姿を消した日の翌朝。血相を変えて飛び込んできた燐に対して、紫苑は眉ひとつ動かさなかった。

「……それが答えか」

ぽつりとつぶやく。険しく強張った横顔とは裏腹に、声は力なかった。

「どういうこと？」

燐の問いに、紫苑はようやく視線を彼に向けた。

「昨日は盗み聞きしていたのではなかったのか？」

「なっ……」

改めて盗み聞きを指摘され、燐の顔に朱がさす。

「それは、その……全部聞こえていたわけではなかったし」

「そうか」

紫苑はそれ以上とがめることもなく、あっさりとうなずいた。

「私は昨日、こう告げた」

お前が居てくれて嬉しかった。側に居たいと思っていた。

燐の顔が驚きに染まる。

「だが私には種を残す能力はない。だから……」

話し合ってくれ。

「彼女の中にいるもうひとつの『人格』、そして壬。答えが出たら、その答えにしたがって行動しろと」

「……………」

「私は」

紫苑はまっすぐに燐の瞳を見つめた。強い目だった。

「とうに答えを出している。彼女が望むならいつまでも側に居よう」と

はじめは保護するためだった。たったひとり、人間の中に放り出されて彼女は生きていけない。否、その強い妖力でもって身を守ることはできるだろう。それでも独りには足りない。独りは、寂しい。

「彼女が水龍だと知り、中にもうひとりの人格がいると知り、その者が青龍の魂を宿すと知った時も、全て受け入れられると思った」
紫苑は、何かにつかれたように喋り続けていた。

「『彼女』は運命だと言った。我々が出会ったのは運命だと。私は否定した。運命に縛られるのは無駄なことだ。己の意志に従って行動するのみ」と

「紫苑……………」

燐は戸惑ったように彼を見つめる。もつと臆病だと思っていた。彼の知る紫苑はいつも誰かに自分の気持ちを知られることを極端に嫌がり、孤独の殻に閉じ籠ることを好む、そういう男だった……そのはずなのに。

「理由は分からぬが、桔梗は私を慕ってくれた。頼ってくれた。だから私も自分の全てを傾けて……私なりに慈しんできたつもりだ」
「……………うん」

燐はうなずく。しばらくの間彼らと寝食を共にして、紫苑がいか

に桔梗を大切にしているかは良く分かっていた。たとえば言葉はぶつきらばうであつても、はしばしに見え隠れする優しさは確かなもので、焔はそんな紫苑をいつも微笑ましく見守っていたものだった。

「けれど」

紫苑の瞳がかすかに揺れた。

「桔梗はもう、大人だ。子供ではない」

「……………」

「以前お前が言ったとおりだ。桔梗は大きくなった」

焔は不意に気付いた。握り締めた紫苑の拳が小刻みに震えている。

「だから……………」

日々美しく成長していく桔梗が怖かった。徐々に大人の女になっていく彼女に、どうすればいいか分からなかった。

紫苑は女の元に通ったことがない。それは自分が半妖でありひとから忌まれる存在であるという理由もあつたが、もうひとつには自分に子孫を残す能力がないということを知っていたためだった。

それはもうずっと以前に、朱雀に教えられている。

「鳳凰族は、貴方で絶える」

焔の姿を借り、朱雀は彼に告げた。

「貴方に子を為す能力はない。たとえ相手が誰であつても、それは同じ」

特に衝撃を受けた記憶はない。自分の血を引く者など、生まれて欲しいとは思わなかった。ひとにもあやかしにもなれぬ、半端な存在。そんな者は自分ひとりで十分だ。しかし……………。

「桔梗が水龍族の存続を望み、そのための伴侶として私を願うのなら」

紫苑は言う。

「私ではどうにもならぬ。どうすることもできない」

「……………」

「かといって、ずっとこのままで居られるわけもない」

「……………」

燐は無言でうなづく。

「桔梗は」

その言葉は、意外にすんなりと彼の唇から零れる。

「私が唯一、愛した女性なのだから……」

涙が一筋、紫電の瞳から頬を伝って落ちた。

二

都の西の外れに、その屋敷はひっそりと立っていた。かつて流行り病に倒れた家人は全て帰らぬ人となり、家はただ荒れ果てている。取り壊す人もなく、朽ちるのを待つのみであった。

だが、今はそこに強い妖力が満ちている。壬だ。かろうじて床も抜けずに保たれていた一室に陣取り、天井を睨みつける。

「御子……」

こんなはずではなかった。御子は迎えに来た自分を歓迎し、手に手を取り合って一緒に南へと下るはずだったのに。御子は記憶をなくして自分を覚えていなかったばかりか、いけ好かない半妖の男の元に居て、自分を頑なに拒絶した。

あんな場所に居てどうしてしあわせなんだ。壬は首を左右に振る。しあわせなわけがない。御子はほとんどあの屋敷から出られないはず。閉じ込められているといっても過言ではない。半妖と、人間の男との暮らし。そんな生活がしあわせであるはずがないではないか。

「それなのに、何故……」

壬は拳を振り上げて床を殴ろうとしたが、穴が開くかもしれないと思い直してその腕をだらりと下げた。

「御子……」

ぶわ、と不意に壬は総毛だった。強い妖気を感じる。それも殺気に近いような、とても濃い妖気だ。懐かしい。これは水龍のも

のだ。それもこれほどまでに強いということは、つまり最強の水龍が近くにいるということ。

ばん、と簾が吹き飛んだ。王は腕を広げてそれを受け止める。ぴりぴりとした空気が肌を焼いた。怒りと悲しみと 全てがない交ぜになったような、強い思念。

「御子……！」

そこに立つのは確かに昨日出会った御子だった。だが、昨日に会ったときは明らかに雰囲気が違う。水晶色の瞳は絶対零度の冷たさで凍りつき、艶やかな赤い唇は笑んでいるが笑ってはいない。

「探したぞ、王」

王はびくりと体を震わせた。昔、ひとつづてに聞いたことを思い出す。母君が御子さまをご懐妊されていた時、青龍がその元を訪れたそう。そしてその魂を胎内の御子にお預けになった、と。もしかして今自分が会話しているのはその青龍の 水属の神獣の魂なのだろうか。気付いた王は慄然とする。

「私に会うのは初めてだな」

「彼女」はそう言って笑った。

「私はお前を覚えているのだが…… 上手くはいかないものだ」
「俺を、覚えて……？」

「私は普段眠りにについている。だがもうひとりの私が見ている景色も、感情も…… 全て記憶にある。共有している」

だが、「彼女」の瞳はあくまでも凍てついていた。

「お前に関する記憶も残ってはいるが…… 許婚とは知らなかったな。どうせまた一族の者が勝手に決めていたのだろう。御子に関する」とはいつもそうだった」

「そんなはずは……！」

「まあ、そんなことはどうでもいい」

気色ばむ王を、軽く手を振るだけで黙らせる。

「どちらにせよ、お前には私を御することはできない」

「……………」

「そつだろつ？」

王は黙り込む。「彼女」は静かに、そして冷たく笑っていた。
「お前が何をしに来たのかは知らぬが」

「彼女」の声は静かで、それでいながら激情を秘めている。

「邪魔だ。帰れ」

「御子！」

「私は『桔梗』だ」

ぴしゃりと言い返されて、王は唇を噛む。

「あの戦から逃れた私は、とある場所で眠りについていた」

「彼女」は視線を少し遠くに投げた。

「神獣である私がわざわざ水龍の御子の体内に宿らなければならなかったのには、理由がある。お前に多くを語るわけにはいかぬが……」

「紫苑は」

その名を呼ぶと、「彼女」の冷たい顔がふわりと綻ぶ。春の気配をいち早く感じ取って蕾を膨らませる新芽のように。王の胸がずきりと痛んだ。

「朱雀を御する男だ。私には彼と出会う必要があつた」

「何故？」

「神獣がそのままの姿でこの地上で集うわけにはいかぬ。だが、地上に生きる命の形を取れば、もしくはその者と契約を結べば、可能になる」

「……神獣が地上に集わなければならない、理由は何なんだ」

王の問いを聞いた「御子」は目を伏せた。

「今は未だ、答えるわけにはいかぬ」

「……………」

「だがな、そんなことはもう、どうでも良いのだ」

「え？」

「確かに私が紫苑と出会つたのは必然であつた。運命と呼んでもい

いかも知れぬ。しかしそのまま私が彼の元に居る必要はなかった。時が来るまで、共に居る必然は何処にもないのだから」

「それなら何故……」

「王」

「御子」はやっぱりと名前を呼んだ。

「私が怖いか」

「……………」

王はふと自分の体が細かく震えているのを自覚した。自分は「彼女」に完全に威圧されてしまっている。「御子」は小さく笑った。

「無理もない」

「……………あの男は」

王は苦々しげにつぶやいた。

「あの男は違つとでも」

「違つ」

「御子」は即答した。

「初めて紫苑が私に会った時、彼は言った」

世界中の皆がお前を怖がっても、私は怖がってなどやらない。

「……………」

王は沈黙した。

「紫苑はそう言ったのだ」

「御子」は微笑する。それは温かな表情だった。

「四大神獣の一である私に……………」

「……………」

「可笑しいだろうか？」

王は諦念にも似た気持ちで目を閉じる。

「昨夜、紫苑に言われた」

少し調子を変え、「御子」の声は続いた。

「半妖には子孫が残せない……………」と

「……………」
王は驚いて顔を上げる。半妖に子孫が残せないなどは知らなかった。だが「彼女」の表情は平静である。もしかすると、はじめから知っていたのかもしれない。

「だから……これ以上私が彼の側に居ることを望めば、私もこの血を残すことができなくなるやも知れぬ」

「……………」

「彼はそう警告してから、私に勧めたのだ。『王と話し合え』と胸を衝かれた。王は眼を見開いたまま「御子」を見つめる。

「彼には分かっていたはずだ。お前が水龍の血を絶やすことを許すはずなどないと」

王は視線を揺らす。

「それでも彼はそう言った。私を……私の立場を慮って」
不意に「御子」は膝を突いた。

「どうか、許して欲しい」

深々と頭を下げる彼女に、王は慌てて立ち上がる。

「み、御子！」

「私は紫苑の側に居たい」

その言葉が「御子」のものなのか、それとももうひとりの人格のものなのか。王には既に良く分からなくなっていた。

「離れたくない」

薄汚れた床の上に滴がきらきらと零れ落ちる。

「御子……」

美しい銀髪が床を這い、埃をかぶった。王はぎり、と歯を軋らせる。　　そうまでして、御子はその男を……。

「だから、どうか」

「もう遅い」

王はつぶやいた。

「あの男は、もうすぐ死ぬんだからな」

第四章

—

気がつくとその中は水の中だった。以前川の中に落ちたときと同じように、息苦しくはない。まわりできらきらと輝いているのは、漂う泡だろうか。はるか頭上の水面から光が差し込み、桔梗の裸体を白く浮き上がらせた。

ここ数週間ですっかり丸みを帯びた彼女の体躯は、しなやかに揺れている。伸びた手足を掻き分ける水流が心地良かった。

「ここは……どこ？」

戸惑いつぶやくと、彼女の足元の方にふつと巨大な影が現れた。

ここは私の住む世界。

蔽かな声。青い鱗が燦然とした光を放つ。それは竜だった。顔と尾が何処にあるかも分からないほど巨大な神獣。

「あなた、誰？」

桔梗が尋ねると、その声は頭の中に直接響いた。

お前の中に宿った魂。もう一人の「桔梗」……。

そう言っただけは苦笑したようだった。

困ったものだ。私までがああ男の与えた名前にこだわるとは……。

「あんな男って……」

御門紫苑。そういう名であったな。

「……………」

桔梗は唇を噛み締めた。激情のままに屋敷を飛び出してしまったことを思い出し、そういえばそれから後の記憶がないことに気付く。

案ずるな。今お前の体は私が預かっている。

「どっしり」

魂の融合が果たされるまで、私とお前とはひとつの体を共有しているからな。

「……………」
それとなく気がついてはいた。自分の中にいるもうひとつの人格の存在。

「あなたがそうだったんだね……………」
竜は優しげに体を揺らした。

私の力は大きすぎて、水龍と言えど扱うには大きな負担が掛かる。そのために創られているお前の体とはいえ、幼体では無理だった。

「もう私は大人だよ……………」
自分で自分の体を抱くようにしてつぶやいた桔梗に、青龍は同意する。

そうだな。その時がくれば……………私はお前の中に溶けて永遠の眠りにつくことにしよう。

「その時？ それはいつ来るの？」
いつでも。お前が望む時に。

「私が……………」
桔梗は分からない、というようにかぶりを振る。長い銀髪がゆらゆらと泳いだ。

「私……………私ね」
独り言のように、彼女は言った。

「紫苑が好きなんだ。本当に好きなんだ」

ああ……………。
「最初は少し近寄りたいたいような気もしたけれど、でもそれは寂しさの裏返しで」

いずれ失う時のために情は残したくないと、そういうことだったのだ。

「いつでも出て行っていいなんていうから邪魔なのかって思ったけど、全然そんな様子もないし」

いつまでも一緒にいられるような、そんな気がしていた。毎日一緒にご飯を食べて、話をして……寒い日は体を寄せ合って眠って。彼の腕の中で守られていた日々。それをずっと繰り返せると思っていた。

「だけど、きつと紫苑はずつと悩んで……」

無邪気に慕う自分と、紫苑の身に流れる血と、そして彼とは相容れない世界。纏れて解けない糸は時を重ねることに頑ななものになっていった。そして壬が現れた。

「あの人が現れて、私は大人になるんだって思った」

桔梗は唇から生まれる泡をぼうつと見上げた。それは点々と連なって水面へと溶けていく。

「あのひとは私と同じ水龍族。だけどそんなことは私にとってはどうでも良くて……」

記憶がないということは、つまりそういうことだ。水龍族にはほとんど何の愛着もない。

「このまま紫苑と一緒にいられるかどうかの方が大事だった。……ううん」

言っつかぶりをふる。

「それだけじゃない……」

紫苑に望まれたかった。共に歩いていくことを。

あの男は……。

青龍はごぼり、と泡を吐いた。

自らの体に流れる悲劇の血を知ってしまった。

人間である父とあやかしであった母。母は息子と引き離され狂気のうちに死んだ。父の正体は相変わらず知れない。

そして、あの燐という男。

あやかしであった恋人を失い、燐がどれほど悲しんだか。自分と同じ人間たちに最愛の存在を奪われ、自らをも憎んだ彼の姿は未だ記憶に新しい。

異種族で道を共にしようとしたものたちには、必ず悲劇が訪

れている。

「……………」
ただでさえあの紫苑という男の立場は複雑だ。それを思えば彼も慎重にならざるを得ないのだろう……。

「血を、残せないって」

桔梗はぼつりとつぶやいた。

「子供が作れないんだって言っていた」

ああ。

「それってやっぱり大きなこと……？」

そうだな、一般的にはな。

青龍はあっさりと言った。

生命は自らの血を継ぐものを生み出すために存在している。

「……………」

桔梗は目を伏せる。

だが、

青龍は言葉を続けた。

生命の存在理由はそれだけとは言えまい。

「え？」

それは生ける者が自分の意志で決めれば良いこと。そうではないか？

「……………」

生の意味を限定するなど愚かなこと。

青龍は苦笑したようだった。

それを私に教えたのはあの男ののだがな……。

「私はお前に呼ばれた。だから出会ったのだ。運命に呼ばれたのではない」

「……………！！」

桔梗は顔を上げて息を呑んだ。

彼はこうも言ったな。

青龍は紫苑の言葉を告げる。

『私は私のしたいように生きてきた。これからもずっとそつだ。だから……』

お前もそつしろ、と。

彼女の頭の中で、その言葉は大きく響いた。

「……したいように」

桔梗は鸚鵡返しにつぶやく。自分の望みは何だろう、と桔梗は考えた。確かに自らの子供を生むことができれば、それはとてもとても愛しいだろう。だが、それは紫苑の子供でなければ意味がない。あの美しい紫の眼と、艶やかな黒い髪。どこかひとつでも似ていればいい。それが叶わぬのなら子供など要らない。紫苑さえ居ればいい。

「私は……」

つぶやきかけたところで、水面から声が轟いた。

「あの男は、もうすぐ死ぬんだからな」

二

「どこの手のものなのだろうな」

紫苑はつぶやく。宮中に参内して帰る途中、気がつくとも結界に閉じ込められていた。迂闊だった。臍を噛む思いである。いくらこころここにあらざであつたとはいえ、事ここに至るまで気がつかなかったとは。結界を張った術者はここにはいないらしいが、紫苑ほどの力を持つ者を簡単に引き込めるとも思えない。ということは……。

「王、かもしれないな」

苦笑が漏れる。私を亡き者にしたところでどうにもならぬのに。

自らの手を汚そうとしない理由は良く分からないが、水龍の殺性に。

を鑑みるにその思考は特に理解できないものでもない。邪魔者は取り除く、そういうことなのだろう。

今日は焰を連れていないが、彼は　朱雀は、この結界に気付いてくれるだろうか。

良く気をつけてみれば、この結界は用意周到に張り巡らされていた罠だということがわかる。緻密な作りは、急拵えで何とかなる程度のものではない。視線を上げるとそこには数多のあやかしたち。もののけとは違って理性的な眼をしており、つまり彼らは自分たちの意志で彼を襲おうとしているということだ。水属の者たちが多いのは、王が水属の長に立つ水龍族のものだからだろうか。

「まあいい」

紫苑はつぶやいた。

「私が守らなければならなかったものは……もう、この手にないのだから」

幼い桔梗を、自分が守ってやらなければ。そう思っていたときならば、意地でも死にたくないと思ったことだろう。しかし、今は違う。桔梗はもはや幼くない。そして彼女には青龍の魂が宿っている。彼が守らなくとも、彼女は十分生きていける。誰も、彼を必要とはしていない。

「だが」

紫苑の瞳に赤い色の炎が燃え上がった。

「むざむざ殺されるのは癪だからな」

懐には数多くの呪札が用意されている。　これが尽きるまでは、戦える。

「いくぞ」

紫苑が気迫を吐き出すと同時、あやかしたちは一斉に彼に襲い掛かった。

「どういうことだ!」

悲鳴に近い声で「桔梗」が壬を詰る。壬は険しい表情で彼女の視線から眼をそらしていた。

「何故、紫苑を」

「いい加減にしてくれよ!!」

壬は叫んだ。一瞬驚いたように硬直した「桔梗」の肩を掴み、揺り動かす。

「あいつは半妖だ。しかも人間側にいるんだ。俺たちの一族を滅ぼしたのは人間、仇なんだよ!!」

「……………」

「何でそんな奴と生きていこうとするんだ!」

壬はその藍の瞳を沸騰させ、そこからは次から次へと雫が零れ落ちた。

「俺のことが嫌ならそれでもいい。だけど　だけど人間だけは、許せねえ!　許せねえんだよ!!」

「……………」

「桔梗」は静かに顔をあげた。

「言いたいことはそれだけか?」

「……………」

壬は息を呑む。

「桔梗」の髪がふわり、と宙に浮かんだ。その身から溢れ出した妖力が、物理的な力となつて彼女を包んでいる。

「彼は」

「桔梗」は冷たく、それでいて爆発しそうな眼差しで壬を見据えていた。

「ひとからはあやかしだと蔑まれ、あやかしからはひとだと疎まれる。そうして今まで生きてきた」

「……………」

「どちらにもなれぬ。何処へいっても拒絶される」

「……………」
「友人はたったひとり。ひとによって妻を殺された男だ。ただ彼女があやかしだったという、それだけの理由で」

紫苑の屋敷で出会った線の細い男の顔を思い出し、壬は顔を顰めた。

「紫苑を受け入れることができるのは集団ではない。ひとという集団でも、あやかしという集団でも」

「桔梗」は彼女の肩をとらえていた壬の手を、強く払いのけた。
「個人なのだ。燐という個人　私という個人」

「……………」
「今お前を殺さないのは、その時間がないからだ」

「御子」

「もう一度だけ言う。私は」

「桔梗」ははつきりと告げた。

「桔梗だ」

「御子！！」

不意に、「桔梗」が膝を突いた。眼もくらむほどの閃光。壬はじり、と後退する。その脳裏に声が響いた。それは、昨日出会った桔梗の。。。

紫苑は、絶対に殺させない。だから、そのための、力を……………！

「桔梗」の肌が青く染まり、硬質の何かが全身を鎧のように覆う。

「み……………御子……………」

壬はつぶやいた。

力を与えよう。

厳かな声。それはあまりに強く、壬の頭の中にまで流れ込んでくる。

私の力を、全てお前に。

壬は悟る。彼女の中の青龍が彼女の想いを　紫苑への想いを認めただのと。

「それでも……………俺は」

王はぎり、と奥歯を鳴らした。
「俺は……！」

第五章

—

鮮血が視界を遮る。紫苑は片膝を地面につき、宝刀を手にして荒い息を吐いていた。あやかしたちの数は半減し、辺りには数多の屍が転がっている。だが、相変わらず状況は圧倒的に不利だった。

「恨むのなら」

あやかしたちのうちのひとりがぼつりとつぶやく。

「水龍に関わったことを恨むのだな」

「……………」

紫苑は額を伝う汗と血の入り混じったものを拭い、同時に勢い良く唾を吐いた。それは赤い糸を引いて黒い土の上に飛ぶ。

「恨む……？」

薄い唇が笑みを描いた。

「私は何も恨みなどしない」

飛び掛ってくるあやかしから身をかわし、宝刀に力を込めてその背中に突き立てる。あやかしは悲鳴を上げる間もなく炎に包まれて消えた。その頃、紫苑は既に次の術を唱えている。地面が鳴動し、土の槍が生えてあやかしたちを足元から串刺しにした。だがそれをも避けたあやかしが再び襲い来る。

「これは全て私自身が選んだことの結果なのだから……………」

妖力の使いすぎで目眩がする。紫苑は歯を食いしばった。も

う、これ以上は……………！

いくら王が裏で操っているとはいえ、これだけの数のあやかしが

彼ひとりを襲いに来るなど普通ではない。

「そうか」

紫苑はつぶやいた。

「私が陰陽師だから」

それだけでも、あやかしにとっては十分彼を襲う理由になるのだろう。彼自身は参加していなくとも、ひととあやかしとの間で行われてきた数多くの戦争　人間側の主力は常に陰陽師たちだった。その戦いに紫苑が参加しなかった理由はただ一つ。その身にあやかしの血を宿すゆえである。　それなのに、私はあやかしたちから恨みを買っているというのか。

「ふふ……」

紫苑の唇から笑いが漏れた。

「ふ……はは……」

「?!」

相對していたあやかしが怪訝な表情を浮かべる。

「ははははっ」

紫苑は勢い良く手を突き出し、素手でそのくすんだ灰色の髪を掴んだ。引き攣った悲鳴。あやかしの瞳に映った紫苑の眼は、真っ赤な血の色に染まっていた。彼はあやかしをそのまま空中に吊り上げる。

「いいだろう」

紫苑は自分の中で何かが解放されるのを感じた。

「それならば」

ざあ、と髪が重力に逆らってそらに立ち上る。彼を包囲していたあやかしたちの群れが一步退いた。

「は、放せ」

掴み上げられたままのあやかしが大きく足をばたつかせた。紫苑はそれを冷たく燃え盛る炎の眼差しで見据える。

「私は、鳳凰族の姫御子の遺児」

紫苑はさっと手を放した。

「母上の血を、無駄にはせぬぞ」
地面に落ちたあやかしの体が発火し、苦悶の声を上げて転げまわる。

「ぎゃああああああああああ!!」

水属であるうあやかしは炎を消そうと水を呼び寄せるが、燃え盛る火の勢いが強すぎてそれもままならない。

「こ、こいつ!」

紫苑はゆっくりと辺りを睨み回した。彼の眼と髪は紛うことなき鳳凰族の色。血と炎に彩られ、彼は不吉な笑みを洩らした。

二

桔梗はゆっくりと眼を開けた。体に力が漲みなぎっている。膝を突いている壬が視界に入り、桔梗は眉を寄せた。

「いつまでそうしているつもり?」

「え?」

桔梗は腰をかがめる。その瞳は先ほどまでの伶俐なものとは違う。これはおそらく最初に出会った時の彼女に近い。だが、その視線の強さは「桔梗」のものに似ている。人格が、統合された? 壬は茫然と彼女を見上げた。

桔梗はまるで彼を哀れむように、静かに言った。

「紫苑を殺しても、私は貴方のものにはならない」

「!!!」

「私は貴方を許さない。……そう、まるで」

桔梗の表情には笑みの欠片もない。

「一族を滅ぼされた貴方が、人間を許せないように」

「同じことだって……そういうのか」

「そう」

「けど、……けど御子の両親だって!」

「私の親を殺し、私の記憶を奪ったのは紫苑じゃない」
桔梗は立ち上がった。

「勿論憐さんでもない。名前も知らない、おそらくは下っ端の陰陽師。帝に……今は亡き先帝に命令されただけの」
「……………」

「少しだけど、記憶が戻ったような気がする」
桔梗はつぶやいた。

「これは、青龍が持っていたもの……？」
「じゃ、じゃあ俺のことも」
「でも」

桔梗はびしゃりと言った。

「それは今の私には関係ない」
「御子！」

「私は」

桔梗は優しく微笑んだ。切なげに、愛しげに。
「桔梗です」

「……………どうしても、なのか」
「うん」

王は齒を食いしばった。

「どうしても」
「どうしても」

「あいつじゃなきゃ駄目なのか」
「……………うん」

「なんで……………」

桔梗は顔を上げた。長い髪がゆるやかな曲線の軌跡を描く。

「私には、紫苑が必要な」
「これからも？」
「うん」

はにかむような笑顔。

「紫苑が、好きだから」

「……………」
「だから」

桔梗は俯いたままの壬に視線をうつし、その表情を険しいものに変えた。

「もし、貴方の手の者が紫苑を殺したら」

ぎし、と床が鳴った。桔梗の体が細かく震えている。

「私、貴方を殺してしまうと思う」

三

「鳳凰の御子の子だと？」

「…………こやつ、半妖…………。そうか、そういうことか！」

「蘭妃の遺した…………」

「ち、厄介な…………」

あやかしたちのざわめきが彼の耳を侵す。紫苑はそれらの全てを拒絶するように眼を閉じ、そして開いた。

しあわせになりなさい。

母の声が甦る。

誰が許さなくても、必ず守りなさい。

今の彼と同じ　赤い髪と眼をした母。狂気から解放された彼女はとても寂しげに、そして優しく微笑んでいた。

愛する者を。あなた自身を。必ず守りなさい。

生きて、生きて、生きて……………！

「…………生きてもう一度」

血に染まった白袖が翻った。

もう一度、桔梗に会いたい……………！！

ぱりん！　結界が罅割れ、その裂け目から赤い光が侵入する。

「朱雀か」

紫苑は振り仰いで微笑んだ。

「間に合ったようだな」

朱雀が彼の妖力に反応して咆哮する。

「ここから出るぞ」

朱雀の吐いた炎が辺りを包み込み、やがて 轟音と共に世界が

崩れた。

四

王がはっと顔をあげる。

「結界が破れた」

「え？」

破れ屋から出ようとしていた桔梗が振り向く。

「ここに来る」

「紫苑が?!」

「結界を張っていたのは俺だ。破れたとなると当然」

王が言い終わるよりも早く、部屋に気配が満ちた。

「しおん！」

忽然と現れたのは、血で汚れきったひとりの男だった。王の座るすぐ前に現れ そのまま力を失って倒れる。赤い髪が床の上に広がった。

「これが……」

王は茫然とつぶやいた。

「これがあの男なのか……?」

彼の張った結界を破ったことも驚愕に値するが、この姿は一体どうしたことだ。

「これじゃまるで」

王はごくりと唾を飲む。

「あやかしじゃないか……」

「紫苑……紫苑!」

桔梗は紫苑に駆け寄った。血で汚れるのにも構わず必死でその膝の上に抱き起こす。

「しっかりして、紫苑！」

「……う」

紫苑は小さく呻いた。睫毛が震え、ゆっくりと瞼が開く。そこから現れたのは紫電ではなく真紅の瞳だった。だが桔梗は頓着しない。安堵の息を吐き、涙を零した。

「良かった……良かった！」

「き、きょう」

咳き込む彼の背中を抱きしめ、桔梗はつぶやく。

「生きて良かった……紫苑が死ななくて……本当に良かった……」
「すまなかつたな……」

紫苑は桔梗の頬を撫でた。指先についていた血が、桔梗の頬に赤い弧を描く。

「お前を、傷付けた……」

「そんなこと！」

「桔梗」

紫苑は穏やかに微笑んだ。

「お前に、もう一度」

会いたかったんだ。

「……！！」

桔梗は息を呑んだ。眼の縁に盛り上がっていた涙がはらはら、と頬の上に落ちる。

「お前に謝りたかった」

紫苑は眼を閉じた。

「本当は」

赤い髪が徐々にその色を強めていく。やがてそれは赤褐色になり、さらに濃くなって 黒になった。

「手放したくなかった」

紫苑はまるで独り言のように淡々と言葉を続ける。

「この身に流れるのが禁忌の血でも……不幸を呼ぶとしても、それでも」

ゆっくりと眼を開ける。懐かしい紫の瞳が、光に滲んでいた。

「それでも、私はお前に」

桔梗の顔がくしゃりと歪む。

「側にいて欲しい」

紫苑の手がそつと桔梗の髪を撫でる。桔梗の涙が紫苑の頬に雨を降らせた。

「それが、私の気持ちだ」

「紫苑……！」

「戻ってきてくれるか……？ 私の元に」

「……………」

桔梗は袖でぐい、と涙を拭いた。そして、満面の笑みを浮かべる。

「はい！」

「……………」

紫苑も微笑した。ふっと意識が遠のく 暗転する視界の中で、

彼は桔梗の笑顔だけを脳裏に焼き付けた。

「紫苑……………」

早く連れ帰って傷の手当てをしなければ。焦りながら、ふと桔梗は辺りを見回す。 壬の姿は、どこにも見当たらなかった。

第六章

—

そこは、暖かな場所だった。柔らかな温度と、ゆつたりとした時の流れ。何者にも傷付けられることのない世界。自分だけのための世界。光のない世界 胎内。

やがて眠りは妨げられ、彼はいつの間にか外界へと押しやられていた。手探りで進んだ先は苦しくて眩しくて、泣き喚く。

「おお、よしよし」

抱いてくれるのは自分ではない存在。母親。紅蓮の髪、紅玉の瞳。笑顔。でも、泣いている。

「おのこか」

ぼつりとつぶやかれた低い声。男の声だった。

「殺してしまうおつもりですか」

母の声がわななく。男は少し黙り、やがて口を開いた。

「できぬ」

「……………」

「だが」

言葉が苦しそうに搾り出される。

「我らの手で育てるわけにもいかぬ」

「この子が生きていくためなら」

母は語調も強く詰め寄った。

「どのような事にも耐えてみせましょう」

「…………私とて、この子が愛しくないわけがないのだ」

男は母を宥めるような口調で言う。

「初めての吾が子なのだからな」

父上？ ぼんやりとした視界の中、男の顔が近付く。

「辛い運命を背負わせてしもうたな」

「…………それでも」

母は力強く言った。細く温かな腕が彼をかき抱く。

「生きてさえいれば」

男の指が、彼女の涙に濡れた頬を拭った。

「生きてさえいれば、必ず出逢えます」

この子を心から愛してくれる存在に。

「それがあやかしののか、ひとなのかは分からないけれど……………」

「そうだな」

母の腕から男の腕に受け渡され、彼は居心地悪げに身を振った。だが優しく揺すぶられ、彼はきやつきやつと笑い声を立てる。

「生きてさえいれば……」

父上。母上。彼は眼を閉じた。顔も分からぬその男と、今は亡き母親に語りかける。

「私はきつと……逢えたのだ……」

眩しい光。　夢が、終わった。

二

都の外れにある森。皓々と空を照らしている月明かりも地上にはほとんど降り注がない。幾重にも重なった木々の葉が、暗く頭上を覆っていた。

鳥の声の不意に止んだ。後に残るのは静かな水音と、妖気。

「壬さま」

川べりの岩に蹲る影に向け、あやかしの一人が口を開いた。

「何だ」

殺気の滲み出るような低い声。それを聞いた者は、一瞬躊躇した後に言葉を続けた。

「あの男。蘭妃どのの血を引くとの事でした」

「蘭妃？」

岩に触れていた手がぴくりと反応した。

「はい。朱雀をも従えていたのはそれゆえでしょうか」

「……そうか、それで」

壬はつぶやいた。何故彼の張った結界が破られたのか。赤く染まっていた髪と瞳の意味は何なのか。何故朱雀を武神のように使役できるのか。その理由の全てはそこにあるのだろうか。

「ただの人妖じゃないってことか……」

壬の口元を苦笑が彩った。

「いかが致しますか。再び彼を襲撃することも十分可能ですが」
「いや」

王は首を横に振った。

「青龍の力を受け継いだ御子が側にいる。そして、彼自身朱雀の力を使えるのだろうか？ しかも鳳凰族の直系とくれば、これは少し分が悪い」

指を軽く唇にあて、考え込む。

「蘭妃の息子……か」

はっと顔を上げた。

「もしかすると、人間どもは知らないのかもしれないな」

「何を……でしょう」

「あいつの父親が誰なのかを、さ」

小さく笑みを浮かべる。しかし瞳だけは爛々とした光を湛えていた。

「そりやそうだよな……知っていたらただじゃ済まないものな」

王は音もなく立ち上がった。

「面白い」

青白い光が一瞬だけ彼の姿を刷く。折しも、吹き過ぎた風が彼の衣と髪を靡かせた。

「ひとつ、やってみるとするか」

王はそらを仰いだ。ここからでは月の面を見ることが出来ない。

「御子」

目を細め、桔梗の面影を脳裏に描く。

「俺は必ず貴方を取り戻してみせる……！」

三

見慣れた天井が視界に広がる。紫苑は静かに息を吸い、そして吐いた。簾から差し込む日の具合から朝なのだと知れる。

自分のものではない小さな呼吸音に気付き、紫苑は首を回転させた。側にいたのは小さく丸まって眠っている桔梗。相変わらずのあとけない寝顔だった。

紫苑は彼女を起こさないよう、静かに体を起こした。ところどころに痛みは走ったものの、傷跡には既に清潔な白布が巻かれている。燐だろうか。

「……………」
黙ったままそつと桔梗の方へ手を伸ばした。白い頬に零れかかる銀髪を除け、ただ見つめる。このまま時間が止まってもいいと思った。見慣れたはずの桔梗の造形が、何故か今はひどく新鮮に見える。青龍の魂との融合を果たしたせいなのか、それとも……………。

「私の方が、変わったのかもしれないな」

ぼつりとつぶやかれた独白。桔梗の睫毛がかすかに震え、やがてゆっくりと彼女は眼を覚ました。

「桔梗」

紫苑の言葉を待つまでもなく、桔梗は跳ね起きてまじまじと紫苑を見つめた。

「……………」

唇を震わせ、頬を涙が伝う。

「おかえり」

紫苑は優しく告げた。桔梗は紫苑の差し伸べた手をぎゅっと握る。

「……………ただいま」

何よりも愛しい温もりを抱擁し、紫苑は吐息を洩らした。私

は、生きている。

四

桔梗に紫苑が目覚めた旨を知らされ、燐は傷口を縛る替えの白布と共に彼の部屋を訪れた。

紫苑はどこかぼうつとした風情で燐を見上げる。燐は安堵の色を押し隠し、敢えてやれやれ、といった表情をしてみせた。

「君が焰さんの背中に抱えられて戻ってきたときは、何があったのかと思っただよ」

「迷惑を掛けたな」

紫苑はそんな彼の様子には構わず、穏やかに微笑んだ。

「すまなかった」

「三日間も眠り続けていたんだ」

燐はぼつりとつぶやく。既に、彼の笑顔の仮面は罅割れていた。

「本当に……無茶をする」

「そつだな」

紫苑は自分の髪をそつと指先で摘んだ。

「これが緋に染まった時は驚いたよ」

「え？」

「桔梗から聞かなかったか？」

燐は首を振る。

「彼女、ずっとここにいたんだよ……眠るのも食事をするのも、ずっとここ。君が目覚めるのを待っていた」

「……………」

紫苑は視線を落とした。

「私の中には確かにあやかしの血が流れている。そして、どうやらそれを意図的に解放することもできるようだ」

「意図的に……？」

「ああ」

紫苑は頷く。

「私が生きるために、あやかしの力が必要だった」

あのままでは殺されてしまっていた。

「そう思ったとき……この体はあやかしのものへと変化していたんだ」

「……………」

「ずっと、ひとの社会で生きてきた」

紫苑は自分の髪を掴み、つぶやく。

「けれど私はひとではない」

「紫苑」

「それは仕方がないことだ」

気遣うように声を掛ける燐を見上げ、紫苑は微笑んだ。

「さつき私は『あやかしとしての自分を意図的に解放した』と言ったが、逆かもしれない」

「つまり」

燐は少し考えてから言った。

「君は『あやかしとしての自分を意図的に抑圧してきた』ってこと？ この世界で生きるために」

「この世界で生きるため……それは対外的な理由だな」

紫苑は複雑な笑みを浮かべた。

「本当は、ただ私が『あやかしとしての自分』を認められなかっただけのことだ」

「どうして認めようとおもったんだい？」

「そうだな」

紫苑は眼を閉じる。紅の髪。緋の瞳。

「母に……出逢ったからかもしれない」

風に乗って、食欲を刺激する匂いが運ばれてくる。燐は微笑して紫苑に言った。

「桔梗ちゃんお手製の粥だそうだよ」

紫苑は眉を顰めた。

「あいつに料理なんてできるのか？」

「さあ……匂いはまともだけどねえ」

「……………」

やがて運ばれてきた粥を食べ　紫苑は再び床につくことになる。彼が再び目覚めるまでには、実に二日を必要としたのだった。

父の巻

第一章

—

夜半過ぎ。ふと目が覚めて桔梗は身を起こした。隣りで行儀良く仰向けで眠っている紫苑を見つめ、小さく微笑む。以前王の畏にかかり全身に負った傷は、既に癒えていた。

「……………」

桔梗は軽く自分の手で胸元を押さえる。ずっとここに眠っていたもうひとりの自分。四霊獣の一、青龍を御してきた人格。今はもうこの心の中に溶けてしまつて、何故か少し寂しい…………。

「桔梗」

背中から呼びかけられた声に、桔梗は驚いて振り向いた。月明かりに照らされて、紫苑が目を開いているのが見える。

「ごめんなさい、起こしてしまいましたよね」

「…………いや」

紫苑はふ、と口元に笑みを浮かべた。

「構わない」

桔梗はもそもそと寢床に潜り込む。

「狭かったか？」

紫苑に尋ねられ、桔梗は首を横に振った。

「いいえ」

骨張った腕に自分のそれを絡みつかせる。

「ここで寝かせてほしいって言ったのは、私ですから」

「夏になったら、きっと暑苦しいぞ」

笑みを含んだ口調で言うが、桔梗は優しい笑みを浮かべ再び首を

横に振った。

「大丈夫、涼しくしますから」

「できるのか？」

「私は水龍の御子ですよ？」

水は温度によって形を変える。氷も雪も霜も、結局は水であり彼女の支配下にある。桔梗はきつとそのことを言っているのだろう。

そういえば、彼女の手は少しひんやりとしている……。

「便利だな」

紫苑は笑う。桔梗は頬を彼の肩に当て、囁いた。

「だから、冬は紫苑が暖かくして下さいね」

「ああ」

鳳凰族の血を引く彼の力でもって、火鉢の火を保てというのだろうか。ただ部屋を快適に保つためとは、妖力の無駄遣いのような気がする。紫苑はくすりと笑い、腕を彼女の体に回す。桔梗はなされるがままに彼の胸元に顔を寄せた。

紫苑はふと、小さくつぶやいた。

「これから……何度の夏と冬を共に過ごせるんだろうな」

「え？」

「ひとりは、嫌だ」

「……………」

桔梗は目を瞬かせた。もしかすると紫苑は寝ぼけているのかもしれない。

「もう、ひとりになるのは嫌なんだ……………」

紫苑は独り言のようにつぶやきながら、桔梗の長い銀髪を撫でている。

「…………紫苑」

桔梗は両腕を彼の背中に回した。やや薄い肉付きの、ごっごつとした背中。ゆっくりとその形を指先でなぞる。

「紫苑はひとりじゃありませんよ」

桔梗は優しくつぶやく。

「絶対に、ひとりになんてしない……」

最近思う　どうして自分は昔の記憶を棄ててしまったのだろうか。かつて、自分は全てを失った。家族も、一族も、何もかも。だが、彼女にはその記憶がほとんどない。青龍と融合を果たした今も……ぼんやりとしか思い出せない。しかも、それにはほとんど痛みが伴わない。

そうか。桔梗はふと悲しい笑いを洩らした。憶えていたら、辛いから。

人間によって彼らの集落が攻撃されて間もなく、彼女は青龍の力を借りてその場を脱出した。そして、あの場所　紫苑と初めて出逢った場所で、永い眠りについた。何故神獣が水龍を救わなかったのか、その理由も今の彼女にはわかっていない。それが彼らの運命だったからだ。水龍という種族の、運命。それに干渉することは青龍にはできなかった。ひどく残酷で、けれどそれが神にも等しい力を持つ者の定め。彼女が記憶を失ったのは、おそらく青龍がそう計らったからだろう。

それで良かったのか？

ふと、胸のうちから投げかけられる疑問。彼女の中に融けた青龍の言葉だろうか。

「……………」

桔梗は再び眠りについた紫苑の顔を見上げた。穏やかな表情。口元はかすかに緩んでいる。そして、彼女の頭を胸に抱え込んで離そうとしない。

「私は……………」

桔梗はつぶやいた。

「『桔梗』は、あの時生まれただ……………」

あの日から、彼女の生は再び始まった。まるでかつての自分を脱ぎ捨て、新しく生まれ変わったように。桔梗にとってはそれが事実だ。青龍に良かったのかと尋ねられても、それに答える術はない。

御子。

ひとりの男の顔が、脳裏をよぎった。彼女と同じ水龍族の……若者。一緒に行くことはできない、と言った彼女を悲しげな瞳で見つめていた。紫苑に手を出したことは許せなかったが、それでも命を奪う気にはなれなかったのは、あの目のせいかもしれない。どうしようもない孤独がそこにはあった。けれど、彼女にはどうすることもできない……。それは運命でも何でもない。ただ、彼女は紫苑を選んだ。他の選択肢などないも同然だったのだ。彼は今どこにいるのだろうか、と桔梗は不意に思った。

不意に月が陰った。桔梗は僅かに視線を動かして、御簾を見つめる。

「雨に、なりそうですね……」

一刻後、しとしとと雨が降り始めた。だが眠りに落ちたふたりは、それに気付く由もなかった。

二

雨が川面を叩いている。

賀茂川と高野川が合流する地にある下鴨神社。国と都の守り神として、また皇室の氏神として、特別の信仰を受けているその神社の本殿の屋根の上。闇と滴に紛れて不審な影があった。影のかたちはごく普通の若者である。だが、それは間違いなくひとではなかった。鋼色がかかった銀の髪、濃い藍の目。尖った耳と肌に描かれた文様はあやかしの特徴である。

それは、王だった。濡れるのもお構いなしに、ただじつと御所の方角を見つめている。

「やっぱり、俺には入れないな」

「ぼそぼそと彼はつぶやいた。」

「強力な結界が、あの男が張ったのか？」

眉を寄せる。尖った顎からぼたぼたと水滴が落ちた。

「そついや残りの神獣は今、どうしているんだろつな」

神獣がこの地上で集うわけにはいかぬ。どんな事情があろうとも。

「『だが、地上に生きる命の形を取れば　もしくはその者と契約を結べば、可能になる』」

王はかつて聞いた言葉を、繰り返した。

「朱雀と青龍はこの地に降り立った」

西の方角を眺め、やがて北の方角を見る。

「残るは白虎と玄武……か」

それにしても何のために。

不意に体の芯に寒さを感じ、王はぶるりと体を震わせた。底知れぬほど深い深淵をふと覗き込んだような気がしたのだ。

「まあ、いい」

彼は強張った頬に無理やり笑みを浮かべる。

「今は……あの男のことだ」

俺はまだ諦めない。拳をぎゅっと握った。

「もう、ひとりでは生きていきたくない……！」

雨粒が彼の頬を濡らす。それはまるで、涙のようだった。

三

はあ、はあ、はあ。

少年の荒い息が洞にこだまする。

「いきなり雨が降ってくるなんて、聞いていないよね」

「じゃあ。足元で鳴く白い猫を見下ろし、ふう、とため息を吐いた。ぶるる、と猫は身震いをする。滴が飛び散り、少年はかすかに顔を顰めた。」

「それにしてはさ、急にどうしたの？　今まではあんまり都に近付くなつて言ってたのに」

にゃあ。猫はただそう鳴くだけだが、少年はうんうんと頷いた。

「そりゃ僕も嬉しいけどね。お父さんに会えるんだもの」

彼は濡れた顔を上気させる。

「どんなひとなのかなあ、お父さん。いきなり会いに行つて驚かれやしないかな」

にゃあ。猫はそ知らぬ顔で天井を見上げている。

「何よりもさ、僕がこんなに大きいとびっくりすると思うんだよね」
闇の中できらりと光る利発そうな目は、琥珀色をしていた。

「僕つてどう見ても十二、三歳だけど……本当は三歳くらいなんだもの」

にゃあにゃあ。猫は僅かに長く鳴いた。少年はそれに答えることなく地面に座り込む。

「とりあえず今夜はここで過ごそう。疲れちゃったし」

にゃあ。猫は目を細めた。既に地面に丸まって眠りにつこうとしていた彼の体を、ふんわりとした白い何かが包み込む。それは風を集めた。つまり、空気を凝集させて作った即席の寝台であった。

「おやすみ、とら……」

少年はつぶやいた。とらと呼ばれた純白の猫は、少年の足元に丸くなる。

外では雨音だけが世界を支配していた。

第二章

—

一晩中続いた雨も夜明けと共に勢いを弱め、桔梗が目を覚ました頃にはすっかりあがっていた。

「……………」

夜中に一度目覚めたせいか頭が重い。それでも隣にいない紫苑のことが気に掛かり、ゆっくりと体を起こした。

「お目覚めになりましたか」

振り向くと廊下に佇む女房姿の式神。彼女は菜々子といい、菜の花の精霊である。萌黄色の衣をまとう姿は春らしく、華やかだった。

「紫苑は……？」

寝ぼけ眼をこすりながら尋ねると柔らかな声が返ってくる。

「いらっしやいますよ」

「今日は、宮中には行かないんだ」

「ええ」

彼女もつすず気付いていたが、紫苑はあまり宮中には行きたがらない。否応なしに彼の出席が求められる時は別だが、そうでもなければできる限り足を運ぼうとはしない。この屋敷において、何か彼の元に厄介事が持ち込まれれば 依頼されれば、それを解決する。彼はそうやってこの都を守ってきたのだ。少し前まで参内することが多かったのは、燐を宮中に復帰させるための働きかけを行っていたのと、彼の復職が決まった後も様子が心配であったからであろう。桔梗の知らぬことではあるが、紫苑の参内回数が増えたというだけで、様々な憶測が貴族たちの間で流れていたほどであった。

「燐さんは？」

「もうお出掛けになりました」

「そっ……」

どうやら彼は宮中で上手くやっているらしい。燐の妻があやかしであったという事実は消えない 誰より燐が消したいとは思わなিদらう。そして彼女がひとによって殺められたという事実も。だが、他人の記憶は薄れていく。現に、今となってはほとんど誰もそのことを口にはしなくなっていた。少なくとも、表向きは。

「朝餉になさいますか」

「うん」

桔梗はのろのろと寢所から這い出した。成体になろうが、青龍と

融け合おうが、桔梗は桔梗でしかない。その仕草は幼い頃と全く変わるどころがなかった。

一一

調べ物をしながらうつらうつらしていた紫苑は、突然首に回された手に思わず床から飛び上がった。息が苦しい。殺気を感じたわけではないが、とっさに体が反応した。

「きゃあ?!」

甲高い悲鳴。

「……………」

紫苑は眼下に広がる銀髪を見つめて瞬く。反射的に背後の人物を引き倒し、拘束する体勢を取ったのだが……。

「……………」

視線の先にある白い頬に朱が指している。青い瞳は痛みのせいか驚いたせいか僅かに涙を溜めているようだった。

「痛い……………」

「す、すまん」

紫苑は慌てて極めていた関節を離す。未だぼうつとしているのは状況が飲み込めていないせいだろうか、それとも眠気が完全には去っていないせいか。紫苑は桔梗に押し掛かったまま首を傾げた。

「何故、私はお前に首を絞められたんだ？」

「!?!」

桔梗が驚いたように彼の顔を見上げる。

「首なんて絞めてませんよ?!」

「そうか? 苦しかったぞ」

紫苑の真っ直ぐな紫電の瞳を見つめ返し、桔梗の頬がますます赤く染まる。

「そ、それは……………力が入りすぎただけ……………」

「もっと軽く絞めるつもりだったと？」

「ば、馬鹿!!」

「ぐはっ」

桔梗の蹴りが鳩尾に当たり、紫苑は思わず桔梗の上にくずおれるように倒れた。

「し、紫苑！ 大丈夫ですか？」

「け……蹴ったのはお前だぞ……」

「ごめんなさいいい」

桔梗は、荒い息をつく紫苑を抱きしめる。ふわりと彼を包む甘い匂い。 紫苑は我に返った。

「桔梗」

「な、何です？」

動揺もあらわに桔梗が聞き返す。

「わかったぞ」

「何がですか？」

紫苑は痛みをこらえながらも小さく笑った。 桔梗はただ彼の背後から抱きついただけで、それがたまたま彼の気道を絞めてしまったのだ。居眠りをし掛けていた彼はその結果だけに反応して、桔梗を押し倒してしまった。 押し倒し……て？

「!!」

紫苑は体を起こそうとしたが、彼の背中にしっかりと回されている桔梗の腕に引つ張られて再び彼女の体を床との間に挟み込んでしまった。

「紫苑？」

「いや、その」

紫苑は桔梗と目を合わせて露骨にうろたえた。柔らかく、温かく触れるもの。彼を包み込む芳しい匂い。澄んだ瞳が彼を映し、艶やかな唇が彼の名を呼ぶ。

「紫苑……？」

頭に血が昇った。確かに、彼らは最近しとね毎晩褥を共にはしている。

だが燐がからかうとおり、彼らはただ身を寄せ合って眠るだけだ。それだけでしあわせだったし、満たされていた。だから。

「紫苑？ どうしたんですか？」

桔梗は固まって動こうとしない紫苑の頭にそつとその手の甲を押し当てた。

「顔が赤い……熱でしょうか」

「……………」

彼女の拘束が緩んだ隙に、紫苑は体を起こす。乱れた着衣を直しているうちに桔梗もびよこんと起き上がった。

「すまなかつたな」

「え？」

「痛かつただろう」

紫苑は彼女の手首をそつとさする。そこには、紫苑の手形が赤く残っていた。

「たいしたことありません」

桔梗はにっこり微笑んで首を横に振る。紫苑の手を掴んでやんわりと離させた。

「私の方こそ、驚かせちゃってごめんなさい」

「構わない」

「……………」

桔梗は少し考えるような表情を見せた後、急ににっこり笑った。

「じゃあ改めて」

「え？」

どん、と突き飛ばされて紫苑は背中から床に落ちる。胸の上に乗っかかっているのは桔梗だ。細い腕が彼の首に巻きつき、肩口には彼女の吐息がかかる。全身をびったりと紫苑に寄り添わせて、彼女は安心したように吐息をついた。

「……………」

紫苑は天井を見上げ、やがて小さく笑い始める。まったく、甘えん坊な小動物だ。

「さつきも、こうしたかったのか？」

紫苑は囁くように尋ねる。桔梗の体がぴくんと震え……やがて小さく頷いた。

「そうか……」

紫苑は黙って桔梗の肩を抱きしめる。空いた片手で長い銀髪を梳くと、桔梗は気持ち良さそうに目を閉じた。

「……………」

紫苑は唇を僅かに開けて、発音するには気恥ずかしい言葉をそらに向けて刻む。

こうやって、誰よりも近い場所にいられるということ。それが何よりも心地よかった。

三

「うほ、うほ……」

藤原雅哉邸の離れ。十代半ばの少年が一人、床に臥せていた。摂政である藤原時雅の末子、蓮である。現在は蔵人として今上の側仕えをしているが、体調を崩したために一端兄の屋敷に退出していた。

気だるい午後。見舞いの者も途切れ、看病してくれていた義姉も今は席を外している。

「……………ふう」

早く完治して参内しなくては……。眠くもないのに、無理に目を閉じる。そのとき 不意に、何者かの気配がした。はっと眼を開ける。

「ひっ」

蓮の喉が小さな音を洩らした。その口が、大きな掌で塞がれる。

「声を出すな」

視線に射抜かれて体が動かない。彼を見つめるのは深い藍色の瞳

だった。そして　　昼の強い光を背負い、それを反射して煌く銀糸の髪。

「お前が、藤原蓮だな？」

「……………」

声が出せぬままこくこくと頷く。　　蓮が思いどおりにならなければ、きっと殺してしまうのだろう。そんなことには全く躊躇わないというような、そういう気配が彼からは感じ取られる。蓮には分からない。それこそがあやかしである彼　　王の発する殺気だということが。

「いい子だ」

王はにやりと笑った。

「騒くなよ。誰かが来たとしても、俺はそいつらごとお前を殺してしまえるんだからな」

「……………」

蓮はこくりと頷いた。恐慌状態は既に脱している。自分でも意外なくらい冷静に、蓮は彼の口を塞ぐ手を軽く叩いた。

「騒がない、ということか？」

蓮は視線で促す。王はあっさりと手を離した。

「話分かる坊主で助かったぜ」

「……………僕に何の用ですか？」

声を低め、蓮は尋ねる。

王はどっかと床に座り込んで胡坐をかいた。浅黒い精悍な顔立ちと、薄汚れた白い衣が妙に似合っている。野性的ではあるが野蠻ではない。ただ、ぎらぎらとした藍色の瞳だけは鋭く、そして何となく嫌な感じのする光を放っていた。

「お前、帝の側仕えをしてるんだろ？」

「え、ええ……………」

「で、お前の姉貴は帝の妃だよな？　第一皇子　つまり世継ぎを産むことを期待されている」

「……………」

戸惑う蓮を尻目に、王は話を進める。

「藤原家としちゃ、天皇家と姻戚関係を深めるまたとない機会って訳だな。……だが、もし」

不意に王の顔から余裕ぶった笑みが消えた。

「先帝の息子がもうひとりいたら……どうする？」

「え？」

蓮は眉を顰めた。

「でも、男の御子さまは今上おひとりのはず……」

「ま、もし隠し子がいたって、弟なら問題ないよな」

蓮の不可思議そうな顔がやがて驚愕の色に染まる。

「まさか……」

「そう」

王は再び笑みを顔に浮かべた。

「どうやら今の天皇には兄貴がいそうだってんだなあ、これが」

「……………」

蓮は息を呑む。父や兄たちの姿が頭を駆け回り　そして宮中に

暮らす姉を思う。

「で、でも……そんな話、一度も聞いたことが」

「まあ、そいつが皇位につくことはあり得ないんだがな。事実を知ってるやつもほとんどいないだろうし」

王は妙に砕けた口調で蓮に語る。だが殺気そのものは全く和らいでいない。

「今の帝本人はそれを知ってるのかね？」

「……………」

蓮はつぶやいた。王は満足げに頷く。

「やっぱりな」

「そ、その話、本当なのですか?!」

思わず恐怖を忘れて詰め寄る蓮に、王は鷹揚に手を振った。

「証拠が欲しいんだろ？　やるよ」

「……………」

どこからともなく取り出した書簡の束。古いものらしく、ところどころが破れている。

「それは……？」

「これは先帝が書いた手紙だ」

「……先帝が？ 誰に？」

「そりゃあお前」

王は立ち上がる。その表情は逆光になって見ることができなかつた。

「子供の母親あてに決まってるだろうがよ」

「……そんな……」

「それ、くれてやるよ」

「え？」

「ただし」

蓮の耳にはその言葉が酷く大きく聞こえた。

「俺のことは他言無用だ。……分かったな？」

凄みのある声音に、蓮はぶるりと体を震わせた。

「他のことは兄貴たちと相談して、好きにすればいいさ」

「……………」

手の中に残された書簡。蓮の視線が一瞬それに落ち、再び王の姿を捜し求めた時 既に彼は部屋にはいなかった。

第三章

—

藤原蓮が復調して再び出仕したのと、その噂がどこからともなく囁かれ始めたのは、ほぼ同時のことであった。

「……………燐さま」

ちょうど退出しようとしていたところに声を掛けられ、燐は振り向く。彼をそのように呼ぶものは一人しかいない。乳兄弟である遠野有平である。

「久しぶり」

燐は微笑むが、有平の表情はどこか強張っていた。

「復官なさいましたこと、おめでとうございます」

「ああ。それは紫苑のお陰だ」

「……………」

びくり、と有平の肩が震えた。燐は訝しげに彼を見つめる。

「どうかしたの？」

「お話がございます」

「何の話？ 大事なこと？」

「ええ……………」

有平は辺りをうかがうようにしてから、小声で囁いた。

「貴方さまのご友人は、私にとっても大切な御方なれば……………」

「……………」

紫苑のことか。燐は合点して頷く。

「分かった。君の屋敷に連れて行って欲しい。話はそこで」

「承知致しました」

燐は自分の乗ってきた牛車の童に何事か告げた。顔立ちの整った、それでいて無表情な童はこくりと素直に頷いて牛を引いて帰って行く。

「あれも……………」

「そう。式神だよ」

燐は有平の胸のうちを読んだように応えた。

「若竹の精霊さ」

「若竹の……………」

「つまり筍、だよな」

燐はくすりと笑った。

「折角裏庭に生えているのに、彼は食べないんだよ」

「そうですか」

「町で買ってくることはあるんだけど……」

「どなたが？」

「奈々子さん　あ、いや彼女も式神なんだけれど。そういえば前は若竹が買いに行っていたなあ」

「筍が、筍を買いに……？」

「何とも言えないよねえ」

隣はくすくすと笑う。有平は表情豊かになつた彼を慶ぶと同時に何ともやりきれない心地を抱え、嘆息を静かに噛み殺した。

二

「兄上」

伴雅の額から一筋の汗が流れ落ちる。まだ夕暮れ時から肌寒くなる季節だというのに、向かい合う雅哉もじっとりと汗ばんでいた。ふたりの席の間に置かれた紙の束。それは蓮が謎のあやかしから受け取ったというものだった。藤原邸の奥、誰も近づかないように命じて彼らは額をつき合わせている。

「これは本物なのでしょうか」

伴雅の声がかすかに震える。

「分からね……が」

雅哉はつぶやいた。

「父上にこれらを見せたところ、筆跡はまさに先帝のものであると仰っていた」

「ということとは……」

「早合点するわけにはゆかぬが」

雅哉はため息をつく。

「……可能性は高い」

「お上はまだ」

「ご存じない」

「しかし噂になっております」

「一体どこから」

「雅哉が気色ばんだ。」

「お前か。蓮か」

「いえ」

「伴雅は一瞬口ごもり、

「そうではありませぬ。どうやら蓮にこれらを渡していったあやかしが、何人かの公達にも接触しているようで」

「……そうか」

「我々がこの書簡を持つと知る者は居らぬようですが」

「知られればただでは済むまい」

「雅哉はため息をつく。」

「今上のお耳に入ったら何とするか……」

「……………」

「伴雅は沈黙した。雅哉はまるで独り言のようにつぶやく。」

「まさか彼が 先帝の忘れ形見であったとはな……」

「しかし、まだそうと決まったわけでは」

「だがそう考えると様々なことの辻褄があつではないか」

「兄の言葉に伴雅は再び息を呑んだ。」

「これらは、伊達や酔狂で偽造できるものでもあるまい」

「このような上質な紙を自由に使用できる身分の者など、そうはいない。」

「それにしても」

「伴雅は眼を細めた。」

「蓮にこれを渡したあやかしは……何者なのでしょう」

「特徴を聞いたとき、私は水龍族の者かと思ったが」

「しかし、男だということでした」

「ああ。無論、彼のところにいるあやかしとは別の者だろう」

「ええ……」

伴雅はあの美しく残酷なあやかしの姿を思い出し、小さく身震いした。射るような冷たい氷の眼差しと、月の光を梳いたような銀髪血の色を宿し、言葉の刃を放つ唇。彼のために、この世の秩序を乱さぬと誓った者。

「どうしたものだろうな……」

既に夕闇が帳から侵入してきている。目の前に積まれた紙束を眺め、ふたりはどちらともなく嘆息を洩らした。これは封印されているべき秘密だったのだ。雅哉は思う。真実を曝露したところで、何もいいことはない。きつと誰かが傷つくだけだ。

「一番傷つくのは」

伴雅がぼつりとつぶやいた。雅哉ははっと彼の顔を見つめる。

「彼なのかもしれませぬ……」

「……………」

雅哉は言葉もなく、視線を床に落とした。

三

夕餉の支度が済んだ頃、桔梗は燐の部屋を覗いて首をかしげた。

「あれ、さつき牛車が戻る音がしたのに」

「ああ、燐なら伝言があった」

紫苑は彼女の背後に立ち、

「どうやら今日は遅くなるらしい。夕餉も済ませてくると聞いた」

「何か御用ですか？」

「幼馴染のところへ立ち寄るんだそうだ」

「おさななじみ……？」

「燐の乳母が彼の母親だったそうだ」

紫苑は桔梗の手を引き、その場を離れる。

「……………」

桔梗はつかまれた手に視線を落として軽く顔を赤らめるが、黙っ

て彼の後に従った。中庭に面した廊を静かに歩いていくふたり。空は既に夕焼けの色を残していない。

桔梗はふと思いつき、尋ねた。

「そういえば紫苑には、乳母って……」

紫苑は不意に立ち止まる。勢い余った桔梗は彼の背中に頭をぶつけた。

「ご、ごめんなさ」

「私は」

紫苑は独白のようにぼそぼそと言葉を紡ぐ。

「物心つくまでのことを何も知らぬ……」

「……………」

しまった、と桔梗は唇を噛んだ。幼少の頃のこと、紫苑にいい思い出などあるはずがない。父は誰かも分からず、母とは引き離された。引き取られた後も義父に疎まれ、義母に拒絶され、乳母がいたとしても彼の存在を受けて入れていたとは思えない。

「ごめんなさい」

もう一度謝って桔梗は背後から彼に腕を回した。言葉は先ほどと同じだが、意味は違っている。そのまま、ぎゅうつと抱きついた。

「……………」

紫苑の手がぼんぼん、と彼女の手の甲を叩く。彼女の気持ちはわかっている、とでもいうようだった。

「お前が何も気にすることはない」

その声は穏やかで、桔梗はほっと息を付く。

「済まなかったな」

「いえ、そんな」

「いやあ。」

「……………え？」

突然足元から響いた声に、二人は目を丸くした。

「いやあ。再び鳴き声。そして、ごろごろと喉を鳴らす音。」

「えっと……………」

桔梗の足に一匹の白猫が体を擦り付けていた。

「やあ、すみません」

澄んだ少年の声。中庭の方角からだった。警戒することも忘れ、ふたりは視線をその声の方角へと向ける。子供が、中庭に立っていた。

「……！！」

紫苑は驚いて息を呑む。同時に背中にへばりついていた桔梗を剥がして身構えた。少年はにこにここと紫苑を見つめている。

「その猫、僕のなんですよ」

「そ、そうなんですか」

桔梗は特に緊張する様子もなく猫を抱き上げる。何となく見覚えがあるような、懐かしい気配がした。

「……誰だ？」

紫苑は低い声で尋ねる。

少年はその琥珀色の瞳をゆっくりと細めた。健康的に焼けた肌を彩るのは細い桜色の髪。肌に文様はないが、それでもその特徴がひとのものでないことは明らかだった。

「貴方が御門紫苑さんですね」

少年はひと懐っこい笑みもそのままに彼に近付いてきた。紫苑は戸惑いながら、警戒は緩めない。

「はじめまして」

「いやあ。桔梗の腕の中で、猫が鳴いた。」

「僕、父に会いに来たんです」

「父親、だど？」

紫苑はあつと声を上げた。

「まさか……」

その桜色の髪には見覚えがある。彼の風貌も、良く見れば誰かの面影を強く宿していた。

「隣と、さくらの……？」

紫苑の聲がかすかに震えた。少年は笑みを消し、頷く。

「僕は、橘燐に会いに来たんです」
彼ははつきりと、そう言った。

第四章

—

遠野有平の屋敷は、京の西の外れにあつた。都の北西に位置する紫苑の屋敷から南にずっと下り、さらに西へと向かつたところにある。遠野家はそれほど身分の高い家という訳ではないから、御所から随分と離れているのも仕方がない。まだ日が沈みきつてはいないというのに、辺りは静まり返つてまるで深夜のようだ。小さな蛙の鳴き声だけが、時折静寂の壁を通り抜けて響いてくる。

屋敷の奥まつた場所にある小部屋。家人に誰も近づかないように言い渡し、有平は燐をそこに通した。そして語られたのは、宮中で囁かれている噂 すなわち、御門紫苑は先帝の忘れ形見であるらしい、と。

「何を……」

笑い飛ばそうとして、燐の顔が引き攣つた。頭の中をめぐる幾つかの疑問 何故、禁忌の半妖たる彼が殺害されることもなく生かされていたのか。何故、蘇芳は弟子としてではなく、養子として御門家に彼を迎え入れたのか。何故紫苑の父は鳳凰族最後の御子と、蘭妃と交わることができたのか。個人的に逢う事ができた人間などほとんど居ないはずだ。まして彼女が妊娠してから出産するまで、その事實はひた隠しにされていた。一体どうやってそこまで秘密を徹底させることができたのだろうか。今まで考えもしなかつたことが幾つも浮かんでくる。そしてその全ては、有平の言った「噂」で説明がついてしまうのだった。

「わたくしめには本当のところはわかりませぬが……」

「ああ、うん」

燐は両袖を合わせ、その中で腕を組む。

「でも、どうしてそんな話が」

「不可思議なあやかしが出没しているようなのです」

「あやかし……？」

「ええ」

有平はそのあやかしがどこかに潜んででもいるというのか、やけに声を低めた。自然と燐は耳を彼の方に寄せる格好になる。

「長い銀の髪を持ち、濃い藍色の目を持つ……」

「何だつて？」

燐は思わず声を上げ、体を跳ね起こした。

「どうかなさいましたか」

不思議そうに首をかしげる有平に、燐は軽く首を振った。内心の動揺を抑えつけるために無理やり微笑む。

「それじゃあまるで水龍じゃないか。絶滅したんだらう？」

「ええ。しかし目撃したものは皆等しく申しております。『あの容貌、そして放つ殺気。まさしく殺戮者と呼ぶに相応しい威容であった』と」

「……………」

壬だ。燐はすぐにそう思った。だが、無論ここで口に出すわけにいかない。彼がそういう行動に出る動機はわかる。彼は、紫苑を憎んでいた。自分たちの御子をたぶらかしたとでも思っているのだからか。それとも、あやかしの血を引いている禁忌の半妖である彼が、ひとの世で安穩としているのが許せないのだからか。

もし紫苑が先帝の落胤だと知られればどうなるか……想像に難くない。今上よりも紫苑の方が数年ほど年長である。無論、既に御門家に養子に入って臣籍に下った紫苑に皇位継承権はないが、恐らく宮中では一悶着あるだろう。今上が紫苑に寄せていた信頼も、事と次第によってはどうなるか分からない。結果、紫苑はこのまま都に

いられるかどうか　微妙なところだ、と燐は思った。

全てはかつての許婚、桔梗を取り戻すために　水龍の御子を、
一族の手に取り戻すために。

「何てことだ……」

燐は嘆息した。

二

「燐の……息子だと？」

紫苑の掠れた声が風に流れる。桔梗は分かっているのかいないのか、きよとんとして少年と紫苑の顔を見比べていた。

「はい」

少年はきつぱりとうなずく。

「しかし、さくらが身籠ったのは二、三年前……」

「僕はひとの世でないとここで育ちましたので」

あっさりと、とんでもないことを言った。

「何？」

紫苑もさすがに眉を顰めた。

「父が帰ってきてから詳しいことをお話したかったですけど……」
少年は困ったように首をかしげる。

「今話さないと駄目ですか？」

「それは……」

紫苑は困惑して言葉を失う。確かに、彼は燐とそっくりだった。

燐を幼い頃から知っている紫苑が言うのだから間違いはない。そしてその髪の色は　さくらと同じ。

「あ」

桔梗が小さく声を上げた。彼女の腕に抱かれていた猫がかすかに発光している。

「桔梗！」

紫苑が叫ぶのと、

「とら」

少年が落ち着いて呼びかけるのは同時だった。

桔梗は特に慌てた様子もなく、猫をそっと放す。白猫は光を放ちながら徐々に夕闇を侵し やがて、

「虎……？」

紫苑は茫然とつぶやいた。彼も画の中でしかその存在は知らない。だが、それは明らかに白い虎だった。

「……白虎」

桔梗の静かな声に、紫苑ははっと振り向く。

「白虎、だと？」

お初にお目にかかる。鳳凰族の血を引く最期の者。

その声はあたりの空気を震わせることなく、それでいてその場にいたもの全ての耳に届いた。

それから、久しぶりだな。青龍よ。

「……………」

桔梗は黙って虎の金に光る目を見ている。……やがて、柔らかく微笑んだ。

「私にははつきりとした記憶はありません。でも、貴方の放つ気はとても懐かしい」

紫苑もまた、かすかに血がざわめくのを感じた。かつて朱雀と交わした契約のためかもしれない。朱雀もまた、白虎の気に反応しているのかも……。

この少年、朔さくは確かに橘燐とさくらの息子だ。

白虎は敵かな口調でそう告げた。

どうか、信じてやって欲しい。

「けれど、どうして……………」

もつすぐ橘燐が帰宅する。暫し待たれよ。

紫苑の言葉をやんわりと遮り、白虎は言う。その柔らかな低音に、紫苑は言われるがまま口を噤んだ。

「貴方は」

桔梗が口を開いた。いや、そのとき彼女は青龍だったかもしれない。

「その子供を 朔を、選んだのですか」

白虎は微動だにしない。だが、それは確実に肯定の意味を含んだ沈黙だった。

「……………」

桔梗は微笑を浮かべ、頷く。

ここに、四聖獣の三が集っている。その異常さを急に自覚して、紫苑の体に不意に身震いが走った。

「紫苑？」

桔梗が声を掛け、紫苑の肩に手を触れる。

「……………何でもない」

紫苑はつぶやき、だがその桔梗の指先をそつと握った。今はこうしていたい。きっと朔がいなければ彼女を抱きしめていただろう。押し寄せてくる運命の奔流を感じて、彼はどうしようもなく怖かった。

三

「何だ?!」

根城としていた廃屋の床から飛び起き、壬は小さく叫んだ。

今、空気が変わった。どうしようもなく大きな力の存在を感じる。

青龍を目の前にしたとき、感じたのと同じ気配……………。

「何だっって言っただよ……………」

壬は立てた膝を片腕で抱え込み、もう片手は髪の中に突っ込んだ。銀髪が視界を塞ぐ。並外れた妖力を持つがゆえに感じてしまう、異様なまでに強く張り詰めた空気。それでも。

「神獣だか何だか知らねえけど」

ぎりり、と齒を食いしばる。

「俺は負けねえ」

もし負けてしまったら……もう、彼には何も無いのだから。

第五章

—

紫苑は白虎に問うた。

「朔はひととあやかしの子供……。つまり、半妖なのか？」

「ああ」

声をあげたのは朔だった。少し悲しそうな目で傍らの神獣を見る。

白虎はその黄金色の瞳で紫苑を見つめた。

実のところ、朔はひとでもあやかしでも……半妖ですらない。

「え？」

紫苑は意味がわからずに聞き返す。

「どういふことだ？」

「僕は、一度死んでいるんです」

朔は重々しい口調で言う。

「母から産まれる前……母が亡くなった時、一度は僕も命を落としました」

「……………」

紫苑は絶句する。考えてみれば当たり前だった。彼はさくらの亡骸を見ている。その身に新しいのちを宿しているとは見えな
いほど、ほっそりとした体つきだった。まだ朔が彼女の胎内に生ま
れて間もなくであつたらう。

紫苑の眉根がきつくしかめられる。あのと時の隣の悲しみは
直視することができなかつた。いつも暖かい彩りを宿していた琥珀

の瞳は絶望に凍りつき、震える歯はまるで何かに牙を剥きたがっているようにかちかちと音を立てていた。

僕は……守れなかった……。

痛い。紫苑は拳を握る。胸が痛くて、血の気が引いた。記憶が生々しすぎるからだろうか。いや、むしろあの当時は違った。確かに悲しかったし、辛かった。燐が望むのならさくらを手に掛けた人間どもを八つ裂きにしてもいい。一瞬、そう思ったくらいだった。けれど、怖くはなかった。いつか、自分も彼女のようにひとによって屠られるのかもしれない。その予感すらも、彼をおびえさせることはできなかった。しかし、今は……。

「紫苑？」

強張った彼の体をいたわるように触れる、暖かな手。腕をそつとさすってくれる彼女の手をとり、力強く握った。

怖い。紫苑は認める。桔梗を失うことが、何よりも怖い

……。

もしそんなことがあったとして、自分はどうなってしまっただろう。そんな考えが頭によぎっただけで、まるで冷たい炎に包まれたような感覚に襲われ、体中を嫌な汗が流れた。そんなことには耐えられない。

「大丈夫？ 紫苑……具合が良くないみたい……」

桔梗が困ったように朔と白虎を見た。紫苑を自室で休ませるにも、来客の手前どうすべきかはかりかねたのだろう。

白虎はそれを見越したかのように告げる。

我々はここで燐の帰りを待たせてもらうが、紫苑どのお立ち会いたく必要はない。先に休まれよ。

「しかし……」

ためらう紫苑の目の前で、朔が進み出た。

「でも紫苑さん、本当に顔色が優れませんよ。すみません、驚かせてしまって……」

「いや、そんなことはないが」

「後は大丈夫ですから、今日はお休み下さい」

そういつて見上げる表情は燐そっくりだった。ひとでもなければ、あやかしでもない。半妖ですらない。白虎の言葉の意味はまだ分からない。朔は彼の表情から何かを読み取ったのか、わずかに険しい顔つきになった。

「僕は魂を白虎に拾われ　彼が作ったひとがたに封じられたのです」

「ひとがた？」

「人形　と言っても構わないんですけど。紫苑さんならご存知でしょう？」

「?!」

紫苑は息を飲む。それではまるで、陰陽師の使用する式神ではないか。確かに、陰陽師は人間の魂を扱うことはできないし、許されていない。だが魂をひとがたに入れて生き物とする、その発想はまさに式神のそれである。実のところ、式神を作るときに使うひとがたは何でも良く、魂の抛り代となりさえすればいい。紙で作る場合が多いのは、それが簡単であり、呪も込めやすいからだ。魂が入りさえすれば、姿はその魂の有り様によって決まる。

朔は弱々しく微笑んだ。

「でも、いいんです。……こうして、父に会いに来れたのだから。

本当なら、僕は父の顔も知らぬまま死んでしまっていた」

「……………」

紫苑は言葉を失ったまま、ただ朔の顔をまじまじと見つめていた。死亡した胎児の魂をひとがたに入れるとは　神獣である白虎にだからこそ可能だったことだろうが、それにしても……。

「紫苑さん？」

彼の声に我にかえると、朔は少し不安そうに紫苑を見ていた。

まるでかつての自分のように……抛りどころを、自分を認めてくれる誰かを、求めている顔だった。

「……………」

紫苑は朔を見つめてしつかりと頷いた。

「父子水入らずの対面を邪魔するつもりはない……我々は奥にいよう」

「はい」

「話はまた明日にでも聞かせてくれ」

この少年がただ父親に会うためだけにここに来たわけでもないだろう。彼は白虎を連れてきているのだ。

朔は頷く。

「……是非」

真つ直ぐな、美しい瞳。さくらが愛した男の面影は、彼女と同じ色の薄紅の絹糸に守られている。間違いない。朔は燐とさくら、ふたりの子供だ。そう思うと同時に、紫苑は自分の内に沸き起こってきた感情の正体に驚愕する。それはまごうことなき、羨望だった。

二

燐はゆつくりと歩みを進めていた。風が冷たい。だが、胸中にくすぶる感情の火種は消えることはなく、むしろ徐々に燃え立っていた。

なんてことだ。

戸惑い。懸念。疑惑。そのすべてが、彼の歩みに重りを結ぶ。

紫苑に言うべきなのか、言わない方がいいのか……。

「彼が先帝の、第一子だって……？」

燐は唇を噛み締める。

戦の勝者たる帝が、敗者の娘に子を孕ませた。そして紫苑が生まれ、我が子と引き離された蘭妃は失意と狂気のうちに死んだ。いや、彼女は我が子への想いが強すぎたためにもののけとなり、つい最近までこの世をさまよっていた。彼女が妄執から解き放たれ本当の死を迎えたのは、かつて心に描いてやまなかった我が子、紫苑の目の

前であつた……。

先帝は何を思つてあやかしに　蘭妃に子をませたのか。権力者の残酷な気まぐれだったのか、それともそこには余人には計り知れぬこころのやりとりがあつたのか……　燐には分からない。ただ一つ確実なのは、

「紫苑は何一つ悪くないつてことだ」

燐は足を止めた。何かの気配がする。強い殺気。そして、同じくらい大きな悲しみ。寂しさ。憎悪。　まるで、さくらを失つた時の彼が抱えていたような。

「……………」

燐は視線を闇の中のある一点に向け、努力して笑みを浮かべた。額に汗がにじむ。

「まさか、君の方から姿を表すとはね……………」

闇の一部が笑つた。

「俺は回りくどいことは嫌いなんぞね」

「その割に、今回は大分まだるっこしい手を使っているじゃないか」
彼は闇をまとつたまま肩をすくめる。

「そうでもないぜ。人間は嗜好きだからなあ。放つておいても広まつたさ」

「……………」

「あんたの奥方があやかしだつてばれたのも、そのせいだろ？」
……………」

「そのせいで　人間たちに殺された」

燐はわずかに目を細めた。

「僕のことはどうでもいい。でも君には聞きたいことがあるんだ」
「こちらもあるの用事はどうでもいいんだよ」

彼は　王は、にやりと笑つた。

「俺は、あんたを殺そうと思つ」

自室に戻った紫苑は、ふらふらと床に座り込んだ。朔のこと。燐のこと。さくらのこと。そして、桔梗のこと。すべてが目まぐるしく彼の頭を駆け抜けていく。

「でも……」

側にいた桔梗がぼつりとつぶやいた。

紫苑は視線を彼女に向ける。その先で、柔らかな笑顔が花開いていた。

「燐さん、子供が生きていて良かったですよ。どんな形であれ、失われてはいなかったんだもの」

「……」

「難しいことは、私にはわかりませんでしたけど」

桔梗はぼつりぼつりと言葉を紡ぐ。

「でも、朔さんからはいのちのにおいがした。生きている、においが」

「……いのちの」

「ええ」

紫苑は口元を緩める。

「そうか」

まるで我がことのように嬉しかった。燐はどれほど喜ぶだろう。

失われたと思っていた愛児は、人知れず生きていたのだから。それがどんな形であれ、燐は必ず喜ぶに違いない。何故なら、朔の存在はさくらとの絆なのだから。なるほど。紫苑は不意に納得する。先ほど彼が襲われた感情の理由が、ようやく分かった。

「子供……か」

「え?!」

桔梗が何故か大声を上げる。

「どうした」

紫苑が怪訝そうに尋ねると、彼女は顔を赤くしてぶんぶんと首を

横に振った。

「な、何でもありません！」

「そうか」

紫苑は眼を細めて桔梗を見つめる。いのちのにおい。

ふわりと紫苑は袖を翻し、桔梗をすっぽりと包んだ。

「し、紫苑?!」

桔梗は慌てふためきながらも、しっかりと彼の背中に腕を回して抱擁にこたえる。

「これが……そうなのかな？」

紫苑は桔梗の髪に顔を寄せ、息を胸いっぱい吸い込む。みずのにおい。そして、どこか甘い香り。香を焚き染めなくても、そのにおいは桔梗そのものから発せられている。白い首筋に唇を寄せると、桔梗は身を擦った。

「く、くすぐりたい……」

紫苑はくすりと笑ってふう、と息を吹きかけた。

「ひゃっ」

甲高い声を上げる桔梗が可愛らしくて、紫苑はさらに笑いながらぎゅっと彼女を抱きしめた。

「もう、紫苑……!」

むっとしたように名を呼ばれる、その響きすら愛しい。それにこうして抱きしめていれば、決してこの腕の中から消えない。

「……紫苑？」

先ほどとは違う声音で、桔梗は紫苑の名を呼んだ。

「どうしたんですか？ 気分は治りましたか？」

「桔梗」

紫苑は彼女の肩口に顔を伏せたまま、呻くようにつぶやいた。

「お前の幼い頃は 赤子の頃は、どんな様子だったのだろうな」

「え……?」

「出会った時よりももっと小さな頃、お前はどんな風に喋ったり、歩いたりしていたんだろう」

「……………」
「きつと」

ため息のような、吐息のような、そんな掠れた声で紫苑は囁く。
「可愛らしかったのだろうな……………」

「紫苑……………」
「見てみたい」

紫苑の腕に力が籠った。

「お前にそっくりな、銀髪で、青い眼の……………可愛い赤子が」
「……………」

桔梗は真つ赤な顔で、それでも悲しそうに紫苑の髪に手を触れる。
それは決して叶わない望みだと分かっているけれど……………。

「わ、わたしは」

桔梗は照れ隠しのように口早に言った。

「紫苑の子供の頃が見たいです。黒い髪がさらさらで……………」
桔梗はうつとりと目を細めた。

「おめめが大きくて、綺麗な綺麗な紫水晶色なんです」
「……………」

「きつと、すごく可愛いです」
「……………そうかな」

「ええ」
桔梗は自信たっぷりに頷いた。

「絶対に可愛いです」
「私はお前に似ている方がいいと思うんだがな」

「そんなの嫌」
桔梗はぐずる。

「だって、紫苑が私の面倒見てくれなくなるもの」
「紫苑は小さく嘔き出した。」

「子供相手に妬くのか？」
「……………」

桔梗ははにかんだように微笑み、彼の胸元に顔を埋めた。

「ね、こんな風に喧嘩になるくらいなら
紫苑は優しく彼女の髪を撫でる。」

「ふたりきりの方が良いでしょう?」

「……………」

一瞬だけ、彼の手が震えた。

「……………」

桔梗は聞こえないふりで目を閉じる。少しずつ慣れてきたはずの
口付けなのに、今日はひどくぎこちなくて…………切ないくらいに甘か
った。

第六章

—

突然、傍らの白虎が低く唸った。朔ははつと息を呑む。

「……………」

「……………」もしかして……………」
ごくり、と喉が鳴った。空気が張り詰めている。そして、禍々し
い「気」の流れ。都の中でこれほどまでの妖気を発する者が現れる
など、尋常なことではない。紫苑や桔梗も強い妖力の持ち主だ。し
かし普段の彼らはそれが溢れぬように押さえているし、こうして他
人に気取られるようなことはまずあり得ない。

朔は表情を引き締めた。この妖気の持ち主は、ひとに気取られる
ことを全く恐れていない。ひとになど負けぬ自信があるのか。そ
れともそんなことはどうでも良いのか…………。彼の脳裏に浮かんだの
は「水の殺戮者」、水龍族の男。彼の手によって運命はまたひとつ、
歯車を動かした。

御門紫苑。火を統べる者、鳳凰族最後の御子の遺児。同時に、彼

は歴史から抹消された第一皇子でもあった。異端とされながらも朱雀を従え、最強の陰陽師として都を守っている。だが、彼が愛したのは朝敵として打ち滅ぼされた水龍族の御子。そしてその身には青龍が宿る。

橘燐もまた、運命に翻弄されて愛する者たちを失った。それは、決して消えることのない傷。しかし彼の息子は白虎によって再び命を与えられた。彼もまた、これから訪れるさだめの奔流に耐えなければならぬ……。

朔。

白虎の声が頭に響いた。朔は即座に頷き、頭を低くした獣の背に、彼に慣れた様子で飛び乗った。白虎は少々急くように、軽く前足を蹴立てる。

どうやらそこに、お前の父がいるようだ。

「……何だつて？」

すう、と血の気が引いた。

二

ざわり、と体中の皮膚がざわめいた。うとうとと眠りに落ちかけていた紫苑は眼を開け、神経を研ぎ澄ます。彼の腕を枕にして眠っていたはずの桔梗は、既に目を覚まし帳を押し開けていた。月明かりのない、漆黒の空が見えている。

「紫苑」

振り向いた桔梗の表情は良く見えなかった。

「燐さんが危ない」

「え？」

「詳しいことは良く分からないけれど」

桔梗の口調は重い。

「どうやら 王がこの近くにいる」

その名前を聞き、紫苑は跳ね起きた。

我が名は王。その御子と同じ……、水龍族だ。

記憶を失う前の桔梗の許婚であり、かつて紫苑を殺そうとした男。

「王が……？」

喉が乾いて、言葉が喉の奥に絡まった。

「何故、燐を」

「分かりません。白虎と朔さんは既に向かったようです」

「そうか」

柔らかそうな桜色の髪と、澄んだ琥珀の瞳を思い出す。紫苑は黙って身支度を整え始めた。

「……………」

桔梗は何も言わずそれに従う。だが不意に手を止め、桔梗は口の中で小さくつぶやいた。

「……………まだ……………諦めていないのかな……………」

俺たちの一族を滅ぼしたのは人間なんだ。仇なんだよ！！

悲痛な叫び声が脳裏に蘇る。その残響を追い払うように、桔梗は首を左右に振った。支度を終えた紫苑が、彼女の頭を一瞬だけ胸に抱く。

「行こう」

「……………」

桔梗は無言で頷いた。

三

これほどまでにあからさまな殺気を向けられたのは初めてだった。指先から徐々に強張っていくのを感じる。それが恐怖によるものだと気づいた時、燐は大きく眼を見開いた。

僕は……………死にたくないのか……………。

燐は無理矢理に指先を折り曲げ、拳を作る。胸の前で握り締めた

それを、燐は見るともなしに見つめた。自分には何も無い。愛する妻を失い、生まれ出ずることのかなわなかった子供をも同時に失ったあの日から　自分の命など惜しくなくなった。何一つ守れなかったくせにおめおめと生きている自分を心のどこかで嘲り、憎んですらいた。しかし、青龍の魂を宿す「桔梗」と会話を交わした日に、生きていくと決めた。それが彼女の　さくらの、最後の願いだったから。

とはいえ、燐の中に生への執着が芽生えたわけではなかった。日々を生きていながら、どこか現実感がない。紫苑と笑いあっているも、桔梗をからかっているも、どんな時でもこころのどこかが冷えている。それは彼女を失って以来、決して癒えることのない痛みだった。いつか、彼女の元へと逝く日　その日を、心待ちにしていたはずなのに。

「……………っ」
歯の根が合わない。それが情けなくて、燐は無理に歯を食いしはった。震える歯が舌や唇を傷付けるが、気にならない。だが、口の中に広がる鉄錆に似た味は、彼の一番忌まわしい記憶を呼び起こす。

あの部屋中に広がっていた、血の匂いを……………。
「覚悟はできたかい？」

砂利の音が響く。王が立ち位置を変えたのだろう。こんな都の外れの路地を、訪れる人もいるはずがない。燐は死を直視した。

「……………は……………」
つぶやき声が王の耳に届く。

「ん？」
「……………僕は」

燐は立ち尽くしていた。いつの間にか、体中を揺さぶっていた震えは消えている。

「僕は、無力だ」

「……………」
「いつだって見ていることしかできなかった」

子供の頃からそうだった。紫苑がどんなに辛い目に遭っていても、彼には何もできなかった。口さがなく悪口を言う学友たち。彼はいつだって見て見ぬ振りをしていた。

「紫苑の前でだけ親友面をして……僕は何もできなかったんだ」

燐の目から涙が溢れる。この涙すら自分のために流しているのかもしれない。死に逝く自分を悼む、涙。

「僕が窮地に陥った時、紫苑はあんなに奔走してくれたのに……」
さくらを失った後、彼を待っていたのは貴族たちからの白眼視だった。あやかしを妻としていたのだ。無理もない。だが、紫苑は身を挺して彼を庇った。宮中への復帰も、彼が今上にとりなしてくれたからこそだった。

「……………」
王は不思議なものを見るように燐を見ている。

「わかるんだ」

燐は少しだけ微笑んだ。

「もしここで僕が死んだら……きっと彼は悲しんでくれる。桔梗ちゃんには泣くかもしれない。うぬぼれかもしれないけど、そう思う」

「何故、御子が泣くんのだ」

王が「桔梗」の名前に反応する。燐は満足げに顔を上げた。

「だって僕らは仲がいいからね」

堂々と、真つ直ぐに王を見据える。

「僕がただの居候だった頃は、いつも一緒に留守番していたんだから」

「……………」御子が……泣く？」

語尾が揺れた。

紫苑を殺しても、私は貴方のものにはならない。

御子の、否、桔梗の瞳を思い出す。

もし、貴方の手の者が紫苑を殺したら……私、貴方を殺してしまつと思つ。

「……………」

王が僅かに逡巡した、次の瞬間。一陣の風が王と燐の間に割って入っていた。

「誰だ！」

砂埃を避けるために、王は目を半ば閉じざるを得ない。燐は強風に煽られてたたらを踏んだ。よろけた彼の手を握り締める、小さな手。

「父上！」

「?!」

燐は思わず目を剥く。煙った視界の中、鮮やかな桜色の髪が舞った。

「さくら……?」

彼を覗き込む瞳は黄金色で、どちらかというと彼に似ている。しかし目の前の子供は童形とはいえずは超えているはずだ。計算が合わない。それに何より……。

「話は後です」

優しく微笑むその表情に、燐は言葉を失った。それはまさに、彼女の笑顔だった。

第七章

—

「お前、誰だ?!」

王の誰何の声に、少年はきつとした眼差しを向けた。

「あなたこそ、ここで何をしています」

「何を……って」

王の全身を揺らめくような殺気が覆った。

「お前には関係ないだろう！」

「関係あります」

少年はその小さな背中に燐を庇うようにして立つ。

「僕は」

燐は信じられないような思いで、その言葉を聞いた。

「橘燐とさくらの　ひとり息子ですから」

「え……？」

声を上げたのは燐と壬、同時だったかもしれない。燐はあっけに取られて少年を見つめた。確かに彼の髪は淡い桜色で、それは記憶にある彼女のものと変わらない。面差しは燐に似ていて、確かに無関係ではあり得ないだろう。けれど。

「で、でも、君はどう見たって」

「計算が合わないのは知っています」

少年は振り向いて微笑んだ。その微笑みに、燐はまた言葉を奪われる。気がつくのと、彼の目からは涙が流れ出していた。

信じられる。理屈ではなく、こころで。この少年は間違いなく彼らの子供だと……。

「名前を、教えてくれないか」

少年はうなずいた。

「母さんが、考えていた名前だそうです」

「さくらが……？」

燐の目から新たな涙が溢れた。

「それは、何というの？」

「朔」

「さく？」

朔　それは新月を意味する言葉。

「僕らが出会った、夜……」

燐はつぶやいた。確か、彼が山の中で迷ったのは新月の日だったはずだ。月のない夜に道を隠されたお陰で、彼はさくらに出会えた……。

「朔」

「親子感動のご対面ってか？」
無骨な声が空気を乱す。

「……………」
朔は再び険しい顔になって壬に向き直った。

「確か、その男の妻はあやかしだったんだろ？」

壬の目に細い光が宿る。

「あの男とお揃いの、半妖ってわけか？」

「いいえ」

朔ははつきりと言った。

「僕はあやかしでもひとでも、まして半妖でもない」

「何…………？」

「僕は…………」

彼の傍らに一陣の風が巻き起こった。目を細める燐の前にすつと音もなく立ち上がる白い巨大な虎。否、燐とて虎の実物を見たことがあるわけではない。それは壁画として、絵画としてしか見たことがなかった。大抵それが描かれるときは四聖獣の一として、朱雀や青龍らとともに並べられる。

「白虎…………?!」

壬が戦慄の表情を浮かべた。

「何故、…………何故!」

この者は一度死した。

その言葉に、燐の体が震える。やはり、あの時にわが子は死んでいたのだ。それでは今目の前にいる少年は、一体…………？

だが、我がその魂を拾い、かりそめの体を与えたのだ。

「…………そ、それじゃまるで…………」

「ひとがた？」

壬と燐が交互につぶやく。

壬は目の前に立つ神獣の気配に吞まれていた。つやつやと輝く白銀の毛並みも、黄金色に輝く瞳も、どれもあまりに神々しい。何よりも厳しいのに、何よりも優しく暖かな気配。それは、桔梗の中に

眠る青龍と相對したときと同じだった。

「それでも僕は」

朔ははつきりと言った。

「生きている。今までも、これから先も」

その言葉が、燐の頭の中に大きく響いた。 生きている。生きていく。僕にはそんな覚悟はなかった。僕の時間は、さくらを失った時で止まったままだった。僕は生きているわけでも、死んでいるわけでもなかった。せつかく彼女に助けられた命を、無駄にくすぶらせ続けていたのだ……。

「朔」

燐は口を開いた。

少年が一瞬だけ振り返る。その表情はとても子供らしいもので、父親に何を言われるのかという期待と不安が見え隠れしていた。

愛しい。燐は微笑んだ。

「ありがとう……」

「……………」

朔はぼかんと口をあけた後、顔を真っ赤に染めた。

「そ、そんな、ぼ、ぼ、ぼく」

「いい加減にしろ！」

壬の怒声が辺りに響き、そして夜空に爆音がとどろいた。奔流が押し寄せる。それは水のようにうでいて水ではなく、触れれば切れてしまいそうな、それでいて崩れ落ちてしまいそうな脆さを併せ持っていた。それでも勢いはとめないもので。

壬の力が到達する前に、朔は白虎に何か言おうとした。しかしその前に、それはすつ、と掻き消えてしまう。

「え？ え？」

朔が目を瞬かせる。白虎が苦笑する気配がした。

やはり来たか。

「元はといえば同じ一族の者なのですから」

涼やかな声。

「放つてはおけません」

やや子供じみた正義感を滲ませながら、それでも少しも揺れることはしない。まっすぐな眼差しが、王を射た。

「久しぶり 王」

桔梗の声は、どこか悲しそうな響きを宿していた。

二

桔梗の側には紫苑が立っている。ちょうど王と朔たちの中間地点の左方。桔梗は先ほどの王の力を手のひらの中に球状にして抱えていた。その液体の内側を荒れ狂う王の妖力。だが、桔梗はことなげにそれを制御している。

「御子」

「御子じゃない」

桔梗は間髪入れずに言い放つ。

「私の名は桔梗だと、何度言ったらわかってもらえるんですか？」

「わからねえ……わからねえよ！」

王は叫んだ。先ほど一気に力を放出したためだろう、足元は少しばかりふらついている。それでも爛々と輝く目は紫苑を睨みつけていた。

「結局、その男はひとの側で生きているんじゃないか！」

「……………」

紫苑は黙って王を見つめていた。ひとの側だとか、あやかしの側だとか、それは既に彼にとっては意味のないことなのだ。彼はどちらにもなれない。そのことは良く分かっている。だから、大切なのは。

「私は」

紫苑は桔梗の肩に手を触れた。

「桔梗が望むのならば、ひとの世を捨てよう」

「……………!!」

桔梗の体が驚きで小さく跳ねた。

「どこで生きていくかは問題ではない。誰と生きていくのが問題なのだ」

紫苑はあくまで静かに言葉を紡ぐ。

「私には誰もいなかった。だから今まではひとの世にいたのだ。曲がりなりに、育ての親がいたからな」

「じゃあ、あんたは」

王は鋭く尋ねた。

「もしひととあやかしが争うようなことがあればどうするんだ」

「……………」

「あんたはひとを殺せるのか。あんたは」

指が燐をまつすぐに指す。

「あいつを殺せるのか」

「……………」

紫苑は目を伏せた。

「それは……………」

殺せるわけがない、と紫苑は思う。だがそれはひとに限ったことではない。あやかしとて殺したくはない。正気を失い、ものけとなつた者たちは別だ。それは既に命の残滓にしがみついている死者であり、生前ひとであつたかあやかしであつたかは関係がない。紫苑が誰かの命を奪おうと決意するのは、彼自身の生命が危険に晒されたときだけ。それはさすがに仕方がなかった。大人しく殺されても、何も良いことはない。

だが、今の王がそれを冷静に聞き、理解できるとは思えなかった。だから、一言だけ。

「私は、殺さない」

「奇麗事だ！」

王は叫ぶ。

「ひととあやかしは共存できないんだ！ どちらかがいなくなるま

で 殺しあうのが運命なんだよ！」

「そんな馬鹿げた運命は知らない」

紫苑が答える。

「それに、運命など 私は信じない」

「……………」

桔梗が微笑む。それはかつて紫苑が彼女に語ってきかせたこと運命になど従わない。ただ、彼のしたいようにするだけだと。

「ぐっ……………」

壬は血走った目で紫苑を睨む。彼を包囲するのは実質、四聖獣の三だ。桔梗に眠る青龍。朔を守る白虎。そして、紫苑に従う朱雀。「勝てるわけねえよな」

壬は哄笑した。腹がよじれそうなくらいおかしかった。そうだ。自分は彼らには勝てない。どうやったって彼を殺すことなどできない。しかし。。

「いいことを教えてやるぜ」

壬は紫苑を見据えた。冷たい愉悦の色を見て、紫苑は一瞬戦慄する。焔ははっとした。

「紫苑！！」

壬が何を言うのか、彼には予想がつく。聞かせたくなかった。紫苑には、絶対に。。

「あなたの父親は、先の帝なんだよ」

壬は勝ち誇ったように、そう言った。

第八章

—

風が唸る。それは白虎の存在によるものかもしれないが、そうで

ないかもしれない。だがそんなことは王にはどうでも良かった。たとえこの風に頬を切り裂かれたとしても、今の彼は痛みなど感じなかっただろう。

紫苑の顔が強張り、やがて眼が大きく見開かれる。紫電の瞳それはひとではない証。刻み付けられた禁忌の刻印だ。

「え……？」

零れ落ちたのは間抜けなほど小さな声だった。唇が小刻みに震えているのが夜目にも分かる。王は喜色を満面に浮かべて声を張り上げた。

「聞こえなかったのか?! お前の親父は、先の帝だって言ってるんだよ! お前は第一皇子なのさ!!」

「……………!!」

その言葉をようやく理解したというように、桔梗がはっと顔を上げた。細い銀糸が強風に靡く。

「そんな……………」

「お前は知ってたんだろ? 橘燐」

「……………」

燐は苦々しげにうなずく。

「……………燐」

紫苑がつぶやくように名を呼ぶと、燐はのろのろと答えた。

「今日、有平に聞かされた。宮中で密かに噂になっているとど
うやらあれが」

と、彼は王に険しい視線を向けた。

「言っただけだよ」

「俺は何も悪いことはしていないぜ」

王は肩をすくめた。

「昔、蘭妃とやらが匿われていた吉野山を訪ねて行ったら、意外とすぐに彼女のいた場所が見つかった。ちよつと入ってみたら先帝の信書がわんさか出てきてびっくりってわけ」

「嘘だ……………」

紫苑はつぶやいた。彼の顔は色を失っている。

「わたしが……そんな……」

「紫苑」

桔梗が彼の腕を抱く。それを見た壬が、さっと憎悪に顔を染めた。

「御子、今度こそ分かっただろ？ そいつが俺たちの仇の息子だつてことがさ！」

「……………」

桔梗は壬を振り向くこともなく紫苑を見つめている。

紫苑は桔梗に抱かれていない方の手で自分の額を押さえた。どくどくと脈打つ音がする。痛い。壬の声がひどく耳障りだった。

「俺たちを、御子の一族を滅ぼしたのはそいつの父親なんだ！」

うるさい。紫苑はがくりと膝を折った。

「紫苑！」

「紫苑さん！」

桔梗と朔が口々に叫ぶ。燐はただ壬を見据えていた。

「君は……………」

紫苑はぎゅっと眼をつぶった。それでも声は大きく反響する

私の父親が、桔梗の過去を奪った……………？

不意に、白虎が吼えた。辺りが光に包まれ、それは結界だということに燐以外の者が気付く。

「とら？」

朔が不思議そうに白虎を見やった。紫苑は膝をついたまま荒い息をついている。

「紫苑?!」

桔梗が驚愕の声を上げると同時　紫苑は爆発していた。

二

摂政、藤原時雅の屋敷。ひとを寄付けない奥まった部屋に、時雅

とふたりの息子が座していた。藤原雅哉。藤原伴雅。異母兄弟ではあるが、時雅の長男と次男である。特に雅哉は、藤原家次期当主でもあった。

「いかがいたしましたでしょうか」
「……………」

時雅は雅哉の声に瞑目して答えない。

伴雅は雅哉の一步後ろに座していた。こうして雅哉と共に時雅の屋敷を訪れるのは彼にとって初めてのことだ。実際、これまであまり父と私的な関わりを持ったことはなかった。母を捨てた父を恨む気持ちになかったとは言わない。だが彼の足を遠のかせていたのは、所詮妾腹に過ぎない自分の身を軽んじる気持ちのためでもあった。冷たく追い払われるのが怖かったのだ。しかし、雅哉に誘われて姿を見せた伴雅を、時雅は意外なほど優しい眼で見つめた。宮中で出会った時とは全く違う。大きゅうなったな。つぶやかれた言葉に涙が出そうになった。

父とはかように暖かなものか。伴雅は思う。この存在感は何だろう。母とは違う、もっと大らかな、ともすればとらえどころのないような、しかしそれでいて彼をしっかりと包み込む温度。それは母ほど確かなものではない。だが、それでも良かった。ここにはまた違った居心地の良さがある。

そういえば、あの陰陽師は、母も父も知らぬのだな……。伴雅はひとりごちた。

母はどこのもとも知れぬあやかしであるという。父はどうやら先帝のようだが、これはおそらく本人も知らぬのであろう。もし、知ったらどう思うのだろうか。恨むだろうか。呪うだろうか。

今上が異母弟であることを知ったなら、彼は一体……。

「伴雅」

「は、はい」

不意に父に名を呼ばれ、伴雅は居住まいを正した。

「お前はどっと思う」

「……………」
既に宮中には広がりきってしまった、例の噂　今上の耳に入る
のも時間の問題かもしれない。

「愚考かとは存じますが」

伴雅はおそろおそろる口を開いた。振り向いた雅哉は暖かな視線で彼の言葉を促す。

「いっそ、御門紫苑の父親は誰々である、としてしまった方が良い
のではないかと」

「先帝以外の誰か、ということか」

「は」

「良い案だ」

時雅はうなずいた。

「しかし」

伴雅は言葉を継ぐ。

「問題がございます」

「……………」

「一体誰の子であるということにするのか」

「……………そうだな」

「彼があやかしの血を引くことは周知の事実」

「誰も立候補はしたがらないでしょうね」

雅哉が顎を軽く撫でる。

「誰か、既に亡き者を仕立てるか」

「御門蘇芳どのは」

雅哉が時雅に尋ねる。

「何と仰せです」

「今上と紫苑どのの耳に入らぬうちに火を消してくれ、とのことだ」

「それはそれは」

雅哉は苦笑した。

「難題ですな」

「全くだ」

時雅は笑みを浮かべることもなく頷いた。

「噂は静まる気配はありませぬか」

伴雅が尋ねると、雅哉は首をかしげる。

「広まるには広まり終わった感はあるが」

「いつ何時今上の耳に入るか分からぬからな」

「そうですね」

そのとき今上が一体何を思っているのか、伴雅には想像もつかない。

結論の出ない議論を続けながら、夜は刻々と更けていった。

三

そのとき、その場にいた誰もが自分の目を信じていることができなかつた。紫苑の髪が紅蓮に染まり、瞳が灼熱する。軽く跳躍したように見えた次の瞬間 王は地面に薙ぎ倒されていた。

「?!」

咄嗟に飛び出そうとした朔を、白虎は体で遮る。

朔、今は危険だ。

「でも……」

横目で桔梗を見ると、彼女は悲しそうな瞳で紫苑を見つめている。

「……紫苑」

呆然とした声で燐がつぶやいた。

王は自分の上に馬乗りになっている男が誰なのか、一瞬分からなかった。それほどまでに。

「ぐ……」

喉元を締め上げる熱い手のひら。彼の視線を捕らえて離さない、まるで噴火口のような眼。白い歯はがちがちと鳴っていた。強大な妖気 あの時より、もっと。かつても紫苑の髪と眼が紅色に染まったことがあった。だが、そのときは比べ物にならない。絶対に認められない、認めたくないことであつたが このとき王は紫苑

を怖い、と思った。

「くそつ……………！！」

壬の放つ水の大蛇おろちが、紫苑を背後から襲う。それらは全て紫苑に到達する前に音を立てて蒸発した。白いけむりが立ちこめるが、その中でも紫苑の真つ赤な髪は煌々と輝いている。

「……………」

紫苑は無言で壬の首を絞め続けている。壬はあがくが、どうしても抜け出せない。周りの者は手も出せずに呆然としているだけだった。

「どうして……………」

燐がつぶやくと、白虎が横目で彼を見遣った。

彼は今、ひとであることを拒絶しているのだろう。

「どうということ？」

次に問うたのは朔だった。

許せなかったのだな。自分が先帝の血を引くということが…

…。

自分の父親が桔梗の親兄弟を殺した。そのことは彼にとって相当な衝撃であったのだろう。

「で、でも」

燐が言葉を継ぐ。

「関係ないじゃないか！ そんなの、紫苑には……………」

「そつ」

桔梗が答え、一歩進み出た。

「紫苑には関係ない。紫苑が直接手を下したわけじゃない」

紫苑と壬は体勢を変えぬまま、妖力による攻防を続けている。紫苑から積極的に攻めることはないが、連続的な壬の攻撃は何一つ彼に瑕疵を与えることはできていなかった。

強すぎる。朔は慄然とした。

「紫苑」

「……………」

桔梗の声にも紫苑は答えない。王の顔は、徐々にどす黒くうつ血
してきていた。

「こ……の……っ」

それでも彼は吐き捨てる。

「出来損ないの、ばけものが……！」

「紫苑」

桔梗は静かに呼びかける。

「紫苑」

その名が愛しくてたまらないといったように、何度も何度も呼ん
だ。

「紫苑……」

しかも、世が世ならば、彼は帝の世継ぎであったのだからな

……。

白虎がつぶやいた。

「紫苑」

桔梗はただ、繰り返した。

「……がっ」

王がもがく。その眼は真っ赤に充血していた。

「王を、殺すの？」

桔梗の問いに、紫苑はぴたりと手を止める。

「紫苑は、王を殺したいの？」

「……ち、ちが」

「紫苑はそれで」

桔梗は優しく問いかける。

「楽になれるの？」

「違……っ」

ひび割れた声が紫苑の唇から漏れる。

「違……っ」

紫苑は王の手から指を離し、地面の上に座り込んだ。王は慌てて
彼から離れ、苦しそうにむせ返る。

「違うんだ……」

紫苑はぼろぼろと涙を零していた。ぬぐうこともなく、頬をそれが伝うままにしている。桔梗はそれを見守りながら、一歩ずつ近づいた。

「知らなかった」

紫苑はつぶやく。

「私の父親が……先帝だったなんて」

「……………」

「お前や王の、仇だったなんて」

「……………」

「お前は」

紫苑の涙に濡れた目が桔梗を見つめた。

「お前は知っていたのか？」

「……………」

桔梗は優しく微笑む。

「青龍のくれた知識にはあったかもしれない。でも私は気付かなかったし、知らないも同然だった。だって」

彼女は紫苑のすぐ側に立っていた。袖がふわりと彼を包む。

「だって、関係ないもの」

「……………」

「紫苑が誰の子供でも、誰の血を引いていても、関係がない。紫苑は紫苑。そうでしょう？」

「……………」

紫苑は子供のように泣いている。

「王が恨むのは当然なんだ。殺したくなるのも、当たり前だ」

「じゃあ」

桔梗は少し寂しげな表情になった。

「殺されたいの？ 紫苑は」

「……………」

「それでいいの？」

「……………」

「ひとでいるのをやめたくなくなるくらい？」

「……………私は」

紫苑は呻く。

「ひとにもあやかしにも　なれぬ」

「違う」

桔梗は言った。

「紫苑はひとであり、あやかしでもある。だから私も側にいられるし、燐さんも一緒にいる」

「……………ききょう」

「泣かないで」

桔梗は紫苑の涙を袖でぬぐう。

「紫苑は悪くない。何にも悪くないよ」

「……………」

「それに……………」

紫苑の目が彼女を見上げた。まるで子供のように澄み切った瞳は、既に紫の色を取り戻している。だが　髪はまだ、朱に染まったまままだ。

「紫苑のお母さんは、紫苑を愛していたでしょう？　もしかしたらお父さんもそうかもしれない」

「父が……………私を……………？」

「だって、紫苑のお父さんは紫苑を殺さなかったもの。ちゃんと養子に出して、育つように計らった。それがお父さんの精一杯だったのかもしれない」

「……………そう、だろうか」

「そうですよ、きつと」

桔梗は微笑む。

「だから、憎まないで」

その優しい心を、

「恨まないで」

痛めないで。

「傷つけないで」

自分を、

「殺さないで」

否定しないで。

「……………」

紫苑の強張っていた体から力が抜ける。桔梗は優しく彼を抱きとめた。紫苑は穏やかな表情で彼女の腰に顔をうずめて眠っている。妖力を使いすぎたのだろう。彼の体がふんわりと風に攫われ、そつと白虎の広い背中に横たえられた。

「御子の言葉は、全部まやかした」

「……………」

王の言葉にはまだ力がない。喉にはくつきりと紫苑の手形が残っていた。

「全部全部、奇麗事に過ぎない。何も解決していない」

「貴方を紫苑に殺させなかったのは」

桔梗は冷ややかにつぶやいた。

「貴方を激情のままに殺すことで、きっと紫苑が傷つくと思ったから」

「……………」

「でも」

桔梗の髪がゆらりと立ち昇った。

「私がここで、貴方を殺しても構わないんですよ……………」

ぞくり、と王の背筋に冷たいものが流れ落ちていく。桔梗が眼光を鋭くした時、背に紫苑を乗せた白虎が一歩進み出た。

王とやら。

「何だ」

王は桔梗から眼を逸らす。

お前に伝えたいことがある。

やがて、白虎はゆっくりとその言葉を口にした。

お前の双子の弟は、生きています。

第九章

一

悪い夢を見ていた。誰にも愛されず、誰にも受け入れられることなく、誰にも必要とされないで、誰にも許されないまま、ただひとりでさまよい続ける……。そんな夢だった。

夢、なのだろうか。この痛みを、彼は知っている。ずっと前から、それは彼の身を蝕んでいた。「孤独」という名の、痛み。

私はひとりだ。

己の腕の中で逝った、母の顔を思い出した。狂気に取り憑かれた彼女は、それでも父と私を愛していた……。

父を　先の帝を想う。彼が八つの年まで、父は生きていた。まだ幼かった彼に辛くあたる公達から、折に触れ庇ってくれたのを覚えていた。父は病がちで、気分が優れない時には彼の笛の音を聞きながら。しばしば養父にも彼を連れて参内するよう命じていたようだ。それは親子の情の成せる技だったのだろうか　今となってはわからない。何故、父があやかしを討伐しようと思ったのかも、何故母を愛したのかも、何故彼を殺さなかったのかも、　分から
ない。

それでも彼は……生きています。

二

夜が明ける。桔梗は眠りについたままの紫苑の顔を見下ろして小

さくため息をついた。紙の様に真っ白な頬に血色はなく、唇はかすかに紫がかっている。手を伸ばして頬に触れると、まるで氷のように冷たかった。

桔梗はつぶやく。

「悪い夢を見ていないといいのだけれど……」

彼の髪は既に黒い艶を取り戻していた。それを優しく指で梳く。こうして目を閉じていると、普通の人間と何も変わりはない。だが、あの紫電の瞳が桔梗は好きだった。優しく、それでいて寂しげで、他のどこにもない美しい色合い。桔梗の心を落ち着かなくさせる。鼓動を高鳴らせる。

「好き」

ぼつりと言葉が零れ落ちた。その意味を、桔梗はゆっくりと噛み締める。こうして寝顔を見守っているだけでたまらなくしあわせで、それでいて切ない。胸の奥の方がぎゅっと何かに掴まれているような……けれど、それは暖かな温度を持っている。側にいたいと思う。ずっとこうして顔を見ていたい。存在を感じていたい。理由を聞かなくてもわからない。ただ、心地良いのだ。彼の側で過ぎて行く時間が、何より愛しい。永遠という名の幻影を追いかけてなくなるほどに……。

「紫苑と出会ったのは、運命だったのかもしれない」

桔梗は紫苑の頬を両手で押し包む。その冷えた肌を温めてあげたかった。

「でも」

桔梗の唇が紫苑の額を、頬を、鼻筋をかすめるように動く。

「紫苑のことを好きになったのは」

びくり。紫苑の体が少しだけ動いたような気がした。

「運命なんかじゃなくて」

桔梗は紫苑の吐息を少しだけ飲んでみる。

「私自身の意思だから」

薄く目を細める。何故だか涙が零れそうになった。

「ずっと、側にいたいよ」

彼の手をとって握り締める。

「紫苑がそれを望んでくれるなら……ずっと」

桔梗は微笑んだ。

「側にいるよ……」

三

からりと帳の引き上げられる音がして、王は伏せていた体を起こした。逆光になって見えないが、線の細い人影が彼を見下ろしている。

「昨晚は眠れた？」

「そんな訳ねえだろ」

鬱陶しそうにそう言うが、人影は気にした様子もなく部屋の中に入り込んだ。　　燐だ。

「そう」

そっけなく言って王から少し離れた場所に腰を下ろす。王はそちらを見ようとせせず、立てた膝に顎を埋めた。

彼は昨晚、紫苑の屋敷で過ごした。白虎にそうするように言われたためであり、明日にならなければ弟の行方は教えないとも言われた。紫苑が目覚ましてから話す、と。さすがの王も白虎を力づくでどうこうする気にはなれなかった。そんなことは無理だと分かりきっている。

「癸みすのと……」

王はつぶやいた。

王のたった一人の兄弟で、双子の弟。控えめな性格で、とてもおとなしい男だった。水龍には珍しい。いつも王の後ろについて回っていたような気がする。ずっと一緒だった　　あの日までは。

「もし、君の弟さんが生きていたら」

燐は尋ねる。

「迎えに行くのかい？」

「当然だろ」

「……もし」

静かで、それでいて鋭い矢が打ち込まれる。

「帰りたくないと言ったら？」

「……！！」

王は立ち上がった。燐の襟首を掴んで引きずり上げる。

「今、何と言った」

顔を伏せていた彼はゆっくりと視線を王に向けた。そこには恐れの色はない。ただ、王を眺めているだけ。

「……」

彼は手を離れた。燐は膝をつき、王を見上げる。

「聞こえなかった？」

「聞こえたよ」

王はつぶやいた。

もし、弟が新たな場所で新たな幸せを見つけていたら……。

「……」

喉が変な音を立てた。それが嗚咽を飲み込んだ音だということに
気付き、王は驚く。 ぽた、ぽた、と足の指の側にしずくが落ち
た。

「……」

燐は黙っている。

王が震える手で自分の頬に触れると、そこは熱く濡れていた。

俺は、泣いているのか。

王は気付く 俺は、寂しいんだ。御子がいなくなるのが、寂しい。
弟がいなくなるのが、寂しい。一人になるのが、寂しい。

「まだ、動けない？」

優しい声。

「君の中の時間を、動かせない？」

「……………なに？」

「辛いことがあった。僕も。君も」

燐は語る。

「大切なものを失くして、そこから動けなくなった。現在から目を背けて、過去に埋もれた誰かを、思い出を、絆を　追いつめていたんだ」

「……………」

「何かを憎むのは簡単だ。僕は自分を憎み、さくらを殺した人間を憎み　でも、そこからは何も生まれなかった。僕はどこにも行けなかった」

「……………」

「だけどね。本当にその思い出や絆は、過去だけのものだろうか。かつてそうであった形を、そのまま保っていないといけないのだろうか」

「それは、どういうことだ？」

王は徐々に呼吸を落ち着ける。燐が何を言いたいのか、自分には分かる　いや、本当はずっと前から分かっていたような、そんな気がしていた。

「昨日、君も朔を見ただろう」

「さく？」

鸚鵡返しにつぶやいてから、あの少年のことだと思いつく。桜色の髪と琥珀の瞳。そういえば、彼は　。

「お前の子供だ、と言っていたな？」

「うん」

燐の声が急に照れを含んだようなものになった。

「僕の息子なんだ。三年前に生まれて、三年前に死んだ」

「え？」

王は燐の顔を見た。途端に彼と目が合って、泣き顔を見せてしまったことに羞恥を感じる。

「白虎が、魂をひとがたに封じたんだそうだ。だから彼はひとでも

あやかしてもない。それでも」

燐の顔がくしゃくしゃに歪む。

彼も泣いていたんだということ

とに、王はようやく気がついた。

「それでも、僕は嬉しかった。さくらとの絆は、切れていなかったんだ。形を変えて、今にちゃんと繋がっていた。過去は忌まわしいだけのものじゃなかったんだ」

「……………」

王は呆然と燐を見つめる。燐は何かにかげられたように喋り続けた。「過去から切り離されて、ひとりきりになってしまふのは寂しいよ。それは僕だつて良くわかる。でもね。それは自分で閉じこもっているだけなのかもしれないんだ」

「……………」

「桔梗ちゃんは、確かに君の知る『御子』ではないかもしれない。でも君と同じ水龍族であることには変わらない。その絆を、君は大切にできないかい？」

「……………けど、俺は」

「紫苑を許せない？」

王は黙つたまま歯を食いしばる。

「それは、君が現在よりも過去にこだわっているからだよ」

「しかし……………俺は」

「君がそうして過去にしがみつき、現在から目を背けている限り」

燐はきつぱりと言った。

「孤独になるのも仕様がなないことだ。だつて、皆の時間は動いているのだから」

「……………」

王は無言で目を伏せた。燐の言っていることはわかる。わかりすぎるくらいわかっている。それでも、胸に燻るこの感情をどうしたらいいのか分からない。

「俺は……………」

ぐつと拳を握った。

「俺は……!!」

からり、と帳が開いて朔が姿を見せた。腕に猫の姿をした白虎を抱いている。

「父上、壬さん。お話中のところすみません」

「構わないよ」

温和な声。燐は「父親」の表情をしていた。壬はその横顔を見るでもなしに眺める。

「紫苑さんが目を覚ましたとのことですよ」

「そう、良かった」

燐は破顔する。朔も嬉しそうに微笑んだ。猫が喉を鳴らす。

話をしよう。

その声は直接頭の中に響いてきた。

お前の弟のいる場所は、少々特別な場所なのだ。

「特別な……?」

壬がつぶやく。

ああ。

白虎は続けた。

それは、玄武の巫女の治める地。

「玄武の、巫女……?」

つぶやく燐の言葉に、朔のすつとんきょうな声が重なった。

「ええっ?! それって……」

出雲の国。巫女の名は、かみのみやすはる上宮昴。

「知り合い?」

尋ねる燐に朔は頷いた。

「うん。一度しか会ったことないけど、変わったひとだったよ」

「へえ」

燐は軽くうなずく。所詮自分には関係ないことだ、という気分が強かった。このときは、まだ。

紫苑は床の上に座し、辺りをぐるりと見回した。彼の周りに、桔梗を始めとして燐、朔　その肩の上に猫と化した白虎　そして壬が座している。最後に音もなく現れた焰、つまり朱雀が、彼の背後に腰を下ろした。

不思議な心地がした。何故自分がこんなに沢山の者たちに囲まれているのだろうか、というような。　孤独の匂いが、ここにはない。

紫苑はゆっくりと口を開いた。

「私は暫く、都を離れようと思う」

その言葉に反応したのは燐と、そして壬のみだった。

「何故だい？」

問う燐とは対照的に、壬は探るような視線を紫苑に向ける。

「おそらく」

紫苑は落ち着き払って言葉を紡いだ。

「例の『噂』が今上の耳に届くのも時間の問題……それなら先に私自らがそのことを言上し、御心を惑わせた罪にて暫し蟄居仕ると申した方が、御心映えも良いであろう」

「噂？」

壬が声を上げた。

「まだそんなことを言っているのか？　お前は間違いなく先帝の

「

「そんなことは分かっている」

紫電の視線が壬を射る。紫苑の声は静かでありながら、有無を言わせぬものだった。

「だが、お前の望んだような結果は得られるまいよ」

「何？」

「お前はひとの世から私が追放されることを願ったのだろうか、そうはいかぬ」

紫苑はわずかに微笑んだ。何かを憐れんでいるような、蔑んでいるような、それでいて憎めないとてもいうような。悲しくも優しい笑顔だった。

「かつてのあやかしの争いで、強力な陰陽師たちはことごとく命を落とした」

脳裏に幾人かの知己の顔が浮かぶ。

「残ったのは、私が幼い頃から既に半ば引退していた私の義父と」

燐がかすかに顔を歪めて目をそらすのを、朔は横目で見ていた。

「敵側に寝返ることを恐れた輩によって都を離れることを許されなかった、私だけだ」

「……………」

壬は思わず黙り込む。

「もちろん鳳凰族討伐は私の生まれる前の話だから関係ないが、その後の討伐隊からは意図的に私は外されたのだ」

紫苑はそんな彼の様子には構わず、話を進める。

「帝の代が変わっても、それは変わらなかった」

先帝はむしろそんな状況に安堵していたかもしれない。息子を戦場へと、しかもかつて母の一族が滅ぼされたのと同じような修羅の場へと、送り出さずに済んだのだから。

今上は何も知らない。先の決定が下されたのは、恐らくは摂政らの意向が反映されたことだろう。結果、彼を遣して他の有力な陰陽師たちは次々に命を落とした。その次の世代には、未だ才能ある者が現れていない。

紫苑は壬から目を逸らさなかった。

「私に敵う陰陽師は　ひとの中にはいない」

「……………」

「たとえば把になってかかってきたとしても」

「私が、退けます」

不意に、桔梗が囁くように言った。

「紫苑を傷つけさせたりはしない」

「……………」

「そもそも」

燐が顔を上げた。

「紫苑以外の者にどうやって、都を守れるっていうの？ 今以上に安定した結界は誰にだって不可能だよ」

紫苑は桔梗と燐に少しずつ笑みを見せてから、頷いた。

「そういうことだ」

「……………」

「人妖と蔑み、忌避する存在であっても」

紫苑は独り言のように続けた。

「ひとは利用して生きていく」

「……………紫苑」

桔梗が心配げに覗き込むが、そこにあっただのは意外なほど穏やかな表情だった。

「ひとは、そういう生きものなのだ」

一瞬目を閉じて深く息を吸う。

「ひとは、かなしい生きものなのだ……………」

紫苑は側に座る桔梗の手の甲に、その手のひらを重ねた。

「だから私は自ら都を離れる。ほとぼりの冷める間だけになるとは思うが」

「都から呼び戻されるのを待つ、と？」

「そっだ」

紫苑は燐の問いに頷いて見せた。

「お前はここに残るだろう。まだ復官したばかりで間がない」

「でも……………」

燐は朔を見遣る。琥珀の瞳が真っ直ぐに見返してきた。

「僕はここにいます。せっかく父さんに会いに来たのですから」

「そ、そう?」

「焔は僅かに顔を綻ばせるが、壬を見遣ってその頬は強張った。沈黙を守っていた白虎が言葉を発する。

「紫苑どのには是非、出雲の国をお訪ねいただきたい。」

「出雲の国?」

「紫苑の背後に座る焔が補足するようにつづ。

「そこには玄武の巫女がいるのです。そして、運命さだめの中心に、最も近いところ……」

「それを聞く桔梗の頬は青ざめ、紫苑の手に触れている場所は固く強張っていた。

「壬がぶつきらぼうに尋ねる。

「俺の弟の話は?」

「白虎は豊かな毛を揺らしうなずいた。

「無論、それもある。」

「ええと、それじゃあ」

「焔は嫌そうに顔をしかめた。

「まさかとは思っけれど、紫苑と桔梗ちゃん、それと壬っていう最悪の取り合わせで旅をしるってことなの?」

「心配するな。今更紫苑を襲って何になる」

「でも」

「焔は半眼で尋ねる。

「紫苑のことは嫌いなんだろう?」

「俺はそこに行き着く道知らない」

「壬は真顔で答えた。

「紫苑に憑いてる朱雀や、御子は 青龍は知っているのかもしれない」

「……………」

「なら、利用させてもらう。それだけのことだ」

「話は決まったな」

「紫苑はあっさりと頷いた。壬が同行することに対する異論はない

ようだ。ただ 傍らに座る桔梗の、その不安そうな横顔だけが気になった。

二

その翌日、摂政である藤原時雅が今上に呼び出されたのは、例になく朝早くのことだった。朝議の始まるずっと前の時刻、時雅は緊張を含んで御簾の前に伏す。

「時雅、参上しました」

「ご苦労」

若い声が、弱い。

「今日は誰にも聞かれてはならぬ相談事があったゆえ、摂政どのお呼びたてでしたのだ」

「は……」

「率直に言う」

時雅の背中に嫌な汗が滲んだ。

「現在の御門家当主の父親は、誰だ」

「……………」

時雅はこわばりそうになる舌を、辛うじて動かす。この場合、沈黙は肯定と同じ意味を持つ。

「何者かが御心をお騒がせ申しましたか」

「口さがないものの立てた噂ならばそれで良い」

今上は言う。

「しかし、真実だというのなら……」

「いののなら？」

「……………」

今上は御簾の下から文を差し出した。

「昨晚届いた。御門紫苑からだ」

「……………」

時雅はその文と御簾を交代に眺める。

「彼は噂の責任を取り、暫し蟄居したいと申してきた。そして出雲の国に陰陽の道を尋ねに行く、と」

「……今上は、いつ頃お聞きになられましたか」

「もう七日ほど前にもなろうか」

今上の答えを聞いて時雅は眩暈をおぼえた。 何ということだ

……。

「正直」

今上は少年じみた声でつぶやく。

「信じられなかった」

「……………」

「けれど」

時雅は顔を上げた。

「さほどの感慨は受けなかった」

「……………」

言葉もない彼に、今上は言う。

「今更 今更それがどうだというのだ。彼が養子に出た時点で、

皇位継承権はそもそも与えられない」

「……………御意」

「父が何を考えていたかはわからぬ。何故あやかしの女を孕ませたのか、何故子を産ませたのか、私にはいくら考えてもわからなかった」

「……………」

「しかし……………」

少し考えるように間を空けて、

「だからといって、その責を子である彼がすべて負わねばならぬのだろうか」

「……………責を」

時雅は控えめに声を押し出した。

「負わねばならぬとは思いませんぬ。 思いませんぬが……………」

「皆は動揺しているか」

「……動揺と申しましようか」
慎重に言葉を選ぶ。

「何しろ初耳で御座いましたから、皆驚いております。半信半疑、といったところで」

「そうか」

今上はそれきり口をつぐんだ。時雅にとっては永遠とも感じられるほどの長さの沈黙。やがて、御簾の内からは深いため息が聞こえてくる。

「そういえば……」

それは半ば独り言であった。

「彼を見ていると何故か懐かしい感じがするのは、どこか父上に似ているからかもしれないな……」

「……」

「時雅」

今上の声音が厳しいものに変わった。

「は」

時雅は平伏する。

「彼を正式に先帝の落胤と認めよ」

「それは……」

「隠されると暴きなくなるのがひとの心理というもの。ここまで広まった噂を打ち消すことは容易ではない。それならばいっそ」

今上はいっそ冷酷にも思えるような声音で言う。

「彼をひとの秩序に組み込むことを考える方が得策であろう」

「……」

「彼は我らにとってなくてはならない人材なのだ。そうであろうか？」

「……御意」

時雅はうなずいた。結局そうするしかないだろう。そして、彼が都を離れているうちに誰もがそのことを忘れ去る。権力の座につき得ない先帝の落とし胤など、誰の興味も引かないだろうから。

時雅が退出しようとしたとき、背後からかすかに今上の声がした。
「たとえ仮初めだとしても」

彼は思わず足を止めてしまう。それが独り言だとわかっていても、
出て行く気にはなれなかった。

「父上はあやかしを、愛したのか……」
「……………」

言葉がそれ以上続くことはなく、時雅は足早に廊下へと歩み出る。
日に暖められて徐々に温くなり始めた大気の温度が、今はたまらな
く不快だった。

三

「行くのかい？」

その三日後、燐は御門邸の門の前に佇んでいた。そこには一台の
牛車と、二頭の馬。牛車には紫苑と桔梗が乗り込み、馬のうち一頭
には壬が、もう一頭には焰が腰を下ろしている。

桔梗も壬も都を出るまでは額の印を塗り隠し、式神を装うことに
した。意外にも、壬は姿を変えることに文句を言わなかった。どう
でもいい、と思っっているのかもしれない。今も不機嫌そうではある
が、この前まで発していた殺気は既に立ち消えてしまっている。

壬の心中に、何か変化があったのかもしれない。燐はそう思った。
「お気をつけて」

側に佇む朔が手を振る。紫苑は微笑んで頷いた。
「少し、療養してくる」

「うん」

燐は桔梗に視線を転じた。彼女の表情には見知らぬ土地に向かう
不安はない。側に紫苑がいれば、居場所がどこであるかなど問題で
はないのだろう。

「紫苑を頼んだよ」

燐の言葉に、水色の目が少し見開かれる。やがてはにかんだように頬が染まり、

「……はい」

と小さな声が聞こえた。

健勝を祈る。

その白虎の声を合図にしたかのように、御簾を下ろした牛車はゆつくりと動き出した。がたん、と揺られた調子に桔梗はふらりと紫苑の胸に倒れこむ。

「あ」

「大丈夫か？」

「大丈夫です」

抱きとめられた桔梗は、そう答えながらも紫苑の表情を伺う。

「？」

不思議そうな表情をした紫苑から慌てて顔を伏せて、桔梗は紫苑の背中にぎゅっと腕を回した。

「桔梗？」

「何でもありません」

「……………」

紫苑は優しく彼女の髪を撫でる。桔梗は心地良さそうに目を閉じつつも、小さな小さなため息を漏らした。

ずっと、何があっても一緒にいられますか。

これからいろんなものを見て、聞いて、いろんなひとと出会って……それでもまだ、紫苑は自分だけの側にいてくれるだろうか。何度も何度も髪を滑り降りていく紫苑の手を感じながら、桔梗はただ自分の胸の中だけで問いかけることしかできなかった。

王の巻

第一章

—

炎が爆ぜ、影が揺れる。それを見つめるのは闇色を星屑で薄めたような藍色。火の粉が踊ってもそれを映す瞳は揺らがない。黒く頬に影を落としている鼻筋は立てた膝の間に消え、顎はぐつと胸元まで引かれている。手の甲はちょうど火の粉が降りかかるかかからなにかくらの位置にあつて、自らの足を折り畳んで押さえていた。

周りは鬱蒼と茂る木々に覆われ、風はほとんど立たない。頭頂部で高くまとめられた強い銀髪こわすら微動だにせず、彼はまるで彫り物か何かのように動かなかつた。

恐らく今日は新月だ。彼、王はそう思つて一度、瞬きをした。いけ好かない半妖と、それを慕つてやまない同属の御子、そしてそれを苦々しげに見つめる彼。奇妙な取り合わせの三人が都を出てから、既に十日が経過していた。初めは彼以外の二人が牛車、彼が馬に乗っていたのだが、三日ほど前から山中深くの路に入ったため、牛車はその直前で乗り捨てた。今は紫苑と桔梗もまた二人で一頭の馬に乗っている。先導していた焰は人の形を取るのをやめ、おそらくは神獣、朱雀本来の姿でその辺りにいるはずだ。多分その主である半妖に聞けば分かるのだろう。　　そう……「半妖」……。

「時間だ。交代するぞ」

その声を聞いても王は振り向かなかつた。別に驚いたというわけでもないが、それでも彼が近づいてきたのに気付かなかつたのは不覚だった。やはりこの男、並のものではない。半妖だからというわけではなく、陰陽師だからでもない。御門紫苑という男が、そんな

のだ。

「寝ているよ。別に俺は眠くない」

「明日、馬から落ちたら晒うぞ」

「晒えばいいだろう」

王は辺りに落ちていた細い小枝を炎の中に投げ込む。一瞬だけ辺りがぱつと明るくなった。

「……………」

背後に佇んでいる男が黙り込んだのが気になり、王はくるりと振り向いた。すると、ひどく困った様子で自分を見つめている紫電の瞳と視線が合い、王は思わず嘔き出す。

「何だ？」

ぼそりと紫苑がつぶやく。炎の色と相性がいいのか、彼の瞳の色はこの闇の中でひどく美しく見えた。それもそのはずだ。彼の母親は炎を司るあやかし、鳳凰族の最後の御子だったのだから。その立場はちょうど御子と「桔梗」と同じ。

「別に」

王はすぐにそっけない表情に戻って体勢を戻す。

「笑つたらう」

「いけないか」

「…………別に」

意趣返しのつもりか、それとも単なる言葉遊びか。紫苑はそう言う。炎を中心として王と自分の成す形が、ちょうど四半分円になるように腰を下ろした。

「おい」

王が声を上げると、紫苑は無表情のままこちらを向く。王はいらいらと言った。

「眠くないんだ。火の番は代わってやると言っている」

「眠くなくても、体を横にするだけで多少なりとも疲れがとれるものだ」

「余計なお世話だ」

「番を代わる、などと言い出すほうが余計だと思っが」

「……………」

王は疲れたようにため息をつく。

「好きにしろよ」

「ああ」

「……………」

沈黙がその場を支配した。時折ぱちりぱちりと炎が爆ぜ、地面に落ちた彼らの影が揺らめく。王はまた先ほどの姿勢に戻り、顎を膝に埋めた。紫苑は右脚だけを胡座あぐらのように折り、左膝は軽く立てていた。そこに肘を置き、広げた手のひらで頬を包んでいる。長い黒髪が、夜に溶け残るように浮かび上がっていた。

「……………なあ」

王はぽつりと口を開く。

「何だ？」

紫苑が応える。

「お前、俺を憎んでいないのか」

「は？」

心底不思議そうな声。王は目を上げない。紫苑の顔を見たくなくなつた。

「桔梗を連れ出そうとしたり、お前を殺そうとしたり……………あとお前の父親のことも噂にして広めて、お前の友人のことも殺そうとした」
紫苑はそれを聞き、喉の奥で小さく笑つたようだった。

「色々とやってくれたな」

「なのに、何で」

王はぐつと喉を鳴らす。

「何で……………普通に一緒に旅をしているんだよ」

それは、ここ数日ずっと王が気にしていたことだった。王に対する紫苑の態度は、あまりにも自然だった。まるで以前からの知り合いであるかのように、これまでの彼らの関係性を考えれば不自然なまでに　自然だった。

「それはお前にも言えることではないのか」

紫苑の声はあくまで穏やかだった。

「お前は、桔梗を慕っていたのではないのか。それに、私の父親は」
「……いや」

王は紫苑の声を遮った。

「どうなんだろう。俺は御子を　桔梗を」

王は言葉を変える。都を離れてから、王は彼女を「桔梗」と呼ぶようになった。彼女がそれを望んだためでもあるだろうが、王はほぼ自主的に、意識的にそうするようにしたのだ。もう、彼女は御子ではないから。

「桔梗を、慕っていたのかな」

「……」

「実際、桔梗とはほとんど接触なんてなかったんだ。彼女は特別な御子だと言われていたから」

「そうなのか」

「俺が許婚に選ばれたのはたまたまだ。多分、俺でなくても良かった」

「……」

横目で紫苑の表情を窺う。言葉を選んでるように唇を蠢かせていたが、結局彼は何も言わなかった。

「一族が壊滅した時は親とか弟のことばかり心配して、桔梗のことなんて思い出しもしなかった。風の便りに彼女のことを　都で暮らしているってことを聞いて、ようやく思い出したくらいだ」

「その割には……」

「必死だったよな」

王は言葉を先回りして苦笑を浮かべた。

「それしかなかったんだ。俺には」

「……」

「それしかない」と

王は目を閉じる。

「思い込んでいたんだな」

「……今は」

紫苑が問いかけた。

「違うのか」

「……どうだろうな」

「弟のことか」

「ああ。癸は、生きているらしい」

王は頷く。

「嬉しかったよ。だけど」

「……だけど？」

「いや……何だろうな」

王は首を横に振った。丸めていた背筋を伸ばす。少し、腰の筋肉が痛かった。

「良く分からない」

「……」

「で、どうなんだよ」

何のことかと視線で問う紫苑に、王ははつきりと苦笑を投げる。

「憎んでいないのか？ 俺を」

「……」

紫苑は少し頭上を見上げた。星など見えるはずもない。そう思っていたのに、意外にも所々に開いた木々の葉の隙間には小さな光の粒がきらめいていた。

「そうだな……」

紫苑はゆっくりと言葉を選ぶ。

「結論から言うと、お前のしたことなどさほど大したことではない。私はそう思っている」

「そ、そうか？ 俺結構いろいろやったつもりだけどなー」

「というよりも、だ。慣れている」

「え？」

「誰かに悪意を向けられることには」

彼の表情には何の色もなかった。ただ、事実だけを述べているのだらう。

「慣れているのだ」

「……………」

王は言葉を失う。

「だが」

紫苑は空気を変えようとするかのようにすぐに言葉を継いだ。

「桔梗が失踪したときは正直、堪えた」

「……………」

「何故だろうな。孤独には慣れていたはずなのだが」

首を左右に振る。

「駄目だった。一度温もりを知ってしまったと、離れがたい」

「……………」

「まるで」

紫苑は口元を笑みに染めた。

「冬の朝に布団から出られないようなものかな……………」

「……………」

王はつられて笑みを零した。

「桔梗が聞いたら怒るぜ」

「冗談だ。真に受ける方がどうかしている」

「お前の冗談はわかりにくいんだよ」

「そうかな？」

紫苑はそれこそ冗談とも真剣とも取れない口調で言い、それきり

口をつぐんだ。

「……………」

再び沈黙が落ちる。だが、先ほどよりもずっと居心地が良いように感じられた。

「悪かったな」

王はぼつりとつぶやく。

「何がだ」

「言わせるなよ」

「冗談だ」

「だから、分からねえっての」

王は空を仰いでぼやいた。多分、朝までそう遠くない。まだ辺りは闇に満ちているのに、何故かそう思った。

二

「何だかなあ……」

燐がつぶやく。

朝餉の席でのことである。向かいには息子、朔の姿があつて、その傍らには白い猫がのんびりと寝そべっていた。四聖獣の一、白虎の仮初めの姿である。

「何？」

朔はきよとんとした表情で問うた。そんな表情が驚くほど亡き妻に似ている。

「主のいない屋敷にいる居候親子というのも、何だかなあ、って」

「……あはは」

朔は乾いた笑い声を上げた。

「確かに変ですね」

「うん」

干し芋を箸でつまみ、口の中に放り込む。

「そりゃあ、ひとの住まない屋敷は荒れるものだけど」

燐は部屋の出入り口付近にちょこんと座る女房姿の女性に目を向けた。彼女は厳密な意味での女性ではない。紫苑の使役している式神である。

「紫苑なら、ちゃんと維持できるだろうしねえ。」

朔はにこにここと微笑みながら食事をしている。燐はしばらく少年を見つめていたが、やがてふと思いついたように尋ねた。

「そういえば、朔は『玄武の巫女』を知っているんだよね？」
その巫女の治める地、出雲の国こそが紫苑らの向かう先なのである。

「ええ……まあ。以前、一度だけ会いました」

「何の用で？」

「えっと」

朔は箸を置いた。

「僕の存在を神々に認めさせる必要があったんです。僕は一度、死んだ身ですから」

「あ……」

燐の表情が揺らいだ。朔は慌てて言葉を継ぐ。

「ほら、体が死んだのに魂が黄泉の世界に行かないと、神々が変に思っらしいんですね。だから白虎に連れられて、神無月に あちらでは神有月ですけど」

「……なるほど」

燐は深く息をついて動揺を鎮めた。

「それで、どういうひとだったの？ 変わってるって言うていたけど」

「うーん」

朔は腕を組み、耳が肩につきそうになるほど首を傾げた。

「とにかく、変わったひとなんです」

「えっと、たとえば何が？」

「ずっと神殿の中に暮らしていて、外には出ないんです。ほとんど誰にも会わないし……僕は例外だったみたい」

「そうなの？」

「ええ。……邑は、長老家と呼ばれるひとたちと巫女によって支配されているんですが、結構両者が仲が悪くて」

どこにもある権力争いということだろうか。燐はぼんやりと思っ。

「僕は味方になってもらえたり、お世話になりましたけどね」

「そう……」

燐はとりあえず頷いた。息子が世話になったのだから悪人ではないと思いたいが、どこか不穏なものを感じる。紫苑が邑で暮らす間、何事もなければいいのだけど……。燐にはそれだけが気がかりだった。

第二章

—

燭の火がゆらり、と揺れる。白木造りの壁に墨汁を流したような影。

「……そう」

つぶやかれた声は空間に広がることもなく、減衰して消える。それほどまでにここは静謐だった。木の厚い壁は外のさざめきも、風のそよぎも、何も通さない。時の流れさえもが緩んでいた。そこにひとり居る、彼女。紅唇に微笑を含む。

「彼らが、来るのね」

間。余人には聞こえぬ「声」を聞いて、彼女は笑った。

「案ずるな。ちゃんとあの水龍兄弟の対面は取り計らってある」

さらに、間。彼女は、笑わなかった。

「それは余計なお世話よ」

何かを断ち切るように、彼女は吐き捨てる。

「私は貴方の操り人形などにはならない。勘違いしないことね」
目を閉じた。気配は去る。

彼女は、ひとり。訪れた沈黙はあまりに長く、深かった。

何かが変わった。桔梗はそう思う。王の言葉から刺々しさが消え、代わりに力の抜けた悪戯心が散見されるようになった。変わったのは王だけではない。紫苑もだ。王に向ける表情はもはやかすかに強ばることすらないし、声も桔梗にしか気付かれない程度の固さを帯びることもない。まるで、ふたりが会話の掛け合いを楽しんでいるかのように見えることすらある。

「良かった、よね」

桔梗はつぶやく。ん？ と紫苑が聞き返した。桔梗は無言で彼の胸に体を預ける。眼前には栗毛のたてがみが揺れていた。

馬に乗るのも悪くない。少なくとも牛車よりはずっと紫苑に触れられているし、紫苑が手綱を引くとまるで背中から抱きしめられているようだ。

「どうかしたか？」

振り仰ぐと、彼の額にはかすかに汗の玉が浮いていた。髪は無造作に結い上げてある。

「いいえ」

桔梗はわずかに身をよじって紫苑の胸元に頬を寄せた。どうせ山道で、馬もたいした速度では走れない。馬を駆る紫苑の邪魔にはなるまい。

「……………」

紫苑は桔梗に見えないところで、かすかに頬を赤らめている。桔梗の髪の毛の匂いが鼻をくすぐった。まるで水桃のように爽やかで、甘い。香を焚き染めてなどいないから、きっと桔梗自身が発している匂いだろう。不意に、紫苑は自分の汗ばんだ体が気になった。

「なあ」

先行していた王が声を上げる。彼の乗る馬は、黒い。

「何だ」

紫苑は聞き返す。

「玄武の巫女つてのは何者だ」

「知らん」

紫苑は即答した。

「お前の知識とそう大差ないと思え」

「……やれやれ」

王は肩をすくめたようだった。

「お前や桔梗みたいに、その巫女には玄武が味方として憑いてるってことかね？」

「さあな」

紫苑は首をかしげた。味方……、朱雀は、味方なのだろうか？

少年の頃に交わした契約によって式神として使役しているが、それは何か思惑があつてのことかもしれない。青龍は、今では桔梗そのものとなっている。彼女は、彼の味方なのだろうか。桔梗は……彼の……。

「紫苑？」

腕の中にいた桔梗がいつの間にか顔を上げていた。紫苑の胸の中で起こった感情の動きに、どうやら彼女は勘付いたらしい。

「どうかしましたか？」

「いや……」

紫苑は微笑んだ。

「何でもない」

かつて桔梗の中に眠る青龍と初めて対峙した時、圧倒的な存在感を目の前にして紫苑が感じたのは、穏やかな諦念だった。彼女に殺されるのなら仕方がない。そう思った。理由はない。別に死にたかつたわけでもない。ただ、甘んじてその運命を受け入れようと思っただけ。結局、彼女が彼を傷つけることなどなかったのだが。

「紫苑」

今度は問いかけではなかった。ただ、呼んだだけだ。

「どうした？」

紫苑は聞き返す。桔梗の顔は、見えなかった。

「連れてきてくれて、ありがとう」

「え？」

「だって」

その声が思いの他強い調子で、紫苑は彼女が拗ねているのかと思つた。しかし、桔梗の表情は穏やかだ。

「出雲の国に用事があるのは紫苑と王だけ……、私が来る理由はありませんでしたから」

「……そうだな」

紫苑はつぶやく。実は、そのことには言われて初めて気がついた。紫苑にはしばらく都を離れる必要があつた。彼の実父が先帝であるという噂　たとえそれが事実であつたとしても、彼がそのままに留まるのは得策ではない。権力争いの道具になるのは真つ平御免だし、そもそも帝の彼に対するおぼえが悪くなるような事態は避けたい。紫苑自身も、権勢への執着はなかつた。

そして、王。彼の弟は、玄武の巫女の庇護下にあるという。水龍が滅びてからどれくらいになるのか……紫苑は覚えていないが、良くぞ生き延びていたものだと思う。青龍の力を借りた桔梗とは違い、王もその弟も、自分ひとりの力で生きなければならなかつた。王は口にしないが、並大抵ではない苦労があつただらう。彼は、弟に会うために出雲の国へ行くことを決めた。

そのふたりに同行する形で、桔梗は今こうして馬上にいるのである。彼女自身は出雲の国には何の用もない。たとえば……そう、あくまでたとえはの話ではあるけれども、彼女は燐や朔らと共に都に残つても良かったのである。

「……………」

紫苑は桔梗の細い肩を押し包むように、そつと腕の幅を狭めた。

「何となく、お前は来るものと決めていたな」

「……………」

桔梗は何も言わない。不意に、紫苑は不安になつた。

「残っていたか？　長い旅路は、辛いかな？」

「いいえ！」

桔梗は強く否定する。

「そんなこと、ないです」

言葉を重ねた。

「私、紫苑と一緒に来たかったから」

「……………」

体を捻り、桔梗は振り返った。乱れる銀系の髪の中から覗く、白い顔。大きな水色の瞳が紫苑を真っ直ぐ射抜いた。紫苑が見つめる中、桔梗の唇がやんわりと微笑んだ。

「どこへでも着いていきますよ」

「……………どこへでも？」

「ええ」

桔梗は頷いた。

「どこへでも……………どこまででも」

「……………」

紫苑は軽く背を曲げた。ひそかに、わずかに重なる吐息。あまりに桔梗がいじらしくて、愛しくて、たまらなかった。どこへでも、どこまででも、この腕に抱いて運んでやろうと思った。決して零れ落ちぬように。この綺麗な想いが、どこへも行かぬように。

三

都を出て半月。昼を少し過ぎた頃だろうか、生い茂る木の葉に隠されていたはずの日差しに突然目を射られて、紫苑は目を細めた。山が、開けた。

「あれが……………」

「玄武の巫女の、治める地……………」

紫苑と王が口々につぶやく。互いの馬の足は止まっていた。

眼下に広がる一面の人里は、ここが都から遙か離れているとは思

えないほど整然としている。いや、遠望しただけでは都の郊外と大差ないように見えた。少々田畑などの緑が多いように見受けられるが、それは致し方のないことだ。山に囲まれたこの地では、自給自足が余儀なくされるのだろう。

「たいしたものだ」

紫苑は唸る。物資の輸送に不向きな土地にありながら、これほどまでに高い生活水準を実現しているとは……。巫女がどういった存在なのかはまだわからないし、直接彼女が政を行まつりごとっているのかも不明だ。しかし、この地には明らかな秩序がある。それだけは確かだった。

「……………」

王は暫く睨みつけるように里を眺めていた。 弟がいる。この

光景の、どこかに。

「……………行くか」

紫苑が促し、彼らは下り坂へと馬を歩ませる。一端開けた視界も、再び木々に覆われてしまった。

「王」

「なんだ」

王は振り返らない。

「お前の弟は、あやかしだな」

「当たり前だろう」

呆れたような声が返ってくるが、紫苑は眉をひそめたまま何も言わない。

「それが、どうかしたか」

「いや……………」

今見えたのは、人里だった。そこにあやかしが、しかも最強と言われる水龍族が、どうやって生きているのだろう。 わからない。

やがて行路が山道から平坦な道路に変わっても、紫苑の険しい表情が緩むことはなかった。

—

夕日が沈んでいく。山々に囲まれている都とは違って、地平線がくつきりと見えていた。集落の入り口と思しき場所には都のものと遜色のない立派な門と、その両脇にやぐらが建てられている。辺りに人影はない。紫苑はそのやぐらから数十歩ほど離れた場所で馬の歩みを止めた。人や馬によって踏み均ならされたのであるう、門の中に続く道は先ほどまでの獣道ではない。

「じつとしている」

桔梗に言い聞かせ、紫苑は馬を離れた。壬は黙ってその背中を見送る。

「……………」

紫苑はしばらく歩みを進め、やがて立ち止まった。門の側に誰かが立っている。遠目にそれと気付かなかったのは小柄だったせいか、それとも夕闇のせいか。

「お待ちしておりました」

りん、とした声。女だ。それも年若い。まだ二十歳は超えていないだろう。

「御門紫苑さまでいらっしやいますね？」

「ああ」

頷くと、少女は軽くお辞儀をした。

「わたくし、梓あやと申します。玄武の邑むつでの皆さまの御世話を申しつけておりますので、以後お見知りおきを」

「これは「丁寧」に」

紫苑は返礼をし、そして首を僅かに傾げた。

「しかし、何故我らの到着をご存知だったのかな？ それも日付や

時刻まで、これほど正確に」

声に多少の警戒が滲んだ。だが、梓は気にする様子もない。

「それは」

明るい、年相応の笑みに見えた。だが紫苑は厳しい眼差しを緩めない。

「巫女さまのお言葉がありましたから」

梓はあっさりと言いつ切り、背を向ける。後ろ髪を肩まで切り揃えた、都では珍しい形をしている。彼女はどうかやら扉を開けようとしているようだった。

「連れを待たせているので、一度戻ります」

紫苑が声をかけると、梓は少し振り向いて頷いた。紫苑は駆け足で戻り、桔梗の乗る馬のくつわをとる。

「歓迎されそうか？ 野宿はもう嫌だぜ」

「……………」

茶目つ気に満ちた王の言葉にも、紫苑は笑わない。

「紫苑」

心配そうに声をかけた桔梗に、彼は短く答えた。

「大丈夫だ」

「……………」

桔梗の大きな瞳が彼を見つめるのを感じる。

「……………大丈夫だ」

自分に言い聞かせるように、紫苑はもう一度つぶやいた。

二

門が開き、三人はその集落に足を踏み入れた。大通りの両脇には民家が隙間なく立ち並んでいるが、ひとけもなくひっそりと静まっている。

「住人の方はいずこに？」

紫苑が先導する梓に尋ねると、淡々とした答えが返ってきた。

「外の方がお出でになるのに慣れぬもので」

「……貴方は随分落ち着いておられるが？」

「わたくしは粗相を致すわけには参りませぬもの」

笑ったようだった。紫苑は黙り込む。どうにも違和感が拭えない。

この邑も、娘も、全てが作り物であるかのような。

「巫女さまがお会いになりたいと仰っていますが」

梓の言葉に、紫苑は現実に引き戻された。

「一度、皆さまに逗留いただく屋敷へのご案内致します」

「かたじけない」

紫苑は謝辞を述べる。いくら巫女が予見していたとはいえ、こつこつも行き届いた出迎えをされるとやはり強縮してしまう。しかし、何故巫女は見知らぬ彼らを歓待しているのか。そして、何故、梓は紫苑のことを何も言わないのか。

「……………」

自分の臉にそつと触れる。その奥に宿るのは紛れもない紫電の瞳。何故、そのことについて何も触れないのか。それも巫女が予言したのだろうか。それにしても何らかの反応はあるものと思っていた。そして、彼の連れであるあやかしのふたり。彼らを見ても、梓は全く動じていなかった。水龍族を見知らぬわけでもないだろうし、知らないにしても彼らはあやかしだ。ひとではない。だが、梓はふたりに紫苑と同じような礼を施している。都の人間では考えられぬことだ。一体何故だろう……。

「こちらでございます」

大通りをしばらく北へと歩いた後、梓は西へと曲がった。一頭の馬のくつわを取り、紫苑はその後を追う。王の乗る馬がさらに続いた。

「紫苑」

紫苑が馬上を振り仰ぐと、桔梗の水晶色の視線とぶつかった。長い銀糸が零れる。それは夕日に染まって、朱色に輝いていた。どこ

か浮かぬ顔をしていたようだが、それでも紫苑と視線が合うと桔梗は微笑む。

「やっと着きましたね」

「……ああ」

紫苑も口元を緩めた。

「辛い思いをさせたな」

長旅は堪えただろう、と労わる紫苑に、桔梗は首を横に振る。

「いいえ、ちっとも」

「……そうか」

桔梗の気遣いをありがたく受け取り、紫苑は微笑んだ。

「なあ」

背後から壬の声がする。

「何だ？」

紫苑が問い返すと、壬は少しいらだったように声を荒げた。

「俺の弟の話はどうなってるんだよ？」

紫苑は言葉に詰まる。

「それは……」

折も折、梓はちょうど一軒の屋敷の前で足を止めた。

「こちらのお屋敷をお使いくださいます」

「……ほう」

紫苑はつぶやく。ここは今まで通り過ぎてきた民家よりも一際立派な造りをしている。都でも、こういった屋敷に住むのは殿上人を中心とした一部の貴族だけだろう。庭も荒れた様子はなく、きちんとひとの手が入っているものと思われた。

「そして……」

梓の視線が壬の方を向く。馬から下りた彼は、彼女を睨むように見つめた。だが彼女は恐れる様子もなく、にこやかな笑みを崩さない。

「壬さまの弟君のことは、巫女さまが良きように取り計らわれるとの事です。どうぞご安心を」

「良きように、って」

「詳しいことは」

毅然と遮る。王は気圧されたように黙った。

「巫女さまご本人からお伺い下さいますよう」

梓は慇懃に頭を下げた。王はふっと息をつく。もうしばらく我慢をする気になつたようだ。

「それでは、わたくしは他の家人たちとともに離れて待機しております。湯浴みの準備も済んでおりますので、どうぞ旅の疲れを癒して下さいませ。一刻半ほど致しましたらお迎えに上がりますので、御仕度を」

「巫女どのは」

紫苑が尋ねる。

「どちらにお出でです？」

「……あちらの」

梓の手が北を指した。

「大社おほやしろの中に聖殿が御座います。巫女さまはそちらに」

「左様か」

紫苑は頷いた。馬に跨つたままでいた桔梗を抱き上げ、地面に下ろす。

「それでは、後ほど」

紫苑が振り向いたとき、既に梓の姿はどこにもなかった。

三

大きな木作りの桶に張られた湯が。ゆらゆらと揺れている。紫苑はその長い手足を存分に伸ばした。桶の直径は彼の両腕を広げた幅よりもまだ大きいだらう。四方もまた木の壁に囲まれ、下部に穴が開いているのは薪をくべるためか。今のところ、火は消えている。

王は湯浴みなど要らないと言った。水の眷属である彼にとって、

身を清めることなど簡単なことなのだろう。それでは桔梗は、と問いかけようとしたところ、辺りに彼女の姿は見当たらなかった。馬にくくりつけていた荷を解いているのかもしれない。壬に伝言を頼み、先に湯を浴びることにしたのだが。

不意に、引き戸が開いた。小柄な人影がするりと入り込んでくる。紫苑は湯煙の中で硬直し、思わず叫んだ。

「お、お………！！！」

「おっ？」

不思議そうに首をかしげているのは、桔梗だった。髪を頭頂部にまとめ、白い木綿のような布で胸から腿までを覆っている。細いうなじやらすわりとした脛やらが、ひどくまぶしかった。

「お、って何ですか？」

「ち………！！！」

「ち？ おち？」

「ば、ばばば………！！！」

「おちば？」

桔梗はあざやかな身のこなしで、さつと湯に体を沈める。ふんわりと浮き上がりかけた布を、器用に抑えた。

「落ち葉がどうかしましたか？」

紫苑はようやく我に返った。

「おい！ 違う！ 馬鹿！」

「あ、なるほど。そういうことですか」

紫苑は飛びのくように桔梗のいない方の端に移動した。

「どうぞ」

桔梗が差し出すのは彼女の巻いているものよりももう少し小さな白布だ。紫苑は腕を伸ばして受け取り、腰に巻いた。

「お前、何のつもりだ」

「何のつもり………って」

桔梗は首を傾げる。髪先の白い肌の上で水気を吸い、つややかに跳ねた。

「紫苑と一緒に、湯浴みをしようと思つて」

「……………」
絶句。紫苑は空気をもとめる溺水者のように、口をむなしく開閉させた。

「駄目ですか？」

笑みを消し、寂しそうな表情をされては無下にできない。紫苑は途方にくれ、濡れた髪をかき上げた。ぽたり、ぽたり、と滴が広い肩の上に落ちる。

「その、困るのだが」

「私は困りません。大体、何に困るんですか？」

「いや…………それは…………」

「構わないでしょう？」

「うーん…………」

「嫌？」

「そ、そういうわけではないが…………」

紫苑はしどろもどろになっていた。顔に血が上る。

薄暗い部屋の中、桔梗がすぐ側に居る。透き通るような、そのまま湯の中に消えてしまいたいそんな白い肌と、上気した頬の色と、潤んだ瞳。かすかにとがらせている唇が紅い。

この状況でどうしようと。紫苑とて男である。確かに、半妖である彼は女性経験もないし、性的な欲求も他人よりは淡泊な方だと思ふ。しかし、これは わざとか。わざとなのか。

体を包む湯がまるで沸騰しているように感じる。熱い。

「紫苑」

桔梗が、動いた。なめらかで、柔らかいものが彼に触れる。

「……………！」
紫苑は声もなく硬直した。桔梗に抱きしめられている。薄い布きれのみを隔てて、こんなにも近く。

「何か、不安そうだったから」

桔梗はつぶやいた。吐息が、肩を覆う。

「ずっと、緊張していたでしょう」

「……………」

紫苑はおずおずと手を伸ばす。桔梗の背中をそっと抱きしめた。

愛しい。紫苑の胸をざわつかせていたものが音もなく消え、代わりに彼を暖かな感情が満たした。

「大丈夫だから」

それは紫苑が桔梗に告げた言葉。

「紫苑はひとりじゃない」

「……………桔梗」

「紫苑」

紫苑は少しだけ力を込め、彼女の体を離した。桔梗の顔を正面から見つめる。

「いつか　そう遠くない将来に」

自分でも呆れるほど落ち着いた声だった。それは、ずっと以前から言おうと思っていたこと。彼女の全てを受け入れ、ともに生きていくと決めた日から、ずっと　。

「都に帰ったら」

桔梗の顔が、間近にある。彼女はただ、澄んだ瞳で彼を見上げていた。

「そうしたら　……………」

桔梗の、白く尖った耳に　あやかしの証であるその耳の中に、紫苑はその聖なる誓いの言葉を注ぎ込んだ。

「……………紫苑」

波紋が広がる。桔梗の頬から落ちるその甘い滴に、紫苑は優しく口付けた。

第四章

湯浴みを終えて出てきたふたりの目の前には、新しい着物が置いてあった。壬が置いたわけでもないだろうから、梓か、もしくは誰かこの屋敷の家人が置いたのだろう。白地の単に、紺の狩衣。そして藤の色目を使った小袷。紫苑は思わず立ちすくむ。

「どうしました？」

桔梗は器用に布を体に巻き付けたまま身支度を終え、最後に足元からするりとさらしだけを抜いた。

「何故、ふたり分……」

顔に血を上らせて紫苑がつぶやく。桔梗はくすりと笑って、

「声が聞こえたのでしょう？」

と答えた。

「……………」

沈黙する紫苑に、桔梗は衣を差し出す。紫苑はそれを受け取り、そそくさと身にまとった。いつまでも布一枚を腰に巻いているわけにもいかない。

「いいじゃないですか」

一瞬だけ視線が下を向いて、すぐに紫苑を射抜いた。強い眼差しだった。紫苑が僅かにたじろぐほど、強い。突き通った、混じりけのない色。

「私は、紫苑を誰にも渡したくない」

「……………桔梗？」

紫苑は怪訝そうに聞き返す。どうしたのだろうか、今までにない桔梗の様子だった。こんな風に、桔梗が不安そうにしたことはない……。

「……どつかしたのか？」

「……………」

桔梗は答えず、少し背伸びをして紫苑に顔を寄せた。紫苑は彼女を抱き止め、その小さな果実のような唇を啄む。甘くて、暖かくて、

柔らかい。

「紫苑」

「ん？」

「私のこと……、その……」

桔梗はためらうように視線をさまよわせた。

「……………」

紫苑は微笑む。湯浴みを共にするのは何とも思わなくせに、何故こんなことくらいで照れるのだろう。

「お前を、大切に思っているよ」

紫苑はもう一度、彼女を抱きしめる。

「誰よりも……想っている」

桔梗は彼の肩に顔を埋め、小さく頷いた。

「私も……です……」

二

梓はちょうど一刻半後に姿を見せた。玄関に揃った三人を見渡し、満足げに頷く。壬もいつの間にか、新しい着物に着替えていた。

「それでは、参りましょう」

後も見ず歩き出す彼女に、紫苑と桔梗、そして壬が続く。壬は足を速めて紫苑の左隣に肩を並べた。

「なあ」

「何だ？」

紫苑は真つ直ぐ梓を見たまま答えた。

「何か、変じゃねえか？」

「……………今更だ」

紫苑は苦笑する。だが壬はにこりもしない。

「大丈夫かな？」

「……………お前らしくないな」

一瞬だけ、驚いたような視線。

「何か、不安なことがあるのか？」

「……………」
王は唇を噛んだ。

「何ってわけじゃない。ただ……………」

「ただ？」

「何もかもがいけ好かない。それだけだ」

「……………」

紫苑は黙って辺りを見回す。整然とした街並み。だが、相変わらずひとの姿は見当たらない。

そういえば、そろそろ夏になるな。紫苑は軽く額をぬぐう。

梓は随分と足早で、紫苑ですら少々急いで歩かなければ見失ってしまいそうだった。湯浴みをしたばかりだというのに……………。ふとその情景を思い出してしまい、思わず顔に血が上る。湯に隠れた桔梗の白い肢体。濡れた銀髪の下で輝く水晶の瞳。優しい弧を描く紅い唇。

桔梗が彼の右手を握った。紫苑はびくり、と肩を震わせる。

「どうしました？」

桔梗が彼を見上げて尋ねた。紫苑は首を横に振る。

「何でもないよ」

上手く微笑むことができたか、自信はない。鼓動が早鐘のように体中を鳴り響いている。桔梗と繋いだ自分の手がひどく汗ばんでいるような気がして、綺麗に拭いたかった。

大切に想っている。先ほど自分はそう言った。本当だろうか？

紫苑は自問した。十月程前、彼女と出会った頃は、ただ守ってやりたいだけだった。自分に似た孤独を、癒してやりたかった。そして…………、彼女の存在は徐々に紫苑の中で大きくなっていった。彼女は、紫苑を守ると言う。側にいたいと 好きだと言う。それは紫苑も同じだ。桔梗を守りたい。側にいて欲しい 好きだ。だから、伝えた。「都に帰ったら、自分の妻になって欲しい」と。

結婚など、死ぬまでしないと思っていた。どうせ彼に子孫を作る能力はない。婚姻など勢力争いの道具としてしか見ていない貴族たちにとって、自分の娘や妹を紫苑に娶めあわせるなど、考えられぬことだ。本人たちとて、それを望むことはあるまい。紫苑自身も、独り身であることに何の抵抗もなかった。蝶よ花よと育てられた深窓の姫君たちに、紫苑の孤独が分かるとは思えない。それならば、いつそ独りでもいい。

けれど、桔梗だけは特別だった。滅びた一族の最期の御子。その身に運命を背負い、青龍を魂に宿す特別な存在。そんなことなど、全く関係がなかった。少なくとも紫苑の前では、桔梗はごく普通の少女だ。笑い、泣き、怒り、拗ねる。それを毎日のように繰り返す。彼女の感情の豊かさに、寡黙な紫苑は振り回されてばかりだった。だが、それが心地良い。ひっそりと静まり返っていた屋敷が急に活気付いた。式神たちさえもが桔梗によって変わっていく。心温かく優しく。ずっと、そんな日々が続くと思っていた。昨日と変わらない今日。今日と変わらない明日。そして、そこには当たり前のように桔梗の姿がある。そんなしあわせな日々が、ずっと続けば良い。しかし、少しずつ彼らの関係は変わっていたのだろう。ふたりとも気がつかないくらいに、ゆっくりと。それは、王が現れてから顕著になった。桔梗が側にいることが漠然とではあるが当たり前になっなっていた紫苑にとって、王の出現は大きな衝撃だった。そして思った。「離れたくない」「失いたくない」「側にいて欲しい」と。それは、きつと「大切に想う」とは違う。もつと自分勝手な感情だ。自分のための感情。自分が、桔梗を欲している。求めていく。いなくなることに耐えられない。それだけだ。彼女のしあわせは二の次で、自分の想いを満たしたいだけ。それでいいのだろうか。桔梗がもし自分のこんな感情に気付いても、許してくれるだろうか。それとも。桔梗も、自分と同じなのだろうか……。

私は、紫苑を誰にも渡したくない。桔梗の言葉が脳裏に蘇る。苦しそうな声だった。けれど、それは紫苑も同じ。どうしようもな

く苦しい想い。そして……。

「私も、桔梗を誰にも渡すつもりはない……」
紫苑は小さくつぶやいた。

三

巫女が住まうという大社に到着した頃には、日はすっかり沈んでいた。梓は開けられたままの門をくぐり抜け、さらに歩みを進める。門番がいるかもしれないと紫苑は辺りを見回したが、相変わらず人影は見当たらなかった。真正面に、大きな建物が鎮座している。それを取り囲むように塔が幾つかと、離れの屋敷。御所と同じとまでは言わぬまでも、かなり立派な造りである。だがひとけはなく静まり返っていて、どことなく不気味な雰囲気醸し出していた。

「あちらが」

梓が足を止めた。細い手は正面の建物を指している。

「巫女さまのお社にございます」

「左様か」

梓は紫苑、桔梗、壬を順に見渡した。

「恐れ入りますが、御門紫苑さま以外のお二方にはお目通りはございません。申し訳ありませんが、今暫く離れでお待ち下さいませ」

「何？」

紫苑が聞き返す。

「何故です？ そんな話は全く……」

「申し訳御座いませぬ」

「……………」

黙った紫苑に変わり、壬が進み出た。

「ちよつと待て。俺は弟と会えると聞いたからここまで来たんだ。

違うのか」

「違いはしませぬが」

梓は怯みもせず言い返した。

「今すぐにといいわけにはいかぬと、おわかりいただけることと存じますが」

「俺は直接巫女の口から聞きたかったんだがな」

「申し訳ありません」

「何故紫苑だけなんだ」

「それは」

梓の表情は少しも動かなかった。

「巫女さまのお考えなれば、わたくしめには計りかねます」

「わかりました」

口を開いたのは、桔梗だった。紫苑は驚いて彼女を見つめる。壬も同じだった。そっと、桔梗は紫苑の手を離す。

「おっしゃるとおりに致しましょう。巫女どのとのお話が終わるまで、紫苑を待ちます」

「桔梗……」

何か言いかける壬を視線で制し、

「ただし……」

桔梗は言葉を継いだ。

「もし、そちらが約束を違えたり、もしくは紫苑の身に危害が及ぶようなことがあれば」

梓が小さく震える。紫苑からは桔梗の顔は見えなかったが、きくと彼女は今、「御子」の顔をしているのだろう。

「御覚悟のほどを」

桔梗がぐるりと微笑む。どこか凄みを残した妖艶な微笑。恐ろしくはない。恐ろしいはずなどない。ただ　美しい、と思った。

遠ざかっていく、紫苑と梓のふたつの背中。それをじっと見つめる桔梗に、壬が声を掛けた。

「良かったのか？」

「……………」

桔梗は少しだけ口元で笑う。薄い色の瞳は、どこか寂しそうだった。

「勿論、ついて行けるものなら行きたかった。でも」

桔梗の瞳が壬を映し出した。

「貴方の弟は、向こうの手の内にあるのですし」

「……………」

壬は思わず息を飲んだ。まさか、自分の弟のことを気遣って退いたのだとは思わなかった。紫苑を傷つけ、都から離れなければならぬ状況にまで追い込んだのは自分なのに。

「そうはいつでも」

桔梗は穏やかに言う。

「さつきも言ったとおり、紫苑に何かあれば遠慮はしませんけれど、桔梗の微笑は優しく、静かだった。そしてそれは壬に向いている。」

「壬たち兄弟は私と同じ、水龍ですものね」

「み……………」

御子、と呼びそうになって、壬は慌てて咳払いをした。

「ありがとう」

嬉しかった。まさか彼女の口からそんな言葉を聞けるとは。彼女の存在は、そしてその運命は、水龍がどうか、そんな狭いところには留まらないものなのだろう。

かつて、燐が言っていた言葉を思い出す　桔梗ちゃんは、確かに

君の知る「御子」ではないかもしれない。でも君と同じ水龍族であることには変わらない。その絆を、君は大切にできないかい。そのとき、壬はためらった。紫苑が許せない。いや、人間たちが許せ

ない。自分から「御子」を奪った全てが許せない。そう思っていたけれど、本当は……。

「わかつてたよ」

王はふつと表情を緩めた。桔梗が怪訝そうに首を傾げる。

「俺じゃ駄目だつてことくらい」

青龍の魂を宿す、運命の御子。その全てを受け止められる度量は、自分にはない。あの男のようには、できない。だから、今自分でできることは弟を探すこと。弟がしあわせでいるかどうかをこの目で確かめたい。もしここで彼がしあわせに暮らしているのなら、そのときは……。

ふと何者かの気配を感じて、ふたりは同時に視線をそちらへと向けた。ざり、ざり、と小石を踏む小さな音。梓と同一年くらいの若い娘が、いくらか離れた場所に佇んでいた。薄布をかぶっていて、顔は良く見えない。ほっそりと、儂げな印象の少女だった。

「おふたりを離れにご案内致します」

「お名前は？」

桔梗が尋ねた。早くも踵を返そうと背を向けかけていた娘は、そのままの体勢で返事をする。

「……凧と申します」

そうしてそれ以上の会話を拒絶するように、凧は足早に歩き始めた。

「……………」

桔梗と王は一瞬視線を見交わし、やがて彼女の後を追った。

二

紫苑は幾つもの回廊を通り、ようやく本殿へと到着した。大きな門の両脇には、武装した門番らしい男がふたり、立っている。梓と紫苑が現れても、そちらに視線を向けることすらなかった。

梓は手早く門を押し開ける。鍵は掛かっていないらしい。

「こちらでございませす」

「……………」
入れということだろうか。困惑した紫苑が梓に視線で問うが、彼女はただ黙って見返してくる。

「……………」
紫苑は致し方なく門の内へと足を踏み入れた。中に入って数歩進んだところで、音を立てて背後の扉が閉ざされる。紫苑は振り向かうかと思つたが、やめた。壁の両脇にずらりと並んだ燭が、一瞬の外気に煽られて揺れる。

「お待ちしております」
りん、とした声が響き渡つた。

紫苑は足を止め、奥を眺める。背の高い燭台を両脇に従えるようにして一段高い場所がある。普段は帳で仕切っているのだから、今日は高く引き上げられていて、奥に女性らしき人影が見えた。都では、年頃の貴族の子女は決して他人の前に顔を見せない。紫苑は思わぬ状況に少々面食らつた。まさか、巫女自らが顔を見せるとは。

「どうぞ、こちらへ」

薄紅から濃赤へと重ねられた単の、一番上には白い衣。袴の色も赤であるようだった。紫苑は不躰かと思ひながらも、真っ直ぐに見据える。お互いの顔がはつきりと見えるようになった頃、女は一礼した。

「はじめまして」

長い髪が、零れ落ちる。

「上宮昴と申します」

その結い上げられた髪は、見たこともないほど鮮やかな黄金の色。その額の下には、まるで深く済んだ泉のような青い瞳が微笑んでいた。

「……………」

紫苑は一瞬絶句するが、今自分のなすべきことを思い出し、気を取り直した。

「ご挨拶が遅れて申し訳ありません」

座している相手に合わせるように、彼もまた腰を下ろす。ひんやりとした床が心地良かった。

「御門紫苑と申します。この度は突然の来訪により多大なご迷惑を掛けたにもかかわらず、ご歓迎いただき心より感謝申し上げます」

「突然ではありませんでした」

昴は穏やかに言う。

「玄武が知らせてくれましたから」

「……………」

紫苑は黙する。

昴は、ひとにしか見えない。見たところ肌は陶器のように白く、どこにも文様はないし、耳も尖ってはいない。しかし、彼女以外にこのような髪や目を持つひとを、紫苑は知らなかった。自分を除いては。もしかして、この女性は自分と同じなのだろうか。自分と同じ、半妖なのだろうか……。

「ご同行の方の弟ぎみ、癸には既に話を通してあります」

昴はあくまでも微笑を崩さない。まるで面でも貼り付けているようだ、と思った。

「明日にでもお会いできるでしょう、とお伝え下さい」

「かたじけない」

「いいえ」

強縮する紫苑を慰撫するように、昴は目を細める。その目も髪も、白磁の肌との対照が眩しい。

「はるばる都からご高名な御門紫苑さまがいらっしゃるのですもの。これくらいは当たり前のことです」

「ご高名、ね」

紫苑は思わず苦笑した。

「何で高名なのは敢えてお尋ねしませぬが……………」

「わたくしたちの里では」

昴は強い口調でさえぎった。

「あやかしとひととが共存しております」

「……………」

紫苑はじつと昴を見据えた。多分、今自分は笑っていない。

「きつと、快適にご滞在されることと存じますわ」

ふわりと笑うさまは、清楚でいて華やかな、胡蝶蘭のようである。しかし、

「できるだけご迷惑は掛けますまい」

紫苑は固い表情でそう言つと、まるでそれを隠すかのように深々と一礼した。

「……………」

昴はそれを高座で眺めながら、こつそりと深く息を吐く。これじゃあ駄目か。誰にも聞こえぬつぶやきを、胸の内に洩らしながら。

三

翌日、都は雨だった。朔は縁に座り、滴に打たれる木々の葉を眺めている。いつしか、式神も葉月という男性の形をしたものと、あざみという女房姿のものに変わった。紫苑はあまり名づけの才がないのかもしれない。いかにも単純な名であった。

父、燐は宮中に参内しており、朔はひとりだ。否、傍らには白猫が寝そべっている。この小柄な猫が四聖獣の一、白虎のかりそめの姿であるとは誰も気付くまい。

「紫苑さんたち、もう着いたかなあ」

猫が小さく鳴いた。どうやら肯定の返事を返したらしい。

「そっかあ」

朔は顔を綻ばせる。上気した頬は彼の髪と同じ、咲き誇る桜の色

だった。それは、今は亡き母から受け継いだもの。

「でも、大丈夫かな。昴さん、変なひとだから」

そう言って顔を翳らせる。その表情は、父と瓜ふたつであった。

「ぼくが思うに、きつとあのひとは紫苑さんを気に入ると思うんだよ」

朔はうんうん、と頷く。

「ということは、紫苑さんを巡って桔梗さんと昴さんが争っちゃうかもしれないよね」

年齢よりもずっと大人びた外見で、さらに大人びたことを言う。

こんなところも父親譲りだろうか。

「紫苑さんは桔梗さんにぞっこんだと思うけど、その程度で引き下がる昴さんじゃないだろうし……」

朔は思い出す。「わたし、都に行きたいわ」と、昴は透き通った声で歌うように言った。

「こんなところに閉じ込められているのはうんざり。どうせわたしは傀儡かいらい、いけ好かない長老どもがいればこの邑は維持できるのだから」

きらきらと輝く宝玉のような瞳が、朔を見つめて微笑む。「あなたがもつと大きかったら、誘惑して連れ出してもらうのだけどね？」

「紫苑さんに、実行しようとしてないといいけど……」

憂い顔で空を仰ぎ、彼は小さく叫んだ。

「やあ、虹だ！」

いつの間にか雨が上がり、ぼんやりとした七色の架け橋が立ち上がっている。まるでそれは出雲の国に続いているようで……。空は徐々に明るさを取り戻し、厚い雲は辺縁へと散り散りになっていく。差し込む光はぼんやりと、しかし真夏の訪れを思わせる眩しさで辺りを照らし出していた。

「綺麗だね、とらー！」

朔は年齢相応の笑顔を取り戻し、いつしかその光が消えてしまう

までずっと空を眺めていた。

第六章

—

紫苑が桔梗たちの待つ離れにやってきたのは意外にも早く、別れてから半刻ほどしか経っていなかった。それでも辺りはすっかり暗くなり、雲ひとつない闇空にはかすかに星の光が揺らめき始めている。先ほど、部屋の四方に燭が置かれた。

簾を開けて、紫苑が姿を見せる。

「おかえりなさい」

実は彼の足音が聞こえたときから桔梗は既に腰を浮かせていて、壬は苦笑を浮かべながらその様子を見守っていた。紫苑は少し疲れたような表情をしている。

「待たせたな」

「巫女やらと話はできたのか？」

壬は床に腰を下ろしたまま尋ねる。彼らを案内してきた凧という女はここにいない。もしかしたらまた梓が迎えに来るのかもしれない、と彼は思った。

「ああ」

紫苑は頷いた。

「お前の弟とは、明日会えるそうだとぞ」

「……………」

あまりにもあっさりと告げられた言葉に、壬は絶句する。

「……………」

声が届まったようだった。

「そうか……………」

胡座をかいた膝に両手をつき、俯く。泣いているのかもしれない。紫苑は彼から目をそらし、桔梗を見遣った。彼女はすぐ側に立っている。薄い水色の瞳がじっと彼を見つめていた。

「どうかしたか？」

紫苑は優しく微笑んだ。

「……………」

桔梗は黙ったまま首を横に振り、彼の腕にしがみつく。

「ん？」

紫苑は少し驚いたようだったが、彼女のなすがままに腕から力を抜いた。

「どうした？ 腹が減ったのか？」

「え？」

桔梗は思わず声を上げた。

「お腹？」

「ああ」

紫苑は言う。

「もう夜だからな。腹が減ったのだろうか？」

「……………」

桔梗はきよんとした後、やがて小さく嘔き出した。

「違うのか？」

「違いますよ」

桔梗は笑う。紫苑が王の方を見ると、彼は顔を上げて哀れむような視線で彼を眺めていた。

「お前、阿呆だろ」

「何故」

「阿呆だからだ」

王は断定し、紫苑が何かを言おうとするより前に口を開いた。

「そういえば巫女はどんな様子だったんだ？」

おそらく、桔梗はそれが気になっていたに違いない。何しろ紫苑が自分以外の女とふたりきりで会っていたのだ、気にならないはず

がない。紫苑は鈍い男だから気付かなかったのだろうが……それにしても空腹なのか、とはまた随分と大きく外したものだ。

「巫女、か」

「紫苑はつぶやいた。」

「良く分からない」

「ん？」

「この邑は」

紫苑は言う。桔梗が見上げてくる視線を、痛いほどに感じていた。

「あやかしとひととが共に生きているのだそうだ」

「へえ？」

「王は言う。」

「変なの」

「……………」

紫苑は考え込むように視線を落とす。

「紫苑？」

桔梗の声があった。紫苑は目を上げない。

「もしかすると……………」

その声はとても小さく、しかし桔梗と王の耳にははっきりと届いた。

「彼女は、私と同じなのかもしれない」

二

髪を梳く。燭台の光を反射して、それはきらきらと輝いた。

「……………」

それを一房とり、彼女はじっと見つめる。青い瞳には何の感情もこもっていないようであり、しかし口元はきゅっと引き締められていた。

「ねえ、玄武」

彼女ひとりきりの狭い部屋に、小さな声が響く。

「私に約束したこと……、忘れていないでしょうね？」

沈黙が、満ちる。何かを待つように目を伏せて、やがて彼女はふつと微笑んだ。

「そう。それならばいいのよ」

彼女は顔から表情が消えた。

「私は忘れてなどいない。愚かな邑びとたちが私にしたこと。私の父や母にしたことを、決して忘れない」

静かな声。淡々と紡がれるそれは、どこか呪詛にも似ていた。

彼女の視線が部屋の一角に注がれる。美しい花の描かれた壺が置かれており、その中は何やら黒く粘度の高い液体で満たされていた。でも……あの男。そう、御門紫苑といったかしら」

彼女は話し続けながら、その壺から刷毛はけで少し液体を掬い取った。髪に絡めていく。その液体は、草花から特別に作られた。彼女が作らせたのではないが。染料なのだった。

「私が髪を染めずに出て行っても、何も言わなかった」

長老たちなどの一部の者たち以外は、誰も知らないことなのに。誰にも知らせてはならないことなのに。彼の口から広まったらどうしよう。だが、そんなことはどうでも良かった。手馴れた手つきで少しずつ、髪を黒く染める。ずっと何年もの間、毎日毎日繰り返ししてきたこと。

「瞳だけじゃ気付いてもらえないかと思って……でも、彼はどう思っただかしら」

そしてくすつと笑う。

「私のこと。興味を持ってくれたかしら？」

この後、長老たちに会わなければならない。きつと紫苑について尋ねるつもりなのだろう。彼らは彼女本来の髪の色を知っているのに、彼女は染めなければならぬのだ。それが彼らの意向だからという、それだけの理由で。

「馬鹿馬鹿しい」

彼女の唇が嘲笑の形に歪んだ。

「こんな茶番、もうすぐ終わらせてやるわ」
青い瞳が宙を睨む。

「そう、もうすぐ……」

三

あれから間もなく、彼らは梓に伴われて屋敷に戻った。夕食を摂り終え、彼らは誰からともなく部屋に引き取る。まだ旅の疲れは癒えていない。とにかくゆっくり眠る必要がありそうだった。

王は明日弟に会えると聞いて少し落ち着かない様子だったが、口に出しては何も言わなかった。桔梗は同じ水龍族に会えるからか、嬉しそうにしていた。良かった、と紫苑も思う。桔梗を水龍の元に返す気は、今はもうない。それでも桔梗が王と上手くやれば良いと思う。何より、彼らはもうほとんど滅びてしまって、仲間のいない種族なのだ。彼の母方の血である、鳳凰族と同じように。

鳳凰族にも彼らのような、ひと知れず生き残っている者がいるのだろうか。もしいるとするならば、いつか会えるだろうか。その時、そのあやかしは彼のような半端な存在をどう思うのだろうか。鳳凰族の母と、その一族を滅ぼした先帝の子。憎まれるだろうか。恨まれるだろうか。それとも……。

「もう休みますか？」

紫苑らにあてがわれている屋敷には多くの部屋があるのだが、桔梗はまるでそれが当然であるかのように紫苑と共にある。彼も敢えてとがめだてはしなかった。

「そうだな」

紫苑は頷いた。桔梗が部屋の隅の燭を吹き消し、辺りは暗闇に満ちる。ゆっくりと闇に目が慣れて、紫苑は桔梗を視界に捕らえた。闇に滲む彼女の輪郭が、何故かひどく儂げに見えて、

「桔梗」

思わず、声を掛けた。

「はい？」

一般的に、ひとよりもあやかしの方が夜目はきくという。桔梗は紫苑が見えていないと勘違いしたのかもしれない。立ちすくむ彼の手をとった。

「……………」

紫苑はその手を握り、彼女の華奢な体を腕の中に包み込む。

「紫苑…………？」

桔梗の声が上がらず。紫苑はただ力を込めて、彼女を抱きしめた。

「どうしたんですか？」

「……………」

説明できない。紫苑は言葉に窮した。まさか、桔梗が夜に溶けてしまいそうだった、とは言えない。自分の前から消えてしまいそうで、怖かった。そして何よりも この邑が、怖い。

「……………」

桔梗は腕を回して紫苑の背中を優しく叩いた。

「ねえ、聞かせてください」

「何をだ？」

「巫女さんのこと。どんなひとでした？」

「何故、今頃」

不思議そうにいう紫苑に、桔梗は頬をふくらませたようだった。

姿はもうすっかり成人なのに、そういうところだけはいつまでも子供のような。

「気になりますよ、だって」

「そうか？」

「紫苑と同じかもしれないって、何がです？」

「ああ……………そのことが」

紫苑はつぶやいた。桔梗は黙って彼を見上げている。闇の中でさえその瞳は力を持って、類まれな宝玉であるかのように輝いていた。

紫苑はその目を真っ直ぐに見つめる。

「彼女の髪の色が、こがね色だった」

「え……?」

桔梗はさすがに驚いたように目を見開いた。

「そして瞳は」

紫苑はさらに言葉を継ぐ。

「青」

「それって……」

桔梗の言葉の先を察し、紫苑は首を横に振った。

「分からない。だが、あやかしには見受けられなかった」

「ということとは」

桔梗は声を低める。

「……半妖かもしれないってことですか」

「可能性は、ある」

紫苑は頷いた。

「……………」

桔梗は紫苑を見上げる。しばらくの沈黙の後、彼女は口を開いた。

「紫苑」

「何だ?」

「今夜は、ずっと手を繋いでいてください」

「寝ている時もか?」

「はい」

「構わないが……指が痺れるかもしれないぞ」

「……………いいんです」

桔梗は頷く。

「寝ている間に、紫苑がどこかに行ってしまうないように」

「……………」

紫苑は少し驚いたように、紫電の瞳を瞬かせた。

「どこに行くというんだ? 私はここにいる。他に行くところがない」

「……………」
桔梗は唇を噛んだ。けれど、もしその巫女が半妖だったら……紫苑と同じだったら……彼女の側も紫苑の居場所になるかもしれない。紫苑は桔梗を腕に抱いたまま言葉を継いだ。鈍い彼は、きっと彼女の胸のうちなど知らない。そのはずなのに。

「お前がここに居るんだ。私の居場所は、お前の側にしかない。そうだろう？」

不覚にも泣きそうになる。桔梗は自分の肩に置かれている紫苑の手をぎゅっと握り締めた。

「……はい」

声の震えは気付かれなかったはず。頬に涙が一粒だけ伝った。桔梗は願う。闇が、涙を隠してくれますように。これは悲しい涙ではないのだから、紫苑が心配しなくていいように。安らかに眠れるように。

第七章

—

眠れない。王は目を開けて、闇に滲む天井の輪郭を見上げていた。明日、葵と会える。何年ぶりだろうか……あれからもう随分経ったような気がする。

集落が壊滅した日、まだ彼らは子供だった。喧嘩っ早く、妖力も攻撃方面の術に長けていた王。物静かで、癒しの術を得手としていた葵。ちょうど「御子」が生まれたのと同じ年に生を受けた双子は、近年まれに見る強い妖力を持ち合わせていたらしく、一族の大人たちからは将来を囁目されていた。王が「御子」の許婚に選ばれたのも、それが理由だっただろう。幼い日の王には大人たちの事情など

理解できなかったが、それでも変に気分が高揚したのを覚えている。一族を率いるために生まれると言われる、特別な「御子」。「御子」は、きつと水龍族の新たな歴史を切り開いていつてくれるに違いない。そう期待を寄せる大人たちの言葉を聴くたびに、彼も胸の高鳴りを感じた。早く会ってみたい。どんな人なのか、知りたい。

結局、新たな歴史などというものはどこにもなかった。水龍族は滅びた。呆気ないまでに。

王は寝返りを打つ。そういえば、自分は何をしていたのだろう。水龍族が滅びてから「御子」が見つかるまで。何をして生きていたのだろう。記憶にない。確か、最初の頃は必死に一族の者を探していた。風の便りを聞いては会いに行ったりもした。だがそれらの努力は実ることがなく。いつの間にか成人していた。

「何だかなあ……」

苦笑した。これでは、本当にあの男の言った通りではないか。大切なものを失くして、そこから動けなくなった。現在から目を背けて、過去に埋もれた誰かを、思い出を、絆を……追い求めている。

橘燐。最愛の妻だったあやかしを、ひとに殺された男。一度は死んだ息子と、再び邂逅した父親。だが、息子はひとでもあやかしでもない。半妖ですらない。神獣、白虎によって作られた不自然な命。彼はそれでもいいと言う。強い男だと思った。

彼の言ったとおり、何かを憎むのは簡単だ。憎めば楽になれる。そこだけを見つめていられるから。振り返ることも、先を見据えることも必要ない。ただ、憎むだけ。

彼はどうやって乗り越えたのだろう。愛する者を亡くし、生まれ出ずるはずであった子供を亡くし。残ったものは周囲の人間からの冷たい目。彼は一体、どうやって……。浮かんだのは、別の男の顔だった。鈍感で、無愛想で、無口な男。自分から「御子」を奪った男。長い黒髪と紫電の瞳。先帝と鳳凰族最後の姫御子との間に生

まれた、禁忌の存在。

「あいつかな」

ぼつりとつぶやいた。どうやら、燐と彼は旧い友人らしい。きっと紫苑は彼のために奔走したに違いない。あれはそういう男だ。冗談が下手で、何を考えているのかさっぱりわからない。だが、ひとつわかることがある。

「あいつって、とんでもなくおひとよしだよな」

くすりと笑みが洩れる。それは、共に旅を続けるうちに分かったことだった。紫苑は他人の悪意に対して驚くほど寛容だ。それは彼自身が語ったとおりの「慣れ」かもしれないし、そうではないかもしれない。とにかくこだわらない。憎まない。王が驚いたほどだった。そのくせひとの善意には敏感で、いつまでも慣れることがない。まるで自分にはそんな善意を受ける資格などないともいうように戸惑っている。それも、どうやら演技ではなく本心らしいから参る。多分、そういうところが好きなのだろう。今はもう「御子」ではない彼女は。

とめない思考の海に溺れながら、王は必死で一つの言葉を封印していた。だが、いつしかそれが緩んでくる。それはかつて燐に言われた言葉だった。もし、帰りたくないと言ったら？ 癸が自分と一緒に帰りたくはないと言ったら、自分はどうすればいいのだろうか。

「ひとりで……帰るのかな」

思い出す。都に「御子」を探しに来る前に住んでいた庵。他のあやかしの交わりもなく、王はたったひとりだった。

「ひとり……か」

泣くまいと思った。折角の再会の日に、目を腫らしたくはない。

「ひとりは、寂しいよな」

彼の脳裏で頷いてくれるものたち。それは桔梗であり、紫苑であり、燐だった。

結局、壬は一睡もできぬまま朝を迎えた。ふらふらと顔を洗っていたらそのまま水桶に顔をつっこみそうになり、紫苑に首根っこを捕まえられる始末。いつもなら離せともがき、余計なお世話だと噛み付くところのだが、今日はぼんやりと礼を言うことしかできなかった。胸が痛いほど動悸を打っている。「御子」に会いに行くときでさえ、こつではなかった。朝餉もほとんど喉を通らない。桔梗は少し心配げな表情で彼を見ていた。紫苑は相変わらずの無表情である。ぱたん、と箸を置いた。菜も汁も飯も、半分以上残っている。

「残すのか？」

紫苑に尋ねられ、壬は曖昧に頷いた。

「なら食ってやる。貸せ」

箸を伸ばそうとする紫苑に、壬はむっと言い返す。

「お前に食わせるくらいなら俺が食う」

「そうか」

紫苑はあつさりと引き下がった。

「……………」

怪訝な顔をする壬に、紫苑は涼しい顔で言う。

「いや、お前が食うのならそれでいいんだ。しっかり食っておけ」

「……………」

視線を動かすと、桔梗はくすくすと笑っていた。どうやら自分は紫苑にいっぱい食わされたらしい。

「……………」

壬はわざとががつと飯をかき込んだ。……多分今、自分は赤面している。

朝餉が終わった頃、梓が現れた。

「弟さまがお越しになられました」

あまりにもあつさりと告げられた言葉に、三人は思わず動きを止める。最初に言葉を発したのは紫苑だった。

「どうする？」

王の顔を覗きこんで尋ねる。

「え？」

王はぼつと紫苑を見た。

「我々が居てもいいのか？ それともふたりで会うか？」

「あ、……ああ」

王ははつとしたように頷く。

「できればふたりの方がいい……かな」

「そうか」

紫苑は梓に向き直った。

「我らは一度部屋に戻りますので、ここに通してやって下さい」

「はい」

梓は答えて去った。紫苑は軽く王の肩を叩く。

「落ち着いたら呼んでくれ」

「ああ」

王の表情に浮かぶのは緊張。だが、彼は紫苑をしっかりと見据えた。

「ありがとう」

「……………」

驚いたように目を見開く紫苑と、静かに微笑む桔梗。似合いのふたりだな、と思う。紫苑はひとつ咳払いをした。

「何も礼を言われることはない。……行くぞ」

桔梗を促し、身を翻す。

「素直じゃないですねえ」

桔梗は苦笑を零し、軽く王に手を振った。

「……また後ほど」

「ああ」

王は頷く。そのままふたりの背中を見送り、待つこと暫し。背後の帳が開けられる音がした。王は振り向けない。

「兄さん！」

懐かしい。ちっとも変わらない、線の細い高い声だった。昔はおなごのようだと言われていたこともあったっけ……。やはり癸だ！ 王は勢い良く振り向き、そして絶句した。

「み、みずのと……？」

目に映るのは確かに彼の弟だった。そのはずだった。優しげな瞳も、色白な肌も、ひよろりと長い手足も、何も変わらない。ただ年を重ねただけだ。けれど。

「お前、その……」

王は指差した。震えて定まらない人差し指の先。覚えのある銀髪はどこにもない。癸の髪は、黒かった。

三

ばささ……。突然大きな音がして、燐は振り向いた。どうやら中庭の池に漂っていた水鳥が飛び立っただけらしい。水面がかすかに揺れていた。鳥の姿は見当たらない。ほっとして再び文机に向かった。硯の中、残り少なくなつた墨をする。

その時、不意に疑問が浮かんだ。王の弟のことだ。白虎は「玄武の巫女が治める地にいる」と言った。そして、朔の口ぶりでは巫女はひとのようだった。どうしてそこにあやかしである王の弟が居るのだろう。朔はどうやら短い間しか滞在していなかったようだから、良くは知らないのかもしれないが、それにしても、ひととは違う外見の朔が訪れることができたのだから、やはり普通の場所ではない。「朔に聞いてみようか……」

燐はつぶやきながら、それでもその場を立たない。日は高いといえ、まだ朔は眠っているようだ。起こすには忍びなかった。燐もすっかり子煩悩な父親である。

「紫苑たち、うまくやっているのかな」

もしかすると、その邑には朔の知らない何かがあるのかもしれない。

「早く帰って来られればいいのに」

紫苑たちが都を離れてから、ひとつきが経つ。紫苑が先帝の胤であるということは、今はもうほとんどひとびとの口には上らなくなった。嗜好きの都びとたちもようやく飽きてきたらしい。今ならもう帰って来られると思うのだが……。

「神獣たちにも、何か思惑があるのかもしれないな」

燐はつぶやく。彼らを信賴してはいないわけではない。だが、まだ彼の知らない何かがあるのではないか。そんな気がしてならなかった。

第八章

—

水龍族は、時に水晶に喩えられる。その白い肌を彩る美しい銀髪と青い瞳によるものだろう。「殺戮者」との異名をとるほどの殺性を持ちながらも忌諱されるのではなく畏怖の対象であったのは、その美しくも儂げな色彩によるところが大きいのもかもしれない。だが、今はもうその貴重な宝玉のほとんどは失われてしまった。残るのは桔梗と、王と。そして、癸だけ。

「髪……、ああ」

癸は訳知り顔で頷いた。

「驚かせてごめんね、兄さん」

「……………」

王は啞然としたまま弟を見ている。静かな青い瞳は昔のまま、朝

目をうつして穏やかに揺らめいていた。けれど、彼の髪は……。
癸は問い掛ける。

「この邑のこと、どれくらい聞いた？」

「い、いや……俺は」

そもそも何から話し始めればいいのかだろう。紫苑のこと、桔梗のこと、何故か燐のことまでも……取り留めなく頭の中をぐるぐると回る。口ごもる壬を見つめ、癸は鋭く息を吐いた。

「まあ」

癸は柔らかな身のこなしで腰を下ろす。壬も自分が立ち尽くしたままだったことに気付き、癸にならって床に座した。

「昴さんに……巫女に会ったのは、紫苑さんだっけ、そのひとだけだと聞いたから、まだあまり良く知らないのかもしれないけれど」

癸は髪の手を指に絡めた。長い黒髪はうなじで一つに結ばれ、背中をつややかに流れている。

「この邑があやかしを受け入れるようになったのは、十年ほど前。僕が初めてここに来たときなんだ」

「……十年……」

「うん。水龍が滅びてから、僕はずっと」

目を伏せて小さく微笑む。その寂しげな微笑に、子供の頃の無邪気な面影はない。

「ひとりきりで放浪していた。ひとに見つからないように、逃げて、逃げて……」

勿論、水龍族である癸がひとに負けるわけにはないのだけれど、彼はその力で他人を傷つけることを嫌う。昔から、そうだった。

「あるとき、この邑に辿り着いた」

壬は口を挟むことなく聞き入った。

「邑は恐慌状態に陥ったよ……だって、僕は水龍だものね」

何かを思い出すように細められた眼差しは、深い海の色。

「殺してしまえという者、ただ恐れる者、手を差し伸べようとする者……いろんなひとがいたけれど、ここの長老の意見は大体同じだ

った」

一度口をつぐみ、そして、言葉はため息混じりに吐き出された。

「関わるな、と。自分たちは何も見なかった、聞かなかった。だから、どこか遠くへ行ってくれ……」

「……………」

「ずっと人里のないとところをうろついていたから相当空腹だったし、しかもちようど冬で、このあたりは完全に雪に閉ざされていた。いよいよ凍死するしかないかな、って思ったよ」

王はぐっとこぶしを握る。彼は たまたま他のあやかしたちの集う集落に辿り着くことができた。だが、そうでないものたちは、きつと次々と命を落としていったらう。飢え死にしたもの、凍え死んだもの。もしかすると野犬に襲われたものもいたかもしれない。

癸は兄にちらりと視線を向けた。

「その時 巫女が言ったんだ」

その者をこの邑に住まわせよ。

「玄武のお告げだって、言ってる」

「玄武の？」

疑わしそうな視線を向ける王に、癸は頷いて見せる。

「僕も怪しいと思った。勿論、長老たちは大反対」

「そりゃなあ……」

思わずつぶやいていた。紫苑が都で受けている扱いを、彼は知っている。あやかしの血を半分受け継いでいる、というだけであれほどまでに忌み嫌われているのである。純粹にあやかしで、しかも一度は朝敵と見なされた水龍族の生き残りである癸。いくらこの邑が都から離れていて朝廷の目の届かない場所だと言っても、暖かく歓迎されるわけがない。

「それからどういうやりとりがあったのか、僕は知らない。ただ、三日ほど経って、ひとつの条件が出された」

その条件が、

「髪を染めること。銀の髪は、どうしたって目立つから」

「それで……？」

「うん。目の色や耳の形はどうしようもないから、別に構わないってことになった。とにかく邑びとたちが慣れるのを待ってくれと

そう言われた」

「誰に？」

「……巫女と呼ばれている、彼女」

「上宮」

「昴さん、だよ」

王は目を上げた。

「それで、その髪か」

「うん」

「……」

複雑な気持ちだった。子供じみた感傷なのかもしれない。けれど、水龍としての絆に傷をつけられたようなそんな気持ちがある。癸は兄の葛藤には気付かない。もしくは気付かないふりをしていた。「巫女は当時まだ十歳くらいだったはずだけど、とてもしっかりしていて、実質的な邑の支配者である長老たちを上手く御していた。今もそれは変わらない……不思議なひとだよ」

「十歳……」

王はつぶやいた。巫女は今、二十歳前後ということか。

「以来、この邑はあやかしを受け入れ始めたんだ。『髪を染めること』と『邑の秩序を乱さないこと』……これを条件として」

「……そうか」

王は搾り出すように答える。そういえば紫苑が言っていた。「この邑はあやかしとひととが共に生きているのだそうだ」と。

そして、癸の髪が黒い理由はわかった。わかったのだが、癸には、聞かなければならないことがある。王は顔を上げ、弟の顔を真正面から見つめる。両手をきつくきつく握り締めた。爪が皮膚に食い込むほどに。これを聞くために、自分はここまで来たのだ。

「お前は今、しあわせか？」

葵の瞳が大きく見開かれる。唇がきゅっと引き結ばれた。ごくり
王は唾を飲む。

「……………」

暫しの間の後、葵は静かに首を動かした。

二

昼にも関わらず、部屋にたゆとう薄闇。その内に潜む何かの気配を敏感に感じ取り　もしかすると無意識の内に玄武によつて教えられたのかもしれないが　昴は体を起こした。

「誰？」

燭の火は消えている。昴は小さく舌を鳴らした。しばらく誰も本殿に近づかないようにと申し渡したのは自分自身である。おそらく声を上げて誰も来ないであろう。

昨夜の長老たちの審問は夜更けにまで及び、昴は朝方ようやく眠りについた。長老たちは御門紫苑を、そして彼の連れである水龍を恐れているのだ。今はもう邑びとの一員であるはずの、邑に住むあやかしたちに何らかの影響を及ぼすのではないかと。彼らにそのような意図は見られなかった。昴はそう思っている。だが、実際そんなことは彼女にとってどうでも良かった。彼女が本当に待っているのは……………。

「お初にお目にかかります。突然の訪問、ご無礼をお許し下さい」

声の主は女性だった。昴は僅かに安堵する。

「名を、お名乗り下さい」

ともし火は点けぬまま、昴は聞き返した。安易に明かりを点けるわけにはいかない。眠る前に染料は髪から洗い落としてしまったのだ。今の彼女の髪は、生来の色　黄金色である。

「名を申し上げても」

澄んだ音色は音楽のように昴の耳を打つ。

「貴方にはお心当たりはないかもしれませんが。でも
ざわり、と皮膚が粟立った。」

「水龍族最後の御子。そう申し上げれば、貴方は……もしくは貴方の内の玄武が。おそらくは何かご存知でしょう」

昴は絶句した。水龍族最後の御子。青龍をその魂に宿すもの。御門紫苑と共にこの地を訪れている、あやかしのうちのひとり。その彼女が、何故今ここに……。

「兄弟の対面を邪魔するつもりはないので、今紫苑と私は少し暇なんです」

彼女の胸のうちを読んだかのように、声は語る。

「紫苑には屋敷の中を散歩するって言うて出てきてしまいましたから、すぐに戻るつもりでいますけれど」

「だ、誰かに」

かすかに声が掠れていた。昴はそんな自分を叱咤する。こんなことで気圧されてどうするのか。何も見えぬ闇をしっかりと見据え、

「見咎められたらどうするおつもりでしたか」

きつい声で言う。

「貴方の軽率な行動で、御門どののお立場が危つくなるやもしれませぬのに」

「ご心配なく」

空気が揺れる。闇に潜む者は笑ったようだった。

「そんなことになるくらいなら、見た者の口を封じますから」

「……………」

再び絶句。昴が立ち直る前に、闇は続けて言った。

「冗談ですけど」

「……………悪い冗談はお控え下さい」

「ご気分を害されたようですね。申し訳ありませんでした」

「一体、貴方は何をしにいらしたのですか」

苛立ちを隠す様子もなく、昴は言う。この者が何であるか、そん

なことは関係ない。自分は上宮昴だ。あの時　この世にたったひとりぼっちになったとき、誇り高く生きていくと決めた。いつだって前を向いて、うな垂れることなく昂然と頭をもたげていようと。こんなところで萎縮してはいけない。気高く、毅然としていなければ……。

「そうそう、本題を忘れるところでした」

「……………」

昴は唇を噛み締めた。その小さな痛みが、彼女の背筋をぴんと伸ばさせる。

「貴方の目的が何かは知らないけれど……………」

りん、と空気が震える。

「紫苑を利用することは、許しません」

「……………」

はつと息を呑む。次の瞬間、気配は忽然と消えうせていた。

夢？ いや、違う。昴は掌が汗ばむのを感じた。あれは、警告なのだ。自分に対する、警告。

「……………面白いわ」

さらり、と髪をかき上げる。あの御子がどれほどのものかは知らないけれど……………。

「私の邪魔をするのなら、後悔してもらおう」

昴の首元で、何かがじゃらりと音を立てた。

第九章

—

ざく、ざく、ざく。砂を踏みしめる音だけが辺りに響いている。前を歩むのは癸。その隣には紫苑。三步ほど遅れて壬が行く。既に

日は高く、初夏の強い日差しが彼らを照らしていた。壬の額には汗の玉が浮かんでいる。巫女の命令なのか、相変わらず町並みに人影はない。

「……………」
歩き始めてから四半刻ほど経っただろうか。いつの間にか人家はまばらになっていった。彼らの左右に広がる田畑には、あああおとした緑が揺れている。

不意に、紫苑が壬の隣に並んだ。
「お前、どうしたんだ」

声を低めて尋ねられる。この日差しの中では暑苦しかったのだろう、長い黒髪は頭頂部で結わえられている。それでも幾筋かは彼の首筋にまわりついていった。

「何が？」

壬はぶっきらぼうに聞き返す。

「兄弟の再会だろう。もっと話すことはないのか」
「……………」

壬は肩をすくめる。紫苑は不思議そうに彼の横顔を見つめた。

一刻ほど前、紫苑の部屋を兄弟は揃って訪れた。

「桔梗は？」

尋ねる壬に、紫苑は首をひねる。

「さあ。その辺をぶらぶらしてくると言っていた。庭ではないか？」

「ふうん……………」

「探して来てやってもいいが」

「まあ、後でいいや」

壬は軽い調子で言うつと、背後に立っていた弟が紫苑に見えるように、一歩右へと退いた。

「こいつが癸。俺の双子の弟だ」

「どうも。御門紫苑です」

紫苑は軽く会釈する。

癸は線の細い青年で、がっしりとした体格の壬とは一見したところあまり似ていない。だが深い青色の瞳は同じで、またことなく面影が似ている。兄弟とは面白いものだな、と思った。しかし、水龍であるはずの彼の髪が黒いというのは……？

「はじめまして」

癸もまた礼をする。しなやかな身のこなしだった。

「兄が色々のご迷惑をお掛けしたそうで……詳しくは存じませんが、本当にすみませんでした。僕からも謝罪させて下さい」

「いや、済んだことです……どうぞお気になさらず」

立ち居振る舞いも言葉も、あまりにも兄と違う。当惑を含んだ眼差しを兄に投げかけるが、知らないふりをされてしまった。紫苑は困って癸に視線を戻す。彼はどこまで聞いたのだろう。自分のこと。兄のこと。桔梗のこと……。

「紫電の瞳、ですか」

癸が口を開いた。壬が息を飲む気配がする。紫苑はかすかに体を強張らせた。

「僕は初めて見ましたけれど」

静かな微笑み。

「綺麗なものですね」

「……………」

言葉が見つからない。立ち尽くす紫苑に救いの手を差し伸べるかのように、壬は口を開いた。

「そういえば、今から少し行きたいところがあるんだ」

「今から？」

問い掛ける紫苑に、壬は説明を重ねる。

「癸が今住んでいる場所なんだけど……邑外れの方だった」

「勝手に出歩いて大丈夫だろうか」

「それなら大丈夫」

癸が頷いた。

「ただ、桔梗さんが今いらっしやらないのであれば、帰りをお待ち

した方が良いかな」

「それは俺よりもこいつの方が分かるだろ。な？」

「まあ、それほど遠いところでなければ……書置きでもしておくか？」

「なるほど」

葵は微笑んでうなづく。

「御子　今は桔梗という名だとお聞きしましたけれど、共にある方が貴方のようなひとで安心しました」

紫苑の強張りが解ける。葵の言葉が胸に沁みた。桔梗はしあわせなのだろうか、自分は彼女をしあわせにしてやれているのだろうか……。脳裏に浮かぶのは花のような笑顔。　きつと、大丈夫。

紫苑は文机の上に置かれていた墨を手早くすり、筆にふくませてさらさらと紙の上を滑らせた。

「では、参りましょうか」

立ち上がる彼の前で、双子の兄弟はほぼ時を同じくして頷いた。

二

空と大地、そして山。ただ、広がった。人家の存在感などこの三者の前ではないのも同じ。葵が足を止めたのは、小さな民家の前だった。農業を営んでいるのだろうか、木戸の脇には鍬や鋤が無造作に立てかけてある。

「ここが僕の家」

兄に対しての言葉だ。壬は黙って頷く。紫苑は数歩下がり、兄弟を見つめた。所詮自分は第三者なのだ。図々しく首をつっこむつもりはない。

「おばさん、加乃ちゃん、ただいま帰りました」

葵が戸の奥に声を掛ける。壬はびっくりと体を震わせた。　それ

は、誰だ？　口をつきかけた言葉を飲み込む。

ぱたぱたと軽い足音がして、彼らの前にひとりの少女が姿を見せた。黒い髪、黒い目　ひとだ。年は十代の半ばといったところだろう。背中に届くほどの長さの髪をうなじでまとめ、頭には布を巻いている。水仕事の最中だったのか、肘から先は濡れていて、ぽたぽたと滴がたれていた。

「お帰りなさい！」

この少女が加乃なのだろう。癸の両脇にいる人物を見て、緊張の表情を浮かべる。癸が一步踏み出した。

「巫女さまからお達しがあっただろう、僕の兄さんと、その旅連れの方。本当はもう一方いらっしゃるのだけど、今は屋敷におられる」

「……ああ」

加乃はぺこり、と頭を下げた。

「はじめまして。加乃です」

「は、はじめまして」

壬は当惑の表情を浮かべながらも礼を返す。

「癸の兄の……、壬です」

「御門紫苑です」

紫苑は簡単に返礼した。

「わあ」

加乃はひよい、と土間に降りた。裸足だが気にする様子はない。

壬に近付き、見上げた。視線の先には彼の銀髪がある。

「きれい！」

「え？」

壬は目を瞬く。

「本当は癸さんも同じ髪の色なんでしょう？　ここじゃ髪を染めないと駄目だから、なかなか本当の色が見られなくて」

ひとしきり凝視した後あまりに不躰だと悟ったのか、加乃は顔を赤らめてさつと退く。そんな彼女の様子を、癸はにこにこ眺めていた。加乃はぐいと癸の袖を引く。

「お母さんが、待ってる」

「うん」

癸は兄と紫苑にひとつ頷いてみせ、その家の中に入っていった。残されたふたりは一瞬顔を見合わせるが、そのまま着いていくことにする。家の中は外見を裏切ることなくひどく質素であった。都人である紫苑には考えられぬほど粗末な作り、そして調度である。だが、農家とはどこでもこのようなものなのかもしれない。やがて、癸はある部屋の前で足を止めた。

「お母さん、癸さんが帰ってきたよ」

「ただいま、おばさん」

「……………」

覗き込んだふたりは、言葉を失った。部屋の中では、ひとりの女性が臥せていた。否、上半身は起きている。だがそのやつれた表情、痩身を見れば、病人なのだということはすぐに知れた。

「おかえりなさい」

加乃とどこか似ている。だが彼女の持つ溢れるような生命の輝き、躍動感といったものは、この女性には全く見られなかった。

「……………おばさんは、ほとんど目が見えないんだ」

ぼそりとつぶやかれた言葉。背後に立つふたりのためのものだろう。

「僕の声が亡くなった息子さんに似ていたらしくてね。僕の面倒を見て下さることになった」

「お客さまがみえているの？」

女性は僅かに首を傾げた。

「あのね、母さん」

加乃は母親の枕元に置いてあった湯呑みに、白湯を注ぎ足した。

「癸さんの、双子のお兄さんが来ているのよ」

「ええ……………」

驚いたように目を見開くが、視線は壬を少しもとらえられず、あてもなく宙をさまよっている。壬は口を開いた。

「壬です。突然お邪魔してすみません」

いつになく柔らかな声。

「弟がお世話になっっているそうぞ」

「いいえ！」

思いの外強い口調だった。

「うちは男手がありませんもので……助かっているのは私たちの方です」

どうやら加乃の父親も、既にこの世にはないらしい。

「加乃も本当の兄のように懐いていますし」

「恐ろしくはありませんか？」

遮るように、王は声を上げた。はっと息を呑む葵の肩に、紫苑は軽く手を置く。

「恐ろしいって……何がです？」

女性は不思議そうに聞き返した。加乃は心配そうに王を見上げる。

「あやかしが、です。俺も……弟も」

王は静かに言った。

「ひとではない。あやかしですから」

「……………」

沈黙がその場を支配した。加乃は黙って膝を見つめている。葵はそんな少女の姿をじっと見守っていた。

「……………」

言葉を捜すように唇をうごめかせていた母親は、やがて口を開く。

「かつては、恐ろしかった」

「母さん……………」

「だって、私の夫はもののけに殺されたのですから」

紫苑は眉を寄せた。ひとはあやかしともののけを混同しがちであるが、実際はもののけとあやかしは等しいものではない。ひとであれあやかしであれ、悪しき気に魂を食い破られたものがもののけとなるのだ。だがここでそれを言ったところで、どうなるものでもない。

「ずっと、あやかしなど見たこともなかった。今も私には葵さんが

見えてはいないから、本当はどんな風なのか、私には分かりません」
目を閉じ、薄く微笑を浮かべる。

「けれど……見えなくても、わかることはたくさんあるのです」
加乃の手に自分の手を重ねる。見えていないはずなのに、母親の手は娘の在り処を間違うことはなかった。

「葵さんは優しい方です。初めてお会いしたときにすぐに分かりました。それに加乃にもとても優しくして下さい。近所の方も最初は怖がっていたけれど、葵さんがたくさん努力されたから、今ではそんなこともない」

「……………」
「きつと……、葵さんに出会わなければ、私はいまでもあやかしを恐れ、そして憎んだままだったのでしょね」

「……………」
「でも、今は」
母親は目を開けた。うつろな眼窩に涙が光る。

「恐ろしくありません」

「……………」
「王は小さく吐息をついた。」

「わかりました」

「兄さ……………」

「失礼なことをお聞きしました。お許し下さい」
「いいえ」

ゆるく首を横に振る。

「弟さんを想われる気持ちは分かります。遠慮なく何でもお聞き下さいな」

「いえ」

王は低くつぶやいた。

「もう、十分です」

お前は今、しあわせか？ その問いに、葵は頷いたのだ。それが、全てだった。

王と紫苑を元の屋敷まで送り届けるとき、癸の横には加乃の姿があった。

「お前のほかに、あやかしはたくさんいるのか？」

王の問いに、癸は首を傾げた。

「実際のところは僕も良く知らないけれど、そんなにはいないと思う。僕は近所の方々が親切だったから上手くいったけど、やはりひとの中に溶け込めないで出て行く者も多いと聞くよ」

「お前は」

王は微笑んだ。誰かの後姿を見送るような、静かな笑みだった。

「良いひとたちに出会えたな」

「……………」

癸は少しだけ頬を染め、やがて頷いた。加乃は彼の手を取って離さない。この少女は、きっと癸のことが好きなのだろう。癸もまた、この少女が……………。

「兄さんは、これからどうするの？」

どこか考えに沈んでいる兄に、癸は問い掛ける。

「俺？ そうだなあ……………」

王は口ごもった。これから自分はどうするのか。もし、癸が自分と共に帰るといふのなら、かつていた、あやかしの集落近辺に戻るのもいいと思っていた。だが、今の彼に癸を連れ帰るつもりはない。いつか彼自身の意思で戻ってくるなら、それはそれでいい。だが、今はあの病弱そうな母親とこの愛らしい少女を捨てて、癸がここを去ることができるわけではない。彼の弟はひどく優しい男だ。それは誰よりも王が知っている。

「ここにいたっていいと思うよ」

癸はそう言う。加乃も横で頷いていた。けれど、きっと自分には

ここは向かないと思う。髪を染めることにも抵抗があった。何故自分かひとにあわせねばならないのか。どうしてもそんな想いが拭い切れない。

癸はここに溶け込んでいるというが、それはあやかしとしての彼をうまく隠しているからだ。妖力も見せず、目立たぬように形なまを変えて、ひとと同じように振る舞いながら生活をする。壬にできるとも思えないし、したいとも思わない。それならば、都で紫苑の屋敷にいたときの方がずっと自由で。

「帰るのではないのか」

ずっと黙っていた紫苑が突然、口を開いた。

「え？」

驚いて壬は振り返る。紫苑の表情は逆光でよく見えなかったが、口調はひどく穏やかで、平坦で、まるで当たり前のことを言っているだけだともいうようであった。

「一緒に帰るだろう。都へ」

「……………」

「そうか」

壬が返事をするより先に、癸が頷いていた。

「じゃあ、また会いに行くよ」

兄のところへ。

「その時は宜しくお願ひします」

「ああ」

癸と紫苑は自然に笑みを交わす。

ちくしょう。壬は空を振り仰いだ。青い。泣いて、たま

るか……………！

鳥が一羽、東の方へと飛んで行った。

昴の巻

第一章

—

夜更け前。

「巫女さま」

簾一枚を隔てた場所からの声に、昴はすつと目を覚ました。まるで誰かが訪れるのを知っていて、待っていたかのようにさえある。

「何ですか」

「葉月しづづめ紹明さまが、お亡くなりになりました」

「そう……」

昴は瞑目した。ここ五日間、毎夜のようにひとが死ぬ。そしてその全員が、邑に十一名しかいない長老衆。

「相変わらず目立った傷はないとのことですが、ひとつだけ」

女の声が、わずかな困惑を含んだ。

「今までにない点が……」

「何？」

昴の胸が、早鐘を打つ。

「『あと七人』。そう書かれた紙が、ご遺体の上に載せられていたそうです」

簾の下から紙が差し入れられる。昴はそれを手に取ってじっと眺めた。美しい崩し文字。一体誰が書いたものかは分からないが、決して無教養なものの手によるものではない。やはり、この一連の死は何者かによって仕組まれたもの……。昴はふと、顔を上げる。
「七人……？」

長老だけを狙った犯行だとしても、数が合わない。

この邑には神有月以外の各月の名を冠する家が十一あり、その家の当主が長老を勤めている。既に命を落としたのは、睦月家、水無月家、文月家、師走家、そして今回の葉月家の当主だ。残るは如月家、弥生家、卯月家、皐月家、長月家、霜月家の六人であるはず。それが、何故七人なのか。長老家を狙ったわけではないというのか。いや、それは考えられない。では……。

「最後のひとりは」

昴はぼつりとつぶやいた。

「私かもしれない……」

「……………」

聞こえなかつたのだろうか、簾の外は無言であった。

気を取り直し、昴は声を張る。

「ともあれ、長老さまたちのお命が危険に晒されていることがはっきりしました。警備を篤くしなさい」

「はい」

「そして」

昴はきつぱりと言う。

「疾く下手人を捕らえるのです」

二

いつものように朝食を運んできた梓に、しばらくは邑を出ないで欲しいと言われた。それを聞いた紫苑は、当惑した表情を浮かべる。

「別に構いませんが、一体何故……」

「それは」

梓は軽く頭を下げた。

「びとではない皆さまには申し上げかねます」

「人死にでもありましたか？」

桔梗がさり気なく問い掛けた。

「何だつて？」

声を上げたのは壬。紫苑は箸を止めて桔梗を見つめる。

「……………」

梓は黙って桔梗を見返した。彼女はその視線を受け、再び口を開く。

「だって、それ以外考えられなくて」

「余所ものの俺たちを出すわけには行かない理由……………」

「たとえば地滑りなどで道が塞がったから、という可能性もありますけれど、最近はずっと良い天気でしたしね」

彼らがこの邑に逗留してから既に十日が経っているが、一日たりとて雨の降った日はなかった。

「後は盗みか…………、殺しか」

「もし生き証人がいるのなら、私たちを留める必要はない。狭い邑ですし、ひとの出入りも少ないようですから下手人はすぐに分かるでしょう」

桔梗は紫苑に視線を投げ、にこりと笑った。紫苑はゆるく頷き、梓に向き直る。

「どうなのでしょう？」

「……………」

梓は小さくため息をついたようだった。

「後程、巫女さまが御門どのにお会いになりたいそうです」

紫苑らの問いに答えるつもりはないらしい。

「また紫苑だけか？」

壬は不機嫌そうに言う。

「その女、あやかしが嫌いなんじゃねえか」

何故桔梗は黙っているのだろう。壬は横目で彼女の様子をうかがい、はっと息を飲んだ。笑みの欠片もない、鋭い表情。透き通った色の瞳には霜が降りている。

「伺うのは一向に構いませんが」

それを知ってか知らずか、紫苑はゆっくりとした口調で言った。

「私は邑びとではないのだし、巫女に仕えているわけでもない」
その紫電の瞳は何を映しているのか。
「ゆめ、お考え違いをされませぬよう」
ゆとりさえたたえる彼の口元に、桔梗は少し緊張を緩めたようだった。

ふと、壬は不安になる。この邑はどこか奇妙な気配がする。
ここで本当に弟は 癸は、しあわせになれるのかと……。

三

「気に入りません」

桔梗はぶう、と頬を膨らませていた。部屋で紫苑とふたりきりになつてからのことである。

「何がだ？」

紫苑は桔梗にその長い黒髪をもてあそばれながら、白湯を嚙っていた。桔梗はぎゅ、ぎゅ、と力を込めて彼の髪を結っていく。

「あの巫女とやらです」

「ああ……」

「何だつて紫苑を呼びつけるんです」

「さあな」

「用があるならそちらから出向けば良いではないですか」

「……………」

紫苑は苦笑する。あの黄金色の髪で邑を出歩くことは可能なのだろうか。 黄金色の、髪……？

「……………うん？」

紫苑は不意に首を傾げ、桔梗の手に髪を引っ張られて悲鳴を上げた。

「い、痛い！」

「すみません！」

桔梗は慌てて手を離すと、引つ張られたと思しき場所にその小さな手を当てた。そつと、優しくなでさする。

「本当にごめんなさい。大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だよ」

わずかに涙を浮かべた目で、紫苑は微笑んだ。だが、すぐに真顔に戻ってつぶやく。

「変だ」

「何がです？」

「この邑で、あやかしは髪を染めている。そうだったな？」

「ええ」

「それは色の違う髪が目立つからだろう？」

「……あ！」

桔梗もはつとしたようだった。

「あの巫女……黒髪ではなかった」

紫苑はつぶやく。

「そもそも彼女は何者なんだ……？」

紫苑と同じくあやかしの血を引くのか、それとも……。

「それに、玄武はどこに隠れている？」

手の止まった桔梗の方へ、紫苑は首をめぐらせた。ぱさり、と髪が雪崩れ落ちる。

「お前、何か感じないのか」

彼女の魂には玄武と同じ四聖獣の一である青龍が宿っているから、何らかの気配を悟ることができても不思議はないのではないか。そう考えたのだが、

「いえ……、それが」

桔梗は困ったように眉をひそめた。

「四聖獣といっても、別に何か特別な絆がある訳ではないのです。相手がそのつもりなら私にも気配を感じることができますが、もしそうでなければ……」

「感じることはできない か」

「別に思考を共有しているわけでもありませんしね」

「そうか……」

紫苑は唇を引き結んだ。

「私も、利用されるのは好きな性質ではない。だが、この邑に留まる以上はあまり事を荒立てたくもない」

「会いに行くのですか」

「会いに行くわけではない」

紫苑は桔梗の声に潜む棘を感じ取り、困惑した表情を浮かべる。

「話があると言っから、聞きに行くというだけのことだ」

「使い古された手段ですよ、そういうのは」

「何にだ」

「教えません」

桔梗は再び頬を膨らませた。それがまるで小さな動物のようで、紫苑はくすりと微笑んだ。水龍の長として、全てに君臨するかのような威厳を見せるときがあるかと思えば、このように幼い子供のような仕草をすることもある。その落差に戸惑いを憶えつつも、そうやって振り回されることすら愛しく感じられてしまう。これは、重症だ。紫苑は俯いて唇をとがらせている桔梗を、ふわりと袖で包んだ。

「紫苑？」

驚いて顔を上げる彼女の額に、そっと唇を押し当てる。

「案ずるな」

低く、柔らかな声。桔梗はその尖った耳を彼の胸につけた。規則正しい鼓動の音。

「私は必ず帰ってくる」

「……………」

「お前の側が」

少し、紫苑の腕が力を込めた。

「私の居場所なのだから」

桔梗は頭に血が上るのを感じる。きつと頬は真っ赤になっている

だろう。

「……はい」

素直に頷きながらも一抹の不安が胸中を漂っている。闇の中で見た昴の気丈な青い眼差しが思い出されて、桔梗はきり、と小さく奥歯を噛み締めた。

第二章

—

稲穂があおく、目に眩しい。壬はそれらを手入れする弟を眺めながら、口を開いた。

「なあ……、最近邑で何か変わったことはないか？」

「変わったこと？」

癸は腰を伸ばし、汗を拭う。

「どうして？」

「いや……」

壬は一瞬逡巡したが、すぐに続きを口にした。

「なんか、足止め食ってるんだ。俺たち」

「足止め……？」

癸は眉をひそめる。

「当分、この邑を出て行くなっさ」

「……」

癸は暫し沈黙した。

「何か心当たりはないか？」

「……ないわけじゃない。でも」

癸の表情は硬い。

「でも？」

「……………」
葵は顔を上げ、壬を真つ直ぐ見据えた。藍色の眼光は鋭く、やはり葵は自分と同じ水龍なのだと思ひ知らされる。だが、壬の感慨をよそに葵の声は固く強張っていた。

「兄さん。その髪のままここに来られると、ちょっと困るんだ」
「……………え？」

「僕はいいけれど、加乃ちゃんやおばさんにまで迷惑が掛かる」
「……………」
壬は信じられない思いで、茫然とした。

「この間はそんなこと、全然」

「あれは特別だよ。巫女さまのお許しがあったから」
「な……………」

壬は頭に血が上るのを感じた。

「何だよ、それ」

「……………」
葵は答えない。

「どいつもこいつも巫女さま、巫女さま。そんなに偉いのかよ、そいつは！！」

「……………違つんだ」

葵は言った。小さな声だったが、壬ははつと息を飲む。葵のまとう空気は、あまりにも切迫したものであった。

「この邑は、巫女派と長老衆派に分かれている」

誰かに聞かれるのを恐れるかのような、小さな声。

「この邑のあやかしを守っているのは巫女派で、長老衆側はそれが気に入らないんだよ。隙あらばあやかしを追い出したいと思っている」

「だから……………」

壬は自分の髪を一房、手に取った。夏の光に照らされて白銀に輝いている。

「俺がこのまま出歩くと、巫女の立場を悪くするかもしれん訳だな。

それに、長老派に見られたらお前の世話になっっている家族にも迷惑が掛かる、と……」

「……うん」

「そう、か……」

王はため息まじりに言葉を吐き出す。

「ごめんね、兄さん」

癸はうつむいた。

「お前のせいじゃないさ」

王は笑った。

「俺が出るのが良くないなら、お前から来てくれればいい。それだけのことだ」

「……兄さん」

癸は驚いたように目を見開いた。

「来てくれるだろ？」

「……うん」

癸は微笑む。

「変わったね。……兄さん」

「そうか？」

王は不思議そうな顔をしているが、癸は笑って頷いた。そう、兄は変わった。かつてはもっと苛烈で、容赦ない性格だった。強大な力を躊躇なく振るうさまは、同じ水龍の者たちさえも恐れさせることがあったのを覚えている。仲間への情に厚いところは今も昔も変わらないが、その負の部分 怒りつぱいところは、今ではかなり影を潜めている。代わりに、包容力を感じさせる穏やかな威厳が備わったようだ。

あの人のお陰なのかな。あの風変わりな半妖を思い出す。飄々として、どこかとぼけたような無表情。神秘的な色の紫の瞳からは、暖かな温もりを感じた。あの人も、兄も巻き込まれないといいのだけど……。

「兄さん」

癸は意を決し、口を開いた。どうせいつかは兄の耳にも入ることである。

「実は今、次々に長老衆が殺されている」

「何？」

壬が驚いて声を上げる。癸はごくりと唾を飲んだ。

「犯人は、まだ分かってない……」

「そりゃあ、お前」

壬は声を低める。

「怪しいのは分かりきってるじゃないか」

「え？」

癸は驚いて兄を見た。その横顔は思いのほか険しい。

「長老衆がいなくなつて、一番得をするのは誰だ？」

癸は思い当たつて顔を引きつらせた。

「兄さん……、まさか」

「そう」

壬は頷いた。

「巫女だよ」

二

二度目にまみえた昴は、その髪を黒く染めていた。

「わざわざお越し下さいまして、ありがとうございます」

「……………」

紫苑は無言で頭を下げる。昴は彼の無愛想など気にも留めない様子で艶やかに微笑んだ。

「本日お呼び立て致しましたのは、ご相談したいことがあるからなのです」

「よそのものである、私に？」

嫌みでなく心底不思議そうに聞き返した紫苑に、昴は困った顔で

笑う。

「第三者の公平な目線というのは、このように閉鎖された邑では貴重なのですわ」

「なるほど」

紫苑は頷く。

「伺いましょう」

良く晴れた日中であるにも関わらず、薄暗い室内。紫苑の白い衣と昴の薄紅の衣がぼんやりと浮かび上がっている。

「……この邑には」

昴はゆつくりと、しかしなめらかに話し始めた。

「代々の巫女である上宮家と、十一の長老家がございます」

「十一？」

「睦月から師走まで 神有月以外の月の名前を冠しておられますので」

紫苑は視線で先を促した。ふたりの距離は、僅か数歩。

「その家の当主が長老と呼ばれ、この邑を実質的に治めている」

「では」

紫苑は鋭く口を挟む。

「巫女の役割は？」

「……………」

昴は口をつぐみ、紫苑を見つめた。

「上宮家は何のために存在するのです？」

紫苑は目をそらさない。

「……………」

暫しの沈黙 やがて、昴が口を開いた。

「我々代々の巫女は、玄武の言葉を伝える役目を負っております。

政治上の重要な案件や、大きな事件があったときに、巫女の意見が求められるのです」

「そうですね」

紫苑はあっさりと頷き、それ以上の追求をやめた。

「お話の腰を折ってすみませんでした。どうぞ続きを」
「……はい」

昴は目を伏せた。桔梗のものよりは少し濃い青の輝きが、睫毛の下に隠れる。

「その長老の方々が、何者かによって次々と殺害されている……」

桔梗の言っていた通りか。紫苑はすつと目を細めた。口さがない都の者たちをも沈黙させる、鋭い眼光が現れる。

「詳しくお聞かせ願えますか？」

「殺害されたのは、睦月、水無月、文月、師走、葉月の皆さま。一就寝中に寢所の中でお亡くなりになっていたそうです」

「一、六、七、十二、八……」

紫苑はつぶやいた。

「特に規則性があるわけではありませんね」

「はい」

「殺害方法は？」

「恐らくは首を絞められたものと思いますが、凶器は今のところ分かっていません。ただ……」

「ただ？」

「遺体の周りが濡れていた、と。それも、とても冷たい水で」

「冷たい、水？」

「それから……」

昴はす、とひと切れの紙を木の床に這わせた。紫苑はそれが見える程度に膝を進める。

「昨夜殺された、葉月さまのご遺体の上に……これが」

「『あと七人』……」

紫苑はつぶやき、ふと指折り数えた。

「今お亡くなりになった方々は、五人ですね？」

「ええ」

昴は頷く。

「残る長老家は六のはず」

紫苑の言葉に、昴は顔を伏せた。

「そうですね」

「残るひとりは一体どなただとお考えですか」

「……………」

昴は唇を噛む。

「私には……………わかりません……………」

「そうですね」

紫苑は言い捨て、さっと立ち上がった。

「し、紫苑さま？」

訝しげに声を上げる昴に、紫苑は一瞥を投げる。

「正直に話していただけないというのであれば、何も協力することはできません。ご信頼なさっている方にお話になるのが良いでしょう。私は失礼致します」

「お待ち下さい！」

身を翻して歩き始めた紫苑は、背中に軽い衝撃を受けて立ち止まった。自分の胸元に細い腕が回されている。昴が、彼の背に抱きついていたのであった。

紫苑は当惑する。

「何です？」

「待つて下さい。お話しますから。どうかお待ち下さい」

柔らかな温もりが彼の背中に寄り添う。爽やかな香の匂いが、紫苑の鼻をくすぐった。

「……………わかりました」

紫苑はため息混じりにつぶやいた。

「わかりましたから、離して下さい」

紫苑は彼女の腕を取って体を離れた。

「……………」

昴が紫苑を見上げる。その瞳に涙が浮いていた。

「……………髪を」

紫苑は口を開く。

「髪を染めているのは、長老衆の意向ですか。あやかしたちに染めさせているのと、同じ」

「……………」
昂は無言で頷く。

「愚かなものですね」

紫苑は口元を歪めた。

「そんなことをしても、何も奪えないのに」

「……………!!」
昂ははつと息を呑む。

「現に、瞳の色は変えられないでしょう?」

紫苑は昂から一步ほどの距離を置き、優しく微笑んでいた。昂の初めて見た、紫苑のこころからの微笑み。胸の奥のどこか深い場所が、わずかにうずいた。

「まあ、それは私も同じですけれどね」

「……………」
昂はうつむく。やがて、囁いているような小さな声が紫苑に届いた。

「長老衆は…………私を疑っているのかもしれない。けれど」
なだらかな肩の線が震えている。

「残る七人の内の『七人目』は」

とん、と紫苑の胸に彼女の頭が触れた。

「私もないのです……………」
「……………」

紫苑は立ち尽くす。目の前で小刻みに震えているこの華奢な体をどうしていいものか、彼にはわからなかった。

「……そういうことでしたか」

戻ってきた王から話を聞き、桔梗は静かに頷いた。

「桔梗はどう思う？ 俺はやっぱりその巫女とやらが怪しいと思うんだが……」

「さあ、それはどうでしょう」

桔梗は首を傾げる。長い銀髪が肩から零れ落ちた。

「たとえ巫女が関わっているとしても、手を下しているのは別人かもしれないし……何より」

彼女の険しい表情に、王はごくりと唾を飲む。

「何のために殺すのか。あやかしに関する意見の対立くらい理由では、割に合いませんよね」

「まあ、確かに……」

桔梗は考え込むように視線を落とした。

「巫女は一体何者なのか……その身に本当にあやかしの血を宿すのか、どうか」

「けど」

王は異を唱える。

「ひとなら、黒目黒髪だろ？ 巫女は黄金色の髪でしかも青い目だったって……紫苑が」

「……」

桔梗は答えない。

「巫女があやかしなら、共犯者すら要らねえんじゃないか」

「何か」

桔梗はつぶやいた。王は口をつぐむ。

「……何か、引つ掛かる」

長い睫毛が薄い水色の瞳に影を落とす。そうしている時の彼女の眼差しには、まるで底なしの湖を覗いているような深みがあった。

「……」

王は黙って桔梗を見つめた。彼女の細い眉がきゅっと寄せられる。嫌な予感がする……。薄紅の唇が、この場にはいない想い人の名を刻んだ。

「……紫苑……」

そのつぶやきは小さすぎて、王の耳にも届かなかった。

二

紫苑は一步退き、昴から体を離した。

「お聞きしたいことがあります」

「何でしょう？」

濡れた青い瞳から、紫苑は目を逸らす。その色に重ねてしま
うからだ。もつと透き通った、しかし同じように青く煌めく瞳をし
た少女を。

「貴方は何者ですか？」

「紫苑さま？」

不思議そうな昴に、紫苑ははつきりと言った。

「貴方に、あやかしの血は流れていない」

「……………」

昴の表情が動く。それが一体どういう意味を持つのかまでは、紫苑には分からなかった。

「これでも陰陽師ですのでね。妖気を読むことには長けているので
すよ」

紫苑は笑うでもなく淡々と言葉を続けた。

「しかし、私は貴方のような髪や目の色をしたひとを見たことはな
い」

「……………」

「それでも」

紫苑は昴を正面から見つめる。

「貴方はひとだ。紛れもなく」

昴の瞳が揺らいだ。はつきりと迷いを浮かべている。

「わ……私は……」

みしり。

「……………!!」

天井の立てたかすかな音に気付き、紫苑ははっと天井を振り仰いだ。つられて仰向いた昴を抱え、低く横に跳ぶ。

「きゃあっ!!」

昴が悲鳴を上げると、天井が轟音を立てながら崩れ落ちたのは、ほぼ同時だった。紫苑は自分の背中で昴を庇うようにしてしゃがみ込む。腕の中で昴が叫んだ。

「し、霜月さま」

「?!」

彼女の視線を追い、振り向いた紫苑が見たものは 瓦礫を染め上げる朱。ぼとり、とまるで時期外れの椿のように床に落ちた、初老の男の首。

「間もなく誰か来るだろう。ここにいろ」

思わず礼儀も忘れ、紫苑は短く告げた。気配を感じる。強いとても強い気配を。

「し、紫苑さま?!」

昴が引き留める間もなく、紫苑は屋根の上に飛び上がった。

「……………」

その後ろ姿をじっと見つめる青い瞳と、引き結ばれた紅い唇……紫苑の姿が見えなくなってから、ふっ、と緩む。

昴よ。

声が、響いた。昴にしか聞こえない……あの日から、聞こえるようになった声。

まだ、続けるのか。

「当たり前でしょ」

昴は座り込んでいた床から立ち上がる。

「誰も私を負かすことはできない」

昴は笑う。

「貴方の言った通りよ……御門紫苑」

昴は強い眼差しを虚空に向ける。

「私からは、何も奪うことなどできないのだから……」

昴は目を閉じた。

昴、昴。

先ほどの声ではない。これは彼女の記憶。思い出と呼べるほど美しくもなく、過去と言っただけほど色褪せてもいない。ただ残酷なほど鮮烈な……。

貴女は生きるのよ。玄武の力を利用して、何としてでも生き延びるの。それが私と……あの人の願いなのだから……。

少女の首元から、細い鎖がこぼれ落ちた。先端に輝く、直角に組み合わされた二本の小さな金属棒。

「……………」
昴はそれを愛しげな、それでいて悲しそうな眼差しで見つめた。だがそれも一瞬のことで、彼女はそれをすぐに胸元に押し込む。

「巫女さま!!」

「ご無事ですか?!」

悲鳴混じりの呼び声と足音を聞き、少女は声を上げる。先ほどとは違う、冷やかかた無機質な声。巫女の、声。

「騒ぐことはありません。私は無事です」

ちらりと足元に転がる首を見て、

「けれど……霜月正雪さまが……」

痛ましい声を絞り出す。演技には、慣れていた。

三

夏の強い日差しは、いつの間にか陰っていた。もしかするとひと

雨降るのかもしれない。屋根に飛び乗った紫苑は、目当ての人影を見つけて身構えた。

「何か用か？ よそのものよ」

声も体格も男のものだ。身長は王と同じくらい。つまり、紫苑ともそう変わらないということになる。頭から爪先まで黒い布で覆い隠しているために、他の特徴は分からない。

「お前が殺したのか？」

紫苑は静かに尋ねる。

「……………」

男はしばらく沈黙した後、口を開いた。

「そつだ……………と言つたら？」

押し殺したような低い声。だがそこには何の感情もない。

「他の長老たちも？」

尋ねた紫苑に、男は僅かに苦笑の気配を漂わせた。

「だつたらどうする？」

「何故だ？ 何のために……………」

「答える義理はない。そして」

男がかすかに体を動かした。途端に張りつめる妖気。

「邪魔をするつもりなら、容赦はしない」

あやかしか！ 紫苑は袖の中で印を結ぶ。

「……………！！」

紫苑が結びの言葉を唱えて呪符を放つのとほぼ同時、男はこちらに向かつて屋根の上を駆け出していた。不安定な足場をもともしない速度。

目前で翼を広げて立ち塞がる鳥型の式神を鉤状に曲げた指で引き裂き、男は紫苑に肉薄した。紫苑は目を僅かに細める。この男……………かなり強い。ひらひらと舞い散る羽根が紙切れに戻っていくのを視界の端にとらえながら、紫苑は跳躍して別の棟の屋根に飛び移った。男が彼を追って宙に浮いた瞬間、紫苑は呪をつぶやく。すい、と伸ばした指先が真っ直ぐに男を指差した。

がががががつ！！ 逃げ場のない男を目掛けて鞠ほどの大きさの火の玉が降り注いだ。

「ちっ……」

焦ったように舌打ちして、男は体を丸める。その体を何か……透明な薄い膜のようなものが包んだ。じゅっ、という軽い音と共に火が消える。男の纏った布には焦げ一つ生じていない。

「何？」

紫苑が啞然とつぶやいた時、わずかな隙が生まれた。男はそれを見逃さない。

「っ？！」

はっとした時にはもう遅く、紫苑の体は男に腹を蹴り跳ばされて宙を舞っていた。胃液が喉を焼く。息を塞ぐ圧迫感に、紫苑は声もなく喘いだ。

「紫苑！！」

聞き慣れた声。

天地が逆さになって落ちていく紫苑を、何か包んだ。白くて柔らかなもの。雲か？ そんなことを思いながら、紫苑はやがてぐったりと地面に降りる。かろうじて体を起こした紫苑は、駆け寄ってくる人影を見て驚愕した。

「桔梗？ ……何故こんなところに」

桔梗は紫苑の側に立ち、先ほどの男の行方を捜すように屋根の上に視線を走らせた。

「王から、多少の事情は聞きました。それに……嫌な予感がしたんです」

日頃の、穏やかでのんびりした様子ではない。桔梗は水龍の御子の顔をしていた。

「大丈夫ですか？」

ぼんやりと彼女を見上げていると、桔梗は不意に腰を屈めて顔を近付けた。彼女の吐息が頬に触れる。

「あ……ああ、たいしたことはない」

細い腕が力強く彼の肩を抱きしめた。

「紫苑……私……」

「紫苑！ 桔梗！」

桔梗が何かつぶやこうとしたとき、彼らの目の前に壬が飛び降りてきた。どうやら紫苑の相手をして覆面の行方を探していたらしい。壬は頭を掻きながら慥然として言った。

「どうやら逃げられちゃったみてえだ」

「そうか」

紫苑は桔梗の手を借りながら立ち上がり、服を払った。

「帰るぞ」

「え……いいのか？」

拍子抜けしたように尋ねる壬に、紫苑は頷いた。

「私に、少し考えがある」

紫苑を支えながら、桔梗は彼を見上げる。その表情は決して明るいものではなく……それを見て取った彼女は、小さくため息をついた。

第四章

—

屋敷に戻った頃、ぽつぽつと雨が降り始めた。

紫苑は怪我を治療するという桔梗に連れられ、部屋に入る。落下する紫苑を桔梗がとっさに濃い雲状のもので受け止めてくれたお陰で、彼にたいした怪我はない。蹴り飛ばされた腹部に鈍痛が残る程度で、外傷ではないから治療のしようがないはずなのだが、紫苑は異を唱えなかった。桔梗に話しておかなければならないことがある。そして、壬には聞かせるわけにはいかないのだ。桔梗は気付いただ

るうか。だからふたりになろうとしたのだろうか……。

「紫苑？」

彼の手を引いて、桔梗が床に座らせる。

「まだ痛みますか？」

「それほどではない」

「……ってことは、全く痛くないわけでもないってことですよね」

鋭い。思わず視線をそらす紫苑に、桔梗は強い口調で迫った。

「脱いで下さい」

「……は？」

「やられたところ。見せて欲しいんです」

「い、いや、大したことは……」

「それは私が、客観的に判断させてもらいますから」

そんなに怒って、客観性も何もないと紫苑は思う。だが、彼女をこれ以上怒らせたくはない。そもそも、桔梗は何故怒っているのだろう。

紫苑はもぞもぞと脱ぎ始めた。袴を残し、前をはだける。少し、恥ずかしい。桔梗は真剣な表情でその小さな掌を彼の胸から腹へと滑らせた。吸い付くようなしっとりした柔らかな感触のものが、そうと触れていく。ただ体の具合を見ているだけだということに 背中がぞくりとした。

「紫苑、知っていますか？」

桔梗が静かに問い掛ける。

「ひとつもあやかしも、その体を作るものは同じ。火と、土と、水と

—

「ああ」

紫苑は頷いた。

「火は、命を燃やす。体を変化させていくもの。背が伸びるのもそうだし、ものを食べてもまたお腹がすくのもそう。体が温まるのも、火のおかげ」

「……そうだな」

「土は形を作る。どんなに年を取っても変わらない、その者の形を。魂を、心を容れる器を、作る」

それは紫苑が陰陽道で学んだことと酷似している。ふと紫苑は疑問に思った。桔梗は一体、いつそんなことを学んだのだろう。青龍の持っていた知識だろうか。

彼女はただ淡々と続ける。ちょうど、紫苑が思い切り蹴られた場所に手を置いて。

「水は 維持する。その者の体温が大きく上下しないように、いっただって等しく鼓動が刻めるように、変わらないものを大切に守る役目」

とくん、とくん。桔梗の掌が触れている場所に、何かが流れ込んでくる。

「私たちは『殺戮者』と呼ばれていたけれど、本当は水を操るのに長けているのだから」

見上げた彼女はにっこりと微笑んだ。

「こんなこともできるはずなのですよね」

痛みが 引いていく。紫苑は驚きをもって彼女を見つめた。

「まだ、痛みますか？」

桔梗の手が肌から離れていく。

「い、いや」

「良かった」

桔梗は微笑んだが、すぐにその表情は引っ込んでしまった。愛らしい頬に影が差す。

「……どうして」

「何？」

「どうして紫苑が戦う必要があったんですか」

「え……？」

紫苑は目を瞬かせる。それが彼の役割だった。目に見えぬもの、妖異と戦うこと。それは彼に課せられた任務だったのだ。都では。「ここでは我々は客人」

桔梗はきつぱりと言う。

「面倒なことに巻き込まれねばならない筋合いはないはずです」

「そ、それはそうなのだが……」

「それとも」

強い眼差しが彼を射た。

「紫苑には、何か理由でもあるのですか……?」

桔梗は怒っている。先ほどまではどうやら心配が先立って平静を取り戻していたようだが、治療も済んだ今ははつきりと怒気が彼女の体を包んでいた。紫苑は何故自分が怒られているのかわからない。だが、何か答えなくては。紫苑は必死に頭を回転させた。

「わ　私は」

桔梗は少しもそらさずに紫苑を見ている。

「ここに我々が滞在する以上、自分の身は自分で守らなければならぬ。だから」

「紫苑は」

遮られ、紫苑は黙り込む。

「自分の身を守ってはいないではないですか。むしろ危険に晒した」

桔梗は言い募る。

「あのひとを　巫女を守るために、自分を危険に晒したんじゃないですか……!!」

「それは……」

違う。紫苑は首を横に振った。あの時、あの巫女を守ろうとしたのではなかった。勿論、手に届くところにいたから庇ってはやめたが……それだけのことなのだ。彼にとってはひどく本能的な行動だった。

「では」

紫苑は静かに桔梗に問い掛ける。

「他に私に何ができた?」

「え……?」

桔梗は戸惑ったように紫苑を見つめた。

「突然屋根が崩れたかと思えば、死体が落ちてきた。その状況で」
手を桔梗の細い肩に置く。

「私に一体何ができた……？」

屋内に留まれば危険は増す。袋のねずみも同じだからだ。攻撃する側にとってそれほど有利な状況はないだろう。だから、

「外に飛び出すしかなかった。そこに『誰か』がいるのが分かっ
ていても」

「……でも」

桔梗の視線が強さを失って下がっていく。

「でも……、ひとりで戦わなくても良かったんです……」

「ああ、そうだな……」

紫苑は掴んでいた肩を引き寄せた。そっと抱きしめる。

「お前が来てくれたじゃないか」

「それは……嫌な予感がして」

「私も」

紫苑は細い銀髪を撫でながらつぶやく。

「お前が危険な目に遭っていたら、ちゃんと気付いてやれるだろう
か」

「え？」

「私はお前ほど敏感ではないから、自信がない」

「だ……大丈夫です」

桔梗の機嫌は直ったのだろうか、彼女の手がおずおずと彼の背中
を抱きしめた。

「私が呼びますから……ちゃんと、紫苑にも聞こえるように」

「……そうか」

紫苑はそれだけを答え、彼女の髪に顔を寄せる。しばらくそ
うしていた彼は、やがてぽつりとつぶやいた。

「敏いお前のことだ　もしかして」

「……」

桔梗の体が強張る。

「では……やはり、あれは」

「多分、そうだろう」

「何故……」

搾り出すような桔梗の声を聞きながら、紫苑は唇を噛み締めた。

脳裏に浮かぶのは、王の姿。

「何故……」

桔梗はもう一度、つぶやいた。

二

「昔、誰かに聞いたことがある」

紫苑は桔梗を離し、ゆっくりとした口調で話し始めた。

「海の間には、髪や目の色がひととは違う　大和びとは違

うなりをした者たちの棲む国があると」

「え……」

驚いたように目を見開く桔梗に頷いてみせる。

「じゃ　じゃあもしかすると」

「あの巫女は」

紫苑はきっぱりと言う。

「あやかしの血など引いていない」

「……………」

「何のために紛らわしいことを言ったのかは知らんが、それは間違いない。もし何らかの力を使えるとしても、それはきっと玄武のものを借りているのだろう」

何のために、って？　桔梗はため息をついた。

雨音が聞こえる。いつの間にか勢いが激しさを増したようだ。

この人は、本当に鈍い。そんなこと、決まっているではないか。

孤独な身の上の紫苑に取り入るためだ。自分も彼と同じ、半妖なのだと装ってみせることによって。紫苑の陰陽師としての技量を見く

びつていたせいで、こうやって看破されてしまったけれど　もしかすると危うかったのかもしれない。この世でたったひとりしかないと思いつながら生きてきた半妖。それに、もし　もし、仲間がいたら……。以前も胸をよぎった不安が、再び大きく広がる。

紫苑は仲間よりも私を選んでくれるだろうか……。紫苑はそんな桔梗の気を知ってか知らずか、彼女の髪をくしゃくしゃと撫でた。顔を上げると飛び込んでくる、彼の笑み。

「お前が何を心配していたのかは知らんが」

「……………」

「私が簡単に他人を信用すると思ったか？」

他人……。桔梗の胸がずきりと痛んだ。

「私はそもそもあの巫女を信用してはいない。だが、これですます信用できなくなっただな」

「……紫苑」

「何だ？」

桔梗は顔を伏せた。

「私のことは……信用してくれていますか？」

「……………」

わずかな沈黙の時間が、永遠にも思われた。やがて、紫苑はふう、と息をつく。

「私は信用していない人間の側で寝られるほど、豪胆ではないぞ」

「……………」

視線で問いかけると、彼はしつかりと頷いてくれる。

「それに、今更何を言っているんだ」

「え？」

「言っただろう。『私はお前を怖がらない』と」

桔梗の瞳が驚きに見開かれた。紫苑の笑みが優しい。

「それは、お前を信じているからに他ならないのだぞ」

「……………」

嬉しい。出会って間もなかったあの頃から、紫苑は自分を信

じていてくれたのだという。自分が紫苑に対する想いを自覚する前から、ふたりの気持ちを通じ合うよりもずっと前から、紫苑は彼女を信じてくれていた……。

「お前は敏いが」

紫苑にぐりぐりと頭を撫で回される。

「肝心なところで鈍いのだなあ」

惚れた女を信用しない男がどこにいるというのだろうか。そんなことを考えて、紫苑は思わず顔を赤らめた。

第五章

—

ばたばたと廊下を駆ける音がした。それは真っ直ぐにこちらへと近付いてくる。紫苑が服を着直すのとほぼ同時に、帳が開けられた。

「御門さま」

肩で息をつく梓の顔は青ざめ、普段の冷静沈着な様子はどこにもない。

「どうしました？」

「大社の前にひとだけだかりが……長老の一族郎党の方のようです」

「長老の？」

「ええ。巫女さまを出せ、と……巫女派の方も集まって来ておられます。今は睨みあっておられるだけですけれど、このままでは……！悲鳴のような声に、紫苑は立ち上がった。

「紫苑？」

見上げる彼女の手を取って立たせる。

「いい加減、決着をつけるしかないな」

「それにしても」

桔梗は冷ややかな水色の瞳で梓を一瞥した。

「随分と都合のいいこと」

「……………」

梓はただ黙って俯いていた。その表情からは何も読み取れない。

桔梗はそれ以上彼女に声を掛けず、一步先を行く紫苑の背中を追った。肝心なことは何ひとつ話さず、困ったときだけ利用しようとする。桔梗は、紫苑がそんな風に扱われるのが嫌でたまらない。半妖だと蔑みながらも手放そうとしない、都のひとびとを思い出すから。

紫苑は道具じゃない。物じゃない。ちゃんと、ところがある。

何故それをわかるうとしないのだろう。彼のところに触れようとないのだろう。こんなきれいで優しい、美しいところを持っているのに。

「……………巻き込んで、すまないな」

屋敷を出るときに小さく告げられた謝罪。桔梗は首を横に振った。針のように細い雨が、彼らの体から静かに熱を奪っていく。

「行きましょう」

屋敷に壬の姿はなかった。もしかすると、騒ぎを聞きつけて先に行ったのかもしれない。壬は、気付いていないのかもしれない。紫苑と戦ったのが一体誰なのか。桔梗は奥歯を噛み締める。ぎり、と不快な音がした。

二

雨でけぶってよく見えない。だが、自分が対峙している人数は、自分の背後にいる者の数よりも多いのは確かだった。彼らは、巫女の敵たち。そして、彼の敵。

「葵さん……………」

加乃が小さく、怯えたような声を出す。本当は彼女をここに連れ

て来たくはなかった。彼女の怯えが、自分に向けられるのが怖い。化け物を見るような　そう、ちょうど今彼に突き刺さっているたくさんの視線と同じ、こんな目で彼女に見られたら、彼はきつと正気ではいられない。

最初から、そういうつもりだったのか。

癸は小さく舌打ちをした。多分、雨音で聞こえない。

あの女……まんまと利用してくれたな。

「そこをどけ」

一歩進み出たのは、確か睦月家の長男だ。先日当主が亡くなったから、次からは彼が長老衆に加わることになる。まだ壮年の彼に「長老」という言葉は似合わないが。

「どいたら、どうするつもりですか」

我ながら、ひどく落ち着いた声だった。体の中を冷たい炎が駆け巡っている。これが水龍の力なのかもしれない。かつては決して使わないようにしていた、力。誰かを傷つけるのは嫌だった。だがそれは、多分そうまでして守るものがなかったから。今は違う。

「巫女　上宮昂に、聞きたいことがある」

男は真顔になった。

「あれは、本当に『祟り』なのか　とな」

癸は小さく苦笑した。

「何故そんなことが彼女にわかるのです？」

「……おい」

最初に先頭を切っていた男の背後から、もうひとりの男が進み出た。こちらは水無月の家の者だったか。

「お前は所詮よそものの、しかもあやかしだろうが。何も知らんのなら黙って引っ込んでおくことだな」

「……それはどうでしょうか」

わざと聞こえないようにつぶやく。だが、癸はすぐに声を張り上げた。

「こんなところで押し問答をしても風邪を引くだけです。今日

はお引取りいただけませんか？」

「そしてまた今夜誰かが死ぬんだ。そうだろうか？」

誰が発したのか分からないその声が引き金となって、目の前のひとだかりが発する殺気は膨れ上がった。

「そうだ！ あの女のせいだ」

「そもそも、俺はあやかしをこの邑に入れるのは反対だったんだ」

「父上だってそうだった」

「それを強引に」

「『お力』をかさにきて」

「そもそも皆、あの女が殺したんじゃないのか！！」

その言葉が一際大きく響くと同時に、空を切り裂いてひと粒の小石が飛来した。誰が投げたのかも分からないそれを、癸は手も動かさずに打ち落とす。降り注ぐ雨を、水でできた薄膜に変えたのだ。

「癸さん」

加乃が彼の袖を引く。

「このままじゃ危ないよ！ 長老家は強いんだ。代々術者の家系だもの……」

実際、数人の者が何か呪を詠唱している声が聞こえる。彼らの力が兄を退けた御門紫苑に及ぶとは思えないが、何分にも多勢に無勢である。そして、癸の背後に佇む少数の邑びとたち。彼らを危険に晒すわけにはいかない。彼らは癸を守ってくれたひとたちなのだから。

「でも」

彼は振り向かなかった。

「ここを通したら、巫女さまが」

この興奮した者たちが、巫女を目の前にした時一体どういう行動に出るか。想像に難くはない。

「そうしたら、僕ももうここにはいられない」

「癸、さん……」

「それは嫌なんだ」

少しだけ振り向いて、癸は加乃の顔を見た。彼を心配する黒い瞳。彼女を、守りたい。そのためなら……僕は鬼にだってなる。

癸が身構えたとき、突然に「それ」は襲い掛かってきた。思わず足元がふらついたくらい、強い水流。横殴りの激しい雨かと思ったが、そうではない。雨はこんな塊では降ってこない。これは……。

「少しは頭を冷やした方がいいと思いますよ」

「桔梗、やりすぎだ」

穏やかでありながら毅然とした細い声と、苦笑を含む低い声。聞き覚えがある。

「紫苑さん。それと 桔梗……さん？」

呆然と癸はつぶやいた。ちょうど、相對している彼らを頂点として正三角形を形作る位置。

「はじめまして、癸さん」

静かに微笑む桔梗と目が遭って、癸はずぶぬれの体をぶるつと震わせた。

三

「早かったわね」

昴は玄武の力によってもたらされる外の様子を聞きながら、苦笑を浮かべていた。まさか、こんなに早く自分が疑われるとは。

「そこそこ従順にやってたつもりなんだけどな」

部屋の片隅に置かれた壺にちらりと目をやる。髪染めの染料が入った壺。だが今、彼女の髪は生来の黄金色に輝いていた。

「それにしても『崇り』だって……『崇り』」

くすくすと笑う。その様子は、心底おかしくてたまらないといった様子である。

「情けないと思わない？ 母さん、父さん」

身につけたまま決して離すことのない、首飾り。「ろざりお」というのだと昔聞いたような記憶があるが　定かではない。
「貴方たちを殺すと決めるときは、迷わなかったのにねえ」
「雨音も響かない、この場所からようやく出て行ける。」
「それにしても」
昴はふと首を傾げた。青い瞳が疑惑をたたえて細められる。
「彼……どこまで気がついていいのかしら？」
その問いに答えるものは、どこにもいなかった。

四

桔梗の側で肩を落としていた紫苑が、葵の方へと歩いてくる。泥が跳ねて彼の藤色の袴の裾を汚した。

「？」
不思議そうな顔で葵が見ていると、不意に紫苑が動いた。早い！　避ける間もなく、葵は吹き飛ばされる。腹に感じる圧痛。唇から何かが零れた。喉が焼ける。蹴飛ばされたのだとわかった時には、既に体が地面に激突していた。泥の中にたたきつけられた彼に、加乃が駆け寄ってくる。

「葵さん?!」

「だいじょ……ぶだよ」

葵は咳き込みながら紫苑を見上げる。非難はしない。抗議の声も上げない。紫苑は無表情に彼を見下ろしていたが、やがて唇の端をきゅっと吊り上げた。

「借りは返したぞ」

「……!!」

彼は、気付いていた……！　葵は微笑む。本当は大声を上げて笑い出したかった。蹴られた腹が痛むが、そんなことはどうでもいい。彼は気付いていた。気付いていたのだ……!!

雨と混じって涙が流れ落ちる。

やっぱり、僕に鬼は向いていないのかもしれない……。こんなにも安堵している自分に驚きながら、癸は目を閉じて空を振り仰いだ。雨が、気持ち良かった。

第六章

—

「御門どの……?」

長老派の中から、畏れを含んだ声が上がった。無理もない。紫苑は濡れた顔に苦笑を浮かべる。この邑の術者が束になっても、彼の傍らにあるあやかしには勝てない。癸にも、そしてこの場にはいない王にも　紫苑自身、きつと誰にも負けなйдらうと思った。

「いかにも。私が御門紫苑です」

軽く礼をする。

「邑をあげてのこころ尽くしのご歓待、痛み入ります。御礼申し上げます」

「今はそれどころでは」

「もうひとり、もうひとりいたはずだ!」

口々に叫ぶのを、先頭の男が抑えた。静かに問い掛ける。

「もうひとりの客人はいかがなされたか?」

紫苑はすう、と目を細めた。

「その前に、御名をお教えいただけますか」

「睦月穂波と申す」

「睦月どの……」

紫苑はことさらゆっくりと言った。

「もうひとりの友、王の行く先は我らも存じてはおりませぬ」

「何？」

「探そうとした矢先、ここが騒ぎになっていると知らされましてな」

「……左様ですか」

紫苑は意味ありげに葵を眺めた。

「血を分けた弟君なら……あるいは」

「……」

言われるまでもなく、葵は泥の中に座り込んだまま静かに目を閉じている。あまりに離れていては気配が感じ取れないが、近くならば感覚を研ぎ澄ませば分かるはずだ。

それは、思いのほか近いところにあつた。巫女の住まう神殿。

「……！！」

葵の顔から血の気が引き、門を飛び越えると社の中へと消えた。

「なっ……」

驚きの表情を浮かべる睦月らに、紫苑は静かに言った。

「ここは我らにお任せ下さい」

「し、しかし」

「不肖の身ではございますが」

紫苑は振り返って微笑む。

「今上より陰陽博士を拜命致しております身なれば……どうか」

「……」

やがて、睦月はゆっくりと頷いた。彼の背後から異義の音があがるのを聞こえないかのように無視し、紫苑は桔梗を促す。

「ゆくぞ」

「……はい」

自然と重ねられた手に、桔梗は顔をほころばせた。

二

唐突に出現した気配に、彼女が慌てることはなかった。

「何者ですか」

静かに問い掛けると同時、扉が吹き飛ぶ。

「……………」

昴が振り向くと、そこに白銀の獣がいた。眇められた瞳は濃い青。その視線に、肌がひりつくような殺気を感じた。気を抜くと震え出しそうになる体を叱咤し、昴は真っ直ぐにそれを見据える。

「あんたが巫女、か？」

「いかにも。して、そちらは？」

「……………俺か？」

獣は薄く笑った。

「まあ俺のことはどうでもいい」

「……………」

「それに」

冷やかな激情が、彼の表情の中に荒れ狂っている。

「予想はついてるんだろ？」

「貴方が何者かは分かります。しかし」

昴は気丈な眼差しを保った。

「何故、貴方がここに来たのかは分かりません」

「……………」

獣の浮かべていた笑みが消える。

「そうか」

「?!」

昴は玄武の力が引きずり出されるのを感じた。皮膚から無数の細かい針が突き出してくるような感覚。痛みはないが、彼女はいつまでもこの感触に慣れることができない。

からん。彼女の周りの床に落ちたのは、透明で鋭利な刃。それは氷でできたものなのだと気付く。

「……………へえ」

獣は小さく口笛を吹いた。

「玄武の力ってのは、そういうものか」

水に住まう青龍、炎が生んだ朱雀、風を束ねる白虎、地を駆ける玄武。

「重さを与えたんだな……なるほど」

「……………」

昴は黙ったまま獣を見つめる。先ほどの攻撃は、恐ろしく早かった。彼女自身にはとても対応できなかっただろう。彼女には玄武の力を自由に操るほどの能力がないゆえに、半ば自動的に守られている。彼女に迫った危機に反応して、玄武の力が発動するのだ。情けない、と昴は思う　　いつその身にあやかしの血が流れていれば……………」

「今のはただの礼だ」

獣は片手を広げ、彼女の目の前に突きつけた。昴の喉が小さく鳴る。

「俺の弟に対する仕打ちに対する……………」

「仕打ち？」

彼女は薄く笑った。

「私は邑に彼を受け入れることを決め、長老らから庇護したつもりですが」

「都合のいい手駒として使うためにな」

「何のことです？」

「今日、紫苑と力を交えた者。あれは癸だ」

「ぼつり、と告げられた声は無表情だった。」

「……………」

「俺には分かる。同じ血をふたつに分けて生まれてきたんだからな」

昴はきつと睨む。

「私は彼の者に襲われたのですよ」

「本当に襲うつもりなら、屋根など落とさないさ」

獣は危険な笑みを浮かべた。

「壁や天井越したって、気配が読めればそれでいい。就寝中なら更に楽だ。首の位置に」

「……………」

昴ははっとした。獣の銀髪が揺らめいている。

「こつやつて刃を降らせばいいんだからな！」

飛び来る無数の氷塊に、昴は絶望的な思いで力を展開した。ばらばらと音を立てて落ちていく氷刃たち。精神力が吸い取られていくのを感じる。妖力を持たない昴は、玄武の力をその意志の強さでもって何とか具現化させているのだ。彼女が気を失えばその先にあるのは……死。

嫌！

昴は奥歯を噛み締めた。

こんなところで死ぬ訳にはいかない！！

胸元の首飾りが浮き上がる。昴はそれを見つめることで、精神の統一を図った。

助けて……母さん、父さん！！

そのまま、どれほどの時を耐えただろう。

「……………」

ふと気付くと、攻撃がやんでいた。怪訝に思いながらも力を解く。目の前に佇む獣は、彼女を見ていなかった。体を斜めにずらし、彼の後方を振り向いている。

「癸」

「兄さん」

ふたりの言葉が発せられたのは、同時だった。

三

「何で」

王はぼつりとつぶやいた。

「何で、お前が」

「……………」
葵は険しい表情で立ち尽くしている。昴の方を見ようとはしなかった。

「この女に脅されたのか?! なあ、何でだよ?!」
兄は焦れたように叫ぶ。

「何でお前が、あんなふうになんて……!!」
「兄さん」

葵が口を開く。昴は何を言いつつもりかと、彼の無表情な顔を見守る。

「兄さんは、僕が人間を殺すことが嫌なの？」

「……………!!」

王ははっと息を呑んだ。

「もし僕が長老たちを殺したとして……、どうしてそれを兄さんが怒るの？ 兄さんは」

葵は静かに微笑む。

「ひとのこと、嫌いでしょう？ 僕たちの一族を滅ぼした、仇なんだから」

「……………それは」

「それとも、兄さんは変わったのかな？ あのひとに 紫苑さんに出会って」

「そ、そういうわけじゃ」

「じゃあ、どうして？」

「……………」

王はぐっと拳を握り締めた。

「それは」

「兄さん」

昴は声を上げる。葵が少しだけ視線を上げ、そしてまたすぐに降りた。

「貴方が……長老さまたちを殺したのかしら」

王の鋭い視線を感じる。きつと、彼女がしらばっくれていると思

っているのに違いない。癸は強張った表情を崩そうとしなかった。

「答えたくありません」

「癸！」

「兄さんは黙ってて」

「貴方でないというのならば」

昴はただ癸だけを見つめている。

「それで構わないのですよ？ 私は貴方を信じていますから」

「……………」

癸の肩がぴくりと動いた。

「もしかしたら」

昴の視線が癸から外れ、壬の上に固定される。

「貴方かもしれない」

「なっ……………」

「昴さんっ?!」

癸が声を上げた。

「お、俺はあの日ずっと桔梗と一緒にだったぞ?!」

「その、『ききょう』とかおっしやる方は信用に足るのかしら?」

昴は落ち着き払って言葉を重ねる。

「その方と癸さんを比べるのならば、私は癸さんを信じますわ。私

癸さんのことなら良く存じ上げていますから」

「……………」

良く似た表情で自分を睨みつける兄弟に、昴は笑みを零した。

「さあ、どうなさる……………」

「さて、どうしましょう」

その声は背後から聞こえた。覚えがある、高く澄んだ女の声。確か、以前闇の中から響いてきた……………。

「今日は来客の多い日ですこと」

昴は振り向くこともなく、視線をそちらへと流す。

「貴方が閉じこもっているから、こちらから出向くしかないのです

「よ」

「紫苑！ 桔梗！」

「……………」
王がほっとしたように彼らの名を呼ぶ。癸は警戒した様子で黙っていた。

「それにしても………… お前が気付いていたとはな」

紫苑は苦笑を浮かべ王を見つめる。本当は気付かせたくなかった。自分の弟が長老たちを殺して廻っているなど、王にとっては愉快な話ではないと思ったからだ。

確かに、王はひとを憎んでいるだろう。その気持ちは今も変わらないのかもしれない。だからといって、王は本当にひとに対してその力を奮ったことがあっただろうか。無力な、抵抗できないものの命を奪うことなど、彼はきつとしないだろう。それは彼の水龍としての矜持であり、甘さなのかもしれない。そして、紫苑はそういう彼の矛盾したところを好ましいと思っている。

「兄弟なんだ」

王はぼつりと答えた。癸がはっと兄の顔を見つめる。

「あの時…………、俺はこいつを見失った。護れなかった。だから…………」

「……………」
桔梗がひどく優しい顔で兄を見つめているのに、癸は気付いた。まるで姉のような、母のような。全てを包み込むような微笑。これが御子か、と癸は思った。

「さて」

紫苑が口を開く。昴が振り向き、彼と対峙するような形になった。

「この辺にしていたくださいますか？ 異国の血を引く、異端の巫女どの」

「……………」

昴の表情から笑みが消え、代わりに驚愕が蒼白な顔に広がる。

「貴方の復讐劇も、これまでだ」

紫苑の横で、桔梗は微笑んでいた。だから警告したでしょう？
とでも言うように。

第七章

—

「ど、どうということだ？」

王が昴と紫苑の顔を見比べる。昴はじつと沈黙を守っていた。癸は紫苑を見つめている。紫苑はさりげなく桔梗に道を譲った。桔梗は静かに口を開く。

「この前散歩していて、偶然見つけてしまったんですけれど……」
穏やかな声。だが、昴はその内に潜む剣呑なものを知っている。

「見慣れない形の、小さなお墓がありました」

昴はぎくりとして、胸元を見下ろした。きっと、その墓は……。

「そう」

桔梗は微笑む。細い指が、不躰に昴の胸元を指した。

「その形と、同じでした」

「私とて聞きかじりの知識でしかないのだが」

紫苑がそのあとを引き取る。

「異国 唐よりももっと遠い西の果ての国には、赤や金の髪、青い目をしたひとびとがいるそうだ」

「それは」

王が口を開く。

「ひとなのか？ あやかしではなく？」

「詳しくは知らん。しかし」

紫苑は昴を見据えた。

「彼女はあやかしではない。お前たちにもわかるだろう？」

「……………」

昴は無表情に彼を見つめ返した。青い瞳が感情を宿さないままに

凍りついている。

「紫苑さまのいうことが本当だとして……、何故私が長老がたを殺めるのです？」

「先ほど私は申しました」

紫の瞳が、意味ありげに揺れた。

「貴方のしたことは、復讐だと」

「……………」

「桔梗の見た墓は、随分と邑の外れにあったそうです。墓標にも何も刻まれていなかったとか」

「……………」

「そして、その墓と同じ形をしたそれを　貴方は身につけている。まるで」

昴は思わずそれを胸元で握りしめた。紫苑の視線が、彼女を暴く。

「形見のように」

ああ……。昴の喉から奇妙な笑い声が零れ落ちる。多分、それは全身から力が抜けたせいだった。

二

床に腰を落とす彼女に、紫苑は手を差し伸べようとした。だが、それは桔梗の手に阻まれる。

「……………」

怪訝そうな顔をして振り向く紫苑から、桔梗は視線をそらす。

嫌だった。目の前で、紫苑が他の女性に触れるのが。たまらなく嫌だった。何だろう……この嫌な気持ちは一体何だろう。

「桔梗？」

紫苑が小さく尋ねるが、桔梗はいやいやをするように首を横に振った。答えられない。紫苑は解せぬ顔をしながらも、心配げに横目で昴を見遣る。それがまた、嫌だった。

紫苑の気持ちはわかつている。彼は優しいから、昴を叩きのめしたいわけでも、傷つきたいわけでもない。ただ葵が巻き込まれるのを、そして王が苦しむのを見ていられなかっただけ。長老たちが次々に殺されていくのを見逃せなかっただけなのだ。そして、昴の過去がもし紫苑が立てた仮説の通りだとするならば。紫苑には彼女に同情するだけの十分な理由がある……。

胸が痛い。桔梗は唇を噛みしめた。こんな自分は嫌だ。こんな自分を紫苑が知ったらどう思うだろう。蔑まれるだろうか。呆れられるだろうか。それとも、理解できないと困惑した顔で眺められるだけか。どれも、桔梗にとってはつらい想像だった。ぎゅっと固く拳を握って耐えようとしたとき。ぽん、と桔梗の頭の上に、暖かなものが乗せられた。紫苑の手。無骨で優しい彼の指先、それが顔を上げられないでいる彼女の頭を何度か撫でていく。ただそれだけで、胸につかえていたしこりがすうっと溶けていく。

「さて、昴どの」

紫苑は口を開いた。巫女、とは呼ばない。

昴が顔を上げる。乱れた黄金色の髪の下からのぞく青い瞳が不思議な光をたたえながら輝き、蒼白なかんばせとあわせて、それはどこか現実味のない美しさだった。

「何も私は貴方を糾弾するために来たのではない」

紫苑はゆっくりとした口調で言う。昴はそれを変わらぬ無表情で見上げた。

「葵のことが捨て置けなかったということもある。だが、それ以上に」

その場の全ての視線をひとりじめして、紫苑は微笑む。

「ただ、理由が知りたい。それだけなのです」

「……………」

昴が顔を俯けた。

「ふ」

息のもれる音。それが笑いだと最初に気付いたのは誰だった。ただろ

うか。

「こんなことなら、後先考えずに私が自ら手を下せばよかったわね」
初めて聞く、ひどくくだけた口調。

「御門紫苑」

紫苑を上目遣いに見る眼差しは挑戦的で、どこか蠱惑的でした。
った。

「貴方にならわかるでしょう？ 異端の者を、ひとがどうやって扱
うか」

「……………」

紫苑は頷かない。昴はたたみかけるように告げる。

「ひとと、あやかしの血を宿すもの。禁忌の半妖である貴方なら

「

「あいにくだが」

紫苑は彼女の言葉を遮るように口を開いた。

「わかりませぬな」

「……………」

昴が眉をひそめる。

「つらくあたられた経験なら数え切れぬほどあるが、だからといって誰かを殺めようと思ったことはない」

「つらくあたられるだけなら我慢できるわ」

昴の声はひどく冷ややかだった。

「けれどもし……、貴方の大切なものの命が奪われたら、どうかし
ら？ 貴方が異端であるという、それだけの理由で」

「……………！」

紫苑の肩が小さく震える。

「友人でもいい。恋人でもいい。兄弟でも、何でも……。私の場合
は」

昴は凄みのある微笑を浮かべた。

「両親でしたけれど」

どうやら自分の予想はあたっていたようだ。紫苑はそう思うと同

時に、足元から言いよのない寒気が這い登ってきた。

貴方の大切な方の命が奪われたら、どうかしら？

寄り添う気配、桔梗。遠く離れた都にあつて屋敷を守っている、
燐。その息子、朔。王。不機嫌そうながらその瞳に信頼が見え隠れ
している。そして彼の双子の弟、癸。もし彼らが害されたら……そ
れも、自分が半妖であるために。

きつと狂ってしまう……！ 紫苑はぎりりと奥歯を噛みしめ
た。

三

「大体は貴方の言ったとおりだわ」

昴は傲然と頭をもたげた。

「私の父は、遠い西の国のひとだったそうよ。船が難破して、どこ
とも知れぬ海岸からこの邑にたどりつき その髪と目の色を奇異
に思われて、すぐさま捕えられた」

彼女の髪は燭の火に煌々と輝いている。

「母は私の一代前の巫女。玄武は母にこう言った。『あの異国の男
が、お前の運命だ』と」

「玄武が……」

桔梗が小さくつぶやく。昴はそれに気付かなかったようだ。

「母はこつそりと父に会いに行き ふたりは恋に落ちた。決して
結ばれてはならなかったのに」

私の父母とは逆だ、と紫苑は思った。父は 先帝は、囚われの
身であった母を愛した。

「母が私を身ごもった時、長老衆は半狂乱になって父親を探した。
けれど、母は頑として口を割らなかつた。しゃべればきつと、腹の
子は殺される。どんな方法を使つてでも、産ませてもらえなかつた
でしょう」

昴は淡々と、しかし目の奥をぎらぎらとさせて語り続ける。

「私が生まれて　その髪と目で、父親が誰なのかが分かった。長老たちは怒り狂ったけれど、母を殺すわけにはいかなかった。彼女は玄武の巫女で、邑にはその力が必要だから」

「……………」

「けれど、父は」

昴の顔が歪む。

「すぐに殺された。無残に打ち捨てられていた骸骨を、母は私を負うて泣きながら葬ったそうよ」

ちらりと桔梗を眺め、

「それが貴方の見た、墓」

と言った。

「私を産んでから、母の巫女としての力が少しずつ消え、その代わりに私は今までの巫女の誰よりも玄武の力を引き出すことができた。そして」

紫苑はその先を想像してぞっと体を震わせる。だが、昴は容赦なくその言葉をたたきつけた。

「私が三歳になったとき。母は殺された。巫女として、用済みだから」

「……………」

誰かがごくりと唾を飲む。

「以来、私は巫女になった。憎くてたまらない、この邑を守るために」

昴がぱつと立ち上がる。王が身構え、紫苑は動かない。

「長老衆は私の父と母を殺した！　だから私は復讐しようと思った。でも私ひとりじゃどうしようもない。玄武の言うとおり、ずっと時期を待っていたのよ」

青い目が燃え盛っていた。

「長かったわ。母が死んでから、もう十五年が経った……………」

「癸さんを使って長老衆を殺した後」

突然、桔梗が口を開く。

「貴方はどうするつもりだったのですか？」

「決まっているわ」

昴はにっこりと微笑んだ。あでやかな笑みは、どこか媚を含んでいるようでもある。

「紫苑さまに、都に連れて行っていただくのよ。この邑にはもう用はないもの」

「なっ……?!」

壬が声をあげ、桔梗は目を細める。紫苑は啞然として口をむなしく開閉させた。

「な、何故私が……?」

「あら、私もまた狙われていると思われるように仕向けたのは、そのためだったのだけど」

「そのたくらみは失敗したようですけどね」

桔梗が冷ややかに告げる。

「失敗？」

昴が驚いたように繰り返した。

「まさか。これからよ」

「貴方にこれ以上長老衆は殺せないし、紫苑は貴方が狙われていることを知っています」

「ええ。でも」

昴の視線がすうつと葵の方に移動した。

「私が葵さんに長老衆の殺害をお願いしたこと……、誰も知らないのよ?」

「……………」

葵はぎゅっと拳を握り、俯いた。

「葵……………」

心配そうな兄の顔から目を背ける。

「葵……………何故、そんな依頼を受けた?」

紫苑は穏やかに尋ねた。

「……………」
葵は答えない。昴はくすりと笑った。

「守りたいものがあると、大変ね。それに縛られてしまうもの」
どこか小馬鹿にした風情で言う昴に、桔梗は即座に言葉を返す。
「それが本人の望んだことなら」

紫苑は傍らの彼女を見下ろした。可憐なかんばせが、毅然とした表情を浮かべている。

「決して不幸ではない。むしろ本人にとっては本望なのですよ」
「……………桔梗さん」

葵が口を開いた。それを横目で見ながら、桔梗は言葉を続けた。

「大体は想像がつかます。そうでしょう？ 壬さん」

「ああ。俺にも大体わかっている」

壬は一步進み出た。脳裏に浮かぶのは、質素な家屋に住まう慎ましやかな母娘。おそらくはあのふたりに関係しているのだろう。

「さあ、どうするの？」

昴はそんな彼らを見無視して小首を傾げてみせた。

「あともう少し、協力してくださいれば良いだけのことよ。そうすれば、私は自由になれる……………」

「……………」
紫苑は壬と視線を交わす。桔梗が彼の袖を握る。 彼らには、それだけで十分だった。

第八章

—

紫苑は落ち着き払って口を開いた。

「貴方は何か勘違いをしているのではないか」

「え？」

昴の笑顔がひび割れる。

「貴方は最初から不自由ではない。誰も貴方を縛ってなどいない」

「何を言っているの？」

青い視線に睨みつけられても、紫苑は全く意に介さなかった。

「私は巫女になるしかなかった。私の両親を殺しておいて！ 長老たちは私を利用したのよ?!」

「それは本当ですか？」

ゆつくりと問い掛ける。

「貴方は本当に巫女になるしかなかったのだろうか？ 確かに貴方のご両親を殺したのは、長老たちの罪です。しかしそれとこれとは、本当に関係があるのですか？」

「……何が言いたいのか？」

「彼らに復讐するのも、貴方は癸の力を借りなければ成し遂げられなかった」

「王がちらりと弟を眺め、その視線が伏せられているのを見て力なく肩を落とした。」

「十五年の間……、貴方は一体今まで何をしていたのだ？」

「わ、私は」

昴に長老たちに立ち向かえる力などなかった。玄武の力を借りることができるとは言っても、そこそこの手練れである彼ら十一名をも相手にすることはできなかつた。だから 玄武の言うとおりに待っていた。時期が来る。必ず、来る。玄武がそう言ったから。 玄武が……。

「先ほど貴方は私に尋ねた」

紫苑はあくまで穏やかに語りかける。

「私の大切なものの命が奪われたら、どうか と」

「……………」

肩にかかる重みを感じ、桔梗は顔を上げた。紫苑の掌が、彼女の肩を包んでいる。

「恐らく、私も貴方と同じだろう。きつとどうにかしてその怒りを、恨みを晴らすうとする。その命でもって、罪を贖わせようとするかもしれない」

「それなら」

昂は昂然と頭をもたげる。

「貴方に私を糾弾する権利などないのよ」

「勿論、私にそんな権利などない。そもそも糾弾などしているつもりもない」

「なら、一体何が言いたいのか?！」

昂はいらだつたように、再びそう叫んだ。

「まわりくどい言い方はやめて欲しいものね!」

「……貴方の復讐は、貴方自身が行なうべきものだ。貴方ひとりの責任でもって」

はっ、と葵が顔を上げた。

「無関係なものを巻き込んだ時点で、貴方の復讐は既に大義名分を失っている」

「無関係なもの……?」

昂はちらりと葵を見た。だが、葵は彼女と目を合わせない。

「確かに、長老たちのしたことは非道なことだ。貴方が彼らに殺意を抱いたとしても、誰も責めることはできない。しかし」

紫苑は視線を葵へと動かした。

「彼は違う。たとえ脅されていたとしても……違うのだ」

「……わかっています」

葵は静かに口を開く。

「わかっていますよ。紫苑さん」

王と同じ、濃い青が紫苑を映した。

「でも、それでも 僕は彼らを守りたかった」

「あの、親子でしょうか?」

紫苑の問いに、葵は頷く。

「母親の病を治すのには いえ、彼女の病は治らないけれど、せ

めて命を永らえさせるために 高価な薬が必要なのです。でも、彼らにはとても買えない。僕は昴さんの言うことを聞く代わりにそれをもらっていました」

「……………」

昴は黙って癸を見つめていた。

「でも」

癸はようやく、昴に視線を向けた。

「それももう やめにします」

「…………え？」

滑り出た間抜けな声。それが自分のものなのだと、信じられない。信じたくない。

「昴さん。兄に手を出そうとしたのは」

ゆるゆると首を横に振り、

「失敗でしたね」

彼は不敵に微笑んだ。

二

紫苑は桔梗の顔を見下ろす。彼女は満足げに微笑んでいた まるでこの展開を予想していたかのように。

「癸」

壬が口を開く。

「俺に変な気兼ねはしなくていい。お前は、お前の好きなようにしたらいいんだぞ」

その結果、ふたりが相對することになるうとも。壬は自分を曲げない。だからこそ、弟にもそうあって欲しかった。

「兄さん」

癸は不敵に微笑む。久しぶりに弟の生き生きとした表情を見たような気がして、壬は安堵した。

「大丈夫だよ。僕は、僕の意思にしか従わない」

葵の手がゆっくりとそらに向けられた。一瞬、ざっ、と彼の髪が摩き、続いて四方に墨色の液体が撒き散らされる。髪から染料を落としたのだ。

「……………」

白銀の髪を取り戻した葵は、穏やかに語る。

「それが水龍の 誇りだから」

「勝手を言ってくれるわね」

昂が口を開いた。

「薬のことはともかくとして、貴方は確かに長老たちを手にかけてのしょう？ その事実は変えられないわ。その罪も ね」

「だから？」

葵は冷たく言い返した。

「言っておくけれど、今多くの邑びとたちは貴方を疑っているんだよ。それが貴方の言葉を信じるかな？」

「……………っ！」

昂は顔を引きつらせた。

「どうしても、この邑にいられなくなるというのなら つらそうに顔をゆがめ、葵は言う。」

「仕方がないさ。僕は出て行く」

「……………葵、」

葵は、あの加乃という少女 そしてその母親にひとかたならぬ情をもっているはずだ。それでも、葵は言う。

「だから、僕はもう貴方の言いなりにはならない」

「……………」

昂はぐっつと歯を食いしばった。

「どっして……………？」

その瞳を揺らめかせるのは怒気か、涙か その両方なのか。
「どっしてよ、あともう少しなのに…！」

昂は叫ぶ。

「もう少しで、父さんと母さんの仇が討てるのに！」

「そしてこの邑を出て行く……か？」

「そうよー！」

紫苑の言葉に、昴は返す。

「なら、今すぐ出て行けばどうです？」

「え……？」

昴は息を呑んだ。

「そこまでして仇打ちにこだわるのは、何故ですか」

「だ、だって……」

それだけが、彼女の生きが이었다のだ。

昴は頬を濡らす涙に気付き、慌ててぬぐった。泣いてはいけない。こんなところで泣くなんて、彼女の矜持が許さない。許さないのに……。

「 っらかったのよ」

ぼつり、と昴はつぶやく。

「十五年間。つらいことばかりだった」

異端視され、閉じ込められ、敬われているようで実は蔑まれていた。髪の色を変え、自らの姿を偽って、それでも生き抜いてきた。

両親の命を無駄にしたくなかった。やがて、彼女は復讐だけを考えるようになった。そのためだけに、彼女は生きてきたのだ。

「そのためになら何だっしょうと思っただわ。他人を利用することだっで、何とも思わなかった」

熱に浮かされたように、彼女は喋り続ける。

「自由になりたかった。こんな風に生を受けた運命から、解き放たれたかった……」

異端の巫女と、そう呼ばれる運命から逃れたかった。

「全部終わったら、この邑を捨てるの。玄武の力は返したっていい。とにかく全部捨てたかった……」

「それは、できない」

紫苑は彼女の言葉を遮った。

「確かに貴方は帛を捨てることができるかもしれない。玄武の力も捨てるかもしれない。けれど、どうしても貴方が捨てられないものがある」

「……………」

「それは、」

紫苑は少しだけ、微笑んだ。

「貴方自身だ」

金髪と青い瞳は、いくら染料を使っても変わることはない。彼女の過去も同じだ。今更変えることはできないし、捨てることもできない。しかし…………。

「それでも」

紫苑は優しく続ける。

「貴方は、貴方を縛っていたものを捨てればいい。貴方が一番捨てたかったものでしょう?」

「私が、捨てたかったもの…………?」

昴はまるで幼子のような表情で問い掛ける。

「それをもう、貴方はご存知のはずだ」

「…………私が…………?」

私が、捨てたかったもの。

「あ…………ああ…………」

昴は目を閉じた。目尻から伝う涙も、もう隠さない。

「ごめんなさい、母さん…………」

この重すぎる憎しみを、意地で固めた強がりやを、無理やりにかきたてていた怨念を、

「私は、捨てたかった…………」

昴は静かに首飾りを外し、それにそつと口付けた。もう、これは要らない。ひっそりと葬られた母の側で、父に守られて眠ればいい…………。

床に落ちたそれが、かしゃりと音を立てた。

邑に入り込み長老たちを殺めたもののけは、都の高名な陰陽師どのによつて退治された。昴の発表に邑びとたちは一応の納得を見せ、事態は沈静化した。やはり玄武の巫女への信頼は篤いらしい。「……気に入りません」

「何が？」

つぶやいた桔梗に答えたのは、紫苑ではなく昴だった。昴は長く伸ばしていた金髪をぱつぱりと切り落とし、肩と同じ高さで揃えている。ゆるく波打つ黄金が白い頬を彩っていた。

「別に」

桔梗はぶつくと膨れて目をそらした。視界の隅で困ったような顔をしている紫苑のことは敢えて無視する。

「その、巫女どの」

「その呼び方は止めてって言ったでしょう？ 昴、でいいの」

「はあ。昴ど」

「ごほん」

桔梗の咳払いに、紫苑は言い直す。

「いや、やはり巫女どので」

ここは巫女の神殿。あれから三日が経っている。

昴は紫苑らを呼んで、こう言った。彼女は玄武の力を捨てられない。そう語る彼女の瞳には、どこか柔らかい光が見え隠れしていた。諦めのようにでいて、決して自棄的な様子はない。

彼女もこの邑をただ憎むだけではないのだろう。仮にも、彼女がその人生を掛けて守り通してきた邑なのだから。だからこそ、複雑な思いがあるのかもしれないが……。

「貴方はこれからどうなさるのです？」

「あら、言わなかった？」

昴はにっこりと微笑んだ。

「貴方に都に連れて行ってもらうのよ」

「は?!」

紫苑の声を掻き消す勢いで、桔梗が叫ぶ。

「勝手なことを言わないで下さい!」

「貴方こそ」

昴はふふんと鼻で笑う。

「私がお願ひするのは紫苑さま。貴方ではないわ」

「くっ……」

桔梗は唇を噛み締める。

「き、ききよ……」

「紫苑も紫苑ですっ! はっきり言ってやって下さい!」

「な、何を」

「そんなの決まってるじゃないですか!」

「ふふふ」

昴はくすくすと笑っている。桔梗がむきになっているのがおかしくてたまらないようだ。これが本当に水龍の御子だろうか。こんな風に頬を紅くして紫苑に詰め寄っているさまは、ふつうの少女と何ら変わらない。まあ、だからといって負けるつもりはないのだけど。昴がふたりの間に割って入ろうとした時。

「たのもう!」

能天気な声が辺りを静めた。振り向いた先に佇む人影は、彼らの視線を受けてやわらかく微笑む。

「久しぶりだねえ、紫苑」

「いやあ。」

その場にいる者全員が目を丸くし、そして叫んだ。

「隣さん?!」

「朔?!」

そして、白虎。

四聖獣が、ここに集った。

封印の巻

第一章

—

「久しぶりだね、紫苑。元気にしていたかい？」

穏やかに笑う友人、そしてその息子。ほんの数週間見ていないだけなのに、こんなにも懐かしく感じる。だが、その郷愁以上に不審が勝っていた。紫苑は眉を寄せる。

「お前、都に居たはずでは……」

「うん、そうなんだけどね」

息子である朔の手を引きながら、燐は紫苑の座っている濡れ縁に向かって歩み寄ってくる。

「白虎がどうしても行かねばならないって言うから」

白虎の背に乗り、夜通し駆けて来たのだろうか。微笑んでいるその目の下に、隈ができていた。

「驚かせてしまつてごめんなさい」

礼儀正しく頭を下げる朔の方は、全く堪えていない様子である。やはり若さの違いかな、と紫苑は思った。

「いや、それは構わないのだが……」

「そう」

不意に、昴がつぶやいた。紫苑の隣から身動きし、濡れ縁の下へと降りる。素足だが、そのことは特に気にしていないようだった。

「時が来たのね」

「時？」

彼女の黄金の髪を見ながら、問い掛ける。だが昴は振り向かなかつた。

「あまり気乗りはしないのだけれど……」

すまないな、玄武の巫女よ。

朔の腕の中で丸くなっている白猫　白虎の仮の姿である　が、
ぴんと尻尾を立てた。

しかし、これはいずれは訪れる日のため……必要なことなのだ。

「わかっているわ。それでも一応玄武の巫女よ」

昴は不敵な笑みを見せる。

「どういうことだ？」

尋ねる紫苑の右手を、桔梗がぎゅっと握った。

「……………」

見下ろすと、彼女の顔はあまり晴れない様子だった。長い銀系の睫毛が、彼女の瞳の色を隠している。紫苑はその手を強く握り返した。いつだって、桔梗は彼を元気付けてくれた。だから、彼女が不安そうにしているときは自分が側に寄り添ってやってやりたい。

「……………」

昴がこちらをちらりと見て、少しだけ寂しそうな顔をしていた。

「それで？」

燐が昴を見て首をかしげた。

「貴女が　上宮昴さん？」

「ええ。はじめまして」

何かが切り替わったかのように、昴は満面の笑みで会釈する。もう今はくせになつてしまったのか、初対面の相手には仮面を被り愛想をふりまいてしまう。そんな自分が少し癪だった。

「お久しぶりです、昴さん」

「朔くん、だっけ」

見上げる少年に、昴はほっとしたように微笑んだ。桜色の髪の毛の、一度は死した少年。

「お父さんと会えたのね」

「はい！　その節はお世話になりました」

「いえ、良かったわ」

朔に並び、燐が深々と頭を下げる。

「息子がお世話になりました。ありがとうございます」

目の前に佇む親子の姿が眩しくて、昴は瞬きをした。

「いいえ。……私は何も」

軽く一礼をして、振り返る。

「……………」

穏やかな紫の視線が、こちらを見ていた。多分……、彼にはわかっているのだろう。これは、彼らが望んでも得られなかった家族の姿。胸がしめつけられるように、切ない。

けれど……朔のいのちは歪な、かりそめのものに過ぎない。

それを、昴は良く理解している。死した者を本当に生き返らせることなど、誰にもできないのだ。たとえ神獣といえども、神ではないのだから。神獣は、あくまで「神から使命を与えられた獣」であつて、神ではない。だから、朔は……………。

「さて、挨拶も済んだようだが」

紫苑が口を開いた。昴ははっと息をのむ。

「済まないが何が何だか全くわからない。誰か、説明をしてくださいか」

「……………そうですね」

朔が表情を引き締め、口を開いた

「この出雲には、ある『封印』が眠っているのです」

「……………『封印』？」

「どこから話せばいいのかしらね」

昴はふう、と息をつく。

「それにしても……………もうちょっと猶予があるものだと思っていたのに」

先に都に行ってみたかったわ、とつぶやく。

まず……………、ひととあやかし、そして神の歴史を。語らねばならぬだろうな。

深く響く白虎の声。紫苑はごくりと唾を飲み込んだ。

二

そもそも、何故この世にはひととあやかしが存在しているのか。そして、何故神がないのか。

「神が……、いない？」

燐がつばやく。

「でも、お社にはちゃんと神がいらっしやるだろう？ 神無月以外の十一の月には、という意味だけど」

「そうは言っても、我々の目には見えないでしょ？」

昴が反論され、燐は口ごもる。

「うーん、そういうのって目に見えるものじゃないんじゃないかな……」

燐が助けを求めるように紫苑を見た。紫苑は小さく咳払いする。

「我々陰陽師は神と関わる訳ではないから、あまりその道には詳しくくないが……」

ふわり、と炎のゆらめきをその羽にまとった鳥が舞い降りた。朱雀。紫苑の肩に軽く爪を掛けて留まる。燐は思った。まるで

紫苑を守っているようだ、と。

「神はかつて、我々のいるこの世界に実在のものとして存在していた。その証拠に、古代における神の伝承は数多く残っている。そうだろう？」

「ああ……確かにそれはそうだね」

燐は頷いた。

「だが、いつ頃から神々は姿を消してしまっ」

「ひとと神は、どちらが先にいたのかな」

いい質問だ、橘燐。

白虎と同質の、しかし異なる声。朱雀のものだ、と燐が気付くに

は暫しの時間を要した。

「ひとは、そしてあやかしはどこから来たのか。神はどこへ行ったのか」

「……………」

紫苑は険しい顔で宙を睨む。

「その謎に関わるのが……『封印』なのか」

「そういうことです」

昴は微笑む。紫苑になら、自然に笑いかけることができた。その傍らでちらちらと視線を送っている少女には、敢えて気付かないふりをする。

「巫女どのは、全てをご存知なのか」

「いいえ。今お話したこと程度ですよ」

紫苑はひとつ頷き、朔を見遣る。

「朔は」

「同じです」

「……………」

紫苑は桔梗を見下ろす。先ほどまで俯いていた桔梗が、いつの間にかしつかりと顔を上げていた。水色の視線は紫苑を捕えて離すまいとするかのように、強い。

「お前は、どうだ」

「知りません」

桔梗は胸の前でひとつ、拳を握っていた。

「もしかしたら青龍は知っているのかもしれない。　　だけど」

口元を少しだけ、ほころばせる。

「私は、紫苑と同じ目線で歩いていきたいのです」

この世からひとつ隔てたところにいる、神とそれに連なるもの。神獣の一、青龍はいまや桔梗の魂の中に溶け、眠りにについている。

それでも、桔梗は何も変わらない。出会ったときから、ずっと紫苑の一番近くにあり続ける存在。

「……………」

紫苑の全身を覆っていた緊張が、嘘のようにほどけていく。
「……………そうか」
紫苑は頷く。自分が柔らかな微笑を浮かべていることなど、少しも気付いていないようだった。

三

「『封印』の存在は我ら玄武の巫女と長老家主らのみが知らされ、なんびとも近付かぬよう厳重に管理されてきました」

昴は厳かに言葉を紡ぐ。

「来たるべき日のために」と

「それは一体……………」

「選択」なのだ。

朱雀が言う。紫苑は肩に留まる神獣を見た。その赤い瞳は真っ直ぐに空を見上げている。

かつて神々が行なったのと同じ、「選択」を……………。

「神々と、同じ？」

我ら神獣は、そのために地上に降りた。ひととして生まれ落ちた上宮昴。あやかしである桔梗。そして……………、ひととあやかしの狭間のもの。

紫苑は朔を見た。朔は頷く。

「それが貴方です。紫苑さん」

「え、それじゃあ朔は……………？」

隣が息子の顔を覗きこむ。

「父さん」

朔は少し悲しげな表情で微笑んだ。

「僕が選ばれた理由は、そういう意味じゃないんだよ」

ほんの少し、魂が神の側に近いもの……………。

「僕は、一度死んだ存在だから」

白虎によつてかりそめの命を与えられた存在。彼がこうやって燐の元に戻つてきたのは奇跡でも何でもない。白虎によつてよりしるに選ばれたという、ただそれだけのこと。

「……………」

燐は言葉を失い　息子を抱きしめる。朔はその腕に手を沿え、何かを小さくつぶやいた。何と言つたのかは聞こえない。もしかすると、それは謝罪かもしれない。

昂はすつと父子から視線を外した。ことさらに明るい声を出す。

「明日、『封印』の地にご案内致しますわ。今夜はごゆるりとお過ごしなさいませ」

紫苑は空を振り仰ぐ。陽は、山際へと徐々に近付いていた。

第二章

—

梟が、鳴いている。紫苑は襟元をくつろげ、扇で風を送っていた。その眼前には燐が座っている。ふたりの間には盃がふたつ。紫苑のものはなみなみと酒で満たされたまま、燐のものはだいぶ減っていた。

桔梗は朔と共に隣の部屋にいる。時々笑いさざめく声が聞こえていた。

「神と……あやかし、そしてひと
紫苑がつぶやく。」

「その三者が一体どういう関係にあるのか、知る必要がありそうだな」

「君も知らないの？」

陰陽師である紫苑は、そう言ったことにも精通しているのではな

いかと思っていたのだが。意外そうに問い掛ける燐に、紫苑は苦笑した。陰陽道はあくまで唐の国から伝えられた、陰陽五行を基にしている。かつてこのやまとの地に居たといわれるやおよるずの神に触れられることは、あまりない。

「期待にこたえられなくてすまないな」

「いや、そんなことは構わないのだけど……」

「酒が減ったな」

紫苑は突然そう言い、一度、手を打ち鳴らした。

「焰」

酒器を捧げ持った男が、姿を現す。赤を身にまとうその男は、朱雀が姿を変えたものだ。焰は無言で燐の盃に酒を注ぐ。燐は会釈して、満ちていく水面を眺めていた。

「幾つか、聞きたいことがある」

「……はい」

焰は静かに答える。

本当に彼は神獣なのか　　燐は不意にそんなことを思った。こうしていると焰はいたってふつうの式神だ。焰自身も唯々諾々としてその状況にあまんじているように見える。そういえば、朱雀は何故紫苑を選んだのだろう……。燐はそのいきさつを知らない。彼が気付いた頃には、既に紫苑は四聖獣の一を従える術者として名を馳せていた。まだ、燐にはその本当の意味などわからなかったのだけだ……。

紫苑は真っ直ぐに焰を見つめ、口を開いた。

「神とは、何だ」

「神とは」

焰はその赤い瞳を伏せるようにして答える。

「神とは、やまとのくにを作り出した存在。ひとにあらゆる恵みを与えたもの。あやかしを生み出したもの」

「え？」

燐は思わず聞き返す。神々は、やまとのくにを作った。そのこと

は燐も知っているし、数々の紀伝書にもそう書かれている。しかし、あやかしを生み出したのが神とは。 。
「どういうことだ？」

口をつぐんだ焰に対し、紫苑は重ねて尋ねる。

「……神は」

焰の乾いた声が部屋を打った。

「ひとと交わり、ひとの血の中に彼らの力を宿しました。陰陽師と呼ばれるものたちの奮う力に、その片鱗が見られます。 神が居なくなつて長い時間が経つゆえ、その力は徐々に弱まりつつあります。 ……」

「ひとと、交わつた……」

「確かに、そういう記述はたくさん見られるね」

燐は盃を取り上げて一口飲んだ。冷えた液体が喉を潤す。燐は酒に強いが、一方の紫苑はさほどでもない。今も、彼は少しずつ舐めるように嗜んでいた。

「では、あやかしは？」

「あやかしは」

焰が目を開いた。燃え盛る炎の色 神々しい、と燐は思った。

「あやかしは 神々の子孫」

紫苑は何度か瞬いた。酒のせいか、言葉が頭に染み渡るのに時間がかかるようだ。

「神々の……子孫？」

「神と神が交わつてできたこどもは、はじめは神でありました」

焰は淡々と言葉を続ける。

「しかし、そのこどもがまた神と交わり、そのこどもがまた……、と繰り返していくうち、血が濃くなりすぎた」

「それが、あやかしだというのか」

「神はひとと良く似た姿であったのですが、その神の血を濃くひくものは、少々異なつたかたちになつたのです」

尖った耳、額に刻まれた文様。鮮やかな髪と瞳の色。それらはす

べて神々が濃い血脈を受け継ぐものに施した烙印だったのだという。
「やがて、神とあやかしは完全に分かれた」

焰の紡ぐ物語は神話にも似て、しかし実際は異なっている。神獣が語るこの物語は、厳然たる事実。かつて、この地で本当に起こったことなのだ。

「では、神がこの地から消えた理由は？」

「……それは」

焰の口調が初めてよどんだ。

「明日、『封印』を目の前にしてから」

「……そうか」

紫苑はあっさり頷いた。

「ありがとう」

「いや」

焰は軽くかぶりを振る。

「私はお前に力を与えるため、この世に降り立った」

先ほどまでとは口調が違っていった。紫苑の式神である「焰」から、四聖獣の一、朱雀へと。

「……………」

紫苑が目細める。まるで何かを懐かしむようだ、と隣は思った。

「知識は力になる。そして」

焰は厳かな口調で言う。

「我々神獣は……運命が行き着く最終地点のために存在しているのだから」

しん、と静まり返る。鼻すら、既に鳴いてはいなかった。

二

神々の子孫。そう告げた朱雀の音が、脳裏を未だめぐっている。

紫苑は軽く寝返りを打ち、傍らで眠る桔梗の顔を眺めた。彼女も、そうなのか。

何故、神はこの地を去ったのだろう。明日には明かされることとは知りながら、紫苑はどうしても思考を止められない。「封印」とは一体何なのか。一体、誰が、何を封印したのだろう。

「……………」

紫苑はふと呼吸を止めた。 誰が…………何を…………？

「しおん……………」

もぞ、と寝具が動いた。紫苑は慌てて息を止める。

「眠れないの？」

こどもをあやそうとするかのように、桔梗の手が紫苑の胸の上をゆっくりと撫でた。

「大丈夫だ」

紫苑はその手を上から握って止めた。桔梗の体温は、暖かい。

「まだ明け方には遠い。ゆっくり休め」

「…………紫苑」

暗闇の中で、桔梗の顔は見えない。

「早く、都に戻れるといいですね」

「…………ああ、そうだな」

「あの巫女さんも、行きたいのなら一緒に都に行けばいいと思います」

「いいのか？」

桔梗は反対しているとはかり思っていた。意外そうに聞き返す紫苑に、桔梗は言う。

「だってこのままひとりきりでここにいるのは さびしいもの」

紫苑を彼女に渡す気は毛頭ない。それでも 昴の孤独を放置するのは、桔梗の良心が許さなかった。都には隣がいる。朔もいる。

壬も、式神さんも、いつだって屋敷には誰かがいる。そして桔梗は、いつだって笑っていられる。しあわせでいられる。

「時々思っんです」

桔梗は目が覚めてしまったのか、とつとつと語った。

「もし、あのひとのほうが早く紫苑に出会っていたら」

それでも紫苑は私を選んでくれただろうか。今のようなしあわせがあっただろうか……。そんな自信など、ない。

「だから、感謝しているんです」

自分を早く紫苑と出会わせてくれた運命に。

だからこそ、昴に対してどこかすまないような気持ちを抱いてしまっただろう。もしかすると二人の立場は逆転していたのかもしれないのだから……。どこか寂しげにそう語る桔梗に、紫苑はため息をついた。天井を見つめていた桔梗の頭を無理やり抱え込み、乱暴に髪を撫でる。

「お前は馬鹿だなあ」

「……え？」

「もう忘れてしまったのか？」

笑みを含んだ声に、桔梗は首を傾げる。

「以前、お前には言ったはずだぞ」

私はお前に呼ばれた。だから出会ったのだ。運命に呼ばれたのではない。

桔梗は目を見開く。

「あ……」

「私を呼んだのは、お前だ。他の誰でもなく、な。それとも」

紫苑は口を切り、彼女の顔を覗き込んだ。暗がりの中で、彼女の髪だけがぼんやりと輝いている。

「それは私の独りよがりなのか？ 私などと呼んではいなかったのに、私は勝手なことをしたのか？」

「違います！」

「だったら」

勢い込む桔梗を紫苑はやんわりととどめ、今度は優しく髪を指で梳いてやった。

「そんなことを言わないでくれ」

どんな運命が待ち受けていようと、あの時呼び声に応えたことを後悔するつもりはないのだから。

桔梗は目を閉じる。それでも目尻から涙が溢れそうだった。

「……はい」

彼女は思う。自分だって後悔しない。あの日、あの時、紫苑と出会ったこと。それ以来歩んできたふたりの道のり。笑って、泣いて、傷ついて、癒された。この道がどこに続くことも、絶対に後悔しない。

「巫女どののことは、また考えよう」

紫苑は静かにつぶやく。

「傲慢かもしれないが、彼女にもしあわせになって欲しいのだ」

彼女の想いにはこたえられなくても、それでも、「異端」という烙印を押され、疎外感を味わってきた彼女の姿は、決して他人事とは思えないから。

「手伝ってくれるだろう?」

「……はい」

桔梗は頷く。

「この間ちよつと意地悪しちゃったから、謝っておきます」

彼女のいる大社に出向いたときのことだ。敵意を剥き出しにして威圧してしまったのは、我ながらおとなげなかったと思う。ただ、紫苑を失いたくない一心だったのだが……。

「おなご同士、良い友達になれるといいのだが」

「……それは、難しいと思いますよ」

昴が紫苑を諦めさえすれば簡単なのだけど。桔梗は、そのことは言わずに置いた。

夜更け 昴は寝付けず、濡れ縁に腰を下ろして夜風に吹かれていた。月はなく、辺りは暗い。髪に指を通してその軽さに戸惑った。まだこの長さには慣れていないのだ。

紫苑は屋敷に、自分はこの神殿にいる。言い知れぬ寂しさが彼女の胸を襲った。あの紫電の瞳は……、ただひとりしか映していない。そんなことは既にわかっている。それでも、割り切れない。

どうしても貴方が捨てられないものがある。

優しい、けれど厳しい声。

それは、

「私自身……か……」

何を偉そうに、と反発する気持ちがなかったわけではないし、今も邑を憎む気持ちは消えていない。父を惨殺し、母を死に追いやったこの邑を、いつかは出て行きたいと思う。彼らの行なったことを許すことは、決してできない。けれど、あの瞬間 何かが変わった。怒りは、憎しみは、自分のもの。悲しかったのは、私。自分は両親の仇をとるために生きているのではないのだ、と。そんな当たり前のことを忘れてしまっていた。周りが何も見えなくなっていた……。

「昴……さま……？」

「……………」

彼女は振り向いた。声に聞き覚えがある。多分神殿仕えの男だ。

昴に接するのはほとんどが女性だが、男手の必要な仕事もあるのだろう。昴自身はそういう男たちには会ったことがないが、彼らの声を耳にした記憶があった。

暗がりの中でぼんやりと浮かび上がる人影。昴の右手に立っている。昴は目を細めてそれを見上げた。以前なら内心慌てていただろう。彼女の髪は金で、瞳も青い。どう見てもふつうのひとではない。怯えるか、事情を知る者ならば目を背けるか。大抵はそのい

れかだ。

佇んでいる青年は昴と同一年くらい。体格が良い以外に目立つところは無いが、目尻の下がったところが優しげで、それが愛嬌といえるかもしれない。

「誰？」

昴は尋ねる。

青年はしばらく沈黙した後、やがてほう、とため息をついた。

「すごく……きれいだ……」

昴は驚愕に息をのんだ。

「な、何よあんだ」

思わず素の口調が出る。男は慌てたように口を手で塞いだ。もちろん間に合うはずがない。

「すみません、聞こえましたか」

彼女から少し離れた場所にすんと腰を下ろし、真っ直ぐに目を合わせてくる。昴は体を引いた。

「ちょうど見回っていたところだったんですけど」

うなじで無造作にくくった髪を、ぼりぼりと掻く。

「誰かが座ってたから、つい声を掛けてしまって」

「私が誰だか、わかってるの」

「ええ。だってさっきおれ、名前呼びましたよね？」

「ああ……そうだったわね」

昴はため息をついた。

「で、あなたの名前は？」

「おれ？」

男は軒先を見上げる。

「名前はありますか」

「え？」

昴は聞き返す。

「親が早く亡くなって、ずっとここにお仕えしていたから。名前なんて必要なかつたんです」

男は穏やかに言って微笑む。

「そんなものなの……？」

彼女は戸惑って聞き返した。青年は頷く。

「『おい』とか『お前』とか。それで用は事足りますからね」

「……そう」

昴は空を見上げた。相変わらず月は無い。星も見えないということとは、新月なのではなく雲が出ているということか。

昴は横顔に強い視線を感じていた。面映い。

「あんまりひとの顔をじろじろ見るもんじゃないわよ」

「あ……すみません」

男は首をすくめた。その様子はまるで叱られた大型犬のようで、

昴は少し口元を緩めた。

「でも、びっくりしたんです。貴方の髪がきらきらして、きれいだったから。おれがずっと仕えていた巫女がこんなきれいなひとだなんて。知らなかった」

「………」

昴は立ち上がる。これ以上ここにいるのが 怖かった。この男

はあまりにも素直で、透明過ぎる。

「もう休むわ。あんたも仕事に戻りなさいな」

「はい。……おやすみなさい」

男の声を背後に受ける。

「……お」

昴は思わず応えそうになり、ぎゅっと唇に力を込めた。代わりに口に出したのは、全く別のことだった。

「名前をあげる」

男が立ち上がったのか、ざらりとした衣擦れの音がした。縫い取りも荒い、着心地の悪そうな服だ。

「名前？」

「そうよ」

昴は首だけでくるりと振り向いた。

「あんたは透流^{とおる}。どう?」

あまりにも彼の眼差しが透き通っていたから。とっさに浮かんだのがその二文字だった。

「……………」

男は笑ったようだった。

「とおる…………とおる。ありがとっございます!」

再び背を向けた昴に、彼は 透流は小声で叫んだ。

「おやすみなさい」

「……………」

昴は無言で立ち去った。

「 変な男」

足早に歩く彼女の頬は、少し火照っていた。

二

今、何刻だろう。燐は何十度目かの寝返りを打った。寝付けない。隣の寝具で眠る朔を、何度となく確かめてしまう。息をしているだろうか、ちゃんとそこにいるだろうか、眠っているうちに消えてしまわないだろうか。

「 父さん」

朔の声がして、燐は思わず息を止めた。寝ているふりをした方がいいのかと思案するが、しかしきつと息子は気付いているのだろうと思いなおす。

「 何? 朔」

「…………まだ、時間はあるから」

その声に、燐は身を起こした。朔は目を大きく開けて、天井を睨んでいる。

「僕は、父さんの側にいたい。ずっと…………ずっと」

「朔」

「生きていたい」

朔は一度死んだ存在。ほんの少し、魂が神の側に近いもの。朔は、本当には生きていない。そのことを、既に燐は知っている。それでも……。

燐は朔の側に這いより、その華奢な体を抱きしめた。亡き妻に似た、甘い花のにおい。

「朔……」

こんなに朔の体は温かいのに、この命は偽ものだというのが。燐の鼻筋を涙が伝って落ちた。

「父さん……」

朔のくぐもった声がする。

「僕……帰って来ないほうが良かったのかもしれないね」「どうして?!」

なじるように尋ねる燐に、朔はつらそうに顔を背けた。

「だって」

その頬に、燐の涙が落ちる。

「父さんにとっては……僕は二度死ぬようなものだもの」「諦めの滲んだ声。だが燐は首を横に振る。

「まだ、そうと決まったわけじゃない。まだ奇跡が起こっていないからって、これからも起こらないとは限らない」

「……………」

「今度こそ、僕は君を守りたいんだ」

燐は少年の体を抱きしめたまま、祈るようにつぶやいた。

「もう二度とあんな後悔はしたくない」

腕の中から零れ落ちた、妻の温もり。彼女に宿っていたいのちが、今燐の腕の中にある。もう二度と離しはしない。そのためにな

ら、僕は何も怖れない……！

「母さんも、きつと守ってくれる」

「……………うん」

「だから、朔も……諦めちゃ駄目だ」

運命を受け入れてはいけないのだと、そう説く父の声に朔は目を閉じた。眦から涙が零れる。

部屋の片隅でうずくまっていた白い猫が、いつの間にか体を起こしていた。その金の目はただ無感情に、抱き合う親子をじっと見つめていた。

第四章

—

翌日、空は晴れていた。日差しは強く、本格的な夏の到来を感じさせる。それでも都よりは過ごしやすい、と紫苑は思った。盆地にある都は一年を通して寒暖差が激しく、一日の間でも昼と夜とでは大分気温差がある。

紫苑らが梓に連れられて神殿に着いた頃には、肌がじっとり汗ばんでいた。桔梗は女物の笠をかぶっており、薄物で白い肌を覆い隠している。燐に手を引かれて歩く朔は、特に暑さを感じていないかのようにすずしげな顔をしていた。肩にはいつものように、白猫が乗っている。

「こちらで少々お待ち下さいませ」

四人は風通しの良い離れに通され、冷えた水でもてなされた。喉を通るそれは体に染み渡っていく。

「そういえば王くんは？」

器を置き、燐が尋ねる。紫苑は唇を手の甲でぬぐった。

「癸のところで農作業を手伝っているそうだ」

「そうなんだ」

燐は微笑む。

「彼らは仲が良いね」

「水龍は基本的に皆仲良しなんだそうですね」

桔梗は器を両手に抱えたまま口を開いた。

「昔は一族でひとつの群れをなしていたようですね」

「水龍は、同じあやかしからも畏れられていたと聞くからな」

紫苑はつぶやく。その声音にどこか共感の響きを感じて、燐の胸がちりと痛んだ。ひとから畏れられた紫苑は、しかし群れをなすための同族すらいなかった……。

燐はことさらに明るい声を出す。

「兄としては心配なのかもしれないね」

「そうですね。せつかく会えたんですし、ゆっくり話もしたいんだと思います」

桔梗はにこりと微笑んだ。

「彼らは……」

紫苑は顎を上げた。その紫電の瞳に、天井の梁がうつる。

「どうするつもりなのだろうな」

選択肢は数多い。壬と癸がここに残るか、それとともに都に来るのか。壬は都に、癸はここに留まるか。もしくはともに新たな安住の地を求めるか。元に壬がいた場所は、恐らくそれなりに安心して暮らせる場所ではあったのだろう。どれを選ぼうとも、紫苑は全く構わない。壬を連れて帰るのはもちろん、癸が都に来たいと言ったならば断る理由などない。部屋は余っているし、自分の屋敷ならば彼らの外見を「式神だから」と説明してやることもできる。

「紫苑はお父さんみたいだねえ」

燐がくすくすと笑った。

「そうか？」

「だっていつの間にかすごい大所帯だよ？ 桔梗ちゃんに、僕ら親

子に、壬くん、癸くん……」

「最後のふたりは決まったわけじゃないぞ」

「でも行くあてがあるのか、心配はしてるんだろ？」

「……………」

切り返されて紫苑は言葉につまる。燐は苦笑した。

「何も責めてるわけじゃない。感謝してるんだよ」

「……別に、私は何も」

そっぽを向く紫苑の、しかし頬はかすかに赤らんでいる。桔梗が小さく笑った。彼女もまた紫苑の照れに気がついたのだろう。

少しの間、沈黙が落ちる。

「私は……ただ」

紫苑は静かに口を開いた。

「私などを頼るほど困窮している者を、無碍むげにできないだけだ」

「それは」

「違いますよ、紫苑」

反論しかけた燐の声とほぼ同時に桔梗が言った。燐は目線で彼女をうながす。こういうのは桔梗ちゃんの仕事だ。

「みんな、紫苑だから頼っているんです。紫苑の周りって居心地が良くて、だからついといとどまってしまう」

敵愾心をむき出しにしていた壬でさえも、今はあんなに和やかに時を過ごしている。それは紫苑という人物が与える影響なのだと桔梗は思っていた。

「それは私も同じ」

桔梗の手が床を這い、紫苑の指先にわずかにそれを触れさせる。

「紫苑の側にいたい。ただ、それだけ……」

「紫苑さん」

唐突に口を開いた朔に、視線が集中する。その優しい色を身にまとった子供は、母親とそっくりな表情で穏やかに微笑んでいた。燐が思わず息をのむ。

「貴方は、僕の家族です。どうか貴方にも……そう思っていて欲しい」

「……」

紫苑はふ、と表情を緩めた。

「……ありがとう」

傍らの桔梗の髪をくしゃりと撫で、紫苑はもう一度器を持ち上げ飲み干した。

一一

昴は不機嫌な顔で足元を睨みつけている。そこにかしこまっているのは昨夜出会った男　透流だ。

「お供などいらさないわ。紫苑さまだっけいらっしやるんだし」

「『しおんさま』とやらのことは知りませんが」

透流は顔を上げる。相変わらずの真っ直ぐな視線。光の中で見るその顔には、ところどころ傷跡が残っている。袖口から覗くごつごつした手にも、同じように無数の傷跡が走っていた。

「凧さまにきつく言われてるんです」

凧は昴の周辺の世話をする女官のひとりである。昴の目にはおとなしいように見えるが、実は厳しいのだろうか。昴は軽く手を振った。

「凧には私から言っておくわ」

「駄目です」

意外な抵抗にあい、昴の眉がつりあがる。

「どうして!」

「貴方はこの邑の巫女様でしょ」

数年ぶりに外出したいと言ったら、これだ。凧は舌打ちしたい気分に駆られた。

「巫女さまなんて言っただけで崇めるくらいなら」

行儀悪く足を踏み鳴らす。

「ちよつとの外出くらい私の好きにさせなさいよ!」

「……昴さまって」

先ほどまでの強い調子とは打って変わって、透流がぼつりとつぶやいた。

「結構わがままなんですね」

「何ですって?!」

「別に、外出してはいけないなんてひとも言っていないじゃないですか」

透流の言葉は素朴で、彼の視線と同じように直線的に届く。

「ただ、おれを連れて行って欲しいんです。それだけです」

「……………」

昴は言葉につまる。

透流の言うのは確かに正論だ。この邑にとって重要な意味を持つ自分が、ふらふらと出歩くわけにはいかない。邑びとたちから見ても紫苑らはいくまで外の人間。巫女を託すに足るわけがない。わかっている。わかっているのはいるのだが……………。

「もし、おれのことを嫌なんだったら」

透流の言葉に、昴の体がびくりと跳ねた。彼はそうとも知らず言葉が続ける。

「凧さまに言っただけを覚えてもらいます。だから……………」

「そんなじゃないわよ」

昴は透流を遮る。

「あんたが嫌だとか、そんなじゃないの」

「……………」

黒水晶のように透き通った瞳が、しかめっつらの彼女を映す。

「ただ……………どこへ行くのも監視つき、紐つきって感じで気が悪かったのよ」

「監視?」

透流は首をかしげる。

「おれにそんなことできませんよ。昴さまのお邪魔をするなんて」

「え……………?」

思わず昴は彼と視線を合わせた。彼は、そらさない。昴の青い眼差しを真っ直ぐに受け止めていた。

「おれは、ただ」

微笑む。まるで子どものような笑み。

「昴さまをお守りするだけ」

「守る……って。何をするつもりよ」

「口ごもりながら強がり続ける昴に、透流は指折り数え始めた。

「足が痛くなったらおぶつて差し上げますし、水が飲みたくなくなったら湧き水を探してきますよ。えっと、あと……お腹が空かれたら川で魚を獲ったり」

「……………」

昴はあつげにとられる。この男、本気か。

「そうだなあ、他に何ができるかなあ」

首をかしげて考え込み始めた透流に、昴は頭上から深いため息を落とした。

「もういいわよ」

「え？」

「考えなくていいって言ってるの！」

昴は座り込んでいる彼の側をすり抜け、歩き始める。背後で慌てて立ち上がる音がした。

「早くしなさい、客人を待たせすぎよ」

「……………はい！」

嬉しそうな声とともに、ぱたぱたと後を追って来る足音。これではまるで犬の仔だ。昴は頭痛をこらえるように額に手を当てた。どうにも唇が緩む。それを隠したかった。

三

「お待たせしました」

半刻ほど待っただろうか、昴がようやく紫苑らの待つ離れにやってきた。その背後には見上げるような大男が従っている。護衛の者、ということだろうか。

「これ。透流」

昴は男を指差してそっけなくそう紹介すると、紫苑に向けてあでやかな笑みを浮かべて見せた。

「お待たせしてすみません」

「あ……いや」

紫苑の視線に気付いたのか、大男はにこりと笑って会釈した。紫苑もまた礼を返す。

「お初にお目にかかる。私は御門紫苑だ」

「桔梗です」

「橘、燐です。この子は僕の息子の、朔」

「はじめまして！」

次々に名乗りをあげる客人らに、透流は動揺したらしい。

「え、えっと」

「……………」

昴は内心ため息をつく。透流はずっと下人として働いてきた。このように礼をつくされた経験などないのだろう。

「あなたの名前なら私が紹介したわ。『よろしく』とか何とか言っておけばいいのよ」

「よ、よろしく」

上ずった声で繰り返す透流を、四人は優しい眼差しで見つめる。

気持ちの良い男だ。紫苑の感想は、恐らく誰にも共通するものだったろう。昴がさらに説明を加える。

「彼は私の護衛ということで同行することになりました。構わないでしょうか？」

「もちろん」

にこやかな桔梗の返事に、昴は一瞬眉をしかめる。しまった。

「……………」

不思議そうにふたりを見比べる紫苑に、「相変わらず鈍いなあ」と燐は小さくつぶやいた。まるでそれに答えるように、白猫はにやあと鳴く。

「さて、出掛けましょうか」

履物を履こうとした昴が一瞬戸惑ったように視線を揺らし、控えていた女官に何事か言いつけた。走り去った彼女が持ってきたのは一足の新しい草鞋。それは、透流のためのものだった。

第五章

—

鬱蒼と茂る森の中、緩やかな上り坂が続いている。ゆっくりとした速度で歩いているにも関わらず、燐はすでに息を切らせていた。朔は身軽に数歩先を歩いているし、紫苑も特に堪えていないようだ。やはり陰陽道を究めるにも体力が必要なのか。書と向き合ってばかりの自分の生活を振り返り、燐は反省した。

それにしても……、と燐は首を傾げた。桔梗が軽々と上っていくのはまだ理解できる。彼女はあやかしだから、潜在的な肉体能力はひとのそれを当然上回っているだろう。しかし、昴は。先頭に立って歩む彼女を見遣る。木洩れ日が、彼女の髪をきらきらと輝かせていた。彼女はつらくないのだろうか。

ふと視線を動かすと、のっそりとした大男と目が合った。とおる、と呼ばれていたか。昴の護衛とのことだ。男は人なつこく微笑み、会釈する。右頬と額に傷跡。良く見れば手にも……。燐はすつと男に近寄った。

「君は、あのお社に仕えているの？」

「はい、幼い頃から」

意外にはきはきと答える。

「両親を流行り病で亡くして、先代の巫女さまに拾っていただいたのです」

「先代の巫女……」

「昂様のお母さまです」

彼は何かを懐かしむように目を細める。

「昂さまは……、お母さまにそっくりでいらっしやる」

その瞳に浮かぶのは憧憬か、……それとも。

「まあ、中身はだいぶ……」

言いかけた男の顔色が変わり、ぱっと駆け出した。隣が驚いて見送ると、ちょうど昂の体がよろめき。

「昂様！」

昂は声もなく、男の差し出した腕に倒れ込んだ。

「どうされました？」

紫苑が驚いた調子で尋ねた。桔梗が進み出、昂の顔を覗き込む。

「水を」

桔梗にうながされ、男は懐から竹筒を取り出した。振り向いた彼女は紫苑に告げる。

「おそらく、熱にあたったのでしょう」

「そうか」

「昂さまがお社の外に出るのは数年ぶりですからね」
水を飲ませ、男がそつつぶやいた。

「無茶をなさる……」

昂は未だ白い顔で浅い呼吸を繰り返している。

「どこか木陰で休むか」

「そうですね」

男が昂を負って立ち上がる。彼の広い背中に担がれた昂は、ひどく小さく見えた。

透流が昴の看病をしているのを横目に、桔梗は小さくつぶやいた。

「透流さんがいてくれて良かった……」

「そうだな」

紫苑が頷く。桔梗は苦笑した。

「もし透流さんがいなかったら、きっと紫苑が昴さんの面倒見ていたでしょう」

「そうか？」

隣もいるぞ　と暗に告げる。しかし桔梗は首を横に振った。

「きつと紫苑でしたよ」

「……………」

「紫苑は」

桔梗は紫苑を見ず、ぼつりとつぶやいた。

「もし、私が他の誰か男のひとにおぶわれたり世話されていたりしたら　」

「代わるさ」

紫苑はまるで当たり前前のようにそう言う。

「それは私の役目だからな」

「……………」

沈黙の後、桔梗はくすりと笑った。

「じゃあ、私も倒れたらいいんですね」

「駄目だ」

「え？」

思いのほか強い口調。桔梗は面食らう。

「心配する。だから、駄目だ」

「……………」

「倒れる前に言え。何とかしてやるから」

「……………」

桔梗は怒ったような言葉と裏腹に、紫苑の腕に頭を預けた。

「昴さん、早く良くなるといいですね」

紫苑は微笑んだ。

「そつだな……」

それから間もなく、昴は意識を取り戻した。ぼんやりとしていた瞳が、透流をとらえる。

「……私、倒れたの？」

「ええ」

透流は立ち上がるうとする彼女に手を貸した。

「歩けますか」

「……悔しいけど、多分無理」

「良かったら背中、お貸ししますけど」

「え……」

透流の問いに血が上る。思わず振り返って紫苑を見たが、彼の傍らには桔梗がいて

「……………」

力が抜ける。鼻がつんとした。こんなことで泣きそうになるなんて……かつての自分ではあり得なかったことだ。それなのに……。

「昴さま？」

透流が慌てたように顔を覗く。

「大丈夫ですか？ ご気分が優れませんか？」

「最悪よ」

つぶやいた彼女の目の前に、白虎が立った。

我の背に乗るか？

黄金の瞳が問い掛ける。また、彼の背後には紅を纏う男がいた。

朱雀の変じた姿、焰だ。

「手を貸そう、玄武の巫女よ」

昴は少し考え、やがて首を横に振る。

「……いいわ。好意だけ受け取っておく」

「そうか」

焰はこちらを見守る紫苑に向かってひとつ頷き、すっとそらに溶けた。

心配してくれるなら、自分で助けられればいいのに。昴は

目を閉じ、彼の広い背に体を預けた。

三

邑を出発してから一刻半ほどが過ぎただろうか。さすがの紫苑も少し疲労を感じ始めた頃、昴が不意に足を止めた。

「ここよ」

ちょうど北の方角、目の前には見上げるほどの崖がそびえ立っている。岩肌に埋まるようにして、ひとの身長の数倍以上の高さがある扉が封じられていた。その表面には古いもの、新しいものなど様々な札が貼られている。陰陽師のものではない、と紫苑は思った。それにしても、この扉は一体いつから、そして何故こんな場所にあるのか。相当古いものに見えるが……。

「一月に一度、長老家の当主が一枚ずつ札を張りに来るのです」

睦月には睦月家の当主が。如月には如月家の当主が。そして、

当主のいない神無月、否、神有月には、

「巫女が被い清めます」

ただし、巫女自らここに来ることはない。大社内の祭壇に向かって儀式を行なうのだという。

「ここまで嚴重な『封印』を施してあるとは……」

紫苑はつぶやき、やがてそらを見上げた。

「朱雀、答えてもらおう。この『封印』が何を封じたものなのかを」
不意に、そらが翳る。木々が不穩にざわめいた。

それは己が目で確かめるが良い。

声は朱雀のものだけではなく、複数声が重なり合っている。おそらくは、四聖獣の……。

「開けますか？」

昴が振り向き、尋ねる。既に自分の足で立つ彼女は、巫女の顔をしていた。

一同の視線が紫苑に集まる。紫苑はじつと扉を見つめていた。

この先にあるものは、一体……。

「貴方はご存知なのか」

昴に尋ねる。彼女は小さく頷いた。

「伝承ですから、正しいかどうかはわかりませんが……」

「構わない。教えて欲しい」

「この扉は」

昴は扉に向き直る。

「神へと通じる途なのだと 聞いています」

「じゃあ何故こんなに嚴重に封じる必要があるわけ？」

燐が声をあげる。

「これじゃあまるで神を封じてあるみたいじゃない」

「そうだな」

紫苑はつぶやく。

「おそらく燐の言つとおり」

「え？」

「この扉は、神々を封じたものだと思う」

神有月には、その「封印」が緩む。だからこそ神獣の力を宿す玄武の巫女自らが被つのだ。「封印」の力をより強固なものとするために。

「神獣は神の使いだろ？ 何故それが神を封じる『封印』に力を貸すの？」

「……何か思惑があるのだ。おそらく」

紫苑はふう、とため息をついた。

「時期が来るまで、開けるわけにはいかない理由があるとか……」

「今がその時期だど？」

燐は混乱したように問いを重ねる。紫苑は首を横に振った。

「まだだ。ただ、今は我らが知る時期にある と。そういうことだろっ」

紫苑が一步進み出て、扉に相對する昴の後ろに立つ。ちょうど

彼女を北と見立てたときに南となるように。桔梗は東へ。朔は西へ。ちようど、それぞれの神獣が守護する方角へ。

燐と透流が下がった、その時。

地面が激しく揺れ動き、四人の足元を繋いで光の円陣が生じた。

まばゆい輝きは、青く、白く、赤く、そして闇がゆらめく北へと収束する。

「扉よ。我らを迎え入れよ」

昴の声が響く。

「我らは神の力を継ぐもの。四つのかげら。四つの血」

半妖と、

あやかしと、

ひとと、

生と死の狭間のもの。

「途^{みち}を、我らに示せ」

「わわ」

透流が茂みに倒れこむ。燐はとくに地面に腰を落としていた。

「こ、これは……」

札が一枚一枚、剥がれていく。扉を縫いとめていた鎖が粉々の破

片に変わり、やがて。

「閉じる……！」

「え………？」

「早く……！」

紫苑が叫ぶ。しかし、間に合わない。

「………?!」

扉の隙間から飛び出した「それ」は、凄まじい勢いで彼らに襲い掛かった。

第六章

—

蝉の声が聞こえる。陽は高く、邑を隈なく照らしていた。

「みずのとさーん、みずのえさーん」

高い声が響き、ふたりは曲げていた腰を伸ばした。駆け寄ってくるのは、加乃だ。

王は泥だらけになった手を袴ではらいそうになり、慌ててぐつと拳を握った。癸はその様子を見て微笑む。

「大丈夫、加乃ちゃんが水桶を持ってきてくれるから」

「ああ」

昼どきである。加乃は毎日癸のために弁当を作っているのだという。朝会ったとき、今日は王の分も作ると言っていた。面映いような申し訳ないような、不思議な気分だ。

「お疲れさまです」

加乃ははじけるような笑みを見せた。癸は既に髪を染めていないが、そのことを彼女は気にしていないらしい。邑びとからも特に何も言われなかったと聞き、王は安堵した。癸はもう、邑びとの一員なのだろう。時間をかけて築いた絆があるのだ。

「お弁当持ってきましたよ」

短い衣から伸びる手足は細く、長い。うなじで結んだ髪が背中ではゆるゆらと揺れていた。

「さ、手を洗って下さいね」

地面に置いた手桶には、なみなみと水が張ってある。覗き込んだ

壬は忘れていた喉の渴きを思い出し、舌でぺろりと唇を湿した。

「ちゃんと竹筒も持ってきてましたから、飲むときはそちらからどうぞ」

傍らで加乃が微笑む。何故か、その面影に桔梗を思い出した。少しも似てはいないのに……。

俺は、桔梗が好きだったのだろうか。壬はぼんやりと考える。自分の感情が失った御子への執着だったのか、それとも思慕だったのか。時々良くわからなくなる。だが、紫苑の側で生き生きとする桔梗を見ていても悔しさは湧いてこないし、むしろ微笑ましく見守っていたと思う。まるで妹を見守る兄のような心情……と言ったら桔梗は嫌がるだろうか。

「あれ？」

不意に癸が声をあげた。不審そうな声。

「どうした？」

壬は手を洗い終え、顔を上げる。癸が山の方をじっと見つめていた。

「どうかしたのか？」

改めて尋ね、壬は目を凝らす。

「いや、今……なんか……」

「……………!!」

不意に、総毛立った。壬の額に冷や汗が浮かぶ。体の底から沸きあがるような悪寒。抑えられない寒気に、壬はぶるると体を震わせた。

「これは……」

癸もまた、青い顔をしている。

「どうしたの？」

あやかしではない加乃には感じ取れないのだろうか。この、禍々しい瘴気　これは一体……？

「もしかして、紫苑さんたちが向かったところで、何か……」

王ははつと息をのんだ。

「何か来るぞ!!」

突然、山肌に湧き出した巨大な黒い塊。遠過ぎて何かは判別できないが、おそらく瘴気の発生源はあれだろう。

おおおおおおおおおおお!!

唸り声のような雄叫びが響く。

山裾へと駆け下ってくるその姿に、王はぞつとした。 あれが

人里に到達するようなことがあれば、何が起こるか……!

「兄さん!」

癸が叫ぶ。

「ああ」

王は頷く。

「加乃ちゃんは家にいて、お母さんを頼んだよ!」

「う、うん」

不安げに山の斜面を見詰めている加乃に声を掛け、癸は王と共に駆け出す。あれが一体何なのかはわからない。ただ、何か良からぬものなのだとだけわかっていた。そしてきつと この 邑に悪夢をもたらすのだということも。

二

白虎が咆哮し、朱雀が羽ばたく。桔梗の体から青龍が立ち上り、

昂は玄武の力が引き摺り出されるのを感じた。

「結界……?」

自分たちの周りを取り囲んだものに、燐は小さくつぶやく。白く光り輝くその外側では、何か黒いものが猛り狂っている。光と闇は激しくぶつかりあい、火花を散らした。

おおおおおおおおお!!

まるで、地獄から響く怨嗟の呻きのような……。

「え、えつとどうなってるんだ？」

「あぶない！」

透流が立ち上がるうとしているのに気付き、燐は慌てて引き戻した。

「でも、昴さまが……」

「彼女は大丈夫だよ」

おろおろする透流に、燐はきっぱりと言う。

「玄武が彼女を守るから」

透流は混乱したように髪を掻き乱した。

「い、一体何が起こってるんです?!」

「僕にだってわからないよ。でも」

燐は扉のあつた方を睨みつける。

「あそこに封じられていた何か……原因だ」

「何か……?」

扉が開いたとき、紫苑は叫んだ。閉めろ、と。多分彼は察したのだろう。何か禍々しいものが溢れ出してくる気配を。だが、間に合わなかった。

「紫苑!!」

燐は膝について立ち上がる。

「大丈夫かい?!」

「扉を閉める!」

紫苑の声が遠く聞こえた。姿は結界に阻まれて見えない。

「桔梗、朔、昴、協力しろ!!」

「はい」

「わかりました」

昴の声が、結界の中に響いた。

「扉よ。我らの前に立ち塞がれ」

荒れ狂う闇はそのままに、しかしそれ以上激しくなることはない。

「我らは神に似て神とは非なるもの。四つのかげら。四つの血」

彼女の言葉は早口に、しかしはつきりと紡がれる。

「途よ、我らの前に眠れ」

それから何が起こったのか、燐にはわからなかった。ただ視界が真っ白に塗り潰され、鈍い耳鳴りがして……。

「燐！」

誰かが駆け寄ってきて、彼を抱き起こす。

「あれが邑に向かった。急いで戻るぞ」

「ん……」

一瞬気を失っていたのかもしれない。燐はぶるぶると首を横に振った。

「一体、何が……」

我らにとっても誤算であった。

白虎の深い声が脳裏に響く。

まさか、あの戦の際の御霊が未だ彷徨っているとは……。

「戦？」

燐が聞き返す。目が回復して、彼を支えている紫苑の横顔が見えた。険しい表情をしている。

「神を封じた地、戦……」

単語をつぶやき、紫苑はぎゅっと唇を引き締めた。

「今流れ出てきたのは、戦死した怨霊か」

「父さん！」

朔が駆け寄ってくる。

「僕の後ろ、白虎の背に乗って！」

「え？」

燐の手をひっぱり、朔は駆け出す。後ろを振り向くと桔梗が朱雀

の背に乗り、透流を引っぱりあげていた。紫苑もひらりとその首に跨る。炎に包まれた鳥はひどく熱そうに見えるが、そうでもないのだろうか。

「一体どういうわけ？」

誰ともなく燐はつぶやく。その声にこたえたのは、彼の背後に腰掛けた昴だった。

「かつて、ここは戦場だったのね」

「戦場……？」

誰と誰が戦ったのか。その問いを口にする前に、燐は悟っていた。

「あの封印は、神を封じるためのもの。つまり……」

「そう」

白虎がそらを疾走し、昴の金髪が風に靡く。

「ではそれを施したのは一体誰か」

「ひとと……あやかし、か」

「おそらく」

それだけではない。神もまた、あの封印に力を貸したのだ。

白虎の声が脳裏に響いた。

「神が……？」

昴は怪訝そうに眉を寄せる。

既に里はすぐ、そこであった。

三

里の北の外れ、壬と癸はそれと対峙していた。

「何だつてんだ、これ?!」

壬の放つ水の刃はことごとく闇の中に吸い込まれていく。癸はじつとそれを観察していた。刃を受けても全く形態に変化がない。これは、まるで……。

「実体がない、のか」

癸はつぶやく。王ははつと息をのんだ。

「実体が……ない？」

「だって物質攻撃が全然効いていない」

「……確かに」

王は再び掌を向ける。蠢く闇の一部を凍らせようとしたのだが失敗した。周囲の木々が冷気を浴びて、ばきりと折れる。

「どうしろっていうんだ」

当惑する王だが、背後から近付いてくる気配にはつと振り向いた。複数の足音も聞こえる。

「何事だ?!」

「癸、これは……」

「睦月さま、僕にも何が何だか……」

癸の言葉を聞き、王はようやく彼らが長老家の者だということに気付いた。邑の一大事に気付き、慌てて集まったに違いない。

「お主らでも敵わぬのか……」

先日父が殺害され、家を継いだばかりの睦月家の若き当主は顔を歪めた。水龍の妖力を思い、自らの力がこれに通用するのかと暗澹たる思いを抱いたのだろう。その認識は正しい、と王は思った。

闇は上下に弾むように蠢きながら、少しずつじりじりと近付いて来る。今のところはまだ攻撃を仕掛けてきていないが、もしこれが動いたらどうなるか……。

「これ、本当に一体何なんだ……?」

癸のつぶやきに応えるように、睦月家当主は静かに口を開く。

「古い伝承にある。これは」

「あっ!!」

闇が不意に膨張した。表面にぼこぼここと凹凸が生じる。当主の背後に佇んでいた者たちが、はつと身構えた。王も異変に気付き、腰を落とす。

「離れる!!」

そこから声が響いた。壬は咄嗟に地面に伏せ、隣で癸が這いつくばっているのを横目で確認する。次の瞬間、強い衝撃が襲い、壬は硬く目をつぶったまま、ただひたすらに耐えるしかなかった。

第七章

—

目を凝らし、紫苑は地上の様子を眺める。壬と癸、そして背後に邑びとらしき影。彼らが相對しているのは、巨大な闇。あれが、怨霊か。

「行くぞ」

紫苑が朱雀から飛び降りようと体勢を整える。しかし、

「駄目!!!」

桔梗が背後から抱きついてくると同時に、地上で変化が起った。

「な、何あれ……」

白虎の背に掴まっている燐が、呆然とした声をあげる。昂が小さく悲鳴を上げた。

「邑が……っ!!!」

紫苑はあらん限りの声を上げ、叫んだ。

「離れる!!!」

壬は動いたような気がする。しかし、癸は。

どうっ!!!

濁流。怨嗟の声と、瘴気と。死に引きずり込まれるような感覚。紫苑の体中から冷たくて嫌な汗が滴り、齒の根がかちかちと鳴った。背中にしがみついている桔梗もかすかに震えている。誰も、何も動けなかった。

「う……………」

一瞬、気を失っていたような気がする。何かに引きずられていきそうになるのを耐えているうちに、ふっと意識が途絶えていた。あのまま連れ去られていたら、今頃は……。王はぶるつと体を震わせる。

そのまま伏せていたという欲求を何とか振り切り、王は何とか身体を起こした。髪の毛のひとふさが目に入り、驚きの叫び声をあげる。真っ白になっていた。

「王!!」

駆け寄ってくる気配に、目をこする。桔梗だ。

「大丈夫?!」

「大丈夫、に見えるか?」

「ごほごほと咳き込みながらも、王は不敵に笑ってみせる。

「王……………」

桔梗の手がすつと王の髪に触れた。

「生命力を奪われたのだな。少し経てば治るだろうが……………」

桔梗の背後に立つのは、紫苑だ。

「さっきの……………どうなった?」

尋ねる。紫苑は首を横に振った。

「消えた」

「消えた……………」

王は啞然と問い返す。紫苑は深く頷いた。怨霊の塊は邑を覆い尽くすように這いずり回り、そして……………。

「さっと四散してしまった。どこへ行ったのかはわからぬ……………」

「だ、大丈夫なのか、それ?!」

王はふらつきながらも立ち上がる。その身体を咄嗟に紫苑が支え

た。

「後を追うにも、どうしたら良いのか……。とにかく、今は邑の様子を調べねば」

「あつ」

王は紫苑の手を離し、傍らに倒れ伏している癸を助け起こした。泥に塗れたその顔は蒼白で、髪も白く色が抜けてしまっている。

「癸！」

揺り動かすと、ゆっくりと瞼が開いた。

「に……兄さん？」

「よかった」

かき抱くと、癸の手が王に触れた。

「兄さんも。無事で、良かった」

彼らの脳裏をよぎったのは、かつて彼らの集落が全滅したときの記憶だった。気がつくともふたりはばらばらになって……。ついさつきまで側にいたのにも関わらず、互いの姿を見失っていた。そしてその後、長い間独りで彷徨うことになる。もう、あんな想いは経験したくない。

「紫苑」

不吉な、低い声。王は顔を上げる。隣が青ざめた顔を横に振っていた。紫苑も強張った表情でうなずいている。

「……どうした？」

「……………」

紫苑は黙って王を見返す。何と言っているか、迷っているようでもあった。王は癸を膝に抱えたまま、背中を伸ばして辺りを見回す。そして 言葉を失った。

彼らの背後に集まっていた、長老家の者たち。真っ白な頭と、土気色の肌が泥の中から覗いている。彼らの身体は、少しも動く様子がない。

「ち……、ちょっと、これ」

王の声がひきつる。

「まさか、そんな」

「邑は?!」

葵が身体を起こし、叫んだ。

「邑のひとは、みんなは……!」

「今、朔が白虎とともに見回っている。昴も一緒だ」

紫苑はようやく口を開いた。その拳はきつく握り締められ、ぶるぶると震えている。

「どうして、こんなことに……」

桔梗が小さくつぶやいた。その声は細かく震えていた。そして、辺りに怒号が響いた。

「どういうことだ!」

びくつ、と王は震えた。肌がびりびりするほどの怒気に、身体がすくむ。紫苑が怒っている。認めたくはないことではあるが、王は完全に圧倒されていた。

「朱雀……、これは一体!」

血を吐くような叫び。桔梗が泣き出しそうな顔で紫苑を見ている。「こんなことになるのなら、『封印』など……!」

解くのではなかった。どうしようもないほどに深い後悔、自責の念。痛みの滲むその声に、王は唇を噛む。葵は泣いていた。

「『封印』を解くことが誰かの命よりも大切なことだったと、そう言うのか! そのために」

私たちを利用したのか……!!

「紫苑……」

紫苑の拳に、桔梗はそつと触れた。ただ、それだけしかできない。紫苑の想いは、痛いほどわかるから。

炎を纏う神鳥は一度だけ、羽ばたいた。

これは我らの意図ではない。

「何?」

「封印」の管理を任されているのは玄武。これは玄武の思惑である。

「玄武の……？」

紫苑のつぶやきを聞き、桔梗がはつと目を見開いた。

十五年間、つらいことばかりだった。そのためになら何だつてしようと思つたわ。他人を利用することだつて、何とも思わなかった。自由になりたかつた。こんな風に生を受けた運命から、解き放たれたかつた。全部終わつたら、この邑を捨てるの。玄武の力は返したつていい。とにかく全部捨てたかつた……。

「まさか……」

桔梗は小さくつぶやく。

あの意地っ張りで、強がり、寂しがりやの、哀しい巫女。彼女の悲痛な願いが、この悲劇を呼んだとしたら。両親を奪い、幼い頃から彼女を抑圧してきたのは邑びとたちの罪。それに彼女が報いたのだとしたら。誰が彼女を責められるだろう。

しかし、本当の悲劇はそこにはない。

「あのひとは……きつと、そんなこと望んでいなかったはず……」
まだ見ぬ神獣、玄武。それは一体、何を考えているのか……。桔梗の中に眠る青龍が鎌首をもたげ、低く唸った。

三

風を切る白虎。その背から、朔は足元を見下ろしてつぶやいた。

「ひびい……」

「……………」

昴は目を瞑っている。その彼女を支えているのは、透流だった。

邑は、まるで何百年も放置されていたかのように荒れ果てている。田畑は枯れ、家は朽ちている。つい先ほどまでいつも通りにひとびとが生活していたなど、信じられないほどの有様だ。

「とら。感じる？」

微弱だが、ひとつだけ……。

その生命の気配を辿り、白虎は駆けていた。

「そう……ひとつ、だけ」

朔はつぶやく。

「何で……こんなことに……」

「玄武」

不意に、昴が口を開いた。その声は冷たく、固い。

「これが貴方の……約束の守り方だったのね」

「昴さま？」

透流の腕の中で、昴の身体は小刻みに震えていた。

「私が……、私が望んだのはっ」

朔ははつと振り向く。昴の手に握られているのは

短剣。

「こんなんじゃないっ……!!」

「昴さま!!」

きん!! 金属音がして、刃は跳ね返された。朔はひとまず

ほつと息をつく。玄武の力に守られたのだ。それが彼女の願いではないとしても……。

「やめてください、昴さん。そんなことをしてもっ」

「誰も生き返らない! わかってるわよ!!」

きん!! ぎいん!! 昴は何度も自らの腹部に短剣をつき

たてようとする。だがそのたびに何かが刃の行方を阻んだ。

「わかってるけど!! でも……でもっ!!」

泣いている。昴は歯を食いしばり、泣いていた。

「わたしはっ……」

「昴さま!!」

ざくり、と嫌な音がして、朔は慌てて振り向いた。その頬に血しぶきがかかる。その血は昴のものではなく 透流のもの。昴の短剣を、刃を掴んでひったくったのだ。昴はぼたぼたと滴る血をその身に受けながら、呆然としていた。青く澄んだ瞳からはまだ次々と涙が溢れている。

「と、透流さん」

朔は慌てて懐から布を取り出した。

「これで縛って!!」

「ありがとうございます」

透流は落ち着き払った様子で処置する。慣れた手つきだった。

「と……」

つぶやきかけた昴に、透流は怪我をしていない方の手を振り上げた。ぱん!! 朔は息をのむ。平手を受けてよろめいた昴の身体を、透流は強く抱きしめた。

「あんたが……、あんたのせいで邑が滅んだなら」

温和な表情はどこにもなく、透流は呻くように言葉を紡ぐ。

「おれはあんたを許さない。だけど」

体を離し、透流はがくがくと昴をゆすぶった。彼女はなされるがままにしている。

「あんたが死ぬのは、もつと許さないからな!! そんなの、絶対、絶対に許さないから!!」

泣いている。透流もまた、悲しみで胸を引き裂かれている。

「じ……」

昴が顔を上げた。その片頬は、赤く腫れている。

「じ、ごめ、んなさい」

透流の胸に顔を埋め、昴は叫んだ。

「ごめんなさい……ごめんなさい!!」

謝っても許されることではない。彼女の身をもつても贖える罪ではない。それでも、今彼女にできるのはただ謝ること……。

「す、昴さま」

透流は我に返ったように、昴の背中をそつと撫でた。

「おれ、昴さまを」

殴ってしまった。慌てて彼女の頬にそつと手を触れさせる。

そこはじんじんと熱を持っていた。

「ごめん、ごめんなさい」

ふたりして謝り続ける様は奇妙でもあり、しかし……。

ここだ。

白虎がすつと地面に降りた。唯一の生存者が、ここにいるという。「ぼくが行きます」

朔はそついい、白虎の背から降りる。あたりは変わらず廃墟のようだった。だが、目の前の瓦礫がかすかに音を立てている。中にだれか？

「とらー!!」

朔の声に従い、風が巻き起こる。それが収まった頃……、朔はあつと声をあげた。

女性が倒れている。その下に抱かれているのは、少女。母娘だろうか。母は……動いていない。だが少女の手はびくり、びくりと跳ねていた。母親が、身を挺して娘を救ったのだ。

ぼくの母さんも……ぼくを……。

目の前がぼやけてくるのを感じながら、朔は少女に駆け寄る。どうか生きていて欲しい。母親のためにも、どうか。力ない母親の身体をそつと除け、少女を揺り動かす。

「大丈夫ですか?! しつかりして下さい!」

「ん……」

声を漏らしながら、ゆつくりと瞬く。

「だれ……? みずの……とさん……?」

生きている!! 朔は狂喜して、白虎に向かって叫んだ。

「彼女を乗せて、みんなのところに!!」

先ほど癡、と言った。彼の知り合いかもしれない。一刻も早く、彼に会わせたい。母を失った痛み気付く前に、少しでもそれが和らげられるように。

白虎が再びそらを駆け始める。再び気を失った少女を支えながら、朔はぎゅつと唇を噛み締めていた。

「帰ってきた？」

「隣がぼつりとつぶやき、紫苑は顔を上げた。その視線の先に、音もなく舞い降りてきた白虎がふわり、と着地する。」

「あっ」

「癸が小さく叫び、支えていた壬の手を振り解いて立ち上がった。」

「よほどの衝撃を受けたのか、足元はまだおぼつかない。」

「加乃ちゃん……?!」

「それでも朔の腕に抱えられた少女の傍らに駆け寄り、癸はそつとその身体を受け取った。」

「邑は？」

「紫苑は言葉少なに朔に尋ねる。加乃を癸に受け渡した朔は、無言で首を横に振った。」

「……そうか」

「朔の背後で透流が身動きした。紫苑はそちらに視線を投げ、絶句する。透流に身体を預けた昴。だが彼女は身動きもしていない。青い目はうつろに見開かれたまま、薄く涙の膜を張っている。時折それが零れ落ちては頬に二本の筋を作っていた。ただ、その涙のあとだけが彼女の人間としての証のようである。まるで人形のように力なく、ぐったりとしている。」

「昴どの……?」

「紫苑が手を伸ばそうとする、それを透流は自分の身体でさえぎった。」

「とお」

「あんたらが、来たから」

「ぼつりとつぶやかれた言葉は、重い。」

「あんたらが来なければ、この邑は……」

滅びることなどなかった……！！

ずきり。胸の痛みには耐えかねたように、紫苑の手が力なく落ちた。脳裏に、邑で出会ったひとびとの顔が浮かぶ。それほど親しく過ごしたわけではない。しかし彼らは、自分たちが来るまで何の不自由もなく暮らしていた、ふつうのひとびとだった……。

「何をしに来たんだよ」

透流は顔を上げない。だがその声は怒りに震えていた。

「あんたら、一体何をしに来たんだよ！」

「……………」

言葉を失う紫苑の手を、誰かがそつと引いた。振り返り、紫苑は顔をゆがめる。佇んでいるのは、桔梗だった。

「……確かに」

彼女はゆっくりと言葉を紡ぐ。

「私たちはこの邑に波乱をもたらした。『封印』だって、私たちが揃わなければ解けることはなかったでしょう」

風が吹き、彼女の長い髪を乱す。

「けれど」

桔梗はすつと鼻に視線を向けた。痛ましげに細められる瞳。けれどそこに浮かぶのは同情ではなかった。

「長老を恨み、邑を恨み……、玄武はその想いに応えただけ。恨んだのは、彼女。昴さんなんですよ」

びくり、と昴の肩が少し震えた。

「彼女の両親を殺したのは誰？ 邑びとたちでしょう。彼女をずつと神殿に閉じ込めたのは？ それも邑びとたち」

「そ、そんなこと知らない！」

「そうですね。でも、無知は時として罪になる」

桔梗の声音は優しく、しかし厳しい。

「痛みを誰にも知ってもらえない、理解されない。そのことさえも、こころを深く傷つけていくから」

「だ……だからって……こんな……」

透流は昴を抱きしめてうずくまる。まるで父親が娘を守ろうとするかのようだった。

「玄武」

桔梗の声音が、微妙に変化した。紫苑ははっと彼女を見る。瞳の青がすつと濃くなり、銀の髪がふわりと浮き上がった。

「そろそろ姿を見せて　語って欲しいのですが」

「え……？」

『ひとつの子よ』

昴が口を開き、透流は目を見開いた。昴はもう泣いていない。

『手を、離してくれ』

いつの間にか強くかき抱いていた透流に、昴は冷ややかな視線を向ける。透流はびくつと震えた。

「で、でも、昴さま……」

『昴は今、この胸の奥深くで泣いておるわ。仕方がないから私が出て来たのだ』

昴のかたちをしたそれは、自分の胸元を指差した。

『……相当堪えたようだな』

つぶやかれた声は、意外にも優しい。

「ようやく逢えましたね、玄武」

厳しい眼差しの桔梗を静かに見据えた後、

『魂に青龍を宿すあやかし　そして朱雀を御す半妖』

彼女の瞳が順番にめぐる。

『白虎に育まれた、生と死の狭間のもの……』

「昴」は立ち上がる。紅い袴の裾が風に翻った。

『何を聞きたい？　何を知りたい？　問われたことには答えよう』

紫苑は少し考え、やがて口を開いた。

「『封印』とは何なのか。その全てを　」

かつて、大和の地に神々が舞い降りた。神々はひとと交わり、また神の血のみを受け継ぐ子孫であるあやかしが生まれ やがて、彼らは親たる神を疎みはじめた。子は、いつか親の手を離れる。ひとはひとの大王おおきみを戴き、あやかしは四天王を崇め。神は、次第に居場所を失っていった……。

「そして、戦が起こったのか」

紫苑の問いに、「昂」の姿をした玄武はうなずいた。

『この地に神は必要ない、と。ひととあやかしが唯一手を結んだ瞬間であった』

「……集団というものは」

紫苑はつぶやく。

「敵を目の前にしたとき、最も結束する。そしてその敵を排除した後は、新たな敵を味方だったものの中から探し出す」

『まさにその通り』

「……………」

桔梗の目が悲しげに細められた。

『神々もまた、この地を離れることを決意したのだ。戦というものの、神は自ら身を引いた。この世界から薄紙ひとつを隔てた世界へと 身をうつした』

「薄紙ひとつを……………」

不思議そうにつぶやく隣に、紫苑は言う。

「式神の魂を召還する場所をそう呼ぶが……、同じところなのだろうか」

『世界はひとつではない。ただ目には見えぬし聞くこともできぬ。』

ふつうは行き来することもかなわぬが、それは確かに存在している

「でも、感じることはできるのですね。そうでしょう？」

桔梗の言葉に、玄武は少しだけ驚いた表情をして、ゆっくりとうなずいた。

「私たちは神々を感じることができ。その抛り所がただの抜け殻

だとしても」

紫苑はぼつりとつぶやいた。

「お社、か……」

「それとこの大惨事と、何の関係があるの？」

燐が声をあげた。玄武はすうつとその青い瞳を細める。

『「封印」は、神々がこちらの世界に再び現れることができぬようにと施された。世界の行き来は神にとっては不可能なものではない。様々なものの力を借りれば、たとえば神有月のように、少しばかり世界の距離は縮まるときがある。そういうときであれば……』

「そのための、『封印』か」

『そうだ。この世界から神々の力を閉め出す為の、「封印」。神々もまた、自らの世界の平穏を乱されることを嫌った。そのために我ら神獣が力を貸したのだ』

「つまり、番人のようなもの……？」

『よく言えば、そうだろう。もしくは、ただの監視だともいえる。ひとやあやかしが信じているように、この世界を守護するために我らが在るのではない』

「……それで、この封印を施すとき何があつたの？」

燐は食い下がる。玄武は彼を一瞥した。

『世界から神々を押し出すとき、少しばかりの数のひととあやしをも、ともに閉じ込めてしまったのだ』

「え……？」

岩盤にはめ込まれていた扉。あれが閉められたとき、その向こうには仲間であるひととあやかしがまだいたというのか。それでは、その後彼らは一体どうなってしまったのか……。

『神々は世界を渡る。しかし、ひとやあやしにはかなわない』

玄武はただ淡々と言葉を続ける。その単調な響きが、紫苑の身体を震わせた。

『飢えたか、凍えたか、どうしたか、私は知らない。ただ、その魂は怨霊となつてずっと逆巻いていた……』

「それを」

紫苑は唇を噛む。

「我らは解き放ってしまったのか……」

『この邑は、「封印」を守るために作られた』

「昴」と同じ顔をしながら、彼女とは違う。表情は全く動かず、目は半分閉じられたまま。透流はそんな彼女をただじっと見つめていた。

『巫女と呼ばれるひとりの女を私の抛り代として差し出すことで、この邑は続いてきたのだ』

「まるで」

桔梗はつぶやいた。

「生け贄のようですね……」

『そのとおり。だが、巫女だけではない』

透流の額に汗がにじむ。とてつもなく不吉な予感がして、この先を聞いてはいけないような、そんな気がする。しかし、玄武は容赦なく言葉を続けた。

『この邑そのものが、封印のために差し出された生け贄のようなものだからな……』

三

沈黙を割いたのは、葵の声だった。

「ちよつとすみません」

止まっていた時が動き出したかのように、紫苑や桔梗は背後を振り返る。そこには加乃を支えて立つ葵と壬の姿があった。ふたりの髪には少しずつ銀の輝きが戻ってきている。彼らにつかまるようにしながらも歩いてくる加乃。表情はどこかうつろだった。

「昴さんとお話がしたいのですが」

葵の表情は険しい。朔から事情を聞いたのか 自分を受け入れ

てくれた邑が、今はもうどこにもないということを知り、今は何を思うのか……。

『昂、か』

玄武は冷ややかに告げる。

『彼女の身体を失うわけにはいかないのな。今起こせば、どうなるかわからぬ』

「どういうことですか」

『彼女に会って何をする気だ？　なじるか？　怒るか？　それとも殺す気か？』

「……………」

『お前たち邑びとがこの巫女にしたのは、今と同じことだ。異人であるというだけで父親を殺し、母親をも殺害し　幼子をひとり、巫女として閉じ込めた』

「確かに、それはひどいと思う。だけどそんなの、ほとんどの邑びとには関係ないことだ」

葵の眼光にもひるむことなく、玄武は冷笑を浮かべた。

『関係ない、か。便利な言葉だ』

「何だつて？」

『邑がこうして完全に自立して生活できたのは、誰のお陰だったのだろうな？　天候を予測し、災害を予知し　それは巫女の役目だったのではないか』

社の奥、たつたひとりて玄武と対話し、邑のためだけに生きる。

それが巫女に与えられた役目だった。代々の巫女が一体何を思い、何を願って死んでいったのか。また、玄武はそれを見ながら何を思ってきたのだろう。

「……………」

葵は沈黙する。

「先ほど、貴方は『封印』を守るために邑があると言った」
紫苑が口を開く。

「それならば、今後はどうなさるおつもりだ？　邑は既がない。毎

月のように強化してきた長老家のものもいなくなってしまった……」
玄武はふつと笑った。

『神々は、この世界には来ない。既に見捨てておられる』

一瞬ひるんだ紫苑だが、さらに問いを重ねる。

「では、何のために『封印』を？」

『それは……お前たちのためだ』

玄武の目が桔梗と、壬、葵に向けられる。

『あやかしとひとが　ひとつの世界にいられなくなった時のため……』

紫苑は息をのんだ。

「それは、どういう……？」

「巫女さま！」

叫び声が響き、紫苑は口をつぐんだ。少女の声だ。

「加乃ちゃん？」

葵の手を離し、彼女は「昴」の元へとふらふらと歩み寄った。そして　彼女は力いっぱい、昴を抱きしめた。

「加乃、ちゃ……」

葵は呆然とつぶやく。壬はその肩に手を置いた。追おうとしていた葵の足が止まる。

加乃の背中が大きく波打っていた。泣いているのだろう。少女は母を、邑を失った。その悲しみの深さは、計り知れない。

『……………』

「昴」が目を閉じる。少女のなすがままにされながら、微動だにしない。いや、違う。透流ははっと目を見開いた。彼女の手がゆっくりと加乃の背に回る。そして、そうつと撫でた。加乃の泣き声が大きくなる。

「昴さま……？」

透流はおそろおそろ声を掛けた。返事はない。ただ、彼女の華奢な肩が小刻みに震えている。

昴だ。

紫苑は深く息をついた。玄武は去ったのか、眠ったのか　ひとまず彼女は自分の身体を取り戻したらしい。

加乃はなじるでもなく、怒るでもなく、手を上げることもなく、ただただ泣きじゃくっていた。今、この悲しみを共有できるものは昂しかいないとでもいうように……。

不意に、白虎が吼えた。

細く長く、大気を震わせる。風が巻き起こり、澱んだ大気を薙いでいく。

朱雀が羽ばたいた。

苛烈でありながら壮麗な、炎が邑を覆い尽くす。それは破壊ではなく新生の火。

そして、桔梗が　彼女の内に眠る青龍が、手を差し伸べた。

焼け跡から湧き出す水が、その流れが、地表を優しく慰撫する。土がそれを吸い、焼け残った木の芽がしぶきを浴びて瑞々しく輝いた。

神々しいとはこのことが。誰もが声もなく、その光景を眺めていた。

「……………」

いつの間にか加乃も泣き止み、昂と寄り添って呆然と見つめている。先ほどまでの廢墟のような邑ではない。魂が眠るのにふさわしい場所へと、変貌を遂げていく。

「昂さま」

透流が名を呼んだ。昂は振り返る。彼が何の意図で名を呼んだのか、彼女にはわからなかった。差し伸べられた手を取り、一歩進み出る。その途端、彼女は自分に課せられた使命を理解した。透流はそのつもりで彼女を呼んだのではないだろう。しかし、彼女はそう

せすにはいられなかつた。

ひざまずき、祈る。

「この地に、言祝ことばぎを。実りを」

それは彼女が何千と繰り返してきた祝詞のしと。邑にさちあれと、豊饒を祈るための言葉。今となってはそらぞらしいとさえ言えるかもしれない。それでも、昴は祈らずにいられなかつた。

彼女から全てを奪った、それでいて彼女の全てであった邑へ。憎しみ、愛した邑へ。彼女を生み育んだ、そして彼女によつて葬られた邑へ。

昴は祈った。

虹が、そらを駆ける。紫苑は眩しげにそれを見上げた。その脳裏に、玄武の言葉が蘇る。

『あやかしとひとが　ひとつの世界にいられなくなった時のため……』

傍らに立つ桔梗が、半歩近寄って寄り添う。紫苑はその手をぎゅっと握りしめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5221z/>

妖 あやかし

2012年1月14日14時52分発行